
IS インフィニット・ストラトス ~I am a Stranger ~

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス（I am a Stranger）

【Nコード】

N9155S

【作者名】

クロ

【あらすじ】

女性にしか反応しない現代最強の兵器——インフィニット・ストラトス通称IS——の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代……。異邦人と呼ばれるフリーランスのエンジニアトがいた。

彼はISの開発者である篠ノ之束からの依頼でIS操縦者育成用の特殊国立高等学校IS学園に入学する事になる。

偶然発生したバグを取り込み、男性でも起動する事が可能となった

唯一のISを託されて……。
ハヴオック・ゲイル
彼がその手に掴むモノは希望か？ それとも絶望か？

主人公設定

うきふねあさひ
浮舟旭

国籍 日本

年齢 15歳

身長 168センチ

体重 60キロ

髪 黒の短髪（鈴にウニと揶揄される）

瞳 ブラウン

特技 格闘術 狙撃 本の速読・暗記

趣味 読書

ストレンジャー

【異邦人】と呼ばれるフリーランスのエージェント。彼のプロフィールはIS学園用に篠ノ之束が準備したもので、彼自身に本名、国籍は存在しない。実年齢は20歳。

ストレンジャー

様々な国や民族の血を引いており、これが彼の異邦人と呼ばれるの由来。

束の依頼で織斑一夏護衛の為、偶然発生したバグを取り込み男性でも起動可能なIS【暴風】^{ハヴォック・ゲイル}を受け取り、IS学園に入学する。

亡国機業とは深い因縁がある模様。

皮肉屋だが意外に律儀な青年で、空気を読むのが上手く時折自分が損をしても周りに気を使った行動をとるなど面倒見の良い兄貴分。

反面、護衛対象の一夏を『目的の為の餌』として見るなど冷酷な面を垣間見せる。

意外に博識で情報通。兵法書を愛読しており、戦術に応用する。

戦闘ではアウトレンジからの狙撃、ミドルレンジでの二丁拳銃、インサイドでの銃を併用した我流の格闘術などを状況に応じて使い分ける。

空中戦は不慣れな為、飛行は不得手。

それゆえにISでの飛行は脚部に反重力を形成し跳躍する事を主流に置いている。

ISでの戦闘能力の低さを戦略でカバーすることで、やっと代表候補生と互角に戦える。

幼少の頃飢饉の為、口減らしの為に親に売られ『人殺しの為の道具』として生きてきた。

実戦において叩きあげられた近接格闘では比類なき強さを発揮するが、過去のある事件から『武器として使う刃物』を忌み嫌っており、現在戦闘能力が半減している。

日々の糧を得る為に富裕層の出したゴミ漁りをして食いつないでいたからか、どんな酷い味のものでも顔色一つ変えずに平らげる。が、唯一生魚だけは生理的に受け付けず、拒否反応を起こす。

自らに持てる技術のすべてを叩き込んだ【身元不明^{ジョン・ドゥ}】を先生と呼び、尊敬しており、彼女の教えに忠実に守っている。痛み慣れている為、強烈なダメージを受けても意識が堕ちる事はない。

過去にセシリア・オルコットと接触、ラウラ・ボーデヴィツヒと面識があり、セシリアに対しては自らの正体を悟られないよう警戒し、ラウラとは兄妹の様な関係を構築している。

『自分の命は自分の為だけにある』という独自の価値観を持ち、『自己犠牲』を激しく嫌う。

一見利己主義な考え方にも見えるが、『自分の行動の結果は自分の責任。誰かの為ではなく、誰の所為でもない』という信念のようなもの。

色々と矛盾した感情がせめぎ合っている不安定な人間で作中で度々『モラトリアム』と称される。

自らを『暴力の使い手』『破壊者』と定義付けており、卑下してい

る。

ハヴォック・ゲイル

IS【暴風】

機体カラー：深緑

系統：後方支援指揮管制型IS

装甲を全身に纏う軽量級の細身のIS。

他ISの支援や連携でのチーム戦を得意とし、単体での戦闘は不得手。

背面に2対。腰部に1対。合計で6枚のスラスタを配置。

機体の重量も手伝って高い加速力、推進力を誇る反面、防御力が低めになっておりダメージコントロール能力は高くない。

旭の蹴り主体の格闘術に合わせて脚部全体が多重装甲になっており、脚部の強度と出力が引き上げられている。

アウトレンジ、ミドルレンジからの砲撃・狙撃をコンセプトにした機体で近接戦闘での格闘性能は平均より少し上程度。しかし旭の高い格闘センスと搭載されている高速演算処理システム（アドヴァンテージ）の恩恵を受ける事で【白式】にも劣らない格闘性能を引き出す事が可能。

【アドヴァンテージ】

ハヴォック・ゲイルに搭載されている高速演算処理システム。

搭乗士の脳波とシステムをリンクさせ、視角で捕捉した対象の動きをISにトレース。

高速演算させる事で未来予知にも似た行動予測が可能。尚、この機能は搭乗士の脳を媒体とする為、処理能力の高さに依存する。旭以外の人間が使おうとすると流れ込む膨大な情報を処理しきれず、搭乗者の脳に過負荷と過度なストレスがかかり最悪発もしくは、脳の崩壊を引き起こす。また、ISネットワークを利用し他の搭乗士とリンク・同期する事で事象予測結果を共有する事が可能。

【インフェルノ】

超長距離射撃用ライフル。連射性能は低いが非常に長い射程を持つ。約30秒のチャージを行う事で現存するISの中でもトップクラスの火力による砲撃を行う事が可能。ライフルにはサブジェネレーターが内蔵されており、2発までなら機体エネルギーを消耗させずにチャージショットを撃つ事ができる。(3発目からは機体エネルギーを消費。【零落白夜】並にエネルギーを喰う)

【ツインバレット】

二丁拳銃。威力は並だが小回りが効き連射性に優れる。旭が最も多様する武装。

銃身の強度が高い為、白兵戦にも対応可能。

【シデン】

物理刀。一夏の雪片式型より一回り大きい大太刀。刃にエネルギーを流し込み、斬れ味を底上げる。尚、この状態の時はその名の通り刃が紫色に輝き、コンクリートはおろかISのアーマーですらも容易に斬り裂く。

完全に余談だが、モチーフは『ブレイクブレイド』の『エルテミス(クリシユナ機)』

【陸戦用強襲型駆動鎧 アサルトアームズ】
通称A.A。

ISが登場する前に次期主力兵器として注目を集めていたパワードスーツ。

ISの登場によって『骨董品』と呼ばれ軽視されているが運動性、汎用性、機動力、小回り、すべてにおいて他の陸戦兵器の追隨を許さず、ISを除けば最強と目される駆動兵器。

開発から10年を経た現在、完全に生産は止まっているが、未だにアサルトアームズを上回るスペックを持つ兵器は開発されていない。旭のAAはハヴオック・ゲイルと同様、深緑のカラーリングが施されている。

プロローグ

第一話

1

《インフィニット・ストラトス》——通称《IS》

日本人技術者である篠ノ之束しののたはねによって開発された現代において最強とされる軌道兵器の総称。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されていなかったが、開発されてから1ヶ月後。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが何者かに一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS《白騎士》が迎撃した上、それを目の当たりにした各国は《白騎士》を捕獲、もしくは撃破しようと大量の戦闘機や戦艦などを大量に送りこんだ。しかし《白騎士》たった1機で送り込まれた大量の軍事兵器の大半を撃破した。しかも1人も死者を出さずに……。

これが後に《白騎士事件》と呼ばれる事件である。

この事件以降、ISの関心が高まることとなり、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まった。そして各国の抑止力の要が配備されていたすべての近代兵器からISに移っていった。

しかし、ISには致命的な欠陥もあった。

それは——女性しか起動する事が出来ないという事だ。

その事実から男女のパワーバランスを崩し『女尊男卑』というヒエラルキーを生まれた。

これはそんな時代を生きた青年の物語……。

ストレンジャーと呼ばれるフリーのエージェントが存在する。

彼にはルーツがない。多数の民族や国の人間の血を引く混血児だ。

ルーツだけではない。本名、国籍、戸籍、住居、親兄弟すべて存在しない。彼はどの国家でもデータ上、存在しないはず人間。つまり何処へ行ってもよそ者。それが彼が『ストレンジャー異邦人』と呼ばれる所以であった。

それを彼は『悲しい』とも『寂しい』とも感じた事はない。

自分に持てる技術をすべて叩き込んでくれた師もそうだったし、身分や戸籍データ

タ、住居は数あるは必要に応じて最適な物を用意すればいい。

国籍などは行動に制限を受けるから邪魔だ。彼の仕事は身軽な方がやりやすい。

ストレンジャーは散らかった部屋で寝そべりながら本を読んでいた。ここ1カ月、依頼がなく暇を持て余していたのだ。

大体20才という実年齢の割に若い……というより、幼い顔立ちに嘗められない様に無精髭をたくわえ、日本人の血が濃く出た黒髪はボサボサになっており、少し吊り気味の薄茶

色の瞳のはトロンと気が抜けたように垂れ下がっていた。

（ヒマだな……。ここ最近ヒマ過ぎて困る……）

ストレンジャーは超一流とまではいかなくても、そこそ腕の立つ事と何より依頼人に

対し誠実である事で有名だ。その為、ほんの1ヶ月前までは依頼がそれなりにきていた。

ドイツ軍の黒ウサギ隊との合同任務や亡命者の逃走経路の確保、お忍びの要人の護衛など様々な仕事もこなしてきて、場数もそれなり

に踏んできており、若さ故の経験不足という欠点も補われつつある。

（しかし、ここまで依頼がこないとなると、何か作為を感じるな。近くに商売敵でもできたのか？）

今後の経営競争をどう生き残っていくか考える為、思考を展開し始めると、玄関

のチャイムが鳴り、青年は訝しげに眉を顰めた。

この隠れ家の住所は自分以外の誰も知らない。仕事の依頼は電話やメールのみで

やり取りしており、クライアントや協力者とどうしても直接会わなければならな

い時は必ずそれ用の部屋を用意する。

彼はソファから起き上がり、懷から愛用の銃であるコルト・ガバメントを取り出した。

銃撃を警戒し、ドアの脇に立ち、覗き穴を玄関先に置いてあった板で塞いだ。

反応がない。

（襲撃じゃない？……。なら、応対が面倒だしこのまま居留守を使っちゃうか）

と、思った時だった。

『あつくん〜！ 久しぶり〜』

ドアの向こう側から聞こえてきたのは聞き覚えのある妙に甲高い女性あの性くまの声。

その声を聞いた瞬間、彼は全身が泡立ち、冷や汗が止まらなくなっ

た。
声の主の訪問は彼にとって一個小隊による襲撃よりも恐ろしいものだ。

女性の声を聞くと同時に彼は自分のとるべき対応を決定した。すなわち――。

ガチャリ、ガチャガチャ！

ドアにロック（アナログ錠、ロックチェーンのオマケ付き）をかけたのだ。

一応電子ロックはついていいるのだが、声の主にかかれば世界最高峰の電子セキユ

リティーでさえ紙屑同然。故にアナログ錠を用いるのが、最も安心かつ効果的なのである。

『あれ？ あつくん、 どうしたの？ 束さんだよ？』

「新聞ならいりませんっ！！」

青年は腹の底から叫ぶと、大急ぎでリビングから持てるだけの椅子を持ってきて

ドアの前にバリケードを作り始めた。

『開けてよ、あつくん！』という声を無視して青年は引き続きバリケードを作る

る。そしてそれがひとしきり終わり、大急ぎで荷物――いざという時速やかに撤退する

為に自分のアシのつきそうな物を纏めておいたカバン――を手に取り、窓から撤退準備に入った。

勿論持ち出せない依頼人のリストや偽造パスポートなどを焼却処分する為の遠隔操作式の発火装置のスイッチも忘れていない。

（あとは窓から飛び降りて、スイッチを押すだけだ！）

そう思って彼が窓を開き、外に出ようとした直後だった。

ドカーーン！！！！

ドアの方から爆音が響き、衝撃波で青年は周りにあった家具ごと吹っ飛んだ。

そして爆煙の中から姿を現したのは……巨大な人参だった。

「はろー、久しぶりだねあつくん　らぶりい束さんたよー」

巨大人参の中からウサミミカチューシャを付けたグラマラスな女性が出現し、青年に向かい軽快に挨拶をする。

しかし先程の爆破で倒壊した家具の残骸の下敷きになっている青年は反応を示さない。

否、示すことが出来ない。

「さっそくだけど、私長旅でお腹すいちゃった。あつくん、何か食べさせて」

「人の拠点を爆破しといて第一声がそれかあああああつ！！！！」
ススだらけになった顔を上げ青年は涙目になりながら吠えた。

2

とりあえず無事だった洗面所に向かい、顔にベツタリとこびりついていたススを洗い流し、残骸の下に埋まっているソファと机を発掘し、元の位置に戻す。

その上に台所から持ってきたコーヒークッキーをドアを爆破し、
『お腹が空い

た』とのたまわった女性に出した。自分の人の良さに若干呆れ気味だ。

彼女の名前は篠ノ之束。現代における花形兵器《インフィニットストラトス》通

称《IS》を開発した天才技術者だ。

オレは彼女の事が少し……いや、かなり苦手だ。何故ならこいつはその卓越した

天才的頭脳と反比例して、性格が激しく破綻しているからだ。先程の拠点爆破でわかるように、目的の為ならば周りの迷惑を一切がっさい無視。しかも厄介な事に本人はそれをこれっぽっちも悪いとは思っていない。

まさにゴーイングマイウェイ、究極のマイペースといった所だろうか。

オレが彼女と知り合ったのは大体4、5年前。

先生が篠ノ乃束から逃走経路の確保、そこに至るまでの護衛という仕事を受け

、オレもその仕事に同行した。それ以来、この篠ノ乃束という女性は何故か厄介事をやたらと持ち込むようになった。

因みに彼女が本名のないオレの事を『あつくん』と呼ぶのは彼女と接触した時に数ある偽名の一つである『浮舟旭』うきふねあさひという名で使った為である。

「で、今度はどんな厄介事を持ち込んで来やがりましたか？」

セリフに皮肉をたっぷりトッピングしてやる。自分の拠点を爆破されて少なからず頭にきているのだ。しかし束ねさんはそんな事全く気にせずいつものように軽い調子で話しを進める。

「うん。あのね、あつくんにお願いがあるんだ」

「断る！」

即答した。彼女の持つてくる依頼は大抵碌なモノじゃない事を確信していたからだ。実際彼女の依頼が原因で、某国の巨大組織の逆鱗に触れてしまい、邪魔者として消されかけたのは、まだ記憶に新しい。あのときは偶然交渉の為の材料を手に入れる事が出来た為、無事に生きながらえる事が出来たが、次も無事に済むという保証はない。

しかし束さんは一向に気にする様子を見せず話を続ける。

「IS学園に入学して、『ある人物』を護衛してほしいんだ」
「何ですと？」

オレは目の前の女性の正気を疑った。護衛するのはいい。しかし――

IS学園――。

IS協定――通称《アス力条約》――に基づいて日本に設置されたIS操縦者育成用の学校である。現在判明しているISの情報、またそれに関する技術のほぼすべてはこの学校に集約されていると言ってもいい。

学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、所謂共同の実験場として重宝されている。とは言っても『国家に属さず、干渉を受けない』というのは表面上だけの話で、その水面下では各国の思惑や足の引っ張り合い、諜報活動などが展開されているのだが……。

まあ、それは今回に限りそんなに重要な事ではない。
それよりも問題なのは目の前の女性は男のオレに『女子校であるIS学園に入学しろ』言った事だ。

「冗談、だよな？」

「うつん、本気だよ」

「IS学園って女子校だろ？」

「正確には『ISを起動させる事ができるのは女の子だけ』だから事実上女子校になってるだけだよ」

「前提条件からして満たしてないだろ！」

そう。他にも色々問題はあるのだが、一番大きな問題はそこだ。オレが男である以上、ISを起動させる事は不可能。仮に女装して潜入するとしても、ISを起動できない時点で男だとバレるだろうし、そんな事すれば……いろんな意味でお終いだ……。

IS学園で教鞭をとっているのが、かの有名な『ブリュンヒルデ』である以上、バレたとき逃げ切れる確率などほんの数パーセント。捕まれば、オレの諜報員としての人生は終わってしまう。しかも『女子校に女装して乗り込んだ変質者』として捕まるという最悪な形で、だ。

「そこが問題なら………切っちゃう？」

「何を！？ 冗談だろ！？ オレ男やめる気サラサラないからな！？」

「冗談だよ。………5割くらいは」

「つまり半分本気ってことだよな！？」

「ISを起動できないって事については問題ないよ。天才の束さんに不可能はないんだ」 ぶいっ

あゝ、吃驚した……。吃驚しすぎて縮みあがっちゃったぜ……。

「はい、コレ。男の子でも起動できるISだよ」

「……………は？」

今、何て言った？

「冗談、だよな？」

「うっん。こっちは本当だよ。これは正真正銘、男の子でも起動する事が出来るISだよっ」

「はあああああああああああつ！？　ちょ、ええええええええええええ！？」

この世界の仕組み自体を変えてしまうような品がオレの目の前に差し出される。

ISを使えるからこそ女性優位のこの時代。それを根本から覆すような物体が今オレの目の前に！？　っていうか、アレだろ！？　コイツ公式発表で『何故ISが女性にしか起動出来ないのかは不明』って言ってたじゃないか！？　ありや嘘か！？

「実はね、このコアを色々いじくってたら、バグが発生しちゃって。そのバグが上手い具合に作用して『男でも起動できるISのコア』が完成しちゃんだよね、　やあやあ、流石に天才の束さんでも驚いちゃった」

「何というご都合主義！？」

「と、いうわけで。あつくんお願い、　勿論報酬も用意してあるよ」

「断る！　大体そんなモン開発したんだったら、バグを解析して量産化とかに貢献しろよ。つか、IS関連にド素人のオレに報酬渡して護衛を依頼するより、どこぞの国に頼めば、空軍のエースパイロットとかをつけてもらえるだろ！　しかもタダで！」

どの国もISの技術は喉から手が出るほど欲しいはずだ。しかもこの社会の根本から変えてしまう『男性が起動できるIS』の技術なら二つ返事でOKして貰えるに決まっている。

それを言った途端、束さんは表情を硬くして、いつものおちゃらけ

た様子が鳴りを潜めたた。

「それはダメ。私はね、あつくんだから頼nderの。他の所に持つていくくらいなら——これは直ぐに壊すつもりだよ」

「……………」

「まあ、というわけで……よろしく、あつくん！」

「待て！ まだ引き受けるとは言っていない！」

「えゝ、いいじゃんゝ。どうせ仕事ないんでしょゝ？」

「何故知ってる！？」

「だって、あつくんへの仕事のメールがいかないように束さんが手を回したからね」

「仕事がこなかったのはアンタの仕業かああああああっ！！！」

この野郎！ こっちは誠実さを売りにしてるつてのに何てことしてくれんだ！

「ちなみにこれが前金の小切手だよ 成功報酬はこれの10倍だからね」

「あ？ これか？ ゼロが1、2、3……8！？ これの10倍つて——10億！？」

あまりの報酬の多さに心の天秤が『依頼を受ける』方に大きく傾きかける。それを根性で水平に保った。

「待て待て待て待て、ちょっと待ちんさい！ これはいくらなんでも多すぎだろ！ 何か裏があるんじゃないだろうな！？」

「えゝ、裏なんてないよゝ。強いて言うなら——あつくんへの信頼、だよ。それにあつくんは『あの人』の教え子だしね」

エージェントへの最高の殺し文句を口にする束さん。しかしその言

葉を額面通りに信用は出来ない。何故ならオレは東さんを友人だとは思ってはいるが、人間的には信用はしていないからだ。

「ちなみにこれが潜入するときのあつくんの個人データだよ」

「えー、と何々？ 浮舟旭^{うきふねあさひ}。15歳——って5つもサバ読んでんじゃないか！」

「大丈夫だよ。あつくん髭を剃って、髪をとかせば普通に15歳くらいには見えるから」

「あんた、オレがそう言われるのが嫌で髭を伸ばしてるって知ってたよな？」

商売上舐められないように、依頼人^{クライアント}に不安を与えないように髭の伸ばし方には少し拘りがある。それを……剃るのか……。

「護衛対象は——織斑一夏^{おりむら いちか}？ おいおい、唯一ISを動かせるってあいつかよ」

「おおう、知ってたの？ 流石だね」

「情報はオレの飯の種だからな」

適当に相槌を打ち、書類を捲る。護衛対象のデータに目を通し、ファイルを閉じる。

「いい話だけど、断らせてもらつよ」

「どうして？」

「この任務に費やす期間は3年……。ちょっと長すぎる。アンタも知ってるはずだ。オレの最終目的……オレが命に替えても叶えたい願いを……」

「……………」

「アンタとは長い付き合いだし、オレの事を買ってくれてるのは本当に嬉しい。けど、これを受けてしまうと、3年間オレは自分の望

みの為に動く事が出来なくなる。片手間で依頼を受ける事だけはしたくないんだ。『どんな時でも依頼人に誠実であれ』これが先生の教えだからな……」

「……………」

「だから——」

「そんなあつくんに耳寄りニュース！」

「おい！ シリアスに決める事すらさせてもらえないのか!？」

「いつくんの周りに亡国機業ファントムタスクが関わってるって言っても？」

「——ッ！！ その話は……本当か？」

「本当。確かな筋からの情報だよ」

「……………ッ！ やつと……！！ やつと、見つけた……！」

「引き受けてくれる？」

「そういう事なら勿論引き受けるさ」

やつと……！！ やつと、見つけた……ッ！

ずっと、ずっと探していた……！！

オレの『命に替えても叶えたい願い』への道……！！

今はまだ小さな一歩だけど……いつか、必ず……！！

プロローグ（後書き）

はじめましての人も、そうじゃない人もこんにちは。
未熟者の書く小説ですが、皆さんに楽しんでいただければ幸いです。
よろしく願います。

第1話 異邦人へストレンジャー

1

『まったくISってのは忌々しい兵器だな。俺たちから仕事を奪っただけじゃな

く、こんな歪んだ格差社会まで作りやがるんだからよお』

『お陰で再就職もまともにできねえ。出来たとしても殆どが女の為の労働力。冗

談じゃねえ』

『随分綺麗なオベベを着せてもらってなあ！ てめえらみたいなメスガキがいるか

ら俺たちが苦しまないといけなくなるんだよおっ！』

『ふん。偶々親が金持ちだっただけで優雅な生活を送る事が出来てたんだ。もう

十分だろう。あとは「恵まれない俺たち」に寄付してくれよ』

『ああ。俺たちがまともな生活が出来ないのは全部貴族の所為だ！

だから俺たち

も貴族から力ずくで奪う！ そうとも、これは正義の為だ！』

今は使われていない廃工場の一角で屈強な男たちが口々に10才くらい

の少女を

に自らの不満をぶつけている。

どれも身勝手で一貫性すらない、滅茶苦茶な主張だが彼ら自身はそ

れを本当に正

しいと思っている。

夜明け前で静まり返っていたこの場では男たちの罵詈雑言がよく響

男たちは皆武装しており、顔つき、歩き方、身のこなしからして『歴戦の軍人』

といった感じだった。対して男たちに罵倒されている少女はロープで後ろ手に縛

られ、鮮やかな色をしたやや縦ロールしている金髪と白い肌はくたびれ、薄汚れてしまっている。

そう。少女は身の代金目当てで誘拐されたのだ。彼女の家は超がつく程の名門貴族であり、狙う人物は吐いて捨てるほど存在する。

今回彼女を攫った男たちも彼女の家に敵対する所から雇われたか、そんな状況にも関わらず、瞳は気丈な光を灯していた。

男たちはそれが気に入らない。自分達に反抗的な少女が。この少女の生殺与奪は

すべて自分達が握っているのだから、最後の審判が下るのを恐れるように、ただ

自分達に怯えていればいいのだ。

「あ、あなた達！ この私、『セシリア・オルコット』にこんな事をしてただで済むと思っていますの！？ 恥を知らなさい！」

セシリアは目に涙を溜ながら男たちをなじる。

犯人の中の1人が不愉快そうに顔を歪めた直後、黙ってライフルのグリップでセ

シリアの頬を殴った。

「かつ……！ ハアッ……！」

余りの激痛にセシリアはグッタリと横たわった。

『この！ クソガキが……ッ！ 今すぐここでぶっ殺してやってもいいんだぞ！ ああっ！？』

『やめろ』

『けどよ！』

怒りで我を忘れる男にリーダー格であろう男が制止の言葉をかける。しかし頭に

血が昇った男は収まりがつかないとばかりにリーダー格の男に噛みついた。

それをリーダー格の男は慌てるでもなく、ゆっくりと言葉を続ける。

『やめろと言った。顔に傷をつければ、そのガキの商品価値が下がる』

「商品……価値……？」

『商品価値』という言葉の意図が理解出来ずセシリアは痛みを我慢しオウム返しに呟いた。

『そうだよ、お嬢様。君の家から身の代金を頂戴したあと、用済みになった君は売られるんだ。君くらいの年のメスガキがお好みというお客様に心当たりがあるからね。ああ。心配しなくていい。逃げようとさえしなければ、大事に扱ってくれるはずだよ』

リーダー格の男が優しい口調で今後セシリアの辿る運命を噛み砕いて語る。それ

を聞きセシリアは恐怖で何も考えられなくなった。人間としての尊厳など何処に

もない、口にする事もおぞましい事をさせられるだけの存在。

ここでは自分の命の価値がこんなにも軽い。それらの事実打ちのめされ、セシ

リアは涙を流し、体中が強張り、ガチガチと震えだす。

もはや先ほどのまでの気丈さは欠片も見当たらなかった。

男たちは自分達にセシリアが屈服したという事実、に極上の酒で酔ったかのような

錯覚を覚え、満足した。

（助けて！ 誰か……助けてっ！）

セシリアの心の中で懸命に叫ぶが、その声に応えてくれる者など今この場に存在

するはずない。容赦のない現実を前にしてセシリアの心は絶望で満たされていっ

た。

夜明けまで後10分ほど……。

その時、異変が起きた。

『おい。そろそろ交代の時間だろ？ 見回りの奴らは何をしているんだ？』

『そういえば……。さっき便所に言った奴も帰ってきてないな……。』

『まさか……ッ！』

リーダー格の男が何かに感づき、サバイバルナイフを手を取った。

周りの男たち

も少し遅れてそれに倣い、銃を構える

その瞬間、ドアがブチ破られる音が響いた。

『え？ あ？』

男たちは少し混乱しながら、ドアがあった方に目を向ける。

そこには深い緑色を基調としたカラーリングを施されているパワードスーツを着

込んだ何者かが立っていた。

『ア、アサルトアームズ！？』

陸戦用強襲型駆動鎧 アサルトアームズ。

今でこそ『骨董品』とされているが、かつてはその機動性、汎用性は地上戦にお

いて現存していた兵器の中では群を抜いており、次期主力兵器として注目されて

いた駆動兵器だ。

犯人グループの1人が銃を構え、照準を合わせる。しかし、その一瞬でアサルト

アームズをきた何者かは男との間合いを詰め、蹴り飛ばした。

突然の闖入者にセシリアは訳が分からない。

『セシリア・オルコットだな？』

アサルトアームズの人物はセシリアの方を向かずに確認をとる。よく通る低い声から察するに男性だろう。

しかも犯人グループよりも一回り小柄である事から少年だと推測できる。

セシリアは無言で何度も頷いた。

するとアサルトアームズの少年は安心したのか、幾分か柔らかい声でセシリアに呼びかけた。

『助けに来た。少し待ってろ。すぐに終わらせる』

口調はぶっきらぼうだったが、聞く者を安心させるような優しく氣遣うような声。

セシリアの眼には少年がまるで物語に出てくる英雄^{ヒーロー}に映った。

少年は犯人グループに向かい走る。犯人の男たちは応戦する為、発砲するがアサルトアームズを纏い、人間の限界を超えたスピードで動きまわる少年にまともに照準を合わせる事など出来るはずもなく、一発たりとも当たりはしなかった。

『クソッ！ クソッ！ 何で当たらねえ！？』

『撃て！ 撃て！ 止めるな！』

一瞬で犯人たちと間合いを詰めて手慣れた様子で制圧していく。約半数を5秒以内に制圧され、勝てないと悟ったメンバーの1人は窓から飛び降りた。

しかし、地面に着地した瞬間目を見開いた。見回りとして外に出ていたその他のメンバーが血塗れになって横たわっていた。男は絶叫し、腰を抜かす。

安全地帯だと思った場所がリヴァイアサンの口の中だったのだ。その上昨日まで

寝食を共にしていた仲間がただの物体になっている不条理さ。問答無用さ。そし

て自らも同じ運命を辿るであろう事への絶望感。

それらの事実を男は受け止めきれなかった。次の瞬間男の額に風穴が空いた。

男は糸の切れた操り人形のようにその場に倒れる。

少し遅れてくぐもった銃声が響いたが、それを聞く人間はもはやその場に存在し

なかった。

2

『やってくれたじゃねえかクソガキ！ お陰で計画が滅茶苦茶だぜ』

ナイフを構えたリーダー格の男がアサルトアームズを纏った少年を笑いながら、見据えている。おどけた様子で話しかけたが、少年へ向ける殺気は本物だった。

『あんた軍人？』

『いや、元軍人だ。まったく参るよなあ、ISが出来た所為で何処も彼処も軍備縮小、削った予算もすべてISの開発に当てるそうさ。お陰で俺たちみたいな下っ端はお払いだあ。しかし嬉しいぜえ。まだ俺と同じ骨董品を使っている奴がいるなんて——なあっ！』

男は一気に間合いを詰め、少年の喉にナイフを突き立てようとする。少年は咄嗟に左に回り込み、男の関節をとろうとするが、

『遅ええええっ！』

ナイフを左側に薙ぎ、少年の頸動脈を狙った。少年はそれを体を反らし間一髪回避、そのまま蜻蛉返りをして間合いをとった。

『その動き……アサルトアームズか』
『その通り』

そう言っただけ男はダボダボのロングコートを捲った。男は毒々しい赤

を基調とした
アサルトアームズが着込んでいる。

『現役時代から使い込んでる相棒さあ！ こいつに懂れて、功績を重ねてきたのに

よあつ！ 受領した直後に《白騎士事件》なんぞが起きやがった！
しかもその上

俺たちは軍を追われて今まで重ねてきた功績は全部パーだ！ 俺がこんなに落ちぶれたのも、こいつが『骨董品』なんて呼ばれるのも！ 全部ISの所為だ！』

『どーでもいい』

『ああつ！？』

『あんたにどんな事情があろうとも、関係ない。オレ達はセシリア・オルコットを奪還するように依頼を受けた。だから彼女を取り戻す。邪魔する奴はなぎ倒す。簡単な構図だろ』

『て、てめえ……ッ！！』

『そうだな。あえて言わせてもらおうとすれば……あんたがどんだけあんたの不幸な境遇とやらを語っても、あんな小さな女の子の人生を奪っていい理由にはならない。確かにあんたはIS開発における被害者だっただろうさ。けどな、それを理由に誰かを傷つけた時点であんたは加害者だ。赦されない』

『黙れ！ 黙れ！ 黙れええええええっ！！！！』

男はナイフを振り上げ、少年との間合いを詰め、一気に振りおろした。少年は振りおろされたナイフの少し下の手首を狙って蹴りを繰り出す。

『ガアッ……！！』

痛みに顔を歪め、男はナイフを落とす。そして——少年の拳が男の腹に突きたてられ、男は気を失った。

「……。大丈夫だったか？ 今、縄を解く」

アサルトアームズの少年は制圧した男たちを全員拘束した後、被っていたフルフェイスのヘルメットを脱ぎ、セシリアの方へ近づく。既に日が昇っており、セシリアには少年の顔が逆光でよく見えなかったが、吊り上がり気味の茶色い瞳とアジア系のような黒い髪が印象的だった。

「怪我は……顔以外目立った所はなさそうだな」

「あ、ありがとうございます……」

「ああ、いいって。いいって。礼ならあんたの両親に言いな。あんたの救出の為にかなりの額をオレ達に払ったんだから」

「あなたは……一体……？」

「ん、オレに本名はない。先生や仕事仲間からは《ストレンジヤー異邦人》って

呼ばれてる」

《ストレンジヤー異邦人》……」

セシリアは少年の呼び名を反芻した。大切そうに、心の中に刻みつけるように……。

「あ、あ。こちら《ストレンジヤー異邦人》先生、聞こえますか？」

『《ストレンジヤー異邦人》、仕事中は「先生」ではなく、コードネームで呼ぶように教えたはずだよ』

「あ、っ。す、すみません先せ——じゃない。《ジョン・ド・ウ身元不明》」

『よろしい。それで状況は？』

「中にいた奴らは全員生け捕りにしました。こいつらを尋問すれば今回の黒幕が明らかになると思います」

『 よろしい。それじゃあセシリア・オルコット嬢の迎えが来るまで
そこで待機。その間に私は外の片づけをしておこう』

「了解っス！」

こうしてセシリア・オルコットの長い夜は終わった。後になって思
えば彼女にとつての初恋はこのときヒーローとして憧れた少年、《
ストレンジャー
異邦人》だったのかもしれない。この事件以来セシリアは《
ストレンジャー
異邦人》とは一度も会っていない。連絡をとってみたくても、連絡先がわ
からない。いつしか彼女の中で《
ストレンジャー
異邦人》の存在は過去のものとな
っていた。

彼女はこの事件の5年後、日本のIS学園に入学する事になる。

3

オレ、ストレンジャーこと浮舟旭（偽名）日本国籍（大嘘）の15
才（年齢詐称）
は今日入学するIS学園の前にいる。

必要な手続きや書類の偽造、戸籍の準備などはすべて束さんがコン
ピューターを

ハッキングしてやってくれたので、前準備の段階では楽が出来た。

まあ、今日から始まる任務では文字通り精神を削るのだから前準備
位は楽をした
い。

延ばし方にこだわりの持っていたヒゲを泣く泣く剃り、ボサボサで
伸ばしっぱなしだった黒髪をバツサリ切ってとかしてスッキリとし
た短髪になっている。髪質が元々固い所為か、ワックスをつけてい
ないのに前髪意外の髪の毛は重力に反抗の意志を示している。

束さんの言うとおり15才と自己申告しても誰も疑わないだろう。
しばらくビール

を飲めなくなるのが非常に悲しいが……任務の為だ。仕方ない。

しっかし……。

自分が入学する学園を見てゲンナリした。

ISは女性にしか起動出来ない以上、当然と言えば当然なんだが……

…見渡す限り女

。女。女……。

この状況を『女ばかりの桃源郷』『ハーレムルートへの第一歩』とか抜かす奴も

いるかもしれないが、そういう人は一度想像してみたい。

学校で少数派というものの息苦しさを。

女の園に男がいる時の場違い感を。下手すると学校中の女

にパシリに使われるかもしれないという最悪の未来予想図を。

どうやっても目立ってしまう為、気軽に鼻もほじくれず、屁もこけない現実を。

想像してもらえただろうか？

そしてわかって貰えただろうか？ オレのこのブルーな気分を……。なににより群を抜いて厄介なのは仕事に支障をきたすという事だ。オレの仕事は基本的に群集に紛れるという事が重要になってくる。今回のような護衛任務なら尚更だ。

オレは周りに埋もれてこそ、意味がある。決して大勢に注目されるのが恥ずかしい訳ではない。しかしここはIS学園。ここでは男のオレはどうしても目立ってしまう。

学園をジッと見つめて今後どうしようか考えていると、数人の女子がこつちをチラ見してヒソヒソ話をしている。

まあ、女子校を見つめている男というのは端から見たら超不信だろう。

いくら怪しいといっても不審者扱いされるのは非常に辛い。

かといって、現時点で注目されるのは、オレの精神衛生上避けたい事態だ。

仕方ない。目立たないように変装して入るか……。

「待て！ 待たんか不審者！」

「不審者って何スか！？ オレはこの生徒ツスよ！」

「嘘をつくな！ きぐるみを着た不審者がこの生徒であるはずがない！ それにキサマ男だろう！」

「中身男だから注目されるのが恥ずかしかったただけですよ！」

「その方が目立っているだろうが！」

数分後、学園内の教師と追いかけてこを繰り広げる事になった。
一体何がいけなかったんだろうか……？

4

「う、浮舟君？ 浮舟あ、旭くん？ いないんですか？ ど、どうしましょう……？」

教壇にいる山田やまだ 真耶まやは非常に困っていた。

おりむらいちか

織斑一夏のほかに急遽入学が決まった二人目の男子生徒が出席の時間になっても姿を現さないからだ。

（しょ、初日から遅刻するなんて……私が教師として不甲斐ないから……）

他人から見たら真耶は何も悪くないのだが、本人はそうは思っていない。

しかない物はどうしようもない。真耶は気を取り直して次に移る事にした。

「織斑一夏くん」

「……………」

返事が無い。ただの屍のようだ。

山田真耶は泣きそうになった。自分の教師としての能力の低さに絶望しかけた。

しかし彼女はあきらめない。状況打開の力ギはいつだって挑戦なのだ。

「織斑一夏くん」

「……………」

最後に一度なけなしの勇気を振り絞り、少しだけ。ほんの少しだけ（55bBが56bBになる程度）大きな声で織斑一夏の名を呼んだ。

「は、はいつ!？」

織斑一夏と呼ばれた少年は声が裏返った。その様子に数名の女子生徒がクスクスと笑う。

「あつ、あの。大きな声出してご、ごめんなさい……。怒ってる？怒ってるかな？ごめんね、ごめんね？でもね、『あ』から始まって、今『お』の織斑くんなんだよね……。何でか浮舟くんはいないし……。だからね、自己紹介してくれるかな」

「いや、あのそんなに謝らなくても……。自己紹介しますから先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですね？約束ですよ？」

一夏は真耶の腰の低さに若干の戸惑いを覚えながらも自己紹介をする為に席を立つ。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

緊張してるのか若干表情が固い。それもそのはず。彼は自分以外のクラスメイトが女という状況に非常に肩身の狭い思いをしていたのだ。唯一彼以外に男の生徒がいるという事は彼にとつて僥倖だったが、今その生徒は遅刻しているようでこの教室にはいない。

（いかん。このままじゃ暗い奴って印象が……！ 何か、何かしゃべらなくては……！）

「すみません！ 遅れました！」

「あ、浮舟くんです……！？ よ、ね？」

「オス！ 浮舟旭（偽名） 15歳（年齢詐称） っス！ よろしく！」
「……」

クラスメイトは誰も反応しない。反応する事が出来ない。突如として教室のドアを勢いよく開けて飛び込んできたのは――犬のきぐるみだったからだ。

クラスメイトは全員一斉に心の中でツツコミを入れる。

（（何故きぐるみ！？）（））

と……。

第1話 異邦人へストレンジャー》（後書き）

《異邦人》^{ストレンジャー} こと浮舟旭の過去と先生こと《身元不明》^{ジョン・ドウ}の登場、そしてセシリアとのファーストコンタクトでした。
ちなみにヒロインはとりあえず今のところ未定です。

第2話 浮舟 旭

1

「あ、あのー？ 浮舟だったよな」

「イエス、アイアム！ マイ ネーム イズ アサヒ ウキフネ！
ハウアーユー？」

「あ？ え、えつと……」

「アイム ファインセンキュー」

「自分で言った！？」

やたらハイテンションの犬のきぐるみにツツコミをいれた。

「なんできぐるみなんだ？」

ボーゼンとしていたクラスメイトは全員我に返り、『よくぞ聞いてくれた！』というような表情で何度も頷いた。

「何故つて勿論目立たない為に変装——」

「その格好の方が目立つだろ！？」

一夏の魂の叫びとも言えるツツコミが旭に叩き込まれた。

「やるな、織斑一夏。良いツツコミだ」

「う、浮舟くん！ き、きぐるみは校則違反なので、脱いで下さい
っ」

「おっと、失礼しました。申し訳ないんですが、背中チャックを
下ろしてもらってもいいツスか？」

「あ。はい」

どうやって着たんだろう、という疑問に蓋をして、旭の背中 of チャックを下げる。出来た隙間から旭が顔を出した。

「ふいふ、暑かった」

「う、浮舟くん。もう一度ちゃんと自己紹介してくれませんか？
えつと……ダ、ダメかな？　ダ、ダメだよ。ご、ごめんね。ごめんね？」

「ダメじゃないツスよ。それじゃあ、改めて……浮舟旭ですか？」

「聞いたらダメだろ！　言い切れよ！」

「ナイスツツコミ。15歳ツス。趣味は読書。特技は狙げ……じゃない。速読と暗記」

旭の顔を見て『普通』『っていうか地味？』『整ってはいるんだけど、織斑くんと比べたら見劣りするかな』と囁いているが、旭はそんな事には構わず自己紹介を続ける。

「彼女いない歴15年。随時募集中です。よろしく！」

社交ダンスの前の礼のように優雅に頭を下げると同時に帽子を脱ぐのと同じ動作で頭のカツラを外した。隠されたヴェールの下からは禿げた頭皮が露わになる。

「……ッ！？！？」

クラスメイトと副担任の山田真耶は全員旭の禿げ上がった頭皮を見て絶句した。

その反応を見て旭は満足そうに頷いた後、ハゲヅラをとると四方八方に逆立っている黒髪の短髪が。

「これぞ本当の隠し芸！」

「誰が上手い事言えと！？」

「因みに将来の夢は吉本興業に入る事ッス！」

「なら、何でIS学園に入学したんだ！？」

「そこが人生のままならない所だな」

「もうええわっ！」

「「どうも、ありがとうございましたっ！！」」

揃って一礼し、やりきった表情を浮かべる。そしてお互いに無言で目を合わせ、ガシッと握手した。クラスの女子は雰囲気酔っているのか、2人に一斉に拍手を送った。

真耶に至っては涙目になっている。旭と一夏は拍手に応える為に両手を上げて手を振った。

その時。

パアンツ！ という音が響き、調子に乗ったバカ2人は仲良く床に沈んだ。

「席に着け、馬鹿者共」

その背後には黒スーツにタイトスカート、スラリとした長身の出席簿（煙が立っている）を構えた美女。このクラスの担任であり、織斑一夏の姉である『織斑千冬』が仁王立ちしていた。

「あ、頭が割れる……」

「ち、千冬姉の出席簿アタックは効くだろ……？」

パアンツ！

「織斑先生と呼べ」

「お、織斑！？ しっかりしろ、傷は浅いぞ！」

「浮舟……。俺はもう、ダメだ……」

「諦めるな！　しつかりしろっ！」

「……（ガクッ）」

「織斑あああああっ！！！！」

スパーンッ！

「ガッ！」

今度こそバカ2人は床に沈み、起き上がってこなかった。

2

「——で、あるからしてISの基本運用は現時点では国家の認証が必要であり、枠内から逸脱した場合は、刑法によって罰せられ——」

只今1限目の授業中。未だに痛む頭をさすりながら、オレは授業を受けている。

流石に出席簿アタックとやらは痛かったが、お陰で護衛対象である織斑一夏とのファーストコンタクトの感触は悪くない。人に警戒される事なく、懷に潜り込むにはバカになるのが一番だ。有能な人物は人に警戒されたり、敬遠されたりするが、バカを警戒する奴はいないからだ。そして護衛任務を成功させるには護衛対象と仲良くなるのが一番手っ取り早い。『織斑一夏』はオレの護衛対象であり、大事な大事な

『餌』なんだからな。

この関係性は大事にしないといけない。オレの命に替えても叶えない願いの為に……。

思考を一旦収束させ、教科書に目を移す。

オレの特技は先生譲りの狙撃の他に本の速読・暗記。教科書の内容は既に丸暗記済みだ。抜かりはない。

盤上でスラスラと説明する山田先生。織斑の奴は先ほどから後ろでサッパリわからない、という顔をしおり、微動だにしない。

大丈夫なのか、あいつ？

そんな織斑の様子に気がついたのか、山田先生は心配そうな顔をした。

「織斑くん、何かわからない所はありますか？」

「あ、えっと……」

「わからない所があつたら遠慮なく言ってくださいね。何せ私は先生ですから」

えっほんと胸を張る山田先生。ふむ、デカイな。——じゃない！

良い教師だと素直に関心した。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

織斑が意を決したように立ち上がる。それに応えるように目を煌めかせる。

「ほとんどの部分がわかりません！」

クラスの全員がずっこけた。いや、比喩表現ではなく本当にずっこけた。

「え……。ぜ、全部ですか？」

衝撃の事実には山田先生は引いている。

「どんだけやる気ないんだよ？ いや、自分がわからない所を聞くと
いう姿勢を見せるって事はやる気が無いって事ではないんだろうと
思うが……。」

「えっと、今のところ織斑くん以外で分からない人はいますか？」

当然誰も手を上げない。

「えゝ！？ 浮舟も！？」

「ああ。教科書の内容は全部丸暗記してるからな」

「ええ！？ お前アホの子じゃなかったのか！？」

「ほほう？ オレはあんたにそういう風に見られていたのか？ つ
ていうか、あんた予習してなかったのか？ 入学前にテキストが配
られただろ？」

「古い電話帳と間違えて捨てちゃった！」

ドヤ顔で胸をはる織斑の姿に呆れを通り越して、感心してしまった。

パン！

「必読と書いてあっただろう馬鹿者。あとで再発行してやるから一
週間以内に覚える。いいな？」

「い、いや。一週間であの分厚さはちょっと……」

「大丈夫だ織斑。人間死ぬ気になれば大抵の事は出来る」

「いや、けどな……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

織斑先生のハートマン軍曹ばりの有無を言わさぬ威圧感に織斑は黙

って従った。

あの人の眼光の前では猛獣ですら黙って従うだろう。

うん。あの人には逆らわないようにしよう。勝てる気がしない。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった兵器を深く知らず運用すれば必ず事故が起こる。そうしない為の基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそういったものだ」

『俺がこんなに落ちぶれたのも、こいつが『骨董品』なんて呼ばれるのも！ 全部ISの所為だ！』

昔ある事件で相手にした事のある男の言葉が脳裏を過る。

ISが開発される前、当時最強とされた戦闘機もアサルトアームズも今や骨董品扱いだ。

改めて『インフィニット・ストラトス』という兵器の強力さを認識させられる。

大きな力にはそれに比例するだけの大きな責任が付き纏うものだ。

「……貴様、『自分が望んでここにいる訳ではない』と思っているな」

織斑の体がビクリと震えた。凶星か……。

「望む望まざるに関わらず、人間は集団の中で生きなければならぬ。それを放棄するというのなら、まず人である事をやめる事だな」

言い方は非常に辛辣だが、その通りだ。しかし、それだけじゃない。織斑先生はあえて口には出さなかったが、『織斑一夏』という存在は今や政治的にも社会のバランス的にも、世界的にも極めて面倒な位置にいる。本人が望む、望まないに関わらず周りの思惑は『織斑

「一夏」の人生を決定する。

あいつはそれらの事についてもっと自覚と認識を持つべきだと思っ
が、結局は本人次第なんだよな。

「え、えつと織斑くん。わからない所は放課後教えてあげますから
頑張りましょう？　ね？　ねっ？」

「はい。それじゃあまた放課後によろしくお願いします」

残業決定。山田先生ってスゲー良い先生だな。頼りにどうかは置い
といて。

「ほ、放課後……。生徒と二人つきり……。ダ、ダメですよ織斑く
ん！　先生強引にされると弱いんですから……。それに私男の人って
初めてで……」

何想像してるんだか……。けど、ふむ。IS学園教師の山田麻耶は
DMと……。

「で、でも、織斑先生の弟だったら……」

「あー、んんっ！　山田先生授業の続きを」

「あっ！　す、すみません！」

本当にこの人大丈夫か？

3

休み時間。織斑がこっちに話しかけてきた。

「改めて織斑一夏だ。よろしく」

「ああ。浮舟旭だ。こちらこそよろしく織斑」

「一夏でいいよ」

「じゃあオレも旭でいい。よろしく頼む一夏」

「わかった、旭。しかし助かったぜ」

「何が？」

「オレ以外に男がいてさ。これでオレー一人だったら針のムシロだったよ」

「はは、まあこの状況で1人は確かにキツイな」

「旭はどうしてここに？」

「ん？ ああ。オレは実験段階で偶然発生したバグを取り込んで偶々出来た『男でも起動できるIS』のテストパイロットってところだ」

と、いう事になっている。

「へえ、そんなISがあつたんだな？」

「ああ。世界で一つだけの貴重品らしいぞ。って言っても取り込んでいるのがバグだから、どんな不具合があるかわからない。いつ爆散するかわからないからドキドキだ」

「それって笑い事じゃないよな！？」

「そうだな。あはははは」

「『あはは』じゃないだろ！？」

大丈夫だろ。なんとつてあの天才技術者の束さんが直々にチューンナップした機体だし大丈夫……だよな？

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「ん？」

目の前に立っていた少女は地毛の金髪が鮮やかな少女だった。

白人特有の透き通った青い瞳がやや吊り上がった状態で一夏を見据えている。

毛先がロールになっており、いかにも『お嬢様』といった雰囲気醸し出している。

「えっと、君は誰？」

「まあ、わたくしを知らない！？ このイギリスの代表候補制にして、入試主席であるこの――」

知っている。オレはこの子を知っている。この子は――ッ！

「セシリア・オルコット！」

「……………」

「……………」

しまった。つい口が滑った。何とか誤魔化さなければ！

「知り合いか旭？」

「……イギリスの代表候補生にしてIS『ブルーティアズ』の操縦士。その上実家は名門中の名門貴族の有名人だ」

「まあ、そちらの殿方は最低限の常識を持ち合わせていらっしゃるようですね」

「あ、ああ。どうも」

「あら？ あなた以前何処かで会ったことがありませんでしたか？ あなたの声、どこかで……？」

「気のせいだろ。オレはあんたに会った事ない、と思う」

リアリティが出るように断言よりも曖昧にしておく。誤魔化せるかな？

「質問いいかな？」

「ふふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏の質問でセシリア・オルコットの関心がそちらに向く。どうやら誤魔化せたみたいだ。良かった、良かった。今後こういう事が無い様に、細心の注意を払わなければいけない。

「代表候補生ってなんだ？」

若干機嫌が上向いたセシリア・オルコットが呆れたように一夏を見た。

「あなた本気で仰ってますの？」

「おう、知らん」

「踏ん反り返るな、一夏。自慢にも何にもならないぞ」

「信じられない。信じられませんか。極東の島国というのはここまですぐの地でしたの？ 常識ですわよ。常識」

「旭、代表候補生ってなんだ？」

「マジで知らないんだ。ISの国家代表は知ってるか？」

「おう。その国に1人代表となるIS操縦者がいるんだよな？」

「そうだ。つまり『代表候補生』ってのはその予備軍。まあ、速い話がその国でトップクラスの実力を持つエリートだな」

「そう！ エリートなのですわ！ 本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その事実を少しは理解していただける？」

「そうか。そいつはラッキーだ」

「一夏、お前……」

喧嘩売ってどうするよ？

「馬鹿にしていますの？ …… 大体あなたISについて何も知らない癖に、良くこの学園に入れましたわね」

そりゃこいつの自由意思じゃなくて、織斑一夏が世界中から『唯一ISを動かせる男』としてのデータ取る為のモルモットとして見られてるからだよ。

「唯一男でISを動かせるというから知的さを感じられるかと思っ
ていましたけど、期待はずれでしたわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあ、私は優秀ですからあなたのような人間にも、優しく
してあげますわよ」

あの子がこんなに大きくなって…… 体もそうだが、特に態度が
まあ、女尊男卑の今の世の中で当然って言えば当然の態度だが。

こういった手合いは『自分を蔑ろにされる事』を嫌い、『自分の力
を頼りにされる事』を好む。適当にあ望み通りの反応を返して、満
足してお引き取り願おうか。

「分からない事があれば、まあ…… 泣いて頼むのでしたら、教えて
差し上げては良くてよ。何せ私は入試で唯一、教官を倒した…… エ
リート中のエリートなのですから」

『そうか。それじゃあ何かあった時は頼らせてもらうよ』的な事を
言っただけで、お帰り願おうとした直後だった。一夏のバカが
爆弾を投下した。

「入試ってあのISを起動させるアレか？」

「それ以外に入試なんてありませんわ」

「俺も倒したぞ教官」

「「は？」」

「わ、わたくしただだと聞いていましたが？」

「『女子では』って、オチじゃないのか？」

マジか！？ リアリイ！？ オレ、ボロ負けだったんだが！？ ア
レに勝ったの！？

「っ、つまりわたくしだけではないと……！？」

「い、いや。知らないけど」

自分の失言に気がついて一夏の声が上ずっている。

「あなたが！？ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「た、多分」

「多分！？ 多分ってなんですか！？」

「えーっと……落ち着け、な！？」

「これが落ち着いていられますか！」

「あ、旭！ 助けてくれ！」

「知らん。勝手にやってろ」

「あさひ……ッ！」

「わたくしを無視しないで頂けますか！？」

ギヤアギヤアと噛みつくセシリア・オルコット。さて、どうしたものかと、考えていたら、天の助けとばかりに2限目のチャイムが鳴った。

「っ……！ またあとで来ますわ！ 逃げない事ね！ よくって！

？ そのあなたも！」

「えー！？ オレも！？」

織斑一夏の護衛を請け負っただけなのに、初日から厄介な事に巻き込まれそうな予感が……。怨むぞ、一夏のバカヤロー……。

第3話 クラス代表

1

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

各種装備の特性か……。ISと本来の兵器との違いは大きい。

オレにはまだよくわからんが、ISという兵器を運用するに当たり、『想像力』と『物体を構成するイメージする力』というのは重要らしい。

そうだった事はまあ、追々学んでいくといて、IS関連のチュートリアルをしてくれるのは、ド素人のオレに取って有り難い話だと思う。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「織斑先生、質問いいつスカ？」

「何だ浮舟」

「クラス対抗戦の代表者って何スカ？」

「文字通りクラスの代表者だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……。まあ、つまりはクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した意味はないかもしれないが、一度決まると1年間変更はないから、そのつもりで」

なるほど。面倒そうな役割というのはよくわかった。

そういう事はやりたい奴に任しておけばいいと思う。オルコット当たりを推薦しておけばさっきの火消し程度にはなるかもしれない。

とか考えていると女子連中がとんでもない事をしてくれた。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「じゃあ、私は浮舟旭くんを推薦します！」

「では、候補者は織斑一夏、浮舟旭。他にはいないか？ 自薦他薦問わないぞ」

冗談！ そんな事になったら面倒事が雪だるま式に増えていくのは目に見えている！

「はい！ セシリア・オルコットを推薦します！」

とりあえず、オルコットが噛みついてこないうちに推薦しておく。

「候補者は『織斑一夏』『浮舟旭』『セシリア・オルコット』。他にいないか？」

誰も手を上げない。あとはオレと一夏が辞退すれば万事解決。四方丸く収まるわけだ。

「よし、この3人で投票を——」

「先生！ オレ辞退——」

「納得いきませんわ！」

オレの言葉を遮り、オルコットがバンッ！ と机を叩き、立ちあがった。物凄い剣幕だ。

「そのような選出は認められません！ 大体男がクラス代表候補に挙がるというだけでも言い恥さらしですわ！」

ヒデエ言われようだな。っていうか、オレ辞退しようとしたよな？
人の話は最後まで聞こうや、オルコット嬢ちゃん……。

「實力から言えばこのわたくし、セシリア・オルコットがクラス代表になるのが必然。それを物珍しいからという理由で絵にかいたような不真面目な男と無知蒙昧で恥知らずな男という猿コンビを候補にされては困ります！」

ここまでボロカスに言われると、もう笑うしかないな。あつはつは！
っていうか『無知蒙昧』なんて難しい言葉を良く知ってたな。

「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき！ そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的なこんな国で暮らさなくてはいけない事自体、わたくしにとって耐え難い屈辱だというのに——！」

周りの反応なんか気にも留めず、セシリア・オルコットはますますヒートアップしていく。

ふう、仕方のない奴だ。気が済むまでしゃべらせた後、オルコットを代表にするって流れに持っていこう。クラスの連中もオルコットのこの熱弁を受けたあとなら、その流れに便乗してくれるはず。

どうすればこの場を穏便に収める事が出来るかという方向で思考を巡らせる。

この場を平和に収める為なら子供のダダこねに腹を立てる事はない。第一、オレは日本人ではないのだ。日本を馬鹿にされて腹を立てる道理もない。

それが年長者としてオレがとるべき態度であり、この場で最もベタな選択だと確信を持っている。

この時、オレは完全に失念していた。この対応は大人であり、日本人でないオレだからこそ出来る事であり、『織斑一夏』は正真正銘

の日本人で、まだ15歳という『子供』だという事を……。

「……イギリスだって、大したお国自慢は無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

「なっ……！？」

セシリア・オルコットの数々の暴言に今まで押し黙っていた一夏がキレた。一夏の反撃が逆鱗に触れたのかオルコットは顔を真っ赤にして怒りを溜めている。

「あっ！ あっ！ あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「オ、オルコット！ すまん、落ち着いてくれ！ 一夏も悪気は無いんだ！ 売り言葉に買い言葉という奴で——！」

「何で誤るんだ旭！？ 豚の餌にも劣るようなモノ食ってる奴に日本をここまで馬鹿にされて黙ってるのかよ！？」

「よーし！ それじゃあ今からオレがイギリスの良い所を順にあげてやろう！ イギリスでは水難事故による死亡率は日本の1/5でな、その理由は着衣水泳のよる教育を——」

「決闘ですわ——！」

「おう。いいぜ！ 四の五の言うよりわかりやすい！」

オレの必死の消火作業も空しく、ヒートアップするガキ2人……。

「言っておきますけど、態と負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負に手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？ 何にしてもちようどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すいい機会ですわ」
「ハンデはどのくらいつける？」

「あら。早速、お願いかしら？」

「いや、オレがハンデをどれくらいつけたらいいかなーと」

クラスが爆笑の渦に包まれた。

なんてこった。鼠が虎に喧嘩を売っている。

「織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「織斑くんは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

一夏のバカヤローの表情がどんどん硬くなる。完全に自分がIS初心者だって事を忘れていたな……。

「……じゃあハンデはいい」

「ええ。そうでしょうそうですね。むしろわたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふつ。男が女より強いなんて、日本の男性はジョークセンスがあるのね」

凄い皮肉だな。一夏の命に関わる事じゃないし、オレにとっては対岸の火事だ。もう勝手にしてくれ。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後第三アリーナで行う。織斑、浮舟、オルコットはそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

「はいはい、がんばれー、いちかー……………って、ええええええええええええ！？　ちょ、はあああああああああああああああああつ！？」

スパアンツ！

「メパツ!？」

「静かにしろ馬鹿者」

「ちよつ、織斑先生! 何でオレまで勝負する事になってるんスカ!？」

「クラス代表を決める為の試合だ。候補者が試合をするのは当然のことだろう」

「辞退! 辞退しまつす!」

「却下だ。他薦された者に拒否権などない。選ばれた者は覚悟を決めろ」

「何でこんな事にiiiiiiiiiiiiiiiiいつ!?!?!?!」

オレの無常な叫びはスパァン! という音によって遮断された。

2

「セシリア・オルコット。イギリス代表候補生。機体名『蒼い雫』ブルーティアーズ。第3世代ISで1対多数での射撃戦を想定した設計なされている。機体第3世代兵器「BT兵器」のデータをサンプリングするために開発された実験・試作機の為、ライフルの実弾装備がない。現在判明している武装は特殊レーザーライフル『スターライトMK?』ビット型武器『ブルー・ティアーズ』近接戦闘用ショートブレード『インターセプター』か……」

オレは現在、ホテルの一室でイギリス代表候補生『セシリア・オルコット』のデータ収集を行っている。余談だが、IS学園は全寮制なのだが、オレの入学は急遽決まった所為で寮の空き部屋がまだない。その為オレはホテルから通学する事になっている。

「狙撃を目的とした機体設計って点ではオレのISと少し似てるな」

ハヴォック・ゲイル

オレのIS『暴風』は多数対多数のチーム戦を想定した機体であり、ミドル・アウトレンジでの戦闘を本領としている。後方支援機の為、格闘性能は並より少し上程度らしいのだが、束さんいわく『あつくんの搭乗を前提としてある機能をぶちこんで、チューンナップしてあるから、近接戦闘でも充分対応できるんだよ』とのことらしい。

まあ、オレはISについては門外漢だ。性能の事は束さんに任せるしかないだろう。

「って言ってもド素人のオレが勝てる相手でもないんだよね……。さて、どうしたものか」

オレの目の前にある選択肢は2つ。

- 1．諦めてボコボコにされる。
- 2．足掻きまくってボコボコにされる。

どちらを選んでもボコボコになる訳で……。

「ふう〜〜〜〜。仕方ない。やれる限りはやるとしますか。倒れるときは前のめりに、だな」

（ボコボコにされる）覚悟を決めて冷蔵庫の中からビールを取り出し、プルタブを開ける。

プシッ！ という音がして、アルコールの匂いが立ち込めてきた。

「しかし、まさかあの時の子がこんな所にいるなんて……」

世間は狭い。そして下調べを怠った自分の迂闊さに呆れてしまう。オレはセシリア・オルコットと過去に一度会った事がある。

たしか『身代金目当てに誘拐されたセシリア・オルコットを救出してほしい』って依頼が先生の所に来て、オレが中の制圧、先生が外からの狙撃を担当したんだっけ……。

ははっ、懐かしい……。

ビールを一口飲み、ベランダに移動する。

オレの願いの為にやる事は山積みだ。

オレのこれからやろうとしている事はきつと多くの人を傷つけるだろう。

オレを友達だと言ってくれた一夏を、オレを信頼していると言ってくれた束さんを、オレを心配だと言ってくれた『イアン』を……。

けど、それでも——オレはやらなければならない。

他でもないオレ自身の為に……。

誰かの為なんて言葉使ってたまるか。

『誰かの為』という事は裏を返せば、『誰かの所為』という事になる。

オレがこれからやる事を『先生の所為』にしてたまるか。

「……………もう少し。もう少しです、先生……。あなたは望まないかもしれませんが、オレは命に替えても——」

誰に向けたでもない旭の誓いの言葉は夜風の音に掻き消された。

3

IS学園に入学してから2日目、二時限目が始まった時点で織斑一夏は既にグロッキーだった。寮の部屋割が決まったのは良いが、同居人は昨日再会した幼馴染『篠ノ之箒』だった。

しかもその幼馴染と部屋で一悶着（彼女の風呂上がりでタオル一枚の所に遭遇してしまったり、市内に引っ掛かっていたブラジャーを見てしまったり）あって殺されかけた事が何回か。そして、トドメとばかりに一時間目のISの授業。昨日少し予習したおかげである程度の専門用語は理解できるようになったが、根本的な論理の部分が理解できない。

（うーん……）

教科書とにらみ合いを続けながら、教壇でISの基礎知識をレクチャーしている山田真耶の言葉に耳を傾けるが、無情にも1ミリも理解できないまま時間だけが過ぎて行った。

「というわけでISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ISは常の操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。これは心拍数、脈拍、呼吸数、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ——」

「先生、それ大丈夫なんですか？　なんか体中いじられてるみたいでちょっと怖いんですけど……」

「そんなに難しい事ではありませんよ。例えば皆さんブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響を及ぼす訳ではない訳です。勿論、自分に合ったサイズのものを選ばなくては型崩れを起こしてしまいますが——」

そこまで言って一夏と真耶の目があい、真耶は慌てた。

「えっと、いや、その、お、織斑くんはしてませんよね。わからないですよ。この例え。あは、あははははは」

「は、はあ」

一夏は居心地悪そうに頬を掻いた。

「わかりました。それではこの不肖、浮舟旭が一夏バカヤローにもわかりやすく解説しましょう」

「「え？」」

「一夏、オレ達と言うパンツの様なものだ。小さい物を無理に履こうとすると、オレ達の大事な黄金の玉二つが潰れて——スコーンッ！——ヒデブツ！」

旭の下品な例え話に千冬が出席簿を手裏剣の要領で投擲し、彼の延髄に衝撃が走り倒れた。

「んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「あつ。は、はい！」

大きなタンコブを作り、床に横になっている旭に心の中で合掌し、一夏は教科書に意識を移した。

「そ、それともう一つ大事な事はISには意識にも似たものがあり、お互いの対話——つ、つまり一緒に過ごした時間でわかりあうといえますか、ええと、操縦時間に比例してIS側も操縦者の事を理解しようします」

その説明に旭は興味を引かれたようで、「へえ、面白いな」と、小さく呟いた。

そこまで言った所でチャイムが鳴り、2限目の授業が終了した。

「あつ。えっと、次の時間は空中におけるISの基本制動をやりますからね」

そう言つて真耶は次の授業の準備をする為にそそくさと教室を後にした。

「ねえねえ、織斑くんってさあ」

「はいはい、質問しつもん」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

クラスの女子たちが休み時間と同時に一夏のもとに肉食獣よろしく群がっていく。

感徐たちの瞳には『遅れる訳にはいかない』と書いてある。

「はいはい、並んで並んで！ 最後尾はここな」

因みに旭の所は閑古鳥が鳴いているので、仕方なく彼は『整理券（有料）』を並んでいる女子に配布している。どうやらぼろ儲けのようだ。一夏が『人で商売を商売をするな！』と、叫んだが当然無視した。

囲まれていた一夏は箒にSOSの視線を送るが彼女は態とらしく視線を反らし、グラウンドの方をジッと見つめている。

（参ったな。箒にISの事を教えてもらいたかったんだが、こりや夜に聞くしかないな）

「千冬お姉さまって家ではどんな感じなの！？」

「え？ 意外とだらしかな——」

スパァン！

「休み時間は終わりだ。散れ」

鶴の一声。まさにそんな言葉がぴたりだろう。いつの間にか一夏の背後に立っていた千冬の一言で騒がしかった女子たちの歓声はピタリと止み、すごすごと席に戻って言った。

「織斑、おまえのISだが、準備まで時間がかかるぞ」
「え？」

「予備の機体が無い。だから学園で専用の機体を用意するそうだ」
「専用機！？ 一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府からの支援が出るって事？」

「すごいな。私も早く専用機が欲しいな」

「旭、専用機があるってそんなにすごい事なのか？」

「あんな……」

女子たちが専用機持ちという事で大いに騒いだが、当の一夏はそれがそう言った事を示しているのかわかっていない様子だった。その様子に旭はげんなりしながら額に手をやる。

「教科書6ページ、読んでみな」

「ええっと、何々？」 『現在幅広く国家・企業に技術提供を行われているISですが、そのコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機のコアはすべて篠ノ之束博士によって作成された物で、これらは完全にブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし、博士はコアを一定数以上作る事を拒絶しており、各国家・企業・組織・機関ではそれぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引する事はアラスカ条約第7項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』

「って事だ。本来は企業とか、政府に所属する人間にしか専用機なんて配布されないけど、あんたのケースは異例中の異例。データを

取りやすくするために専用機を用意したって事な。OK？」

「あ、ああ。大体は。って事は旭はどこかの企業に所属してるのか？」

「まーな」

「あ、あの織斑先生。篠ノ之博士って篠ノ之さんと何か関係者なんでしょうか……？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラスに有名人の身内が2人もいる！」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱ天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才なの！？ 今度ISの操縦を教えてよっ」

さっきまで一夏の集まっていた女子が一齐に箒に集まって行つた。矢継ぎ早に質問をされるが、箒は俯いたまま唇を噛み締めている。

「あの人は関係な——！」「あーっ！！！！ 校庭に巨大なタケノコがニョキニョキとおおオオオツツ！！！！」

「……」

旭は唐突に箒の大声を更に上回る大声で馬鹿な事を口走った。クラスメイトの冷たい目線が旭に一齐に突き刺さる。冷たい目線を一身に受けて旭は苦笑いを浮かべた。それを見て、千冬はフツと微笑みながら授業の準備を始める。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令を」

「あ、はい！」

（気を、使ったんだろうか……？）

一夏は前の席の旭を見て、首を捻った。

いやー、さっきの冷たい視線は痛かったなあ。ちよいと泣きそうになっちまったぜい。

束さんと篠ノ之妹の関係についてはオレも少し聞いている。難しい問題だとは思う。

休み時間に一夏と篠ノ之を誘って机の上でIS学園に来る途中に寄った京都で買った『おたべの夕子』を広げている。うん。やっぱり和菓子には渋い緑茶だな。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようと思っていたいなかったでしょうが」

「よお、オルコット。どうだ？ これでも1つ」

「？ 何ですのこれは？」

「京菓子生八つ橋『おたべの夕子』だ。渋いお茶と一緒に食うとお茶の渋みと混じって美味だぞ」

「これが生八つ橋。……？ 何故『夕子』ですの？」

「そう言えば何でなんだろうな？ 箒、知ってるか？」

「……………知らない」

「それはな、これを作った会社の社長の愛人の名前が夕子で――」

「「「ええっ！？！？！？」」」

「冗談だ。水上勉著『五番町夕霧楼』の主人公の『片桐夕子』からとられているんだ」

「「へっ」」

「勉強になりますわ。……ってそうではありません！ 何故敵であるわたくしにお茶を振る舞っているのですかあなたは！？」

「セシリア・オルコット。こんな話がある。昔、日本の戦国武将『武田信玄』は今川氏との同盟を破棄し、東海方面への侵略を企てた。それに怒った今川氏は北条氏と結託し、報復として武田領内への『

塩留め』——要するに塩の流通を塞ぎ止めたんだな——を行つた。武田の領地は今で言うの山梨と長野で、海に面していなかったから塩を取ることが出来ず、領民は苦しんだ。この事態をみて、武田の領民を助けたのが信玄の好敵手だった上杉謙信だ。義を重んじる事で有名な謙信は、越後から信濃へ塩を送り、本来敵である武田信玄とその領民を助けた。このことから、敵対関係にある相手でも、相手が苦しい立場にあるときには助けてあげてあげて、『敵に塩を送る』というようになった」

「い、良い話ですわ……」

「そうだろう、そうだろう」

「って煙に撒かないで頂けませんか!？」

うーん……。根本的な所では単純なのかこの子は？

「コホン、一応勝負は見えていますけど？ さすがにフェアではありませんからね」

「？ 何で？」

「以前教えて差し上げた通りこのわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり現時点で専用機を持っていますの！」

「へー」

「馬鹿にしていますの？」

「いや、単純にスゲーなっと思ってただけだぞ。どうスゲーのかはわからねーが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うんでしょう!？」

あゝあ……。ガス抜きしたのに台無しな。ますますヒートアップしてるのな。

「……コホン。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でISは

467機。つまりその中でも専用機を持つ者は全人類60億超の中でもエリート中のエリートという事になりますわ！」

「そ、そうなのか……」

「そうですわ」

「人類つて60億人越えてたのか……」

「そっちかいな！」

「そこは重要ではないでしょう！」

オレとオルコットのダブルツツコミが炸裂する。やるな一夏。オレにツツコミをさせるとは……！

「あなた本当に馬鹿にしていますの！？」

「いや、そんな事はないぞ」

「何故棒読みですの？」

「なんでだろうな、箒」

「あ、そっちに振る？」

オルコットの関心が篠ノ之妹に向く。

「そっといえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

「あ、オルコット。その話題は——」

「妹というだけだ」

「うっ……」

ギンツ！ と眼つきを鋭くさせ、凄む篠ノ之妹。オルコットは尋常じゃない怒気に当てられ怯んでいる。いけない。この場を和ませる為にか一発芸を！

「OH！ 邪魔ジャマー！」

「……は？」「……」

「これ今マイブームなんだよ。つまらなかったか寒かったかヒイてしまったか痛かったか」

「「「……………」」」

さ、3人の視線が痛い……。これは何の試練ですかゴット!?
これがホントのOh my god! ……つまんねー……。

「ま、まあ。どちらにしてもクラス代表にふさわしいのはこのわたしセシリア・オルコットという事をお忘れなく」

よし。オレの超寒い一発ギャグが役に立ったのかどうかはわからないが、毒気を抜く事は出来たようだ。オルコットはまわれ右して向こうの方へ立ち去って行った。

あとは一夏、フォローよろしくな。と目で合図。一夏はオレの意図を汲み取ったようで、頷いて篠ノ之に声をかけた。

「箒」

「……………」

「篠ノ之さん、学食に飯食いに行こうぜ他に誰か一緒に行かない？」

『はいはいはいーっ』

『行くよー。ちょっと待ってー』

『お弁当持ってきてるけど行きますー!』

おうおうおう。羨ましいな。腹立つから撃ってしまっていていいかな？

「……………私は、いい」

「まあ、そう言っな。立て立て行くぞー」

「お、おいっ！ 私は行かないと——ええい！ 腕を組むな！」

「なんだ？ 歩きたくないのか？ おんぶでもしてやろうか？」

「なっ……！」

篠ノ之妹は一夏の台詞に顔を真っ赤にした。
あ、ヤバイ。気付いた。気付いてしまった。この子、一夏に惚れてる。

「は、離せ！」

「学食に着いたらな」

「今離せっ！ ええいつ——」

一夏が組んでいた腕を掴み、篠ノ之妹が関節を極める。そして一夏の体が宙を舞った。

「おお、見事な投げ技だな」

「腕をあげたなあ」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？ こんなものは剣術のオマケだ」

「オマケで古武術を習得してる女子なんてお前だけだよ、全く」

「え、えーと……」

「や、やっぱり……」

「私たち遠慮しておくね……」

「……………旭はどうする？」

「オレは先約があるんだ。篠ノ之と一緒に言ってこいよ。会つのは久しぶりなんだろ？ 『二人きり』でゆっくり話して来い」

二人きりという所を強調して言ってやる。これで他の奴を誘おうものならこいつは朴念仁でトウヘンボクで決定だ。

「？ あ、ああ。わかった。箒」

「名前で呼ぶなと——」

「飯食いに行くぞ」

一夏はガシツと篠ノ之の肩を掴み引つ張っていく。やるな一夏。

「お、おいつ。いい加減に——」

「いいから行くぞ」

「黙ってついて来い」

「む……」

一夏に言われるがまま篠ノ之は教室から出ていく。

素直じゃないな。若いうちは——高校生くらいの時はやっぱり好きな人に気持ちを伝えるというのは恥ずかしい物なんだろうか？

あゝあ。みんな羨ましいぞっと。

第4話 更識 楯無

1

「つまりあんたは篠ノ之にISの訓練をつけてもらえるようになったんだな？」

「ああ。ISの事についてはチンプンカンプンだったから篤が教えてくれるって言うてくれて助かった」

放課後。IS学園の教室で一夏は旭に昼休みの事後報告を行っていた。旭も一夏の話の本のページを凄い速さ（5秒あたり1ページ）で捲りながら、しっかりと聞いている。

余談だが、今彼が読んでいる本は『詭弁論理学』である。

「良かったら旭も一緒にどうだ？」

「……………」

旭は一夏のアマリの鈍さに少々の頭痛を覚えた。そして傍に控えていた若干不機嫌な顔をした篠ノ之妹に憐みの視線を送る。

「篠ノ之、あんたも大変だな」

「なっ！ わ、私は別に……っ！」

（素直じゃないのな。これが最近流行りのツンデレという奴だろうか？）

「魅力的な提案だけど、遠慮しておくよ。今日は挨拶しておかないといけない人がいるからな」

「挨拶しておかないといけない人？」

「ああ。昨日色々あって行きそびれたから、今日あたりにも行っておかないとな」

「そうか。残念だ」

「悪いな、折角誘ってもらったのに」

「気にするなつて。じゃあ、また明日な」

「ああ。また明日つと、忘れる所だった。篠ノ之」

「何だ？ これは記録用チップ？」

「その中にセシリア・オルコットの入試の時の映像が入ってる。相手の出方が分かればそこから対策が練れるだろ？」

「いいのか？」

「孫子曰く『彼を知り、己を知れば百戦危うからず』つてな。その為に持つて来たんだ。気にするな」

「感謝する。浮舟、お前の健闘を祈る」

「おう。やれるだけの事はやるさ」

そう言つて箒はは一夏を伴い、教室から出て行つた。旭は彼らのを見送り、大きく伸びをする。

（あとはあいつら次第。正直オレも人の心配してられる立場じゃないしな。精々頑張るとしますかね）

2

夜の学園というのは総じて不気味なものだ。

適度に闇に包まれ、適度に光源がある薄暗い空間。

人は見えない物、理解が出来ない物を想像し、恐怖する。

そして暗闇は人の想像力をかきたてる。

見えない所に何か潜んでいるのではないかと……。

「浮舟旭くんだね？」

「……………」

旭、いや《異邦人》ストレンジヤーは声のした方に振り向き、後ろに跳んで間合いをとる。

背後を取られている事に気付かなかった。

それどころか、気配すら察知する事が出来なかった。《異邦人》ストレンジヤーは背後の女に警戒心を募らせる。声の主は暗闇になっいて顔が良く見えない。

「凄い身のこなしだね。私、吃驚しちゃったよ」

一步、二歩、三歩……。女はゆっくりと《異邦人》ストレンジヤーに近づいていく。

「君みたいな大物がこの学園の潜り込んでるなんて」
「……………」

《異邦人》ストレンジヤーはベルトに挟んであった銃に手を伸ばしていつでも撃てるようにセーフティを外し警戒した。月の淡い光が女の顔を映し出す。そこには少女がいた。

《異邦人》ストレンジヤーよりも少しだけ年下だろうか。

その少女を一言で表すなら——神秘的。

《異邦人》ストレンジヤーは少しの間目の前の少女に見惚れ、警戒する事を忘れていた。

《異邦人》ストレンジヤーの放っていた殺気を前にして余裕のある、品のある笑みを浮かべながら何処からか取り出した扇子を口元に持っていた。まるで猫が悪戯が成功させたときのようにただ、ただ楽しそうに。

「対暗部用暗部『更識家』オウシキケの17代当主、更識楯無さんさらしきたてなし、ですね？」
「そつだよ。浮舟旭くん」

しばしの沈黙。尋常ならざる空気が波紋のように辺り一帯に広がっていく。
そして――。

「『浮舟旭』は偽名です。ご存知かもしれませんが、私に本名はありません。故に《異邦人》^{ストレンジャー}と呼ばれております。お会いできて光栄です。17代目楯無殿」

そう言つて《異邦人》^{ストレンジャー}は王に跪く騎士のように、目の前の少女にやうやうしく頭を垂れた。

その礼には惜しめない敬意、これ以上ない誠実さが込められていた。

「律儀だね」

「それが私の売りですから。態々お越しいただきありがとうございます。少し遅れましたが、ご挨拶をさせていただきます」

そう。《異邦人》^{ストレンジャー}が挨拶しなければならぬ人物とは目の前の少女――更識楯無――の事だ。綺麗な見た目に騙されてはいけない。彼女はこう見えてIS学園の生徒でありながら自由国籍権を持ち、ロシアの代表操縦者にして肉弾戦・IS戦の双方ともに超一流。IS学園最強の称号である生徒会長の座にいる。

彼女がその気になれば《異邦人》^{ストレンジャー}など片腕だけで灰にされるだろう。そうなる事は彼にとつて旨くない。敵対関係にあるならともかく、

《異邦人》^{ストレンジャー}は『織斑一夏』を護衛しに来たのだから。

そうならない為に、『彼女の縄張りに足を踏み入れる事に許可を貰い、自らがIS学園及び、彼女に敵意が無い事を証明する』これはIS学園で任務を全うする以上、重要な事だった。

そして『そもそも無断で人の庭に入り込んで勝手な事が出来る』ほど《異邦人》^{ストレンジャー}の神経は図太くない。彼は普段のバカな言動に隠れが

ちではあるが、意外に律儀な人間なのである。

「つまり旭くんは『織斑一夏』くんを護衛しに来たんだね？」

「はい。私の依頼人については例え拷問されたとしても、教える事は出来ませんが——」

「ストップ」

「はい？」

「固いよ」

「か、固い？」

「そう。口調が固いよ」

「そう、でしょうか……？」

「固い固い。もっと普通にしていいよ」

「い、いや。そ、それはちょっと難し——」

「言う事聞かない子には——オシオキしちゃうよー」

「な、なんですか？　なんでそんな手をワキワキさせて——」

「覚悟」

「——ッ！？！？」

邪悪なイタズラっぽい笑みを浮かべた楯無に嫌な予感を感じ取り、
ストレンジヤー

《異邦人》は回れ右して脱兎のごとく逃げ出そうとするが、

「あまーい」

「ぐあっ！——」

抵抗空しく、あえなく御用となる。《ストレンジヤー異邦人》は関節を取られ、後ろ向きにマウントポジションを取られた。それでも往生際が悪く必死に逃げだそうともがくが、関節を痛くない程度にしっかりと押さえられていた為、立ち上がる事が出来ない。

「さあて、覚悟はよろしいかな？」

たくすぐり地獄に叩き込まれるかもしれないしな。

「どうしたの？」

「何でもないっス」

鋭い……。女の勘というのは侮れないな。

「して、勝算はあるのかな？」

「全く無いっス！！一夏はともかく、IS素人のオレが代表候補生なんてのに勝てる訳ないじゃあ〜りませんか」

「口調は明るいのに発言は後ろ向きだね」

「そうでもありませんって。やられっぱなしってのも面白くないですからね。勝てないまでも、一泡吹かしてやりますよ。その為のプランも準備してあります」

「へえ？ そのプランとやらは教えてくれないのかな？」

「それは当日までのお楽しみっス」

その前に幾つか問題点を解消しておかないといけないけどな。

武器の展開までの時間の短縮、自在に飛べるようになる事、IS武装の特徴を把握し戦略の幅を広げる事。やる事は山積みだ。

「ふうん？ 頑張れ男の子」

「ゲホッゲホッ！ ……オス」

楯無さんは思いっきり背中を叩き、オレに渴を入れる。あまりの強く唐突で唾が変な所に入り、むせてしまった。

それから5日間はひたすら特訓だった。

朝は4時起きして武装のイメージをスムーズに出し入れできるようにひたすら反復練習。昼間は授業、夕方はISを起動し飛ぶ練習。正直言ってアサルトアームズを使い続けてきたオレにはこれが一番難しかった。夜は体力をつけるためにランニングと格闘術の素振りをしてホテルに帰って就寝するのは大体0時過ぎ。やれやれ、まったくオレは一夏ほど若くないってのにな……。

まあ、努力の甲斐あって最初空中で回っているだけだったISでの飛行はある程度マシになり、武装の展開もハンドガン約1秒、長距離射撃用のライフル3秒と最初の10秒に比べて大分マシになった。5日間の付け焼刃の割には良く出来た方だろう。あとは、メッキが剥がれない様に注意な。

そして——決戦前夜。

この日は早めにトレーニングを切り上げ、ホテルで対オルコット対策とイメージトレーニングを行っていた。最後にチェックを兼ねて武装を確認する。

IS《暴風》
ハウオック・ゲイル

深緑を基調としたミドルレンジ・アウトレンジでの狙撃・砲撃戦を想定した機体で格闘性能は並より少し上程度。

メイン武装である長距離射撃用ライフル《インフェルノ》
二丁拳銃《ツインバレット》

演算補助システム《アドヴァンテージ》
物理刀《ruby》《rb》《シデン》

—</rb><rp>《</rp><rt>アドヴァンテージ</

rt><rp></rp></ruby>つてのはまだ使いこなせないだろうし、《シデン》に至っては使う気すら無い。オレはナイフや刀っていうような『武器として使う刃物』が大嫌いなんだ。この中でオレが使える武装は《インフェルノ》と《ツインバレット》だけ……。

無様を晒さない為にやれるだけの事はやったが、これで本当に大丈夫なんだろうか？

もつとやれる事はあったんじゃないだろうか？

不安ばかりが先立ちその夜はあまり眠る事が出来なかった。

5

オレは今アリーナのISを収納するための空間Aピットにいる。本来なら一夏とオルコットの対戦が第一試合に組み込まれていたが、一夏の方にトラブルが発生したため、オレとオルコットの試合が先という事になった。

目を瞑ってイメージの中でオルコットとの対戦を繰り広げる。

只今の戦績8戦8敗。しかも開始して1分も持たずにオルコットの上空からの一斉射撃で沈んでいる。

イメージトレーニングでくらい勝たせてくれたっていいだろうに……。

今さらだけど、こんな試合ですらやる意味無いだろ。

オレはクラス代表なんて面倒だからやりたくない。

そんな事していたら一夏の護衛という仕事に支障が出てきてしまうしな。

それに——注目されるのはあまり好きじゃない。オレの仕事は『紛れる』事に『目立たない』事にこそ意義がある。……しつこい様だが、オレは決して注目されるのが恥ずかしいわけではない。

「やつぽー。旭くん、元気？」

「……みたいっスね。最初からこれを見越して？」

「いやいや、おねーさんはただ旭くんと遊びたかったただだよ」

「ソッスか……。まあ、あなたの狙いが何であれ……感謝します。」

あのままアリーナに突っ込んでいたら訓練内容の一割も出せないまま無様を晒して終わる所でした」

「んふ」 素直な子はおねーさん大好きよ」

「だからオレの方が年上だって——！」

「ほら、始まるよ」

アリーナのゲートが開き、ゆっくりと、ゆっくりと前に進んでいく。

「楯無さん……」

「ん？ なに？」

「ありがとうございます」

「ふふっ。どういたしまして」

実際力量差は天と地ほどの差がある。ド素人のオレが代表候補生とやり合ってもまともな勝負になるとしたら、これは奇跡だ。

『奇跡』というやつは起こり得ないから『奇跡』というらしい。

けどよ、奇跡ってのはそれに頼ろうとせず、ただ前に進もうとする身の程知らずのバカが起こすもんだと相場が決まっている。

だったら起こしてやるうじやないか奇跡って奴を！

なってやるうじやないか身の程知らずのバカって奴に！

ハイパーセンサーを起動させ、地を蹴り深緑のISはアリーナの空中を翔け抜け、停止した。

ハヴオック・ゲイルとシンクロするような感覚。一気に開ける視界。そして目の前には——青いIS。あれが、イギリスの第3世代IS『ブルー・ティアーズ』。

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。I

Sネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり――。

脳に直接相手のデータが書き込まれるような感覚。

便利だな。これが、ISか……。

「よく逃げずにここまで来れましたわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどーも」

適当に応えながらオルコットが持っている2メートルを超すであるうバカでかいライフルに目を移した。

――検索。67口径特殊レーザーライフル《スターライトMK?》と一致。

おお、便利だ。

「その勇気に免じて最後のチャンスをおげますわ」

「へえ？　ぜひ聞かせてほしいな、そのチャンスとやらを」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで泣いて謝るといふのなら、お友達と一緒に特別に許してあげない事もなくてよ？」

――警戒。敵IS操縦者の右目が射撃モードに移行。セーフティロック解除を確認。

「ありがたい気遣いに涙が出そうだね。……シェイクスピア曰く『臆病者は本当に死ぬまでに幾度も死ぬが、勇者は一度しか死を経験しない』だそうだ。自分の国の作家の名言くらい覚えときな、イギリス人」

「……そう。残念ですわ。それなら——」

——警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾エネルギー充填。

「——お別れですわね！」

チュイン！ という音の直後、閃光が放たれる。

それを体を旋回させてかわし、ツインバレットを呼び出しセシリア・オルコットに連射した。光弾はセシリア・オルコットのISのバリアーによって阻まれたが、当の本人は驚きのあまり目を見開いている。

「なっ……！ わたくしの初撃を躲いただけではなく、このセシリア・オルコットにシールドを使わせるなんて……！ しかもISに乗り始めて1週間にも満たない初心者が……！」

「オレに初撃を当てたければ、最初からエネルギーの充填を終わらせておいて眉間に狙いを定めておくべきだったな。エネルギー充填のタイムラグと狙いを定める為のタイムラグがあれば『避けてください』って言うてるようなモンだ。………ハッキリ言ってるるか？ あんたの狙撃はお粗末だ！」

「………ッ！ よくわかりましたわ………ッ！ あなたに手加減は必要ないという事が………ッ！」

「負けた時の言い訳はとっておいた方がいいんじゃないか？ イギリスの代表候補生さん？」

「………ッ！」

直後、弾雨のごとく射撃の嵐がハヴォック・ゲイルに降り注いだ。それを全部避けきれないまでも、最小限のダメージで済むように跳び回る。

よしよし。怒ってる、怒ってる。挑発した甲斐があつたつてもんだ。オレがオルコットに勝とうと思うなら、ある程度のダメージと痛みは覚悟しなければならない。

何の犠牲もなく鼠が虎に勝てるなんて都合のいい事は思っていない。だから、そのまま冷静さを失ったまま暴れてくれよ？ そうする事で初めてオレに勝機が生まれるんだから……！

第4話 更識 楯無（後書き）

ISの名前を『ストレンジヤーズ・ウィッシュ異邦人の願い』から『テンペスト嵐』
と被っていた為↓『ハヴォック・ゲイル暴風』に変更します。

何度も変更してしまい、読んで頂いてる読んで頂いている申し訳なく
思います。

以後、『ハヴォック・ゲイル暴風』を正式名称にしますので、よろしく
お願いします。

オリジナルISに関してはかなり独自解釈が入っていますので、ご
指摘などがありましたら、お願いします。

第5話 暴風へハヴォック・ゲイル（前書き）

『嵐』^{テンペスト} イタリアのIS『テンペスタ』と被っていた為、
旭のISの名前を『暴風』^{ハヴォック・ゲイル}に変更します。

何度も変更してしまい、読んで頂いてる読んで頂いている申し訳なく思います。

以後、『暴風』^{ハヴォック・ゲイル}を正式名称にしますので、よろしく願います。

それではどうぞ！

第5話 暴風へハヴォック・ゲイル

1

1人の少年が深緑のISと青のISがアリーナで繰り広げている戦闘に眼を奪われていた。

「スゲー……。スゲーよ旭！ たった一週間でここまで動けるようになるなんて！」

なあ、箒もそう思うだろ？」

「……………」

少年、織斑一夏は隣にいた篠ノ之箒に同意を求めるが、彼女は微妙な表情をして目を逸らすだけだった。

「箒？」

「まあ……。ある意味……。凄いのだろうな……………」

箒は呆気にとられていた。旭の駆るISの曲芸じみた奇妙な動きにISにおけ

る飛行の基礎イメージは『スケートのように滑る』事だ。

しかし旭は『空中を足場にして走り、跳ね回っている』のだ。箒の知っている限りそんな妙な動きをする操縦者は存在しない。

何故なら『滑る』動きと『走る』動き、どちらが無駄なく前に速く進めるかと聞かれれば当然前者である。つまり旭の動きは無駄だからだ。しかしそんな無駄だらけの動きで器用にもセシリア・オルコットの《ブルー・ティアーズ》の放つ砲撃の嵐を最小限のダメージ

で済むよう回避し続けている。箒の目には旭がかなり実戦慣れしているように見えた。

「浮舟、旭……。一体何者なのだ……？」

箒の小さな呟きは隣にいる一夏の歓声にかき消された。

2

目の前に広がるのはビーム兵器による砲撃の雨。雨。雨。
セシリア・オルコットは先ほどの旭の挑発により完全に頭に血が登っていた。

ひたすらビット《ブルー・ティアーズ》を、狙撃ライフル《スターライトMK?》を、自らのISが持つすべての火力を総動員して照準などお構いなしに兎に角撃ちまくってきた。しかし旭は曲芸じみた妙な動きでこれをひたすら躲す。勿論、雨の様に降り注ぐ砲撃の嵐をすべて避けきる事は不可能だ。だからこそ旭は細かいダメージは一切無視して致命傷になりそうな攻撃だけは確実に回避していた。その証拠に《ハヴォック・ゲイル》のシールドエネルギーにはまだまだ余裕がある。旭は砲撃の隙を逃さず、確実にツインバレットでセシリアを狙い、引き金を引く。ツインバレットの放つ光弾はすべて《ブルー・ティアーズ》のシールドによって阻まれた。

お互いのシールドエネルギーを少しずつ削り合う。

両者は決め手に欠け、状況は拮抗していた。

旭が長距離射撃用ライフル《インフェルノ》のチャージショットをセシリアに命中させる事が出来れば、《ブルー・ティアーズ》のシールドエネルギーを一気に削り取る事が出来るだろう。しかし、セシリアの猛攻が照準を合わせる時間もエネルギーをチャージする時

間も与えてくれない事を彼は理解していた。一方セシリアはしばらくして冷静を取り戻し、旭が何か機を伺っている事に気づいていた。砲撃の手を緩めたら彼はすかさず自分に噛みついてくるであろう事も。だからこそ彼女は今の内に圧倒的な手数で押し切ってしまうおうと考える。旭はISに乗り始めてまだ1週間にも満たない素人なのだ。先にミスを犯すとしたら、経験値の高い自分ではなく確実に旭の方だという事実も持久戦の選択を後押ししていた。セシリアはひたすら砲撃を続けた。但し、先ほどとは違いしっかりと照準を合わせて。そうなれば押されるのは当然旭の方だ。彼はセシリアの正確な照準を定めた砲撃の嵐の前に徐々にだが、確実に追い詰められていった。旭はチラリと上空を伺う。

(あと……少し……！)

——警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。エネルギー充填。

「しまっ……ッ！」

次の瞬間、《ブルー・ティアーズ》の放った砲撃が《ハヴォック・ゲイル》に降り注いだ。

3

「……痛てて……」

——バリアー貫通。シールドエネルギー残量239。実体ダメージ、レベル中。

「勝負あり、ですわね」

「……………」

セシリアが全火力を旭に照準を合わせながら通信を開く。

「露を払うだけのつもりでしたが……思った以上に手強くて驚きました。先日言った『絵に描いたような不真面目な猿』という言葉は撤回させて頂きますわ」

「こっちなもな。お粗末な射撃しかできない『なんちゃって狙撃手』かと思つたら……」

中々やりやがんのな」

セシリアはクスリと笑う。その笑みにはつい先程まであつた侮蔑の色はなく、寧ろ相手を認め、尊敬するかのような笑みだった。

「特別にもう一度チャンス差し上げましょう。大人しく降参すると言うのならトドメは刺さないでにおいて差し上げますわ」

「『断る』って言つたら？」

「勿論、敬意をこめてブルー・ティアーズの全火力を以てトドメを刺して差し上げます」

「……………」

旭はセシリアの出した条件を吟味するように空を仰いだ。
そして――。

「悪いな。その話は呑めない。オレみたいな適当な奴でも雀の涙程度の意地があるんだよな」

「……………」
「そうですか。そう言うと思っていましたが、残念です。」

本当に、残念
ですわ」

そう言ってセシリアは引き金にかけている指に少しずつ力を入れる。
旭はもう一度上空の様子を伺った。

（条件は揃った。タイミングを誤るな）

「さようなら。わたくしの敵。浮舟旭さんっ！」

（今だっ！）

「シールドエネルギー全開！ 来な、《インフェルノ》！」

シールドエネルギーを最大まで引き出し、自身を包囲していたビツトを吹き飛ばしてセシリアの狙撃を防ぐ。そして右手に持っていたハンドガンを手放して、超長距離射撃用ライフル《インフェルノ》に持ち替えた。

——エネルギー充填開始。フルチャージまで32秒。

セシリアは急いで第二射を撃つが、旭の方が一手早く動いた。吹き飛ばしたビツトを足場にして高く、高く跳躍する。

左手に残っていた銃をセシリアに向かって乱射して彼女の牽制しながら頭上をとる。

セシリアは慌ててライフルを上空に向かって構え、照準を合わそうとするが――。

「うつ……！」

旭は太陽に背を向けており、逆光でその姿を確認する事が出来ず、

旭に対して決定的な隙を作ってしまう。

そう。旭が上空の様子を伺っていたのは、太陽の光でセシリアの精密射撃を封じ込める為だった。

その為に太陽の位置を窺っていたのである。

「狙撃手は目が命ってな」

旭は軽口を叩きながらも左手に持ったハンドガンでセシリアを撃ち、シールドエネルギーを確実に削り取っていく。

——エネルギー充填完了。システム、オールグリーン。

画面に表示された文字を見て旭はニヤリと笑い、左手に持っていたハンドガンも捨ててライフルを構えた。

——ターゲット《ブルー・ティアーズ》ロックオン。

「こいつで終わりだああああっ!!」

「させませんわ! ブルー・ティア——!」

言いかけてセシリアは動く事が出来なくなった。

逆光の中でセシリアが辛うじて見えたのは

——吊り上がり気味の茶色い瞳。短く切られた所々跳ねている黒髪。かつて誘拐された彼女を救い出し、セシリアが誰よりも憧れたあの青年の姿と旭の姿がダブった。

「ス、《異邦人》……………?」
「貰った!」

セシリアが作った隙を旭は見逃さなかった。《ブルー・ティアーズ

《に狙いを定め、トリガーを引き絞る。

誰もが自分達が『ド素人の浮舟旭がイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットに勝利する』という前代未聞の事件の証人になる事を疑わなかった。

しかし――。

――警告！ 右翼スラスター損傷。飛行不能。

「……………は？」

旭は右の翼を見ると、スラスターから黒い煙が噴き出している。片方のスラスターが破損し、機体がバランスを崩し照準がブレる。《インフェルノ》から放たれた圧倒的な熱量、暴力的なまでの光の束がセシリアの駆る《ブルー・ティアーズ》の真横を走り、そのまま地上を深く抉った。しかし、本人は一回の戦闘に2発しか撃つ事の出来ない貴重な『チャージショット』を外した事など気にしている場合ではない状況にあった。

「……………え？ え？ え？」

『飛行不能』。その文字が示す意味はただ一つ。すなわち――
墜落だ。

「うそおおおおおおおおおおおおおおおおお
！？！？！？」

右側から傾き、浮舟旭専用IS《暴風》は墜ちていく。
ハヴォック・ゲイル

ISには『絶対防御』という機能が備わっている為、墜落しようが、撃墜されようが操縦者が死ぬ事はない。しかしそれはあくまで『死ぬ事はない』というだけの話だ。

つまり——『操縦者がどんな状態であれ、息をして心臓が動いてさえいれば生きている』のである。何が言いたいかというと——
墜落したら死なない程度に痛いのだ。

「なんじゃそりやあああああゲフウウウツ!!!!!!!!!!!!!!」

更に旭にとって悪い事は先ほどシールドエネルギーを全部使ってしまった為、ISに防御シールドを展開するエネルギーが残っていないかったことだった。

シールドエネルギーが少しでも残っていれば、シールドを張り落下時の衝撃を幾分緩和する事が出来ただろうが旭がどれだけ泣いても喚いても残っていないモノは何ともならなかった。

対戦相手であるセシリア・オルコットは何が起こったのか把握できずポカンと口を開けたまま呆けている。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

こうして『浮舟旭』専用のIS『ハヴオック・ゲイル暴風』の初陣は終わった。

この後、IS『ハヴオック・ゲイル暴風』とその操縦士である『浮舟旭』の名はIS学園内で最も長く語り継がれる伝説となる。

初陣でいきなり墜落した伝説のISと間抜けな操縦者として……。

4

「よう、旭。調子はどうだ？」

「……体中が……痛い……」

「……そうだろうな」

オレは今、医務室で寝ている。墜落したときにISに搭載されている機能『絶対防御』が作動し、命に別状はなかったが、それでも怪我は酷い物だった。

全身打撲、右手首捻挫、その上左肘にヒビが入っている。

見舞いに一夏と篠ノ之が来たが、まともに起き上がる事すら出来ない。

「で、あんたの試合結果は？」

「うつ！……………」

一夏は答えにくそうに眼を反らした。その横で篠ノ之がジト目で一夏を見ている。

その反応から大体の事は察せた。

「つまり、負けたんだな？」

「グヌ……ッ！」

「……………」

「……………」

「あ、あと少しで勝てたんだ！ あ、あそこでエネルギー切れなんか起こさなければ勝てたんだ……………」

「うん。けど負けたんだよな？」

「負け犬の遠吠え」

「ぐ……ッ！」

「って事はクラス代表はオルコットに決定？」

「いや、それが……………」

『クラス代表は一夏さんですわ！』

声のした方向へ首を向けるとオルコットが手に腰を当てるお決まりのポーズをしてドアの前に立っていた。あれ？ 名前呼び？

「浮舟さん、ご機嫌麗しゅう」

「仮にもレディを名乗るんだったら、ノックくらいしな」

「し、失礼しました」

「まあ、いいや。で、昨日の試合に負けた一夏が何だって代表に？」

「それはわたくしが辞退したからですわ。勝負はわたくしの勝ちでしたが、それは考えてみれば当然の事。相手はこのわたくしセシリア・オルコットだったのですから。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒った事を反省しましてクラス代表は一夏さん譲る事にしました」

「ふうん」

「つきましては、優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトなこのわたくしがコーチをすれば一夏さんもみるみるうちに成長を遂げ――」

「さつきも言ったが一夏の教官は足りている！ 私が直接一夏に頼まれたからな！」

「病室で修羅場はやめてくれよな。やるなら余所でやってくれ」

「すまないが浮舟。これはこの場で決着をつけないといけない問題だ」

「そうですね。浮舟さんにご迷惑はおかけしませ――」

「傷に触る。黙ってくれるよな？」

「は、はい」

「よし」

「まったくガキ共め……。病室でくらい静かにしてくれ。」

「さつきからこの二人ずつとこの調子なんだ。困るよな」

「原因多分お前だぞ」

「え？ 俺が？」

「……わからないならいい」

「????」

鈍感すぎる……。朴念仁オブ朴念仁とはまさにこの事を言うんだろ
うな。

しばらく一夏、篠ノ之妹、オルコットが病室にいたが、6時になり
そろそろ寮に戻らなければいけない時間だったので、さつさと帰し
た。

と、いうかこのまま篠ノ之妹とオルコット、そして鈍感大魔王一夏
を同じ部屋に置いておいたら騒ぎに発展するような気がするから、
さつさとお帰り願いたい。いや、マジで。

「それじゃあ旭、また明日な」

「おー」

「体を厭えよ」

「へーい」

「……………」

「なんだよ、オルコット？ 人の顔ジロジロ見て？」

「べ、別に何でもありませんわ！——やっぱり違いますわ。わた
くの知っているあの方はもっと格好良かったですもの……」

「あ？」

「いえ、なんでもありません。コホン、それでは浮舟さんご機嫌よ
う」

「んー」

騒がしい三人は病室から出て行った。そして部屋が急に静かになる。

……………。

……………。

……………。

「不思議なモンだな。いると五月蠅いだけだと思っていたけど、こ
うも周りが静かだと逆に——」

第5話 暴風へハヴォック・ゲイル（後書き）

ISに関しては独自解釈も入っていますので、感想もしくはご指摘がありましたらよろしくお願いします。

作者はあまりにも寂しいと死んでしまうので↑ハムスターかいな！
？

第6話 IS

『では、これよりISの基本操縦を実践してもらつ。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ』

あの激闘から約2週間が過ぎた。オレの右手首の捻挫と全身打撲は既に完治し、左肘のヒビの方もあと1週間もすれば治るらしい。

うん。この2週間思えば色々あった。主に厄介事が。

利き腕を負傷していた為に起こる生活面での弊害がでる事（主に食事や便所など）、篠ノ之とオルコットが一夏を巡って喧嘩ばかりする事、しかも輪をかけて厄介なのは当事者である一夏自身が自分が原因で篠ノ之とオルコットが喧嘩するなんて考えてもいない訳だから、喧嘩の仲裁時に的外れな事ばかり言っただけであの二人を怒らせてしまつ事だ。その度にこっちに泣きついてくるからオレは火消し役になるしかない。双方穏便に、丸く収めるのは実に骨が折れた。そして何より大変だったのは楯無さんだ。あの人は何と言つか……自由奔放すぎるというか……まあ、とにかく察してほしい。

『……きふね、……っってみろ』

兎に角大変だ。うん、大変だ。

スパァン

「へブッ!？」

いきなり頭部に衝撃が走り思わず頭を押さえた。

「集中しろ、馬鹿者」

「い、いきなり出席簿アタックは非道かないツスカ？」

スパアン

「口答えするな。さっさとISを展開しろ」

「はい……」

周りを見回したら既に一夏とオルコットはISを展開している。慌てて目を閉じ、呼吸を整えてからISの装甲をイメージする。

（来な、ハヴオック・ゲイル）

光の粒子が展開し、体を包むように収束して装甲を作り上げる。展開まで約1秒。まあ、速くなった方かな。

「遅い。0.5秒で展開できるようになれ」

「……はい」

鬼教師、と心の中だけで毒づいとく。流石に本人目の前に口に出す度胸はなかった。

「よし、飛んでみる」

「カツアゲツスカ？」

スパアン！

「誰が跳躍しろと言った？ 飛行しろと言ったのだ」

「は、はい……」

ほんのお茶目なジョークだったのに……。

「冗談は好かん」

「心の中読まないでください」

見上げればオルコットは遙か上空に、一夏はノロノロと空に昇って行っていた。

「何をしている織斑！ スペック上の出力では白式の方が上だぞ！

浮舟はさっさと行け」

「はい」

跳躍するイメージを固め、地を蹴る。そのまま階段を何段かとばして昇るような感覚で空を駆け上がっていく。途中で一夏を追い抜いたような気がしたが、まあどうでもいい。

上空200メートル。そこから見える景色はまさに壮観の一言に尽きる。

「いい景色だな」

「あら、浮舟さんはISからの景色を眺めるのは初めてですか？」

「まあ、な。この間まで怪我で実習には参加できなかったからな。

感動すら覚えるよ。けど、それだけにやるせない」

「何がですか？」

「こんな景色を見せてくれるコイツが兵器だっていう事が、だよ」

「それは……」

「まあ、言っても仕方ない事なだけだな」

「……………」

言わずもがな。兵器の本質は『人を殺すための道具』だ。

しかし開発者の束さんは当初このISを宇宙空間で活動を行うためのマルチフォーム——つまり宇宙服——として開発したらしい。開発当初世間に見向きもされなかったISだが、軍事転用が出来るとなると政府や世間一般の認識は変わってきた。

白騎士事件以降、ISの軍事転用が始まる。

宇宙開発と軍事は切っても切り離せないものだ、と考えられる。

事実、古くからの歴史で宇宙開発の技術が軍事転用される事はそう珍しいケースではない。

V2ロケット、SDI構想、キラー衛星。例を挙げ始めればキリがない。

そういった技術の開発者は自分達の子供が兵器に転用される事に何を思ったのだろうか？

そしてIS開発者の束さんにもあのおちやらけた言動と裏腹に何か葛藤があるのだろうか？ 仮に葛藤があるとしたら何故オレにISを渡した？

……。もうひとつ仮説はあるが、こちらの方はあまり当たっていてほしくない。

もしこの仮説が事実だとしたら……。それは狂気の沙汰だ。

まあ、お世辞にも綺麗な生き方をしてきてないオレが今さら『人殺しの為の兵器はいけません』とか綺麗な言を並べるのも何か違う気がするが……。

「遅いぞ一夏。やっと着いたな？」

「お前らが速過ぎるんだよ。セシリアはともかく、なんで旭はそんなに速いんだよ？」

「ん、なんでだろうな？」

「『自分の前方に角錐をイメージ』って言われても、いまいちピンとこないんだよな」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模

索するのが建設的ですわ」

「旭はどういうイメージで飛んでるんだ？」

「オレは空中の足場があると仮定して、そのまま跳躍するイメージかな？ 織斑先生や篠ノ之曰く、隙だらけになるからやめた方がいいらしいが」

「当たり前ですわ。浮舟さんの動きは無駄が多すぎます。『跳躍する』のは相手の意表を突くには良いかもしれませんが、普段の移動では跳躍して足場に着くまでの隙が大きすぎて危ないです」

「難しいのな」

「第一空を飛ぶイメージってのはあやふやなんだよ。何で浮いてんだ、これ？ 飛行機とは理屈が違うんだろ？」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力翼と流動波干涉の話になりますから」

「わかった。説明してくれなくていい」

「『俺の頭じゃ理解出来ないから』を付け加え忘れてるぞ一夏君？」

「う、うるさいな！」

「残念ですわ。ふふっ」

オルコットは口元に手を当て上品と笑っていた。この間の様なバカにするような嘲笑ではなく、心底楽しそうに。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。

浮舟さんもうしてもというのなら——」

「ああ、オレの事は気にするな。オレの方もコーチを申し出てくれる人がいたから」

「そ、そうですか」

なんだ？ なんで残念そうな顔をしてるんだ？

『一夏！ いつまでそこにいる！ さっさと降りて来い！』

大音量ではいる通信に思わず眉をしかめた。下を見ると鬼のような形相をした篠ノ之妹が山田先生から通信機をひったくっていた。

「一夏、鬼武者が呼びだ」

「お前それ箒に言ったら殺されるぞ」

「内緒にしてくれるな？」

しかし、よく見えるのな。毛穴までバツチリ。ん？ 待てよ？ この機能を使えば覗きなんて朝飯前なんじゃ……？

「浮舟さん、何を考えていますの？」

「い、いや？ 何も考えてない」

「鼻の下が伸びていましたわよ？」

「それはきつと気の所為だな」

とりあえずオルコットの（鋭い）追及をかわし、咳払いを一つ。

「織斑、オルコット急下降と緊急停止をやって見せろ」

「誰の物真似だ？」

「織斑先生」

「ぶっ！ くくくッ……！ 似てないぞ旭！」

「そうかな？ 結構自信があつたんだけど」

「ぜ、全然似てませんわよ……！ ふふふッ……！」

「その割にはアンタら大ウケだな？」

『浮舟、織斑、オルコット。急降下からの完全停止をやってみる。目標は地面から10センチだ』

「」「ぶはっ……！」

物真似の時の台詞がそのまんまだったので、3人揃って嘖き出して

しまった。

『どうした？』

「な、何でも有りませんわ。了解いたしました。では一夏さん、浮舟さんお先に」

そう言つてオルコットはスイーツといった感じで降りていく。

「上手いもんだなあ」

「慣れだろ、慣れ。経験値に勝る武器は無いからな。そう言えばアントア、篠ノ之との訓練の調子は？」

「……………」

「おーい、何で無言で目を反らす？」

「…………… からないんだ」

「あ？」

「筭の言つてる事が全然わからないんだ」

「そりゃアントア、ISのいろはも知らない素人が理論で説明されても——」

「違う！ そうじゃないんだ……………」

「は？」

「『グツ、とする感じ』『ドン、とする感覚』『ズガン、という具合』とかそんなのばかりなんだ！」

「…………… 篠ノ之のあだ名は『ミスター』で決まりだな」

「恥ずかしながら戻つてまいりました！」

「オク。兄さんの方じゃねえよ！ 長。さんの方だ！」

ボケた一夏に裏手でツツコんだ。しかしコイツ何気に上手いな……。わざわざ小。田さんのネタをチョイスするあたりなかなか見る目がある。

グラウンドに巨大なクレーターを作っていた。落下物の正体は土煙で確認出来ない。

反射的に狙撃用ライフルを呼び出し、落下した物体に銃口を向ける。アンノウンが穴の外に手を引っかけゆっくりとした動きでクレーターから這い出てくる。

オレはアンノウンに照準を合わせ、引き金に指をかけていつでも撃てるように狙う。

土煙が収まり、姿を現したのは――。

「ま、待て旭！ 狙うな！ 俺だ！」

「一夏？ アンタ何やってんの！？」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を空けてどうする」

「すみません……」

一夏は羞恥で顔を真っ赤にする。ISでの絶対防御の恩恵で無傷とはいえ、周りのクスクス笑いのお陰で心の傷は相当深い模様だ。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えただろう」

教えたというのはさっき一夏が言っていた長嶋式の説明をさしているのだろうか？

当の一夏も何やら微妙な表情をしている。

「貴様、何か失礼な事を考えただろう」

「そ、そんな事はないぞ」

「大体だな一夏、お前と言う奴は昔から――」

「大丈夫ですか一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

篠ノ之が一夏に説教を始めようとすると、その隙にオルコットが一夏の氣遣う態度を見せる。篠ノ之はそれが面白くないようで、むくれた表情をしてジト目で一夏たちを見ている。

「……ISを装備していて怪我をする訳ないだろう……」

「あら、篠ノ之さん他者を氣遣うのは当然の事。それがISを装備していても、ですわ。常識ですよ」

「この猫かぶりめ……！」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ」

お互いに目をそらさずに皮肉を飛ばしあっている。
うーん、面倒臭いな。

「旭、ISって凄いな。あの二人の間に火花が飛び散ってるように見えるぞ」

「……何で険悪な空気は読める癖に、女心は読めないかね……。この唐変木は……」

「おい、馬鹿者共。邪魔だ端っこでやっている。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はい」

一夏は言われるがまま目を閉じ武装のイメージを始める。左手で右手首をぎゅっと握り、集中力を研ぎ澄ましていく。淡い光が手から放たれる。その光が徐々に収束していき、物体を形作った。一夏の手握られているのはIS『白式』の唯一の武装『雪片式型』が握られている。

（あれが……『雪片式型』……。かつて《ブリュンヒルデ》と呼ば

れた『織斑千冬』が愛用した『雪片』の後継武装……)

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

オレと同じ事言われてるのな。

一夏は織斑先生の辛辣な批判に肩を落として頂垂れた。

「褒めもしないどころか、貶された……」

「鍛えてる最中の未熟者を褒める人がいるかよ」

「どう言う事だよ……」

「オレにも尊敬する先生がいてな、その人の教育方針は『心で褒めて、言葉で貶す』って感じだったぞ。『褒めれば心技体未熟な奴は増長して研鑽を忘れるから』だそうだ。怒るのは『常に今日の自分よりも上を目指す姿勢を忘れるな』って事だよ」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ」

強くなる事が出来なければ——死ぬだけだ。

「浮舟、セシリア武装を展開しろ」

「はい」

オルコットは返事と同時に左手を上げ、オレは正面に両手を出す。
一瞬発光し手の中には狙撃銃《スターライトmk?》が握られている。

少し遅れてオレも両手に二丁のハンドガン《ツインバレット》を呼び出した。

視線を送りロックを外し、いつでも撃てるようにする。

「流石だな、代表候補生。——ただし、そのポーズはやめろ。銃口

を左に向けて誰を撃つつもりだ？ 正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを固めるために必要な――」

「試合の時に『照準を合わせるまでのタイムラグ』を浮舟が指摘していただろう。まだわからないか？」

「――、……はい」

「浮舟はもう少し早く展開できるように訓練しろ」

「はい」

《あなたのせいですわよ！》

織斑先生が向こうへ言ったのを確認した後、オルコットがプライベートルチャネルの通信回線を開く。あまりの理不尽な叱責にオレは長い溜息をついた。

《都合の悪いところを指摘されてキレるとは、逆恨みもいい所だな》

《な……っ！》

《勘違いするな。失敗する事は別に恥じゃない。失敗から何も学ばない事が恥なんだ》

《うう……》

《それにISはファッションじゃなくて兵器だ。運用方法を誤れば即座に死に繋がる。自分だけじゃなく、他人の死にも、な。過ちを直さず、取り返しのつかない事になったとしたら『あの時、指摘された事を真摯に受け止めておけばこの人は死なずに済んだ』って後悔する事になるぞ。それともアンタはそういう後悔を背負って不特定多数に恨まれながら今後の人生を生きていくのがお好みか？》

《ああ、もう！ わかりましたわよ！》

《そうか。わかってもらえて何よりだ》

「（絶対に、違いますわ……。あの人はこんなに意地悪ではありませんもの……）」

「セシリア次は近接武装を展開してみる」
「えっ？ は、はいっ」

オルコットは慌てて狙撃銃を光の粒子に変換——『^{クロース}収納』し、近接武装の『^{オープン}展開』しようとした。——が、光の粒子は一向に収束する様子を見せず、中々出てこない。

「くっ……！」

「まだか？」

「す、すぐです。——ああ、もうっ！ 《インターセプター》！」

叫んだ直後、光は収束しオルコットの手には近接戦闘用のショートブレードが握られていた。確か武装の名を呼び、『^{オープン}展開』するのは初心者用手段で代表候補生としてのプライドが高いオルコットは使いたがらない。案の定オルコットの顔は羞恥で真っ赤になっていた。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから問題ありませんわ！」

「ほう？ 織斑との対戦で初心者に簡単に懷を許したお前がか？」

「あ、あれは、その……」

泡を食って弁解しようとするが、織斑先生の言っている事の方が正しい為弁解の余地はない。結果オルコットは《インターセプター》の展開を重点的に訓練するという事になった。

「次は——浮舟、近接用の武装を展開しろ」

「……………」

「どうした、浮舟」

「……お断りします」

「何？」

「お断りします」

ハッキリと、キッパリとそう言った。

オレはナイフや刀が嫌いだ。二度と……使いたくない。
使うくらいなら——死んだ方がマシだ……。

「自分が何を言っているのかわかっているのか？」

「勿論です。出席簿で殴るなり、罰を与えるなり好きにどうぞ」

「お、おい！ 旭、何言ってるんだよ！？」

「そうですね！ そんな事——！」

「一夏、オルコット。悪いが黙っていてくれ」

一夏とオルコットが慌てて、取り消すように言うが、抑揚のない声で拒否した。

織斑先生は眼つきを鋭くしながらオレの目を真っ直ぐ見据えてきた。それを睨み替えうように視線を逸らさない。

……。

……。

……。

沈黙が辺りを支配する。緊張が波紋のように広がり、周りの生徒は居心地が悪そうに顔をしかめ、山田先生はオロオロしている。そんな張りつめた空気の中、真っ先に言葉を発したのは織斑先生だった。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドの穴を埋めておけ。浮舟は罰として放課後第一グラウンドをISを装着して

50周走っておけ。当たり前だが、PICは勿論補助動力もいれるなよ。いいな」

「はい」

「……………はい」

「浮舟さん……………」

「何？」

「えっと……………その……………大丈夫、ですか？」

「別に、大丈夫……………」

言うだけ言っただけでグラウンドを後にした。後ろで一夏や篠ノ之、オルコットがオロオロしていたが、他人の事を考える精神的余裕なんてなかった。

今は……………何も考えなかった……………。

第7話 転校生

「というわけでっ！ 織斑くん、クラス代表就任おめでとう！」
「おめでと〜！」

言うと同時にクラスメイト達はクラッカーを鳴らす。破裂音が部屋全体に響き渡り、中から飛び出した紙テープが床に降り注いだ。夕食後の自由時間。寮の食堂で一組のメンバーが集まり、『織斑一夏』クラス代表就任パーティー『なるものを行っていた。各自飲み物やお菓子を片手に適当に騒いでいる。

その中に浮舟旭の姿はなかった。今彼は教師である千冬に反発した罰としてパワーアシストを切った状態のISを装着して校庭を走っていた。

「いや〜、これでクラス代表戦も盛り上がるね〜」

「ホント、ホント」

「ラッキーだったね。同じクラスになれて」

「ホントホント」

『さっきから相槌をうつている女子は2組だったような？』とか、『おかしいだろ。どう考えても参加者が30人以上いるぞ。何でクラスの集まりの筈がクラスの人数越えてんだよ？』とか、いう疑問をとりあえず置いておいて一夏は校庭の方に視線を移した。

昼間の旭の態度が気になったからだ。自分の姉である千冬に噛みついた時の荒んだ瞳、その後の誰も寄せ付けけないような雰囲気が一夏は引つ掛かりを感じていた。

3週間ほどの付き合いしかないが、『浮舟旭』という人物は基本的に思慮深く温厚でお人好しだ。時々痛烈で辛辣な皮肉を飛ばす時もあるが、そのほとんどは相手を気にかけているもしくは必要だから

こその言葉だという事を一夏は知っている。事実、一夏が困っていると必ず手助けをしてくれるし、他の人に対してもそうだ。時折年下のように扱われる事もあるが、不思議と一夏はそれが不快ではなかった。旭は『皆のお兄さん』で自分達の間人関係を円滑にするための潤滑油のような役割を果たしていた。その旭があんな風になるなんて俄かには信じられなかった。

「人気者だな、一夏」

「本当にそう思うか？」

「ふん」

（箒は箒で何故か機嫌悪いし……。何なんでしょうかね？）

「はいはい！ 新聞部です！ 話題の新生生織斑一夏くんに特別インタビューをしに来ました！」

突然の新聞部員の乱入に場が盛り上がった。一夏はますます面倒くさそうに顔をしかめた。

乱入者はそんな一夏の心情を知ってか知らずか、そのまま真っ直ぐ一夏に向かって来て正面に立った。

「私は2年の薫子。よろしくね。一応新聞部やってます。はい、これ名刺」

名刺を受け取り見る。そこには【IS学園 2年 新聞部 副部長 薫子】と書かれていた。角数の多い漢字だ。書く本人は大変だろうなどと、一夏があまり関係ない事を考えていると薫子はボイスレコーダーを一夏にスイと向けてきた。

「ズバリ！ クラス代表になった感想をどうぞ！」

「えつと……頑張ります」

インタビューには乗り気ではないが、期待を裏切る訳にも行かず、
無難な答えでこの場を乗り切ろうとする。一夏はきつと『NO』と
言えない日本人の典型なのだろう。

「えー。もっといいコメント頂戴よ。俺に触ると火傷するぜ、と
か」

そんな一夏の反応が面白くないのか薫子は口を尖らせ抗議し、一夏
は苦笑した。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！ まあ、いいや。適当に捏造しておくからいい
として」

（捏造って……）

薫子のマスコミにあるまじき発言を一夏は心の中だけでツッコんだ。
そんな一夏の心情などなんのその。薫子の勢いは止まらない。

「セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういう事はあまり好きではありませんが、仕方あり
ませんわね」

そう言いつつなんだかんだで目立つ事が大好きな彼女は既に一夏の
隣で髪の毛のセットを終え、スタンバイしており、やる気満々だった。

「コホン。では、まず何故わたくしが代表を辞退したかと言います
と――」

「あー、長そうだからいいや。写真だけ頂戴」
「なっ！？」 最後まで聞きなさい！」

あんまりな言い草にセシリアは憤慨した。当然と言えば当然なのが。

それでも薫子は自分のペースを崩さない。

「いいよ、適当に捏造しておくから。織斑くんに惚れたからって事にしておこつ」

「なっ！？ な、ななっ！？」

図星を言い当てられて真っ赤になるセシリアを怒っていると勘違いした一夏がフォローのつもりで余計な事を言った。

「何をバカな事を。セシリアが好きなのは旭だろ？」

「え、そうなの？」

「なananあananあanan何を言っているんですの！？ 違いますわ！ 論外ですわ！」

「え？ だつてよく旭の事を気にかけて——」

「初恋の人に似ているから少し引っ掛かっていただけですわ！！よく見ればあの方とは似ても似つきませんから、わたくしの勘違いでしょうけど！ あの方はもつと気品あふれて、もつともつと格好よかったですもの！ 浮舟さんのように軽薄で、地味で、下品な冗談を飛ばすような方ではありませんわ！」

「そうなの？ ちえ、特ダネゲット！ って思ったのにー。ってあれ？ そう言えば浮舟くんは？ 彼のコメントも欲しかったんだけど」

「旭は……えーっと、罰走してます」

「え？ 何で？」

「千冬ね——じゃない、織斑先生に反抗して……」

「あの織斑先生に楯つくなんて……。結構不良なのかな？」

「いや、浮舟は多少妙な所はあるが、誠実で信頼に足る人物だぞ」

「筈がそこまで言うなんて珍しいな。そんなに旭の事を気に入ったのか？」

「お前と違って細やかな気遣いが上手いからな。一夏も少しは見習え」

「……………はい」

「うーん、流石は伝説のIS操縦者」

「……伝説！？」「」

「黛先輩、それどういう事ですか！？」

「浮舟さんはそんなにすごい操縦者でしたの！？」

「あー、違う違う。セシリアちゃんとの対戦の時、マシントラブルで墜落しちゃったじゃない」

「……はあ……………」

「初陣でいきなり墜落するなんて伝説を作ったから伝説のIS操縦者」

「な、なんとも不名誉な……………」

「本人が聞いたら泣きますわね……………」

「いや、むしろ笑うんじゃないか……………」

旭のあんまりの不遇な扱いに苦笑しつつ、三者三様の見解を出していく。

「実際に彼って意外に謎多き人物なんだよねー。出身地とか、家族構成とか、経歴とか、どこの企業に所属してるのかすらも未だにわかってないし。判明してる事って言ったら、男でも起動できる狙撃タイプのIS『ハヴオック・ゲイル暴風』のテストパイロット。趣味は読書。特技は速読と暗記って事くらいなのよねー」

「…………………」

一夏、箒、セシリアは黙り込む。確かに旭は自分の事をあまり話したがらない。

質問しても自分の詳細に触れる内容は冗談で返すか、煙に巻くかそのどちらだ。むしろ意図的に隠しているようにも見える。

「ハヴォック・ゲイルって色は深緑なんだよね……。深緑、狙撃手、気遣い上手……ハッ！」

「ま、黛先輩どうしました？」

『重要な事に気づいてしまった！』というような顔をする薰子の顔を一夏、箒、セシリアは神妙な面持ちで覗き込んだ。

「彼の口癖って『狙い撃つぜ』とかじゃ——」

「……違います！」「」

怒られそうな発言をする薰子にツッコミを入れる一夏、箒、セシリアだった。

2

昔の事を思い出した。

千冬から言い渡された罰走を終え、息を整えてから旭はハヴォック・ゲイルのパワーアシスト機能、及びPICを起動させる。静かに目を閉じ、イメージするのは鋭い刃。鉄の匂い。刀の重み。

直後、強烈な光を発して旭が手に持っていたのはハヴォック・ゲイルの近接武装、全長約2メートル。ISでなければ振る事など適わないであろう長大な刀《シデン》だった。旭にとってシデンを展開すること事態はツインバレットやインフェルノをイメージして展開するより容易な作業だ。元々旭の専門分野は近接格闘。物心ついた頃から生きるためにナイフや刀を握って身を立てていたから刃の事

は知り尽くしている。彼にとって体の一部と言ってもいいだろう。そんな物をイメージするなど朝飯前だ。しかし問題はそこではない。

「……うッ……！」

旭がシデンを握った瞬間、彼の世界が反転した。全身の血が逆流し、胃の中が、ハラワタが、脳がかき回されるような不快感を覚える。激しい頭痛、吐き気、眩暈に襲われ、まともに立つ事が出来ない。膝を折ってその場に倒れ込む。倒れた拍子にシデンを手放してしまい、巨大な刀は光の粒子となって消えていった。同時にハヴォック・ゲイルを待機モードのゴツイ鎖のブレスレットに戻し、体をひっくり返し大の字になる。吐く息は荒く、浅い。旭の気分は最悪だった。

「忘れる事を許さない、か……」

まるで刻印だ。と旭は思う。どんなに洗っても、擦っても、削つても決して消える事のない記憶の刻印。だからこそ意味があるのかもしれない。

自分がこの傷を背負う意味が。

自分が生き続ける意味が。

自分が存在する意味が。

雲に覆われていた月が姿を現し、月明かりが旭を映し出していく。その顔に感情は無く、虚ろな瞳は何処か遠くを見つめていた。

3

「織斑くん、浮舟くんおはよー」

「おはようさーん」

「おはよう」

朝。いつもどおりに登校した。一夏やクラスメイト達は昨日の事について触れてこない。

気を使ってくれたんだと思う。っていうか……十五歳に気を使われる二十歳って……。

「ねえ、転入生の噂聞いた？」

「転入生？ この時期に？」

「あー、聞いた聞いた。なんでも今度入ってくるのは中国の代表候補生だつてな」

「ふーん」

「このわたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

「あつはつはつは！ オルコットはジョークのセンスが一流だな」

「それはどういう意味ですの！？」

「まあ、オルコットの冗談は置いといて——「冗談とはなんですか！ 冗談とは！」——確かに珍しいよな。こんな半端な時期に転入なんて」

「このクラスに転入してくる訳ではないのだろう？ 騒ぐほどの事でもあるまい」

「普遍的な日常に刺激がほしくって」

「専業主婦の不倫の言い訳みたい」

「どんな奴なのかな？」

「……なんだ？ 気になるのか？」

「ん？ ああ、——「ボン、キュ、ボンのダイナマイトボディの美人だったらいいな」——って旭！ 何言ってるんだよ！」

「僭越ながら一夏の心の声を代弁させてもらった」

「「一夏^{さん}！」「」

「ち、違う！ これは旭が勝手に——！」

「礼ならいいって。オレも一夏の役に立てた事を誇りに思う」

「そうじゃないだろ！」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦が始まるというのに」

「一夏曰く『俺の青春の1ページのロード オブ ハーレムは年中無休デス！』」

「「一夏^{さん}！」」

「言ってないから！ 旭、頼むからやめてー！」

いやあ、一夏をイヂめるのは実に楽しい。

「コホン、話を戻しましょう。一夏さん、クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせて頂きますわ！ なにせ専用機を持っているのはまだクラスで一夏さんとわたくしだけなのですから」

「あれ？ オレ忘れられてる？」

「浮舟さんはまだ怪我が治り切っていないでしょう。そんな状態で一夏さんの模擬戦の相手は無理ですわ」

「……ごもつとも」

とりあえず今は怪我を治す事だけ考えとけってか。

まあ、クラス対抗戦はオレの出る幕ではないし、今回は高みの見物と洒落込むかな。

ちなみにクラス対抗戦とはその名の通り各クラスの代表（つまり1組は一夏が）同士が試合をするリーグマッチの事だ。この試合の学園側はスタート時点での実力の指標作り、クラス単位での交流、団結などを目的としている。生徒達のモチベーションを引き上げる為、優勝クラスには食堂のデザートフリーパス3年分という豪華（かどうかは微妙だが）景品が進呈される。女は甘い物好きが多いからなあ。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんか！」

「情けないぞ、一夏！　男たるものそのような弱気でどうする！？」

「織斑くんが勝つとみんな幸せだよ」

オルコット、篠ノ之、クラスメイト達が好き勝手言い、一夏は困り果てている。

正直一夏の見解の方が正しい。初期段階のISの操作に躓いている一夏では、自分の方向性すら導き出せていない一夏では経験値で勝る他のクラス代表に勝てるとは思えない。戦闘において経験値は強さに直結する。積み上げた年月を一気に飛び越えられる可能性があるとするれば、それはただ一つ。――相手に勝る才能だけだ。

「織斑くん、頑張つてね！」

「フリーパスの為にね！」

「専用機持っているクラス代表って今のところはウチと4組だけだし、余裕だよ」

「おゝい、2組の転校生も専用機持ちらしいぞ？」

「それは本当ですか？」

「マジだ」

『その通りよ』

教室の入り口から声が聞こえ、クラスの全員が突然割り込んできた声の主に注目する。

髪型はツインテール。小柄でちょっと吊り気味の目が可愛らしい少女だ。全校生徒の顔と名前を既に記憶済みのオレが見覚えないうて事はあの子は例の転入生だろう。

転入生は腕を組み、片膝を立てて教室のドアにもたれかかっていた。よく漫画などで二枚目のクールなライバルキャラがしているような

ポーズだ。

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴？ お前、鈴か！？」

「そう。中国の代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「……………一夏、あそこで格好つけてる微妙に痛いお子さんはお前の知り合いか？」

「な……ッ！ なんて事言うのよ、このウニ！」

「ウ、ウニ！？」

そっちこそなんてこと言うんだよ！ 仕方ないだろ髪が固くて勝手に四方八方逆立つちまうんだから！ ——って志村後ろ後ろー！

「おい」

「なによ！？」

バシイン！ という音が教室内に響き渡る。ヴェイダー卿のご到着だ。

鳳は頭を押さえて痛がっている。

「ショートホームルームもうSHRの時間だ。自分の教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

先ほどまでの大きな態度などなんのその。借りてきた猫のように大人しくなってしまった。

「後でまた来るからね！ 逃げないでよ一夏！ それとそのウニ

！ 覚えてなさいよ！」

「なんで俺が逃げるんだよ」

「ウニって言うな！」

「さっさと戻れ」

「は、はい！」

織斑先生の静かな、それでいて威圧感たっぷりの言葉に凰は2組にダッシュで戻っていった。

「一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな」

「い、一夏さん。あの子とは一体どういった関係で！？」

「ウニ……。ウニとか言われた……」

バシンバシンバシン！

「席に付け、馬鹿者共」

凰に言われた事を気にして床に手を付き、打ちひしがれていたなら織斑先生に出席簿で殴られた。泣き面に蜂とはこの事だな。

なんだか……。また厄介事に巻き込まれそうな予感がする。

第8話 同室者

1

そんなこんなであつという間に昼休み。織斑先生の授業は気が抜けないから肩凝つちまつた。そんな事を思いながら首に手を回し、指でリンパを刺激しながら捻るとバキバキバキと鳴った。あゝ。相当凝つてんのな、コレ。

「旭、昼飯行こうぜ」

「ああ。今行——」

そこまで言いかけて固まつた。一夏は篠ノ之、オルコットを始め他十数名の女子を後ろに引き連れていた。アレだな。だいぶ前にドラマで見たぞ。えゝっと『賤前教授の総回診です』って奴。アレみたいな。

「どうしたんだ？」

「……何でもない。折角の誘いだけど、やめとく」

その人数じゃ席取れるかどうかからならな。護衛である以上、常に行動を共にするのが筋だが、今の所ISS学園内に誰かが潜入している気配もないし、放置しておいても問題ないだろう。それに——昼休み中にやる事あるしな。

2

屋上のドアを開け、一気に目の前の視界が広がった。風が体を吹き抜け、雲一つない空に爽快感を覚えた。旭は座学で固まつた筋肉を

ときほぐすように両腕と背中を目一杯伸ばし、深呼吸した。脳内の酸素がすべて入れ替えられたような気がして気分がスッキリする。ポケットに入れてあったカロリーメイトを摂取した。

ストリートチルドレンだった頃には富裕層の出したゴミ漁りをして自分の食べる分を確保していた旭にとっては三食の心配をしなくていいというのは最高の贅沢だ。

カロリーメイトを食べきり、普段使っている携帯とは別の仕事用の携帯を取り出してロックを解除しアドレスを開く。

カテゴリ、クライアント、篠ノ之束。

以上の操作を行って何度か電話のコール音が鳴り、クライアントが電話をとった。

『ヤッホー、あつくんおひさー』[♪]

「ヤッホー、束さん、おひさー」[♪]

『おやおや〜？ 今日のアつくんはなんだかノリがいいね〜？』

「この学校ではこういうキャラで通ってるもんで。軽い感じで会話しておけば、万が一聞かれたとしても友人同士の小咄に見えるでしょう？」

『なるほど〜。束さんとしてはいつもの真面目なあつくんよりそっちのあつくんの方がいいなー』[♪]

「そいつはスミマセンねえっ！」

束の言葉に若干傷つきながら、旭は咳払いをひとつとして本題の現状報告に入った。

「……………以上の事から今のところ亡国機業は動きを見せていない。まあ、日常的に騒動の種は尽きないけど、それも殺伐としたもんじやないみたいだし、な」

『うん、わかったよ。それじゃ、引き続きよろしくね。あつきゅん』

「なんだよ、あつきゅんって……。まあ、いいや。で、妹の方は――」

『なんでそこで篝ちゃんの話になるのかなあ？』

「深い意味はない。聞きたくないって言うんならを見みたいに押し黙っておくが、どうする？」

『……………』

返ってきた返事は沈黙。旭はそれを勝手に肯定と受け取り、話を続ける。

「やっぱり相当苦労しているみたいだ。特に人間関係。なんというか……不器用な子だな。一夏が間に入って緩衝材になってるけど、当の本人が積極的に人を受け入れようとしていないって所だな」

『……………』

「まあ、最近はいがみ合いの相手だとしても本音を言える相手が出てはいる。それがいい方向に向くか、悪い方向に向くかは分からないが、な」

（まあ、オルコットの性格なら陰湿なイジメに発展する事はないだろう）

旭はセシリア・オルコットの事を思い出し、性格を分析しそう判断を下す。彼女はプライドが高い故にそう言った卑劣な真似は絶対にしない。今日会った凰鈴音という少女にしてもそうだ。見た所、裏表を使い分けるような器用な性格には見えない。

「まあ、問題ないだろ。……………東さん、アンタが何を考えて、何をしようとしているのかは知らない。けど、妹を傷つける事はして

やるなよ。……傷つけたり、傷つけられたりする事は……どうしようもなく辛い事だ……」

『はい』

わかつていいのか、わかつていないのか微妙な返事だが、これ以上は余計なお世話だと考え、旭はそれ以上踏み込んだ事を言うの控えた。

3

「浮舟くん、お待たせしました。寮の部屋の準備が出来ましたよ」

山田先生からその言葉を受け取ったのは今日の放課後。引越しの為に今日の体力作りは中止して、ホテルから荷物を持ってきた。部屋には本が大量にあり、学校側が準備してくれた車の中に運び込むのに苦労した。うっかり本棚を壁にぶつけてしまい、罪悪感に襲われる。日本の納税者の皆さん、ゴメンナサイ……。あなた達の血税で賄われた壁に傷をつけてしまいました。まあ、凹んでも作業が進まないで、そのまま寮内に運び込む。

ルームメイトは——まあ、一夏だろうなあ……。一夏じゃないんだし、可愛い女の子と同室というフィクションの世界で起こりそうなラブコメ展開などオレには縁のない話だ。

クソウ、一夏め……！ リア充は爆発してしまえ！ もしくはそのラブコメ体質を少しオレに分けてください！ ……とは言っても5歳も年下の子相手にどうにかなる可能性などゼロなのだが……。とか、考えていると廊下で誰かが言い争っている声が聞こえてきた。なんだか聞き覚えのある声なので気になって覗いてみると――。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？ 気を遣うし。のんびり出来ないし。その辺、あたしは平気だから変わってあげよ

うかなって思つてさ」

「別に嫌だとは言つていない……。それにだ！ これは一夏と私の問題だ！ 部外者に首を突っ込んでほしくない！」

「大丈夫。私も幼馴染だから」

「だからそれが何の理由になるといふのだ！」

篠ノ之妹と凰鈴音が廊下で言い争いをしていた。その隣で一夏は遠い目をしながら、傍観している。

「アンタら何やってんの？」

「あ、旭！ ちょうどいい所に！ この二人を止めてくれ！」

「浮舟！ お前からもこの不屈き者に何とか言つてやってくれ！」

それぞれ好き勝手な事を言うので深いため息をつく。声をかけた事を激しく後悔した。

さっきの話を聞く限り部屋割の事で揉めてるようだ。

「つていうか凰^{ファン}、この部屋は一夏と篠ノ之の部屋だろ？ 後から来て好き勝手言われたら、そりゃ篠ノ之だっていい気はしないだろ？」

「アンタには関係ない事よ！ 引つこんで、ウニ！」

「一夏、説得は失敗だ」

「あつさり諦めんなよ！」

「知るか。オレに関係ない喧嘩までいちいち仲裁してたら胃が持たん。オレは自分の部屋に荷物を運びに行く。お前もあとで来いよ」

「え？ どういう事？」

「オレの部屋の準備が出来たんだとさ。普通に考えてオレとお前が同室だろ。だから——」

「ちよつと待ちなさいよ、ウニ」

「だからウニと言つな」

「そんな事はどうでもいいわよ。あんたの部屋は？」

「ん？ ああ、この階の左側の奥から2番目」

「あたしの部屋じゃない！」

「え？ ちょ！？ ええええええ！？ 何考えてんだIS学園！？」

「なるほど。これで部屋割の問題は解決だな」

一夏がずれた事を言い、篠ノ之が横で満足げに頷いている。オレは学園側のアホな決定に頭を抱え、ファンが反発した。

「嫌よ！ 何でこんなウ二と一緒に部屋にならなきゃいけないのよ！？ ちよつとウ二！ 一夏と代わりなさいよ！」

「勝手な事を言うな！ 学園側の決定には大人しく従ったらどうだ！？」

篠ノ之とファンギヤイギヤイと言い争いを再開した。騒ぎの大きさに他の生徒はある者は迷惑そうに顔を潜め、ある者は興味津々に聞き耳を立て、ある者は我関せずの姿勢を貫いている。オレはその様子を見て更に深いため息をついた。

どうすればこの場を丸く収められるだろうか、と、最善策を思案する。

1・ファンの要求通り一夏とオレが部屋を交代する。

——ダメだ。その後機嫌が悪くなった篠ノ之と同じ部屋で過ごすなど、オレの胃痛の元だ。

2・このままの部屋割りで行く。

——筋は通っているのだが、これも却下。そのあとファンがギヤイギヤイ騒ぐに決まっている。これ以上騒がれるとさすがにオレもキレてしまいうかもしれない。

3・オレと一夏が一緒の部屋になる。

——本音を言うとこれが最も問題が少なく常識的でベストな選択肢なのだが、これは拙い。篠ノ之とファンの相性は見た所最悪だ。そ

の二人を一緒の部屋になんかしたら——コブラ対マングースよろしく。とにかく碌な事にはならないと思う。

現在目の前にある選択肢はすべてBAD　END直結する。

どないせーちゅーねん！

大概にせえよ、ガキ共！　部屋割くらいで揉めとんなっちゅーねん！

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふざけるな！　出ていけ！　ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるんでしょ？　だったら問題ないじゃん」

お互いに埒が明かないと判断したのか、ジャッジを一夏に任せるべく二人して凄い形相でガン見していた。

「俺に振るなよ……」

傍から見たら無責任極まりない言葉だが、一夏の鈍感スキルを甘く見てはいけない。

この朴念仁はきつとこの喧嘩が自分を巡っての喧嘩だとは認識していないだろうから。

って言うかいい加減気づけ、このバカ。

「とにかく！　部屋は代わらない！　出て行くのはそちらだ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するな！　ええい、こうなれば力づくで！」

「あっ、バカ！」

「……………ッ」

咄嗟の事だったので反応が遅れた。頭に血が上った篠ノ之が部屋から持ち出してきた竹刀を振り上げ、ファンに向かって振りおろした。

バシイインッ！！

竹刀のぶつかる音が廊下に響く。っていうか生きてるのか、コレ！？竹刀は意外に固く、当たり所が悪ければ大惨事に発展する。剣道の全国優勝経験のある篠ノ之の打突なら殺傷能力は十分だろう。

「鈴、大丈夫か！？」

一夏は慌ててファンの身を案じた。篠ノ之も我に返り、自分のやつてしまった事に気づいて顔を真っ青にしている。

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは代表候補生なんだよ」

ファンはISの腕の装甲を展開させ篠ノ之の放った竹刀を受け止めていた。

これにはオレも驚いた。ISの展開は人間の任意で行われる。つまり今の攻撃に反応できなければ受け止めるなんて芸当が出来ないのだ。

これが、代表候補生……。

オルコット

今まで近くにいた代表候補生がアレだけに実力を疑問視していたが——改めて彼女たちの実力の底知れなさに戦慄を覚えた。

「っていうか生身の人間なら本当に危ないよ」

「う……っ」

ファンの言葉に篠ノ之は罰が悪そうに眼を反らす。確かに手を出した篠ノ之も悪いんだけど、原因はファンの人を馬鹿にしたような態度にもあるからどっちもどっちだと思う。

「ま、いいけどね」

ISを収納し、気にしてないという態度をとるファン。対する篠ノ之は目を反らしたまま固まっている。気まずい沈黙が流れる。そんな沈黙を破ったのは一夏だった。

「鈴、約束っていうのは」

「う、うん。覚えてる……よね？」

「えーと、あれか？ 鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「そう、それ！」

「――奢ってくれるって！」

「……………はい？」

「だから鈴が料理出来るようになったら、俺にメシを御馳走してくれるって事だろ？」

それってアレじゃないのか？ 『毎日あなたに味噌汁を作ってあげ・る（ハート）』 的なニュアンスにしか聞こえないんだが？

「いや、しかし自分の記憶力に感心だ。えらいぞ俺の脳細胞！ ちゃんと仕事してたんだ――」

パン！

「……………へ？」

ファンは一夏の頬を力いっぱい引つ叩いた。目には涙を一杯溜めている。

俯いて肩を震わせている。えっと……噴火前？

「あ、あの、だな、鈴？」

「最つつつ低！ 女の子との約束を覚えてないなんて、男の風上に

も置けない奴！ 犬にかまれて死ね！」

言うや否やファンはバックを持って自分の部屋に戻って行った。一夏は訳がわからずボーゼンと立ち尽くしている。

「……拙い。怒らせてしまった」

「一夏」

「おう？」

「馬に蹴られて死ね」

「うつ……！ 旭いゝ……」

「知らん。勝手にしろ」

っていうか、オレの部屋の問題ってどうなるんだコレ？

4

コンコンコン。

ファンの部屋（というか今日からオレの部屋でもある）をノックしても返事が無い。
参ったな。オレの荷物どうなるんだ？

「おい、ファン！ 部屋に入るぞ！」

相変わらず返事は帰ってこない。一応ノックもした事だし、ドアをゆっくりと開ける。

部屋は真っ暗だった。壁に手を当て、電気のスイッチを手探りで探す。

突起物の様なものを見つけたので、押すと部屋が明るくなる。

先ほど一夏の部屋に押し掛ける為に持ってきていたポストンバック

の中身が散乱していた。

そして壁が不自然に凹んでいる。

なるほど。八つ当たりで、バッグを壁にぶつけたんだな。

この部屋の散らかりの現況であるファンは布団を被り拗ねたように丸まっている。

本当なら触らぬ神に祟りなしって事で厄介事を避けるために話しかける事はしないが、ここは共同部屋。一時的にしてもルームメイトなのだから、最低限の通すべき筋は通しておかないといけない。

「ファン、アンタには不便をかけて悪いが、この部屋使わせてもらうぞ」

「……………勝手にすればいいじゃない」

「じゃ、勝手にさせてもらう。オレはしばらく外行ってくる。もし着替えとかシャワーを浴びるつもりなら、外に張り紙しておいてくれ。念の為、風呂場に鍵をかけるのを忘れるな。12時までには戻る」

「……………」

無言。相手から言葉は返って来ない。何と云うか……間が持たんな。ジャージの上着を羽織り、体力作りの為にランニングに向かった。怪我をしているからってサボってなんかいられない。怪我が治ったら即、楯無さんのIS操縦者としての強化メニューが始まるのだから、基礎体力を向上させるなら今しかない。

いつものコースのスタート地点につき、念入りにストレッチをして体を解す。

腰、股関節、膝、大腿、脹脛、アキレス腱、足の指。よし、異常無し。

靴ひもをしつかりと結び直し、夜の道を駆けて行つた。

翌日、クラス代表選の組み合わせが廊下に大きく張り出され発表さ

れた。

一夏の一回戦の対戦相手は――凰鈴音だった。

第9話 リーグマツチ

1

5月。麗らかな日差しもそろそろ暑さを帯びてくる頃。昼休みに浮舟旭と凰鈴音は同じテーブルで昼食をとっていた。最初こそ相性の悪かった二人だが、旭の気の長い友好的な態度が功を奏し、ここ数週間である程度打ち解けてきている。鈴の旭に対するウニという呼称については既に諦めたようだが。

「ねえ、ウニ。あんたさ、いつもいつも夜中まで何してるの？」

「特訓。オレはアンタらと違って初心者な上に凡人だからな。人の2倍、3倍努力して血反吐を吐かないと代表候補生なんて化け物組に追っ付けねーの」

半分嘘だ。確かに旭は毎日アリーナの閉まる16時まで楯無によるIS操縦の特訓を受けて残りの時間は体力づくりや、格闘の訓練に当てているが、遅くなったのはそれが理由ではない。彼は凰鈴音の経歴を調べ、情報の裏をとっていた。必要とあらば対象の周囲から排除するために。人間は知らない顔ばかりの中でよく知った顔を見つけると無意識に無警戒になってしまう。そんな状態で襲われてしまえば、ほぼ確実に殺されるだろう。暗殺の極意は相手を油断させ、死角から襲う事なのだ。過去に暗殺者であった旭であればこそその思考で相手の動きを先読みして先手を打つ事は重要だ。護衛と言っても四六時中張り付いている訳にはいかないのだから事前にある程度の危険の排除はやっておかねばならない。

しかし鈴のデータを彼女の経歴を調べ裏を取り特に怪しい所はなく、

警戒レベルを下げた。

凰鈴音。15歳。中国の代表候補生で、専用機『^{シエンロン}甲龍』の操縦者。気性が激しいがサバサバした性格で、裏表を使い分ける事が苦手。対象との関係は幼馴染。^{一夏}10歳から14歳くらいの間に一夏とその友人である五反田弾と友人関係を築くが、両親の離婚により帰国。まな板のごとき胸がコンプレックスで地雷。旭は凰鈴音のデータを頭の片隅に置いて、話を続ける。

「ふーん。あんたさー、あたしが転校してくる前にイギリスの代表候補生相手にいい試合したって聞いたけど？」

「ありやオルコットがオレの挑発に乗って冷静な判断力を欠いていた事とオルコットの戦闘スタイル、ISデータ、スリーサイズまでくまなく調べて対策立てたからこそだ。まともに正面からやり合えばボロ負けだったーの」

「スリーサイズって、あんた……」

言いながらラーメンのスープをレンゲですくい、口に運ぶ。

「あんたなにレンゲなんて使ってるのよ？ 女々しいわよ」

「レンゲ使う」女々しいの理屈がわからん。人が見ていて不愉快になるモンでもあるまいし、いちいち食い方に文句付けるな」

「あたしが不愉快になるのよ！」

「オレがアンタにそこまで気を使ってやる義理はないな」

傍から見たら口喧嘩に聞こえるが、『憎まれ口を叩き合う仲』。これが旭と鈴の関係の間合いだった。

「ところで、一夏の事だが――」

ピタリと鈴の動きが止まる。

「いつまでああやってしておくつもりだ？ 何も言ってこないが、寂しがつてるぞ、アイツ」

「フフン」 だからいいのよ

「あ？」

鈴のやけに確信的で自信満々な物言いに旭は頭の上に疑問符を浮かべ首を捻った。

「いい？ モテないあんたにわかりやすく説明してあげるわ」

「アンタはオレに喧嘩売ってんの？」

ビシッと額に指を突き付けた鈴に対し、旭は鈴の発言に若干傷ついたようで眉間に皺を寄せ引き攣った笑みを浮かべる。そんな事を鈴は気にも留めず自分の話を進める。

「男はね、逃げる者を追いかけたくなるの！」

「犬かよ」

鈴が立ち上がり、妙に自信満々な様子で言いきる。旭はそんな鈴に冷やかな視線を送り、冷静にツツコミを入れた。しかしゴーイングマイウェイな彼女は止まらない。

「離れてる間に一夏はどんどんあたしの事が気になり始めて——」
「で、誰の入れ知恵だ？」

鈴の目の前にまだ手をつけていないカツ丼を置き、何処からともなく取り出したスタンドライトの光を鈴の顔に浴びせて取り調べを行

った。

「……ラ、ラクロス部の先輩」

「やっぱりな」

旭にはこんな駆け引きめいた事を直情型の鈴が考える筈がないという確信があった。

犯人——ではなく鈴は旭の質問に罰が悪そうに顔を背けながら答える。旭は息を深く吸い、長いため息をついた。頭の中がお花畑で羨ましい。と思つたが賢明な事に彼はそれを口には出さなかった。旭は皮肉屋ではあるが、空気を読むのが上手いのだ。

「押してダメなら、引いてみるってか？ その先輩には悪いが、オレは間違いなく失敗すると思うな」

「何でよ？」

「一夏は稀に見る朴念仁だ。仁を神という字に替えて朴念神ぼくねんじんと言ってもいいくらいな朴念仁だ」

「そこまで言う？」

「女心に疎いアイツがそんな恋愛の駆け引きなんて考えてる訳が無い。精々『本人が放っておけて言ってるんだから放っておけばいいか』くらいにしか思っ
てないぞ、多分」

「う……っ！」

「さらに言わせてもらえば、アンタが離れてる間に他に一夏を狙つてる子が今頃仲良くなつてるかも知れないし」

「うう……っ！」

「別にアンタらの恋愛にはこれっぽちも興味はないが、意地張つてないでさつさと仲直りした方がいいんじゃない？」

「ううう……っ！」

鈴が頭を抱えて唸る。何やら葛藤があるようだが、そんな事は旭の

知った事ではない。

旭は鈴を放っておいて、空になったラーメン丼を脇に置きカツ丼に箸を伸ばした。

2

「謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！」

フアンの一方的ともいえる主張に一夏が反発した。

放課後。フアンは何故かオレも半ば強引に連れて来て、第三アリーナで特訓していた一夏のもとに仲直りの為に訪れていた。そう。仲直りの為に出向いたはずだったのだが――。

ピットで待っていたフアンは一緒にいた篠ノ之とオルコットを押しわけ、一夏に謝るように迫ったが、当然一夏に反発され今に至る。

「あつたまきた！ どうあつても謝らないっていうわけね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうしてきてるんでしょうが！」

自分が悪いと納得出来ないのに謝る事はしたくない一夏。自分との約束を忘れた一夏に腹を立てているが、その約束の意図を言いたくないフアン。

お互いに自分の主張を曲げないものだから水掛け論になっている。

一夏、社会に出たら自分が悪くなくても頭を下げなきゃならない場面なんていくらでもあるんだぞ？　そしてフアン、ちゃんと訳も話さずにわかってもらおうなんてそんな無理な理屈が通る訳ないだろうが。両者のかみ合わない会話を聞いて深いため息を漏らす。このままここでこうしていたら胃に穴が空いてしまいそうだ。

この依頼って労災はおきるんだろうか？　今度東さんに聞いてみる

事にしよう。

「じゃあ、こうしましょう！ 来週のクラス対抗戦^{リーグマッチ}で負けた方が勝った方の言う事を一つなんでも言う事を聞かせられるって事でどうよ！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明して貰うからな」

「せ、説明はちょっと……」

ファンは顔を真っ赤にしている。説明する事態になった自分を想像して照れているんだろう。

「なんだ？ やめるならやめてもいいんだぜ？」

一夏の挑発にファンの吊りあがり気味の眼が更に吊りあがった。

「誰がやめるのよ！ あんたこそあたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「何でだよ馬鹿！」

「馬鹿とはなによ馬鹿とは！ この朴念仁！ マヌケ！ アホ！ 馬鹿はあんたよ！」

和解の想いは惨劇を呼び、往く道に退路はないってか？

一夏もここまで扱き下ろされて相当腹が立ったようだ。ポロつと言ってしまった。あの言葉を。あの禁句を。

「うるさい貧乳」

スガアアアンツ！！！！

直後、ピット内に激しい爆音が響き、建物が大きく揺れた。ファン

が甲龍を腕の装甲だけ展開させて、何かをしたのだ。装甲の周りには攻撃の余波である紫電が纏わり付いている。

「言っただね……！ 言ってはいけない事を、言っただね！」

すごい迫力でファンが一夏に迫った。

「わ、悪い！ 今のは俺が悪かった！ すまん！」

一夏は慌ててファンに謝るが、本気で怒ったファンはその程度の謝罪では止まらないようだ。

「『今のは』！？ 『今のも』でしょ！？ いつだってあんたが悪いのよ！」

滅茶苦茶な理屈ではあるが、一夏は言い返せない。ヒステリックになった女に論理や理屈は通用しないのだ。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど——死にたいらしいわね。いいわよ希望通りにしてあげる。——全力で、叩きつぶしてあげる……ッ！」

そう言っで一夏を睨みつけてファンはピットから出て行った。

怖えー。ファンさんメツチャ怖えー。

「……パワータイプですわね……。それも一夏さんと同じ近接格闘型……」

「みたいだな。特殊合金を凹ますほどの威力って事はシールドでも衝撃を殺しきれないだろうし、とりあえず一夏」

「お、おう。なんだ？」

「謝る練習、しとこつか」
「おいっ！」

3

「さあて、どうしたものかな」

現状報告。部屋から締め出されました。

あの後キレたファンは部屋に閉じ籠ってしまい、そのまま寝てしまったようだ。

なにより問題なのはオレがカギを持ち出すのを忘れてしまった事だ。この寮の部屋のカギはピッキング防止用の防犯シリンダーを採用している為、針金での錠開けも出来ない。

どうすれば分からずに部屋の扉の前で佇んでいた。とりあえずノックをして、呼びかけてみる。返事はない。アイツは一度寝ると中々起きない。ベットの所には目覚ましが2つ、3つ置いてあったのを見た事がある。まあ、それは今どうでもいい。

うーん。さしずめ天岩戸に引き籠ったアマテラスか。試しに宴会して踊ったら出てくるだろうか？　って、んなわけねーだろ！

「仕方ねーな。野宿しますか」

野宿は慣れたものだ。その上ここはIS学園。物盗りや野犬の心配はないので気が楽だ。

まあ、けど野宿すると体が冷えたり、固まっちゃまうからあんまり好きではないが。

「あら、浮舟さん。何をしていますの？」

「オルコットか」

「どうしましたの？　何かお困りですか？」

「いや、そんなに困ってねーから大丈夫」

「嘘おつしやい。さつきからずっと部屋の前で佇んでいたではありませんか」

「ジツと観察してたのかよ。……………ハッ！ まさかアンタ、オレに惚れたんじゃ——」

「ななななななにを言っていますの！？ 違いますわ！ 論外ですわ！」

「ろ、論外……」

論外とまで言われるのか、オレは。モテないのはここ1カ月で知っていたが、そこまで言われるのか。ちよいと傷ついちゃったぜい……。いいんだけどな！ 5歳年下の子供にモテなくても！ 全然悔しくないよ！

「コホン。で、どうしましたの？」

「ああ。どうも締め出されちゃったみたいで、な」

「鍵はどうしましたの？」

「部屋の中に忘れた！」

腰に手を当て胸を張りドヤ顔で言うオレを見てオルコットは呆れ顔だ。

「……………仕方ありませんわね」

「あ？」

「困っている人を見捨てたとあつてはオルコット家の恥ですわ！

浮舟さん、わたくしの部屋に——「却下」——最後まで聞いたらどうですの！？」

「いや、申し出はありがたいんだけどな。それは色々問題があるというか……………」

「凰鈴音さんとは同室ではありませんか！」

「それは学校側の決定だから仕方なくだ」

「本当に仕方なくですか？」

「……やけに突っかかるな。どうしたんだよ？」

「別に！ なんでもありませんわっ！」

訳わからん。わからんけど――。

「気持ちだけありがたく貰っとくな」

そう言つてオルコットの頭をポンポンと軽く撫でる。オルコットの目が見開き表情が固まった。

「あ、悪い。嫌だったか？」

「い、いいえ……」

「そうか。じゃあ、おやすみ。いい夢を」

「あ、あの！ 浮舟さん！」

「ん？」

寢床を探しに行こうとしたら、オルコットに呼び止められた。なんだか切羽詰まってるような顔をしている。

「あ、あの……その……わたくしと、やっぱり……昔会った事はありませんか！？」

「……………」

内心ドキリとする。それを表情に出す事なく空いた間を誤魔化すために考え込む振りをした後「いや。前にも言っただけど会ってないと思うな」と言っておく。

「そうですか……」

オルコットはホッとしたような、がっかりしたようなそんな微妙な表情を浮かべる。

不用意に近づきすぎたな。オルコットとは少し距離を置かないといけない。

正体がバレる様なヘマは出来ない。それだけは何としても避けなければならぬ。

その日の夜は昔の事を――先生の事を思い出した。

4

試合当日。第二アリーナ第一試合。織斑一夏と凰鈴音との対戦が始まる。

観客席は噂の『世界で唯一ISを起動できる男』である織斑一夏の試合を一目見ようと、どこかしこも満員で立ち見の観客までいる。入り切らなかつた関係者や生徒はリアルモニターで鑑賞できるように取り計らいまであるくらい注目のカードとなった。

一夏の白式がピットから飛び出した。アリーナでは既に凰鈴音の専用機『シンロン甲龍』が試合開始のときを静かに待っている。

『甲龍』。代表候補生凰鈴音の専用機で燃費と安定性をコンセプトに設計された機体で鈴の気性を現すような攻撃的な外見や装備が特徴的だ。

《両者所定の位置に移動してください》

アナウンスに従って一夏と鈴は向き合った。互いの距離は約5メートル。ISであれば一瞬で距離を詰められる距離だ。鈴は一夏にオープンチャンネルで言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少し痛めつけるレベルを上げてあげていいわよ」

「雀の涙程度だろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

織斑一夏と云う男は全力の勝負を好み、勝負に手を抜かれる事を激しく嫌う。

勝負は全力でやって初めてそこに意味が生まれると考えているからだ。

鈴はそんな一夏の言葉を聞いて嗜虐的な笑みを浮かべた。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破するだけの攻撃力があれば本体にダメージを与える事が出来る」

《それでは両者、試合を開始してください》

試合開始のブザーが鳴り、一夏と鈴は同時に動いた。

ガキイーン!!

白式の唯一の武装雪片二型が衝撃で弾き返される。一夏はセシリアから習った三次元躍動旋回で体勢を整え、鈴を正面に捉えた。

鈴は一夏に余裕を見せつけるように手に持っていた巨大で異形の青龍刀をバトンのようにクルクルと回して笑う。

「いくわよ!」

鈴が青龍刀を自由自在に角度を変化させ高速回転させながら一夏に斬りかかる。一夏はそれを捌くのが精一杯の様でこのままでは消耗戦になると判断し、一旦鈴と距離を取ろうとするが――。

「甘いつ!」

甲龍の肩のアーマーがスライドして開き、口が光る。瞬間、一夏は見えない衝撃で殴りとばされた。

「今のはジャブだからね！」

言うと同時に本命の大きな衝撃が一夏を襲う。

「グアッ！」

攻撃をまともに受けた一夏は地表に打ちつけられた。シールドバリアーを貫通したダメージで体がずきりと痛む。

（こ、これはかなり拙い……！）

一夏はゆっくりと立ち上がり雪片二型を構えなおした。状況は悪いが、一夏の目は死んでいなかった。

第10話 異形

1

「なんだ、あれは……？」

ピットのリアルタイムモニターで一夏と凰鈴音との試合を観戦していた箒は目を見開き、呟いた。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃を砲弾化して撃ちだす。ブルーティアーズと同じ第3第型兵器ですわ」

隣で同じ様に観戦していたセシリアが神妙な面持ちで箒の問いに応える。

しかし箒には既にセシリアの説明は耳に入っていなかった。自分の大事な人が一撃、一撃痛めつけられる姿から目を逸らさない様にするのに必死だった。

自分は勝てと言った。一度口にした事を翻す事が最低だと自覚している。それでも箒は願わずにいらなかった。一夏が無事に帰って来てくれれば勝利などいらないと。

2

旭はアリーナで行われている試合を1人教室の端末で観戦していた。周りには誰もいない。

一夏は鈴の放つ衝撃砲を前に一方的に追い詰められていた。

「チャオ、旭くん」

「あ、楯無さん。ども」

「こんな所で試合観戦？ 旭くんもアリーナに行ったらいいのに」

「どうも昔から人の集まる場所は苦手で……」

「言う事が引きこもりみたいだよ？」

「ほつといてくれ」

言ってから旭は画面に視線を戻す。楯無は旭の隣に椅子を持ってきて座り同じ様に画面上で繰り広げられる試合を見た。

「追い詰められてるね」

「そりゃ、いくらアイツの白式のスペックが高いからってISでの戦闘はそれだけで勝てるほど甘いもんじゃないだろう？」

ISの世界では専用機を持っているというだけで、大きなアドバンテージが存在する。

織斑一夏の専用機『白式』は数ある専用機の中でトップクラスのスペックを誇る上にかつて初代ブリュンヒルデと呼ばれた織斑千冬の専用機『暮桜』と同じ単一使用能力『零落白夜』——エネルギー無効化攻撃——受け継いだ世界でたった1つの4世代型IS。

だが、現状で一夏はその強力な武器を使いこなせていない上に、ISのスペックに依存している。そんな生半可な状態で勝てるほど凰鈴音は甘い相手ではない。

「ずいぶん冷静な分析だね？ 他人事みたいだよ」

「実際他人事だし、一夏がこの試合で勝とうが負けようがオレにとつてはどうでもいい事だからな」

旭の任務はあくまで一夏の命を守る事。この試合が命のやりとりでない以上勝敗に興味はない。だが一夏があまりに弱すぎても困る。

旭の目的を果たす為の餌として一夏が最低限自分の身を守るだけの強さは必要だ。

「ねえ、旭くん。前から聞きたかったんだけどね……」

「なにを？」

「君の本当の目的は何？」

旭は何の前置きもなく自分の核心部分に触れられ心臓が跳ね上がる。動揺を精神力で抑え込み、あくまで平静を装い話を続ける。

「前にも話した通り、オレの任務は一夏の護衛。それ以外は何もないよ」

「うーん……。それは嘘じゃないけど、本当の事は言っていないよね？」

楯無は持っていた扇子をバツと開き、口元に持っていた。その扇子に書いてあった文字は『曖昧模糊』と書かれている。それを見て旭は肩を竦め、軽く口の端を吊りあげるように笑う。楯無の目はそのふざけた言動とは裏腹に『誤魔化しは利かない』と言っていた。誤魔化しきれない。そう判断して彼は軽く嘆息し、両手を上げた。

「オレの企みなんて小さな事だよ。ただ――」

「ただ？」

「絶対的な力が欲しい。ただ、それだけだよ。その為にI S学園の生徒を危険にさらす事はないからご心配なく」

「……………」

力が欲しい。心はいらない。
旭が欲しいのはどんな敵をも打ち倒す為の暴力。破壊者としての圧倒的な力。どんな障害も壁も叩き壊せるだけの絶対的な力。そんな

存在になれるなら旭は迷わずその力を追い求めるだろう。

たとえその力故に破滅に誘われる事になったとしても構わない。

自分の願いを叶える為ならどんな犠牲も払うつもりだ。腕でも、足でも、眼でも、命でも持つていけばいい。

その代償として得た力で目的を達成できれば、ただそれだけでいい。

それは楯無の問いへの答えであり、答えではない。

人は目的なく力を追い求めはしない。人が力を追い求めるのは、力を得る事が願いを叶える為に必要な手段だからだ。だが、旭は絶対的な力を得て、何をするのか明かさない。

しかし楯無は旭に何かを感じたのか、それ以上追及する事はなかった。

旭と楯無。破壊者と守護者。似て非なる立場の二人の間に静寂が横たわる。

旭の中の闇を感じ取った楯無は何も言わずに彼の隣に寄り添い試合が行われている空を見上げ続けていた。

3

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴だっていうのに」

何度目かわからない見えない砲撃をかわされても鈴の余裕は崩れない。楽しげに笑いながら上下左右正面真後ろと縦横無尽に一夏を攻撃していく。

それに対し、一夏には余裕はなかった。ハイパーセンサーで空間の歪みや大気の流れ探らせ、攻撃の先読みを試みるが、それでも遅い。防戦一方だ。一夏は攻撃に転じる為に辛抱強くとチャンスを窺った。右手に雪片式型を強く握りしめながら。

まだ自分は訓練の成果を出しきっていない。まだやれる。まだ動ける。

セシリアとの試合での反省点を踏まえ、今日までの訓練は近接戦闘、急加速急停止といった基礎移動技能に費やした。箒との剣道の訓練も『刀』の間合いと特性を把握し、運用する為に生かす事が出来る。何より——自分には『織斑千冬』の弟としての誇りがある。

千冬の顔に泥を塗るような無様は晒したくない。

（そうだ。たとえ倒れるとしても——前のめりだ！）

一種の開き直りでもあったが、逆にそれが一夏に覚悟を決めさせた。

「鈴」

「なによ？」

「本気でいくぞ」

一夏の本気表情を真っ直ぐに見れず、鈴は顔を真っ赤にして思わず眼を逸らす。

「な、なによ……。そ、そんな事当たり前じゃない……。と、とにかく！ 格の違いってものを見せてあげるわっ！」

鈴は照れを隠すように大きな声を出し、青龍刀をクルクルと回し、迎撃態勢をとる。

一夏も雪片式型を構え、機を窺う。奇襲のチャンスは一度。二度目はない。

「……………」

「……………」

「……………」
「……………」

相対した二人の操縦者緊張がアリーナ全体に伝染したように、観客席は静まり返る。

次の瞬間、一夏の駆る白式の姿が鈴の視界から消えた。

「な！？ ど、どこに！？」

「ここだ！」

「！？」

開いていた間合いを一瞬で詰め鈴の懷に一夏が潜り込んでいた。

『瞬間加速』。イグニッション・ブースト一夏がこの一週間で会得した移動技術。

ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーをして爆発的に加速するという無茶なものだが、使いどころを間違えなければ旭の『ISでの跳躍』と同じように代表候補生と渡り合えるだけの効果を発揮する。

「うおおおおおおおおおつ！！」
「……………」

一夏は零落白夜を発動。裂帛の気迫を刃に乗せて乾坤一擲の攻撃を鈴に仕掛けた。

鈴は完全に反応が遅れ、一夏の攻撃を防ぐべく動くが一手遅い。

一夏の刃が甲龍のシールドを斬り裂こうとした瞬間――。

ドオオオオオオオオン！！！！

突然轟音と共にアリーナが揺れた。一夏も、鈴も、観客も試合のことなど忘れ呆然とした。

アリーナの遮断シールドが破られ、ステージ中央から煙が舞い上がる。観客席の非常用隔壁が全て降りた。

「な、何が起こって……?」

「一夏、試合は中止よ! すぐにピットに戻って!」

「何言って——」

——警告。ステージ中央に熱源反応。所属不明のISと断定。ロックされています。

「——なっ!?!」

その情報が指し示す事実はただ一つ。ISのシールドと同様の物を使用しているアリーナの遮断シールドを突き破るだけの攻撃力を持つISが一夏達をロックしているという事だ。

ハイパーセンサーが熱源の正体を映し出す。そこには——異形のISがいた。

色は灰色、手足は人間ではあり得ないほど長く、首の関節部は存在しない。

そして何より特異だったのは『全身装甲^{フルスキン}』だった事だ。

通常ISという兵器は全身を包み込む装甲というのは必要ない為存在しない装甲に頼らなくてもエネルギーシールドで機体の防御は事足りるからだ。

「……お前、何者だよ?」

『……………』

一夏はオープンチャンネルで全身装甲^{フルスキン}に問いかけるが、勿論応答はない。

「一夏速く！」

「お前はどうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐからその間に逃げなさいよ！」

「逃げるって——女を置いてそんなこと出来るか！」

「バカ! あんたの方が弱いんだから当たり前でしょ! 別にあたしも最後までやり合おうって訳じゃないわよ! こんな異常事態、すぐに学園側の先生が収集して——」

「あぶねえ！」

鈴の言葉を最後まで聞く事なく一夏は彼女を抱え敵ISが放ったビームを避ける

一夏は鈴を抱えたまま大きく旋回し、苦々しげに敵を見据えた。

「ビーム兵器かよ……! しかもセシリアや旭のより出力が上の……!」

「ちょ、ちよつと何処触ってるのよ!」

「バカ、暴れるな! 殴るな!」

「うるさいうるさいうるさい!」

《やってる場合かあああつ!!》

「あ、旭!？」

オープンチャンネルで旭から一夏と鈴に通信が入った。恐らく何処かでハヴォック・ゲイルの通信機能を展開してこちらに通信を送っているのだろう。

《一夏、ファン! さつさとそつから離脱しろ! アレは競技に使うようなISじゃない! 軍用ISだ! やり合えば殺し合いになるぞ!》

《そうです! 早く逃げてください! 先生たちがISで制圧します!》

通信にピットに待機していた副担任の山田麻耶が割り込んでくる。

「——いや、それなら余計に逃げる事なんて出来ない！　ここで逃げたら周りに危害が及ぶかもしれないだろ！　だから先生達が来るまでここでこいつを足止めする！」

《バツ——ッ！？　自分が何言ってるのかわかってるのか！？　これは訓練でも試合でもない！　しくじったら死ぬかもしれないんだ！》

《その通りです！　生徒さんにそんな危険な事させる訳には——！》
「大丈夫よ、山田先生にウニ。こう見えてあたしは代表候補生よ？

何とかなるわよ……！」

《ガキがナマ言ってるじゃねえっ！　代表候補生だろうがなんだろうが、そんな危険な事——！》

旭の怒声を最後まで聞くことは出来なかった。敵ISが突進してきたからだ。一夏と鈴はそれを避ける事に意識を集中させ、紙一重で何とかかわした。

「逃げるも何も……向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

一夏と鈴は敵を見据えそれぞれ手に持っていた雪片式型と異形の巨大青龍刀を構えた。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するからあんた突っ込みなさいよ。あんた武器それしかないんでしょ？」

「その通りだ。それじゃあ、まあ——」

お互いの武器の切っ先を当てる。スポーツで言うハイタッチ、ビジ

ネスで言う握手の様なものだ。即席のコンビネーションだったが、お互いがお互いに頼もしさを感じていた。

「——やりますか！」

4

「もしもし！？ 織斑くん！？ 鳳さんも！？ 聞いてますー！？」

ピット内に待機していた山田麻耶は慌てて一夏と鈴に呼びかけるが、帰ってくる返事は無言。頭の中が焦りのあまり意識がブラックアウトしかけ、冷や汗がたらたらと背中に流れる。生徒が心配なのは勿論、頭の中には『生徒が大怪我』↓『保護者からの抗議』↓『教師生命の終り』という図式が完成していた。それが真耶の焦りを更に加速させる。彼女はこめかみに両手を当て、首をブンブン振ってテンパっていた。

そんな麻耶とは対照的に千冬は設置してあったコーヒーマーカーにコーヒード豆を入れ、湯を入れた。インスタントコーヒーとは違う豆から挽いた本物のコーヒーの香りが彼女の鼻腔をくすぐる。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

《言ってる場合か！？ アンタの弟が襲われてんだぞ！？》

旭の怒声がピット内に響く。

「先生！ わたくしにIS使用の許可を！ すぐに出動できますわ！」

セシリアも居ても立ってもいられないという様子で千冬に詰め寄っ

た。

「そうしたいところだが、これを見る」

「これは――」

セシリアの目の前にブックタイプの端末を差出し、第二アリーナのステータスを見せる。

「シールドレベルが4に設定……！？ しかも扉が全てロックされて……！ これもあのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは非難も救援に向かう事も出来ないな」

《だったらさっさと政府にエマージェンシーを――》

「さっきからやっている。現在も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できればすぐに部隊を突撃させられる」

《それまで待つてられるか！ オレは一夏の救援に向かう！ ハヴオック・ゲイルのチャージショットならシールドのレベルが4だろうが、5だろうがブチ向いてアリーナ内に侵入出来るはずだ！》

「あ、浮舟くん！？ 浮舟くん！？」

旭は一方的に通信を切った。真耶が必死に呼びかけるが再び応答が返ってくる事はない。

「ふう、まったく浮舟にも困ったものだ」

「お、お、織斑先生！ 何のんきな事を言っているんですか！？」

「そうですね！ 浮舟さんはIS初心者なんですよ！？」

「落ち着け。浮舟はああ見えてそれなりの修羅場を潜ってきているようだし問題ないだろう」

そういつて千冬がコーヒーマーカーの中に出来上がっていたコーヒ

―をカップに注ぐ。

「コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、織斑先生。それ、砂糖じゃなくて塩ですけど……」

「……………」

ピット内の時間が止まった。――様な気がした。

セシリアは見てはいけない物を見たような気がしてそっと顔を背ける。

「何故塩があるんだ？」

「さ、さあ……。で、でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……………」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙がピット内に流れる。セシリアと真耶は千冬にかけるべき言葉を見つける事が出来ない。

「あつ！ やっぱり弟さんの事が心配なんですね！？ だからそんなミスを――」

気まずい雰囲気と和ませようと真耶が千冬に話しかける。が、途中で言っただけの話題のチョイスを誤った事を悟った。

「……………」

「……………」

千冬から真耶に向けて放たれる無言のプレッシャー。それに耐えか

ね、真耶は固まった。真耶の心境は蛇に睨まれた蛙といった所だろう。

「お、織斑先生。あ、あのですね——」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あのそれって塩が入ってるやつじゃ——」
「どうぞ」

先ほどとは比べ物にならないプレッシャー。これを断れるとしたらどんな弾圧にも屈しなかったキング牧師くらいのものだろう。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

「はい……」

そんな千冬と真耶のやりとりを尻目にセシリアはある事に気がついた。

「あら？ 篠ノ之さんは何処へ……？」

5

「あつの！ アホガキ共がああああつ！！！」

旭は激怒していた。顔を真っ赤に紅潮させ、頭が沸騰し、額には血管が浮き出てピクピクと震えている。乱入者の目的が何かはわからない。しかし乱入者が纏っているのが軍用機である以上その目的は碌でもない事だけは確かだろう。最悪の場合、殺し合いに発展する事だって考えられる。だからこそ行動を慎重に選択し、軽挙妄動は慎むべき状況だというのに一夏と鈴は戦う道を選び、千冬達はのん

びり構えている。旭はそれが腹立たしい。

確かに一夏の言うとおり敵が周りに危害を加える可能性は十分にありえる。被害拡大を防ぐために本隊到着まで足止めするという考えは的確でもある。そして千冬達の言うとおりシステムが乗っ取られている以上、今できる事は信じて待つ事だけだと言う事は理性では理解していた。理解はしていたが、感情のメーターが理性を完全に振り切っているのだ。

そして旭が何より彼が腹立たしかったのは、自分自身が一夏を危険にさらしてしまったという事だ。

浮舟旭は織斑一夏の護衛だ。護衛対象を危険に晒す事など彼にとってあつてはならない事だ。

旭は自分の無力に歯を食いしばった。

「楯無さん！ オレは一夏の救援に行きます！ あなたは生徒の避難を——」

「私も行くよ。生徒会長たるもの学園の生徒達を守らないとね」

旭はダークグリーンを基調とした色のIS《暴風》ハヴォック・ゲイルを楯無は自身の専用機スカイブルーのIS《霧纏の淑女》ミステリアス・レイディを展開させ、窓から飛翔する。

そのままアリーナに一直線に行きたい所だったが、二人を阻む存在があつた。

モニターで見た者と同じ異形のIS。《全身装甲》フルスキン。

その機体を直接見た瞬間、旭は怒りで表情を歪める。

「退け……ッ！」

「……………」

自らの怒りを無理やり押さえつけたような声で旭は《全身装甲》フルスキンに

警告する。

しかし《フルスキん全身装甲》からは何も反応が返って来ない。
旭は激昂した。

「退けえッ！ 殺すぞッ！！」

インフェルノを構え敵に照準を合わせる。《フルスキん全身装甲》はそれでも反応を示さない。旭が引き金にかかった指を引こうとしたその時――

バシヤアアアンッ！！

頭から滝の様な大量の水が降り注ぎいだ。更識楯無が自らの専用I
S《ミステリアス・レイディ霧纏の淑女》は水を操る。左右に展開する《アクア・クリスタル》によつてナノマシンで構成した水を旭の真上に落としたのだ。
濡れ鼠になった旭は状況が飲み込めず、眼を何度も瞬かせ、口を鰹
のようにパクパクと閉じたり開けたりしている。

「な、何するんだ！？ 今は悪ふざけしている場合じゃ――」
「注意♪」

楯無は怒鳴りつける旭の口元に人差し指を当てて黙らせる。

「……………は？」

「旭くん、落ち着きなさい。君は万に一つの勝機を物にする豊富な
戦闘経験から磨き上げられた戦術眼があるからこそ、熟練者相手に
対等に渡り合う事ができるんだよ？ それをなくしたら君はショッ
カーの戦闘員くらいの強さしかないんだからね？」
「うぐ…………」

酷い言われようだが、返す言葉が無かった。事実完全に頭に血が上っていた訳だし、先ほども敵の戦力の分析もせず、感情のまま突っ込み玉砕するところだった。

「反省」

「……………はい」

楯無の言葉に旭は肩を落とし項垂れた。

（参ったな。年下なのに、この子の方が色々としっかりしている）

旭は短く嘆息し、罰が悪そうに頭をバリバリと掻いた。

「わかればよし。それじゃ、ここはおねーさんに任せて、織斑くんを助ける為に行ってきたさい」

「けど、楯無さんが——」

「私はこのIS学園生徒会長だよ？ 忘れちゃった？ 『生徒会長、すべての学園生の長たる存在は——』」

「『——最強であれ』だったな」

旭と楯無は顔を見合わせニツと笑った。旭の表情には先ほどまでの憤怒が消えている。

「その通り。君は君のやるべき事をやりなさい」

「了解。楯無さんも気をつけて」

スラスターを吹かせ一気に跳躍して旭は成すべき事を成しに行く。

《フルスキン全身装甲》は旭を逃がすまいと、攻撃を仕掛けようとするが——、

「ダメだよ。余所見しちゃ」

決着は一瞬だった。

楯無が展開していた特殊ナノマシンによって超高周波振動の水を螺旋状に纏ったランス——蒼流旋が《全身装甲》フルスキンを捉え、装備されていた4門のガトリングガンが至近距離で撃ち込まれる。至近距離から水の弾丸を何度も撃ち込まれ、《全身装甲》フルスキンは装甲は四散した。

6

楯無さんを残してオレはアリーナに向かう。一夏とファンを援護する為ではない。

アリーナのロックを外し、一刻も早く突撃部隊をアリーナに招き入れる為に。

オレはIS初心者でIS操縦者としての技量は現在学園内にいる専用機持ちの中でも最弱と言ってもいい。そんなオレが一夏とファンを援護して状況をひっくり返すなど、おこがましいにも程がある。

『プロなら自分の出来る事、出来ない事を正確に把握して自らが行える最善の結果を出さなければならない』

危うく先生の教えを忘れ、暴走するところだった。3年の精鋭部隊がクラッキングしているとしても、ロックを外すには今しばらくの時間が必要だろう。しかし——オレのハヴォック・ゲイルに搭載されている演算補助システム『アドヴァンテージ』ならロックを外すまでの時間を破壊的にまで短縮する事が出来る筈だ！

そう考えISで疾駆する。しかしハヴォック・ゲイルのハイパーセンサーがあるものを捉えた。

「《全身装甲》フルスキン！？ まだいたのか！？」

《全身装甲》フルスキンはこちらがその姿を補足すると同時に近接武装を展開

させ襲ってきた。オレは慌ててツインバレットを展開し、《全身装
甲^{キン}》の攻撃を左手に持った銃のグリップで受け止め、右のハンドガ
ンで弾丸を撃ち込んだ。

しかし《全身装甲^{フルスキン}》はそれを旋回してかわし、ライフルを展開して
射撃する。

「ぐあ……ッ!!」

正確無比な射撃はオレを捉え、ISの絶対防御が発動し、シールド
エネルギーが大幅に削られる。衝撃で後退したオレはツインバレッ
トで牽制の為に連弾を放つが、《全身装甲^{フルスキン}》は既にツインバレット
の射程外に後退して停止していた。

ヤッベ……! なんて強さだよ……。今でシールドエネルギーを
4割近く削られちゃった……。

オレは必死に目の前に現れた敵に勝つ為の策を練るが、どれもこれ
も勝率が3割切る上に時間が掛り過ぎる。一夏達を助ける為に時間
はかけていられない。事態は一刻も争うんだ。

深呼吸をして、覚悟を決める。戦闘で使うのは初めてだったが――
コレを使わずに目の前の敵を殲滅する事は――最速でアリーナに向
かう事は不可能。
だからこそ今ここで切り札を切る。

「アドヴァンテージ起動」

敵である異形のISを見据えながら小さく呟いた。
透明で無数の数字と計算式が羅列した球体の立体スクリーンがハヴ
オック・ゲイルを包み込む。

「さーで、始めようか鉄クズ野郎。解体作業を、なあっ！」

第11話 アドヴァンテージ

1

「アドヴァンテージ起動」

敵ISを見据えながら旭は小さく呟き、透明で数字と計算式が羅列した球体のスクリーンが投影され、ハヴオック・ゲイルを包んだ。

「さーて……始めようか、鉄屑野郎。解体作業を、なあっ！」

言うと同時に旭は空中を滑るように後退しながらインフェルノの引き金を引いた。敵ISはインフェルノから高速で放たれた光弾をフィールドで防ぎ応射しながら旭の駆るハヴオック・ゲイルとの距離を詰めるべく追う。

正確無比な射撃。旭の感じていた違和感は確信に変わっていった。敵は無人機だと。一般的にはISは人が乗らないと動かないとされている。

無人機は前例がない。教科書にも載っていたが、果たしてそうだろうか？

確かに無人機という代物は今までのIS開発の歴史を振り返ってみても前例がない。

技術なんてものは日進月歩。日々進化している。

決して『前例がない』不可能』という事ではないのだ。

（しかし、こんな真似が出来るのは――）

旭の中で小さな疑念が生まれる。

彼考えながらも、牽制を含め何発か狙撃するが、敵ISはそれらをすべて無駄のない動きで防ぎ、撃ち合いをしながら飛行がお粗末な旭との距離を徐々にだが確実に詰めていく。

敵ISは旭を肉薄すると同時に近接戦闘用装備を展開。旭に斬り掛かった。

白刃が旭の頬を掠め、血が流れる。

（考えてる場合じゃないな。今はコイツを何とかしねえと……ッ！）

ガシャンッ！！

敵ISの手首と旭の放った膝蹴りがぶつかり合い、空気が振動する。敵ISが剣を振るために振り下ろした腕を旭が蹴り上げたのだ。

そのまま敵は後ろによろめいた。その僅かな間隙を縫って旭はインフェルノを収納。ツインバレットを展開し敵ISに連弾を浴びせた。敵ISはすぐさま体勢を整え、横風ぎに斬り掛かる。――が、旭は敵の攻撃の流れに同調して左足を軸に体をヘリコプターのプロペラのように横に旋回させて回避。そのまま踵で敵の頭を蹴った。再び大きく体勢を崩した《全身装甲》^{フルスキン}を連弾が襲う。ツインバレットは単発では並の威力しかなく、シールドを形成している相手にとって大したダメージにはならない。しかしこうも連弾を当たられてはシールドエネルギーは削られていく一方だ。《全身装甲》^{フルスキン}は姿勢制御プログラムに従い、何度も崩された体勢を直そうとするが、旭のマシガンのように繰り出される蹴りの嵐がそれを許さない。姿勢を直す度に蹴りを喰らい、体勢を崩し弾丸を撃ち込まれる。その繰り返しだった。

旭は完全に闘いの主導権を握り、流れを支配し、敵ISを圧倒していた。それもハヴォック・ゲイルの本領とするミドルレンジ、アウ

トレンジでの戦闘ではなく、インファイトでの戦闘で。ハヴォック・ゲイルの格闘性能は訓練機より上という程度。いくら旭が近接闘のスペシャリストで実戦から積み上げ続けた経験で磨き上げた戦術眼が優れているとはいえ、それだけでISのスペックの差を完全にカバーする事など不可能。

それなのに何故近接戦闘タイプの敵ISを圧倒できるのか？

答えはハヴォック・ゲイルに搭載されているある機能にあった。高速演算処理補助システム《アドヴァンテージ》。対象の動きをリアルタイムで解析、演算する事によって未来予知にも近い行動予測を行う事の出来る機能。

旭は今《フルスキン全身装甲》の0.5秒後の攻撃を読み取り、攻撃の起こりを悉く潰していた。

《フルスキン全身装甲》の電子的な思考はこのままでは勝てないと判定したのか、近接武装を収納しながら後退。ライフルを展開するが――。

ドオン！！

《フルスキン全身装甲》の後退と同時にツインバレットを収納し、スナイパーライフルを展開していた旭が《フルスキン全身装甲》が銃を展開しようとした空間を狙撃して銃を破壊した。

――サブジェネレーターよりエネルギー供給。エネルギー充填完了まで28秒。

そのまま旭は後退し、チャージを始める。《フルスキン全身装甲》は逃げる旭を真っ直ぐに追いかけてきた。

9――8――7――6――。

フルスキンと旭の距離はみるみるうちに縮まっていく。

5 — 4 — 3 —。

ハヴォック・ゲイルを肉薄したフルスキンは近接武装を大きく振り上げて、旭に襲いかかる。

2 — 1 —。

旭はフルスキンが刃を振り下ろすモーションに入る前に横に旋回して、振り下ろされる刃をかわして敵ISの胸（コアがあるであろうと予測される部位）にインフェルノの銃口を押し当てた。

「アストロビスタ——」

トリガーに指を添え、旭は不敵に笑った。

0。エネルギー充填完了。システムオールグリーン。

「——ベイベーッ！」

ゼロ距離からインフェルノの引き金を躊躇なく引いた。膨大な熱量が、圧倒的なエネルギーの奔流が敵ISを飲み込んでシールドを突き破り、装甲を溶かし、削っていく。

スラスターからは煙が吹き上がり、異形のISは墜ちていった。

装甲のあちこちが剥がれ、腰から下が無くなったISは地に臥しても尚、戦い続ける為立ち上がるうともがく。まるで破壊こわされるという自らの運命に抗うように。

その様子を旭は冷めた瞳で見つめながら再びスナイパーライフルを構えた。

「お別れだ」

トリガーに指を置き、精密な照準を定めた。

狙うは装甲が剥がれ落ち、露出しているヒビ割れ崩壊寸前のコア。アドヴァンテージから送られてくる膨大な情報が直接頭に流れ込んでくる。瞬時に目標との距離、重力による弾道への影響、気温、気圧、湿度、風向き、風速を演算処理、そして経験値から蓄積された僅かな勘を頼りに照準の修正を行う。

（こいつは——観測手いらずだな）

自らが纏っているISに頼もしさを感じながら引き金を引いた。ライフルから放たれた一筋の光は虚空の空を突き抜け、1ミリの狂いもなくコアを貫き、フルスキンは動かなくなった。

残骸を見下ろしながら旭はゆっくりとハヴォック・ゲイルを降下させる。その顔から表情を読みとる事は不可能だった。

憐憫も悲哀も喜悦も慈愛も達成感も何もない。ただ敵を破壊したという事実を確認し、旭はスラスターを吹かせアリーナへ飛翔した。自らの成すべき事を成す為に。

2

アリーナのピットの入り口に到着し、通信回線を開く。

「こちら浮舟旭。織斑先生、聞こえますか？」

《浮舟か？ 状況はどうなっている？》

旭は扉に設置されていた端末を分解しながら、現状の報告をする。

「現在確認した敵機の数はいりーナの奴含めて3機。内2機とは一

夏、ファン組と生徒会長が交戦中1機は先ほど沈めました。今からそちらにクラッキングを行ってロックを解除します」

《浮舟さん、急いでください！　一夏さん達が押されています！》

「焦るな、オルコット」

《ですが——ッ！》

「少し待つてろ。すぐに終わらせる」

《！？　そ、その言葉——！》

セシリアが何か言いかけるが、旭はかまわずISを直接システムに同期させ、アドヴァンテージの演算機能をフルに使ってクラッキングしていく。

そして、5分もしないうちにピットのロックは解除された。

3

「クッ……！」

必殺の間合い。自らの渾身のひと振りを難なくかわされ、一夏は歯噛みした。

「一夏バカ！　ちゃんと狙いなさいよ！」

攻撃後に出来る隙。その間隙を縫って攻撃を仕掛けようとする《全^{ルスキン}身装甲》を牽制する為に衝撃砲を放ちながら怒鳴る凰鈴音。一夏と鈴。両者の攻撃を難なくかわしていく。

「一夏、離脱！」

「おう！」

その隙に一夏は旋回、距離を取る。

「……鈴、シールドエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つてところね」

一夏は白式の投影されている立体スクリーンに目をやり、エネルギー残量を確認した。

白式のエネルギー残量は60。零落白夜を発動できる回数はあと一度。

鈴は現状の自分達の戦力を計算、分析して頭の中で勝率を計算する。

「……今の火力であいつのシールドを突破して機能停止させるのはちよつと厳しいわね」

「確率がゼロじゃなきゃいいさ」

一夏は口の端を吊り上げながら言う。

「あつきた。確率はデカい程いいに決まってるじゃない」

「そりゃそうだった！」

敵の放ったビームを一夏は回避、そのまま後退した。

「——で、どうすんの」と、鈴。

「逃げたきや逃げていいんだぜ？」と一夏。

「バカにしないでくれる！？ あたしは代表候補生よ！？ それが尻尾を巻いて退散なんて笑い話にもならないわ！」

「そうか。じゃあ俺はお前の背中を守るくらいはやってみせるさ」

「え？ あ。う、うん……ありが——！？」

真っ赤になりながら鈴は一夏にお礼を言おうとするが、その隙に敵ISはビーム兵器を放ってくる。気を抜いていた訳ではないが再び

相手を注視し、集中を高めていく。
そして、一夏はある事に気がついた。

「なあ、鈴。あいつの動き、何かに似てないか？」

「何かって何よ？」

「なんていうか……機械じみてるような気がして——」

「ISは機械よ？」

「そうじゃなくてだな。えーと……」

上手く自分の意図を伝える事が出来ずに一夏は言葉を探した。

「……あれって本当に人が乗っているのか？」

「は？ 人が乗らなきゃISは動かな——」

一夏の考えを一蹴しかけて、鈴は止まった。そして口元に手を当てて何か考えている。

「そういえば、あたし達が話してる時はあまり攻撃してこないわね……。まるで、興味があるように聞き耳を立てているような——うん。でもあり得ない。ISは人が乗らないと動かない。そういうものなんだもの」

鈴はよく考えた上で一夏の仮説を否定した。しかし一夏は食い下がった。

「仮にだぞ？ 仮に無人機だとしたら——勝機が見えてくる」

「なに？ 無人機だったら勝てるっていうの？」

「ああ。無人機だったら全力で攻撃しても大丈夫だしな」

「全力も何も攻撃が当たらないんだから意味が無いじゃない」

「次は当てる」

一夏は自信満々に鈴に笑顔を見せた。それを見て、鈴は一瞬ドキリとするが、すぐに彼女も笑みを浮かべ応じた。

「言ったわね。それじゃああり得ない事だけど、あれが無人機だつて仮定して攻めるわよ。なんでも手伝つてあげる。何をしたらいい？」

「俺が合図したらあいつに衝撃砲を撃つてほしい。最大出力で」
「？ いいけど当たらないわよ」

一夏の不可解な指示に鈴は首を傾けた。一夏には策があるようで、不敵に笑う。

「いいんだよ。当たらなくても。じゃあ、早速——」

一夏は《フルスキン全身装甲》に向き合い、突撃の為の姿勢をとり、突っ込むとした時——。

《一夏あああああつ——！！》

突然スピーカーから流れる怒声が戦闘宙域であるアリーナに響いた。一夏はギョツとしてハイパーセンサーの望遠機能を作動させて放送席をみる。そこにいたのは肩で息をして、怒っているような、焦っているような不思議な形相をしている自分のファースト幼馴染の姿。

《男ならッ！ 男ならそのくらいの敵に勝てないでなんとする！？》

一夏の表情が変わった。先ほどの幕のスピーカーから流れる喝に気合をいれられたからではない。目の前の《フルスキン全身装甲》が幕に興味を持ったようにアリーナの放送席を向いたからだ。

「箒、逃げ——!!」

最悪の事態を想像してしまい全身の毛が逆立つ。もはや形振り構ってられない。敵ISが箒に危害を加える前に速やかに脅威を排除しなくてはならない。

「鈴、やれ!!」

「わ、わかったわよ!」

鈴は一夏の気圧されながらも、すぐさま最大出力で砲撃の反動に耐える為に後方に力場展開を行い砲撃の準備に入る。それと同時に一夏は衝撃砲の斜線上に自らの機体を移動させた。

「ちょ——!!? 何してんのよ!?!」

自殺行為としか言えない一夏の行為に鈴は激しく狼狽する。

「いいからやれ!」

「……ッ!? ああ、もう! どうなっても知らないわよ!?!」

一夏の剣幕に気圧されて鈴は半ばヤケクソ気味に叫んで衝撃砲を放った。

最大出力の衝撃砲を背中に受け一夏の背中が軋む。痛みを堪え後部スラスターが衝撃砲のエネルギーを取り込み圧縮、そして一気に放出し加速した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!」

右手に雪片式型を強く握りしめその危険な攻撃力故に対人戦では出

力を抑え込んでいた零落白夜を最大出力で解き放つ。

ISとシンクロし、クリアーになっていく感覚。集中力が何十倍にも跳ね上がっていくような高解像度の意識。そして全身から湧きあがる力。

——俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、旭を——

「——護つてみせるッ！！！！」

裂帛の気合と共に振り下ろされた雪片式型は《全身装甲》^{フルスキン}のシールドと一緒に右手を斬り裂いた。攻撃後無防備になった一夏に《全身装甲》^{フルスキン}の左拳が襲う。そのままゼロ距離からビーム兵器を放とうと《全身装甲》^{フルスキン}は更にき夏との間合いを詰める。

「「一夏！！」」

箒と鈴の悲痛な叫びが重なった。それと対照的に一夏は余裕の笑みを崩さない。

「……狙いは？」

《完璧ですわ！》

次の瞬間。ビーム兵器の雨がシールドを破壊された《全身装甲》^{フルスキン}に降り注いだ。イギリス代表候補生セシリア・オルコットの駆るブルーティアースはビットを操作しながらウイंकをしながら笑みを浮かべた。

《ギリギリのタイミングでしたわ》

「セシリアならやれると思ったさ」

《それでも浮舟さんがピットのロックを解除してくれなければ、あ

あなたはやられていましたのよ？　もつと慎重に行動してください！」
「わ、悪い」

セシリアに怒られ一夏は罰が悪そうに頬を掻いた。

「何にしてもこれで終わ——」

——敵ISの再起動を確認。警告。ロックされています。

「「「！？」」」

アリーナにいた一夏、箒、鈴、セシリアは武器を構え直そうとするが、敵が攻撃態勢に入る方が速い。

——間に合わない！

《まったく、詰めが甘いんだ——よっと！》

その時だった。敵の攻撃より速く遙か上空から空気を斬り裂くような衝撃音が響き、巨大な光の柱が《全身装甲^{フルスキン}》ごとアリーナの地面を深く抉った。

敵ISは圧倒的な熱量に飲み込まれ、爆発の焰を上げた。

一夏達はすぐさま上空を見上げる。

そこには——スナイパーライフルを構えた深緑のIS《^{ハヴォック・ゲイル}暴風》を駆る浮舟旭の姿があった。

4

「助かったぜ、旭」

一夏はアリーナに降り、白式を待機状態に戻してから、同じ様にハ
ヴオック・ゲイルを待機状態に戻していた旭の方に寄って行った。
対する旭はニコニコしたまま表情を変えない。一夏にはそれが妙に
怖かった。

「あ、あの旭……さん？」

「一夏？」

「は、はい！」

「歯あ食いしばれや……ッ！」

「え？」

「こつの……ッ、ドクサレがああああああああっ！！
！！！！」

直後、旭の右アッパーカットが一夏の顎を捉え、彼の体が宙を舞い、
一夏の意識を刈り取っていった。気絶する瞬間一夏は『嗚呼。人つ
てISが無くて空を飛べたんだ』と考えていたのは完全に余談で
ある。

「アホか貴様は！ 百歩譲って教員が突入するまでの時間稼ぎをす
るだけならともかく！ あんな自殺みたいな突撃しやがって！ 誰
かを護る為の自己犠牲なんて安い自己陶醉だ！ そんなもんで護ら
れたとしてもそのせいで命を落としたんじゃそれは誰かの為じゃ
なくて誰かの所為になるんだ！ 貴様は護りたいと思った人にそ
んな重荷を背負わせるつもりか！？ 誰かを守りたいんだったら
な、待っている人の元に必ず帰るという気概を持って戦え！ それ
が出来ないのなら『護る』なんて言葉を軽々しく口にするな！ わ
かったか、このボケナスッ！！ ああ、やっぱり殴り足りねーな！
もう5、6発殴らせろ、このタコ助がッ！！」

「お、落ち着いてください浮舟さん！ 一夏さん気絶してますから
！」

「ウ、ウニ！？ あんた口調変わってる！」

「う、浮舟。い、一夏はよくやったと——」

「テメーもだ篠ノ之！ 戦闘宙域で敵の注意を引くような馬鹿な真似しやがって！ 貴様等は揃いも揃って自殺志願者か！？ だったらオレの目の前じゃなくてオレの視界の外で勝手に死ね！ 違うなら自分の軽拳妄動を猛省しろ！ わかったか、スットコドッコイ！」

「し、しかしだな……！」

「誰が口答えしていいと言った！？ 貴様が口を開いていいのは『はい』か『イエス』」

「と言う時だけだ！ とりあえずそのちよつと正座しろ！ これからみっちり説教してやる！」

「は、はい……」

5

関係者以外には知られていない事だがIS学園の地下50メートルにはレベル4の権限を持つ関係者しかはい入れない隠し部屋がある。あのあと更識楯無によって比較的損傷が少ない状態で機能停止した《全身装甲》フルスキンはすぐさまこの部屋に収納され、解析された。学園を襲撃した敵機は他にも2機いたが、いずれも浮舟旭によって徹底的に破壊され、解析できるだけの原型を留めていなかった。

部屋の中で織斑千冬はアリーナでの戦闘をディスプレイで見ていた。まるで何かにとりつかれた様に何度も何度も繰り返し。

「……………」

《織斑先生？》

ディスプレイから割り込みでウィンドウが開く。通信してきたのはIS学園教師の山田麻耶だ。その顔はいつものどこか抜けているような表情とは違い、真剣そのものだった。

《あのISの解析結果が出ました》

「ああ。どうだった？」

《はい。あれは——無人機です》

無人機。それは世界中でまだ確立していない技術だった。リモート遠隔操作か、スタンドアロン独立稼働か、はたまた全く違う未知の技術か……。

その世界を揺るがしかねない事実はすぐさま学園関係者のすべてに緘口令が敷かれた。

《どのような方法で稼働していたかは不明です。更識さんの攻撃で機能中枢が破損していました。復元も修復も不可能かと》

「コアはどうだった？」

《……それが、登録されていないコアでした》

「そうか。……やはりな」

《何か心当たりがあるんですか？》

「いや、ない。今はまだ——な」

そう言つて千冬は通信を切り、誰もいないはずの後ろに振り向いた。

「貴様はどうなのだ？ 浮舟旭。いや、ストレンジヤー《異邦人》」

「……………。参ったな。上手く忍び込んだと思っただけ。しかもオレの正体までバレてるし。どの辺で気づきました？」

レベル4の権限を持つ関係者以外入れない隠し部屋に忍び込んでいたのは浮舟旭。ストレンジヤー《異邦人》と呼ばれるフリーランスのエージェントだった。彼のおどけた様子に千冬は射抜くような視線を送る。

「ストレンジヤー《異邦人》が過去の事件から刃物を使う事に激しい拒絶反応を起こす事は有名な話だ。それに——貴様からは血と硝煙の匂いがする」

「お見事。流石は彼のご高名な初代」
ブリュンヒルデ

「貴様のおふざけに付き合つ気ない。単刀直入に聞く。貴様は何を企んでいる？」

「なにを、とは？」

「惚けるな。今回の襲撃は貴様の手引きだろう」

しばしの沈黙。
ストレンジャー 《異邦人》は何も言わずに千冬を値踏みするように見つめた。そして――。

「オレの依頼人に関しては何とも言えませんが――少なくともオレは今回の襲撃に無関係ツスよ」

「その話を信じるだけの根拠はあるのか？」

「ないツスよ。だから信じてもらうしかないツスね」

「そんな話を信じられると思うか？
ストレンジャー 《異邦人》、貴様を拘束する」
「やめておいた方がいい」

そついつて
ストレンジャー 《異邦人》は銃を取りだした。

「そんな物を取り出してどうするつもりだ？ 仮に私を殺し逃げたとしてもすぐさま貴様は他の教員に拘束されるぞ」

「ええ。確かにそうですね。ですが――これならどうツスカ？」

ストレンジャー 《異邦人》は取り出した銃の銃口を自分のこめかみに押し当てた。

「……何の真似だ？」

「見ての通り人質ツスよ。もしオレを拘束しようとするなら――オレは迷わず引き金を引きます」

「そんな脅しに――」

「本気ツスよ、オレは」

酷薄な笑みを浮かべながら、真っ直ぐに千冬を見詰めた。千冬の頬に汗が一筋伝う。そんな事はお構いなしに《異邦人》ストレンジャーは言葉を繋げる。

「仮に貴様が本気だとして、私が躊躇する理由にはならない」

「いいえ。なりますよ。仮に、自分の姉が自分の友達の自殺に関わっているとしたら？　一夏が貴女を見る目はどう変わりますかね？」

「——ッ！？　貴様……ッ！」

「ああ、そんな怖い顔で睨まないでください。オレのジョニーがブルってしまいます。それと——そもそもオレ達が敵対する理由はないッスよ？　オレの目的は織斑一夏の護衛なんですから」

「……なん……だと？」

ハヴォック・ゲイル

「オレは一夏を護る為に篠ノ之束博士から《暴風》を託されたんです。これは——オレのエージェントとしてのプライドにかけて本当だと断言します」

「信じるべき根拠は……？」

「これも信じてもらうしかないッスね。ただ、織斑一夏を護る事はオレの願いの延長線上にあります。だからオレは一夏を護ります」

「……………貴様の願いとはなんだ？」

「ありきたりな事ッスよ。オレの願いは——です」

「貴様ッ！」

「慌てないでください。オレは自分の願いは叶えたいと思っていますが、それに一夏や他の生徒を巻き込むつもりはありません。決着はオレ一人でつけます。誰かに譲って——たまるかよ……！」

ストレンジャー

《異邦人》は凄惨な瞳で自身の心情を吐露した。しばらくして我に返ったのか、咳払いを一つして話を続ける。

「兎に角、オレは一夏の敵にはなりません。これだけは確かな事です。信用してくれとは言いません。が、あなたの助けがいるからこ

そ、こうやって自分の正体を明かすリスクを背負ってまでコンタクトをとったんですから」

千冬は一瞬だけ逡巡してから、顔を上げた。

「……いいだろう。信用できるかどうかはさておき、確かに一夏を護るためには貴様の存在は有用だ。何か企むにしても私の目の届く所なら監視もしやすい」

「それでいいッス。それじゃ、オレは寮に戻ります。また部屋のカギ忘れたんでさっさと戻らないと締め出し喰らってしまいますんで」

そう言つて《ストレンジャー異邦人》は浮舟旭に戻り、部屋から出ていく。
エレベーターに乗り、壁に持たれかけて天井を仰いだ。

「東さん……。アンタ一体……。何企んでるんだよ……。？」

旭の芽生えた疑念に返事を返す者はその場には誰もいない。
静かな空間の中でエレベーターのワイヤーが巻きつく音だけがやけに大きく感じられた。

第11話 アドヴァンテージ（後書き）

一巻はとりあえず終了です。

次回から2巻に入ります。そうです。あの二人登場です。

そしてヒロインそろそろ決めないとなくとも思ってみたり。
次回もお楽しみに！

第12話 日常（前書き）

久しぶりのIS投稿になります。
楽しんで頂けたら幸いです。

第12話 日常

1

少年はナイフで抱き寄せた女性の胸を貫き心臓を一突きにした。

「――、――、――」

瀕死の女性が最期に紡いだ途切れ途切れの言葉。その一つひとつが少年の心に深く突き刺さる。そして女性はそのまま事切れた。

ナイフを女性の胸から引き抜く。刺し穿った傷口から流れ落ちるのは鮮血。

それと同時にゆっくりと、ゆっくりと残っていた体温が無くなっていく。

少年は何も言わない。否、何も言えない。

自分の目の前の現実を受け入れきれずに乾いた唇はただ震え、自力で立つ事すら出来なかった。

自分は今どこにいる？

この女性は誰だった？

自分は一体何をした？

目の前の光景が信じられない。心が受け入れられない。これは夢か、現か？

血糊のべつたりと付着した震える掌を眺める。次に横たわる女性の顔を見た。

彼女は少年に殺される前に既に苛烈な拷問を受けていた。

全身のあらゆる急所を避けて釘が打ち込まれ、両手足の指は斬り落

とされ、左耳が削ぎ落され、美しかった顔の右半分は焼き潰されていた。

いくら治療を尽くした所で彼女を待ち受けていた運命は『死』しかなかっただろう。

しかし――。

オレガ殺シタ

彼女を殺した感覚が手から消えない。

孤児だった少年はマフィアに買われ、使い捨ての殺しの道具として生きてきた。

使い潰されて死にかけていたところを彼女に救われ、生きる為のありとあらゆる技術を叩きこまれた。

彼女に出会わなければ少年は間違いなく路傍で塵のように死んでいただろう。

女性は間違いなく少年の恩人だった。

その女性を――。

オレガ殺シタ

頭の中の糾弾の声が自らの罪から目を反らす事を許さない。

数日前まで自分と共に何でもない事で笑って、泣いて、怒って。

そんな命ある者ならば誰でも持ちえた筈のすべての『可能性』を彼女から奪った。

「なんで……ッ！ どうして、こんな……ッ！」

嗚咽混じりの声を洩らし、思考がグルグルと脳裏を渦巻いていく。彼の頭の中には一体何故こうなった？ 自分はどうすればいい？ 何をすれば償える？

頭を抱え懊悩する。胸が押しつぶされそうな哀しみ。気が狂いそうなほどの罪悪感。

そしてもつれていた知恵の輪が突然外れた。

「……………ああ、そうか。そうすればいいのか……………」

自らの命を以つても贖いきれない罪。

そして自ら命を絶つという行為は彼女の最期の願い——「自分の存在を無かった事にしないでほしい」という願いを踏み躪る事となる。それだけはしたくなかった。

死ぬのが怖い訳ではない。ただ自らの罪を償わないまま安直に『死』という逃げ道を選ぶ事は出来ない。それだけは駄目だ。自分はもつと苦しむべきなのだ。

苦しんで苦しんで苦しんで苦しみ抜いた果てに死ぬべきだ。

それを陶酔と呼ぶなら呼べばいい。

同じ様に彼女に死の原因を作った者たちにも然るべき報いを受けさせなくてはならない。

彼女が苦しんで死んでいったでいったのに、彼女を苦しめた者たちが今も何処かで笑っているという不条理がどうしても我慢ならなかった。

ファントム・タスク
「亡国機業……………ッ！」

敵であろう組織の名を口にして少年は自分の目的をはっきりさせた。

「殺して、やる……………ッ！」

曇天の空から雫が落ち、ナイフに付着した血糊を洗い流していく。少年の激し怒りに呼応するかのように雷鳴が響き渡った。

「で？」

「で？　って何がだよ？」

「女の園の話だよ。いい思いしてるんだろう？」

「してねえつつの。何回説明さなんだよ」

「嘘をつくな、嘘を。旭、実際のところどうなんだ？」

「いい思いしてるのは一夏だけだな。オレみたいなジミーにはそんなモン縁がねえな」

「かーっ！　なんでお前ばっかモテるんだ！？　この顔か！？　この顔がモテスリムか！？　スリム分やるからモテ分よこせ！」

滅茶苦茶な理屈だが、弾の気持ちも分からなくはない。一夏のラヴコメ体質には時として護衛の本文を忘れ、殺意すら抱く程だ。この間襲撃受けたばかりだというのに相変わらず危機感足りねえし……。

「つつかアレだ。鈴が転校してきてくれて助かったよ。話し相手が少なかったからなあ」

「嘘つけ。お前と友人関係を築きたいって奴はあの学校にはワンサカいるだろうが」

「鈴か……。鈴ねえ……」

「ん？　なんだよ？」

「いーや、別に——よっしゃ！　俺の勝ち！」

「あああああつ！！　汚ねえっ！　ハイパーバーストモードで削り殺すのはなしだろ！」

「ははは。これで一夏の連敗だな」

「チクシヨウ！　テンペスタ強すぎだろ！　つつかエグい！　偶には違うキャラ使えよ。イギリスのメールシュトロームとかよ」

「あれ使い勝手悪いんだよな！　技弱いし、コンボ微妙だし」

「オルコットが聞いたらキレそうな話だな」

「……内緒にしといてくれよな」

「へーへー」

情報端末の画面に『HIT』の文字が出て、画面を覗き込んだ。

『ドイツ軍第三世代型IS【シュバルツェア・レーゲン黒い雨】完成』
『フランスのデュノア社で不穏な動きあり』

その情報を即決で買い上げる。ゲームに熱中している弾と一夏を横目に、短く嘆息してから二人に聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「またキナ臭くなってきやがったな」

ダスダスと大きな音が近づいてくる。

殺気！ 襲撃か！？

ベットから跳ね上がり、いつでも一夏をガード出来る位置に移動する。そして扉が開いた。入ってくる人影の関節を掴み、床に抑え込んだ。

「お兄！ さつきから昼飯出来たって言ってる——キャアッ！」

「動くな。何者だ？」

「あんたこそ誰よ！！？ 痛い痛い！ 離しなさいよっ！」

「旭！ それ俺の妹！ 離してやってくれ頼むから！」

「妹！？ マジで！？」

弾の言葉に驚きのあまり目を剥き、視線を抑え込んでいる人物に視線を移す。

肩まである髪をクリップで纏めたショートパンツにタンクトップというラフな格好をした女の子だった。何処からどう見ても刺客には見えない。慌てて抑え込んできた手を離す。

「わ、悪かった。凄い殺気だったから襲撃かと思って……！」
「アンタ頭沸いてんじゃないの！？　なんで襲撃だと思う訳よ！？」
「すまない。返す言葉もない」

素直に謝った。これはどう考えてもオレが悪い。どうやらこの間の無人機によるIS学園襲撃以降、相当神経過敏になっているみたいだ。

「蘭、旭も反省しているんだからその辺で——」
「お兄ダメレ」

「……………はい」

「あー、蘭。久しぶり。元気したか？」

「いつ！　一夏さん！？」

「ん？」

あれ？　この反応は……………まさか——。

「い、いや。あの……！　来てたんですか……？　全寮制の学校に通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日は外出。家の方の様子見ついでに寄ってみた」

「そ、そうですか……」

五反田妹は一夏を前にして顔を真っ赤にしながら口ごもっている。

一級フラグ建築士織斑一夏は学園外でも猛威を振るっているようだ。

一夏、アンタはアレか？　上条さんのアレなのか？

「あ、あの一夏さんもよろしければお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「ああ、うん。頂くよ。ありがとう」

「い、いえ……」

それだけ言つと五反田妹は弾の部屋から出て行つた。
微妙に気まずい沈黙が部屋に流れる。

「しかしアレだな。蘭ともかれこれ3年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれないかねえ」

「……………は？」

あまりに的外れな一夏の見解にオレと弾の疑問符が重なつた。

「いや、ほら。だつて未だに余所余所しいだろ？ 今もさつさと部屋から出て行つたし」

「……………ハア」

「アホだな」

「な、何だよ！ なんでアホ呼ばわりされたんだ俺！？」

「それがわからない時点でアホ決定だ」

「時々わざとやってるんじゃないかって思う時があるぜ」

「なんだよ！？ どういう意味だよ！？ 二人して勝手に納得して！」

「人に聞けば必ず答えが返つてくると思うな。こればかりは自分で気付かなきゃ意味ねーんだよ」

「こいつには一生かかっても無理だと思うぜ？ 気付かなけりや気付かないでいいさ。俺はこんな年の近い弟はいらん」

「まあ、同じ年の友達にそんな呼び方されたら色々と気まずいわな」

「…………… だからなんだよ—— ツ！？」

3

五反田弾の実家は『五反田食堂』という定食屋だ。一夏の話によると中学時代は弾の家に遊びに行ったついでにメシを御馳走なるといふ事が結構あったらしい。

まあ、それはそれとして昼飯を食わしてもらえるという事だったの
で有り難く呼ばれる事にする。

どうせ売れ残り？ バカ野郎。残飯漁りをして命を繋いでいた幼少
期を思えば、食わせてもらえるという事はなによりも有り難いこと
だ。

弾に連れられて裏口から食堂に入る。そこで弾は嫌そうに顔を顰め
た。

「うげ……」

「ん？」

「……………」

弾の視線の先には不機嫌そうな顔をして座っている五反田妹がいた。
しかも先ほどのようなラフな格好ではなく、ヒラヒラの服を着てこ
れでもかというくらいにめかしこんで。

なんというか……ここまであからさまにアピールしているのに気付
かない一夏ってスゲーな。

「なに？ 何か問題あるの？ 嫌ならお兄はそのタワシ頭と一緒に
に外に食べに行ったら？」

「聞いたか？ 今の優しさに溢れる言葉。泣けてきちまったぜ」

「随分と嫌われたもんだな」

「別に4人で食べばいいだろ。それより他のお客さんも居る事だし
さっさと座ろうぜ」

「そうよバカコンビ。さっさと座れ」

「一夏、弾。アンタらバカコンビ扱いされてるぞ？」

「バカは一夏さんじゃなくてアンタよ！ タワシ頭！」

「そんなバナナ！」

「……古っ……」

「古典的なギャグってのはスタンダードだよな」

とかアホな話をしながらオレは弾の正面、一夏は妹の正面の席にそれぞれ座る。

そこで一夏は妹の服装が変わっている事に気がついて声をかけた。

「蘭さあ」

「は、はひ？」

テンパリすぎだろ、オイ。声がひっくり返ってるぞ。

「着替えたの？ どつか出かける予定？」

「あつ、いえ。これは、ですねっ」

「あ、わかった。デートだ」

「違いますっ！」

五反田妹は一夏のまるで見当違いの推理をテーブルを叩き、身を乗り出しながら即刻否定した。なんで態々地雷を踏みに行くかな、コイツは。

「ごめん」

「い、いえ。と、とにかく違います……」

「違うっつか、寧ろ兄としては違ってほしくないんだがな。なにせお前が気合を入れてオシヤレするのは数カ月一回——」

シュバッ！

弾が口を滑らせかけた所を妹がアイアンクローを極めて口封じ。うん。凄い光景だ。

「五反田妹、一夏の目の前で猫被るのはいいとして、メッキがはが

れてるぞ？」

「ね、猫なんて被って無いですよ」

そう言いつつも弾の頭から即手を離してニッコリ笑って何事もなかったかの様に振る舞うあたり、この子も相当いい性格している。

「お前ら兄妹本当に仲いいな」

「「はあ!？」」

「まあ、確かに。言動に遠慮が無いのは相手に甘えてる証拠だつてよく言っしな」

「どこからどう見たらそうなるんだよ!？」

「そうですよ! 悪い冗談です!」

「食わねえなら下げるぞガキ共」

揉めてる所に現れた色黒で筋骨隆々とした爺さんは『五反田蔵』。この兄妹の祖父に当たり、この五反田食堂の料理人をやっている。一夏曰く拳骨の痛さは織斑先生に匹敵するらしい。

そんなもの落とされたら溜まったものではないので、揃って食い始めた。

「でよう一夏。鈴と、えーっと……誰だっけ? ファースト幼馴染? と再会したんだって?」

「ああ、筈な」

「ホウキ? 誰ですか?」

「ん? 俺のファースト幼馴染」

「ちなみにセカンドは鈴な」

「ああ、あの……」

凰鈴音。中国の代表候補生にして甲龍の操縦士。彼女の名前が出た途端、五反田妹の表情は硬くなり、あからさまに不機嫌になった。

一夏の好意を持っっている者同士牽制しあっていたのだろう。その上ファンのあの性格は五反田妹とは相性が悪そうだと、勝手な分析してみる。

「そうそう。その筈と一緒に部屋だったんだよ。ちなみに旭は鈴と同じ部屋でな——」

「「お、同じ部屋!?!」」

「ど、どうした? 落ち着け」

「一夏さん! 同室って事は寝食共にしたって事ですか!?!」

「旭、貴様! お前だけは! お前だけは違うと思っていたのに……」

……! 裏切ったなああああああつ!」

「落ち着けバカ! 同室っても相手はあのファンだぞ?!? どうにかなる訳ないだろ!」

「そうだぞ。それにそれは先月までの話で、今は俺と旭が同じ部屋になってる」

「寧ろなんで今までそうしなかったのかが謎なんだが……」

「それでも一カ月以上同せ——同居していたんですか?」

「ん。そうなるな」

五反田妹は何か打ちのめされたように机に伏した。

そして正気に戻った弾が何故か青ざめた表情で滝の様な汗を流している。

「お兄。あとで話し合いましょう」

「い、いや。俺この後こいつらと一緒に出かけるし」

「では夜に」

静かに、それでいて殺意のたつぷりと籠った声に弾は軽く涙目だ。っていうか、コレ別に弾悪くないんじゃないかね?

「弾、お前大変だな」

「わかつてくれるか旭……」

「私、決めました!」

「「何を?」」

「来年IS学園を受験します!」

「お前何言つて——!」

弾の言葉が最後まで続く事はなかった。何故なら厨房からお玉が飛んできて、弾の眉間のど真ん中をぶち抜いたからだ。他の客に迷惑をかけるなという事だろう。

「受験するって……なんで? 確か蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで行けて、しかも超ネームバリューのある所じゃなかったっけ?」

「大丈夫です。わたしの成績なら余裕です」

「IS学園は推薦ないぞ……」

弾がよろよろと立ち上がりながら妹に言う。

「私はお兄と違って筆記で余裕です」

「け、けどよぉあそこって確か適性検査があっただろ?」

「ん? ああ、あるな。IS起動試験つてのがあって、その成績が悪いと筆記が良くても弾かれるんだ」

「……………」

五反田妹は勝ち誇った顔でポケットの中から一枚の紙を取り出し、無言で弾に渡した。受け取った弾は折り畳んであった紙を開き中身を検め、驚きのあまり目を剥いた。

「げえっ!?! …… IS簡易適性試験…… 判定A……」

「問題は既に解決済みです」

なるほど。素質は十分ってわけだ。けど……眉を潜めずにはいられない。

「それって希望者が受けられる奴だっけ？ 確か政府がISの操縦士を募集する一環でやるっていう奴」

「はい。タダです」

日本政府も必死だな。そこまで戦力増強を図るのならISを独占しちまえば速かっただろうに。今さら言ってもしょうがない事ではあるし、大きな力を持つという事はリスクも半端ないから世界に配布した方が角が立たないという意味では良い判断何だが。

「い、一夏さんには是非先輩としてご指導を……」

「ああ、いいぜ。受かったらな」

「約束しましたよ！ 絶対、絶対ですからね！」

「あ、ああ」

「お、おい蘭！ 何勝手に学校変える事決めてんだよ！ なあ、母さん！」

「あら、いいじゃない別に。一夏くん、蘭の事よろしくね」

そう言ったのは五反田食堂（自称）看板娘『五反田蓮』。年齢不詳。本人曰く、28歳から年をとってないらしい。黙っていれば本当に28歳に見えるから人類って不思議。

「あ、はい」

「はい、じゃねえ！ ああ、もう！ 親父はいねえし！ いいのかじーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いはねえわな」

「いや、だつて——！」

「なんだ弾？ お前文句あるのか？」

「……………ないです」

「そうは言いますが、大将。弾の心配は尤もだと思いますよ。ISは兵器です。運用するに当たって多大なリスクを要します。思いつきや甘い考えでこちら側に来るべきじゃない。自分だけではなく、他の人を危険に巻き込む事になる」

「うーむ……………」

「大丈夫です！」

「自分は大丈夫だと思つてゐる奴に限つて大丈夫じゃないんだ」

「覚悟はできています！」

「ふん。覚悟、ねえ…………。例えばアンタがISの操縦者になつたとして、100人以上の人間の命が懸つた任務につくとする。その任務を邪魔したい奴がアンタの家族を人質にとつて、『裏切らなければ、アンタの家族を殺す』と言つてきたらどつちをとる？」

「……………ッ！？」

「旭、そんな——」

「ああ、そうだよ一夏。この問いに『答え』なんてない。どちらを選んでも残るのは後悔と自己嫌悪、そして深い罪悪感だけだ。けどな、オレ達は『任務をとる』と言わなきゃいけないんだ。それがオレ達の身を置いている世界で、力を持つ者としての責任なんだよ。……………クソみたいな話だけだな」

「……………」

「その覚悟が出来るなら、これ以上は止めはしない。アンタの決める事だ。けど、その覚悟が出来ないなら……………悪い事は言わない。こちら側には来るな」

「……………」

「悪かつたな。雰囲気が悪くした」

五反田家を出て、IS学園に帰る途中。旭と一夏はひたすら無言だった。

「……お前、蘭に随分きつくなかったか？」
「そうか？ …………… そうかもしれないな」

旭は罰が悪そうに溜息をつき、空を仰いだ。

「何であんな言い方したんだ？」

「最近のIS学園の周りが妙にキナ臭いからだよ。危険からはなるべく遠ざけた方がいい」

「キナ臭い？」

「ああ。この間の無人機の襲撃。あれ、何が目的だったと思う？」

「何がって……」

「これはあくまでオレの個人的な考えで確証はないが——あの無人機、狙いはアンタじゃないかって思うんだ」

「俺！？」

「ああ、早まるな。あくまで可能性の一つっただけだからな。白式の開発した企業は知ってるか？」

「倉持技研だろ？」

「ああ。表向きは、な」

「どういう事だ？」

「白式には妙な経緯があつてな、倉持技研が設計開発していたんだが開発技術者の手に余る代物だったらしくて、欠陥機として凍結されかけたところとある人物の手に渡り、完成までこぎつけた曰く付きの機体らしい」

一夏の脳裏に以前姉の千冬から言われた『白式は欠陥機だ』という言葉が浮かんだ。

「その機体がアンタの手に渡って、単一仕様能力は初代でありアンタの姉の織斑先生と同じ【零落白夜】。その上今回の戦闘で普通の倍の戦闘データを採れたときたもんだ。偶然にしては出来すぎだろ」
「……つまり、今回の襲撃は裏で誰かが糸を引いてるって事か？」
「確証はないが、な。注意しろ一夏。学園の外を出歩くときは絶対に1人になるな。常に信用できる奴を近くに置いておけ。もしくはオレに声をかけろ。いいな？」
「あ、ああ。わかった」

その答えに満足したように旭は柔らかな笑みを浮かべた。

4

IS学園の寮に戻りラフな格好に着替えてカレンダーを見た。
学年別個人トーナメント。一学年約120名によるIS戦闘のトーナメントを一週間かけて行う学校行事だ。目的としては一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年は訓練における成長評価、三年はより実践的な戦闘評価をみる為らしい。

ドイツ軍がこの時期に新型を開発したって事はこの行事を見越しての事だろう。

間違いなく新型を携えた代表候補生を捻じ込んでくる。

しかし——ドイツか……。懐かしいな。

先生に拾われてからしばらく訓練を受けたのもドイツ、自分よりも5歳年下の友人がいるのもドイツ、そして——オレが先生を殺したのもドイツ……。

……。
今は考えるのはやめよう。過去に足を取られたら動けなくなってしまう。

軽く首を左右に振り、部屋から出て自販機へと向かう。

ポケットの中でジャラジャラいつている小銭を手で弄びながら、何をかうか悩んでいた。

「あー、あさぴんだ」

シリアスモードを一瞬でぶち壊すこの間延びた声は――

「やつぽー、あさぴん。ちょうどよかったよー」

「……本音か」

「溜息なんてついてどうしたの？ そんなんじゃ幸せが逃げちゃうよ？」

「ほっとけ。つか、あさぴん言うな」

「じゃあ、ウッキー？」

「猿みたいだな。却下」

「アシベ？」

「ゴマちゃんはいないぞ」

「アッシー？」

「……………わかった。あさぴんでいい」

肩をすくめて両手をあげて降参のジェスチャーをする。

マイペースな天然をまともに相手をしていたら疲れるだけだ。

彼女の名前は布仏本音。一年一組所属のクラスメートだ。全体的にのほほんとしたイメージがあり、一夏は彼女の事を『のほほんさん』と呼んでいる。こう見えても更識家に代々使えてきた布仏家の人間で楯無さんの妹で日本の代表候補生『更識簪』の専属メイドらしい。人は見かけによらないものだ。

「つか、アンタ毎回言うけど、袖のダボダボを何とかしろって。だらしなく見えるだろうが」

そう言いながら本音の袖丈を折り曲げて安全ピンでとめる。放っておけばいいのに、お節介な奴だと自分でも呆れてくる。

「わーい。ありがとー、あさぴん」

「で、ちょうど良かったって何が？」

「あのねー、生徒会の仕事が溜まっちゃってねー。あさぴんに手伝ってほしいって会長がいつてたんだ」

最近オレは生徒会の雑務を手伝う事が多い。手伝うというより、押しつけられるに近いが、その辺は深く考えると凹んでくるので考えない様にしている。

「つい三日前に仕事手伝って全部終わらせたと思ったが？」

「えーっとねー実はねー、あさぴんの纏めたデータの入ったUSBを水の中に落としちゃった」

「犯人はアンタか!？」

言つと同時に頬を抓り、上下に動かす。何気に柔らかくて良く伸びる頬だ。

「あーっ、痛いよ」

「五月蠅い！ 毎度毎度仕事を増やして！ 反・省しろ！」

「うー、あさぴんがお姉ちゃんみたいだよ」

「せめてお兄ちゃんにしてくれねえ!？」

「なるほど。旭くんは『妹萌え』なんだね？」

「どわああああああああああああああっ!！」

いきなり背後から声を掛けられ思わず大声をあげてしまった。

「楯無さん！ 気配を殺して背後から回り込むのやめてくれて何

度言ったら――」

「かいちよー。あさぴん手伝ってくれるってー」

「そう？ それならさっそく手伝ってもらおうかしら？」

「オレはまだ了承してねえよな！？」

「うつうつ……」

いきなり楯無さんは床に膝と手をついて泣き始めた。（勿論噓泣き。小道具として目薬を用意している辺り芸が細かい）

「酷いよ旭くん。私にあんな事したくせに」

「あんな事って何だよ！？」

「やん、それを私の口から言わせる気？ 旭くんのH」

断言するが、オレは楯無さんにやましい事は何もしていない。しかし、そういったオレしか知らない事実は今この場でたいして重要ではない。

往来である事ない事言いふらされて妙な噂でもたったら色々やりにくくなる！

「わかった！ わかりましたよ！ 喜んでお手伝いをさせて頂きます！」

「さっすが、あさぴん。やさしい」

「うんうん。お姉さん惚れちゃいそうだよ。終わったらお姉さんが真心をこめてマッサージをしてあげよう」

抵抗は無駄だと悟り、ツツコミをする気力を根こそぎ奪われたオレはがつくりと力なく肩を落とした。結局オレが生徒会の仕事を終え解放されたのは明け方だった。

第13話 再会

1

AM6:00。浮舟旭はIS《ハヴォック・ゲイル暴風》を纏い、アリーナ上空を滑空していた。地上には彼のコーチを引き受けている更識楯無の姿もある。

「旭くん、スピードが落ちてるよ。機体の制御だけじゃなく、姿勢制御にも気をくばりなさい」

「はい！」

旭は楯無の指摘を受け、再び意識を集中させる。全体の機体制御と姿勢制御、反動制御に気を配りつつ、コースとターゲットの位置を常に認識していなくてはならない。マニュアル操作における細かい動きはアサルトアームズで慣れていたので苦にはならなかったが、三次元的な動きに体がついて言っていない。無理もないだろう。

彼はアサルトアームズの使い手だったのだ。二次元的な戦闘を生業にしていた旭にいきなり三次元的な動きをしろというのは、立ち上がる事の出来たばかりの赤ん坊に「走れ」と言っている事に等しい。飛行の際に跳ねるアサルトアームズを使用していた頃の癖も抜けていない。楯無にも以前「旭くんの戦い方はアサルトアームズの戦い方だね」と指摘を受けたばかりだった。

「そのままシューターフロアをしたまま射撃。ターゲットは1・4・8・10」

言われるがままは旭は機体を制御する。ハヴオック・ゲイルは円軌道を描き、旭はツインバレットを展開してグリップを握る。そのまま照準を合わせて交互に2発ずつターゲットに向かって引き金を引く。

放たれた光はターゲット1・8・10の中心を撃ち抜き、4の的を掠めた。

——チツ、1発外した！

旭は心の中で舌打ちをする。その瞬間に操作が雑になってしまい、機体制御が乱れた。慌てて機体の制御を掌握し直し、飛行を続ける。

——何回同じミスしてんだよオレは……！

彼はお世辞にもISの操縦士としての才能があるとはいえない。操縦士としての才能だけで言えば、一夏の足元のも及ばない。幼いころから磨き上げてきた近接格闘も今はあまり意味を成さない。彼が一夏達より優れているとしたら狙撃の腕と経験値だけだ。

旭は知っている。操縦士としての自分が凡才である事を。そして一夏や楯無が天才である事も。

だからこそ、旭は彼らの三倍、四倍の努力を自らに課す。何度も何度も同じ事を注意されながらもひたすら反復する。経験を蓄積させる。凡才が天才に勝つためには血反吐を吐かなければならないという事も理解しているからだ。

全てを破壊する事が出来る絶対たる力を手にする為に。

2

最近妙な噂が学園内に流れている。なんでも今度の『学園別トーナメントで一夏に勝った奴があいつと付き合う事が出来る』という訳

のわからないものだ。

相変わらず平和な光景だ。緩い空気と言ってもいいかもしれない。キナ臭い空気など誰も感じていない。危機感が足りていない。正直そう思うが、その光景に安心して居る自分も居る。

彼女たちが認識しているIS戦闘はスポーツだ。兵器同士の殺し合ではない。

だからこそ、暴力と硝煙と血の匂いと悪意はこの場には似合わない。この光に世界には似合わない。

矛盾していると思う。

沢山の人間を傷つけてきた癖に――。

散々人を殺してきた癖に――。

先生を殺した癖に――。

今も尚、奴らを殺す為にこの学園にいる癖に――。

この平和な世界で救われないのかオレは？

あり得ない。そんな事は許されない。許さない。オレの行く道に退路など必要ない。

五反田蘭に向かって覚悟を問うた癖に――オレ自身覚悟が決まっていけないではないか。そんな考えすら浮かんでくる。

本当にどうしようもない、愚か者だ。

目を閉じ、一度深呼吸してから思考をゆっくりと切り替えた。

今日、か……。

ドイツの代表候補生とフランスの代表候補生が転入してくる。組織からの情報には確かにそうあった。『真実を売る』というのが奴らの組織の信条だという。故にガセネタという事はないだろう。操縦士のデータは重要機密扱いになっているから調べる事は出来なかったが、来ることが分かっているだけでも大きい。

ドイツ軍の新型IS。こちらの目的は大体予想は出来る。

一夏の【白式】を始め、今年の1年には専用機持ちが多い。

イギリスの代表候補生セシリア・オルコットの【蒼い雫】ブルー・ティアーズ。中国の

代表候補生凰鈴音の【甲龍】シェンロン。倉持技研が【白式】の解析に力を入

れている為、今だ未完成ではあるが日本の代表候補生更識簪の【打鉄式】。そして表向きはテストパイロットになっているオレの【ハウソック・ゲイル暴風】。

第3世代の開発戦争となっている今、他国に自国の技術を見せつける事は重要な事だ。

しかし、デユノア社の目的は読めない。

未だに第2世代型【リファール・リヴデイヴ疾風の再誕】を主力商品として扱っており、第3世代型のIS開発は大幅に遅れている企業が態々この時期に捻じ込む利点が見当たらないのだ。

……同業者という事も考えられるか？ そうだとしたら一夏に近づけさせないよう警戒しなければならない。まあ、なんにしても実際に見てからだな。

織斑先生が教室内に入って来たのも有り思考を終了して、席を立つ。そのまま号令に従い、一礼して席に着いた。

「諸君、おはよう」

『『『おはようございます』』』

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業なので各人気を引き締めてかかるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で授業を受けてもらう。なければまあ、下着でかまわんだろう。では山田先生。ホームルームを」

「はっ、はい」

連絡事項を終え、織斑先生は山田先生に後を引き継いで隅に置いてあるパイプ椅子に腰かけた。あれ以来織斑先生は何も言ってこない時々オレを敵意たつぷりに睨んでくるだけだ。信用ねーのなオレ。いや、まあ自分でも胡散臭いとは思っけどさ。

「ええつとですね、今日は転校生を紹介します。しかも2人です！」

え
⋮
?

あ、拙い。両手で耳を塞ぎ、怒号に備える。

[illegible]

大音量。クラスのほとんどの生徒がいきなりやってくるという転校生の情報に大声をあげた。おお、あまりの大音量に机がビリビリ震えてら。クラスメートのオーバリアクションにやや呆れつつ耳から手を離し、腕を机の上に置いた。

「（っていうかなんでウチのクラス？ 普通は分散させるんじゃないか？）」

「（なにか目的でもあるんじゃないか？）」

「（目的って？）」

「さあ。ただのこじつけだからわかんね」

「あ、そう……」

後ろの席の一夏とそんな話をしていたら教室の扉が開き、転校生とやらが中に入ってきた。

そのうちの1人が黒板を背にしてこちらに真っ直ぐ向き、にこやかに挨拶する。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事が多いかと思いますが、よろしくおねがいします」

一夏やクラスの子達は先に入って来た金髪を見てどよめいた。転校生の1人は「男」だった。一般的に織斑一夏という例外を除いてISを起動できるのは女性だけだ。しかし目の前の金髪はその常

識を覆してしまっているからだ。

クラス中が目の前に現れた中性的な容姿を持つ美形に沸く。名前からしてデュノア社縁の人物だろう。驚いた事は驚いたが、今はどうでもいい。

それよりオレはもう一方の転入生を見て血の気が引いた。

長く伸ばした銀髪。小柄な体。左目に当てている黒い眼帯。そして氷の様な瞳。

記憶にあった姿より随分と成長しているが、見間違えようはずがない。

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

少女は織斑先生に向かい敬礼し、こちらに向き直る。オレは慌てて教科書で死角を作り、机に伏せて彼女に顔が見えないように隠れた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

『『『………』』』』

気まずい沈黙が先ほどの騒ぎから打って変って教室内に気まずい沈黙が流れるがそんな事はどうでもいい。

うそーん。やつぱり。まさかドイツ軍が黒ウサギ部隊の——しかも隊長を投入してくるとは思わなかった……。それだけ今回開発したISには力を入れているって事か？

「あ、あの……以上ですか？」

「以上だ」

山田先生が恐る恐る尋ねるが、ラウラの返事はにべもない。
コラコラ。弱い者いじめをするんじゃない。山田先生涙目になって
るじゃないか。

「！ 貴様が——！」
「へ？」

ラウラはオレの後ろの席の一夏と目が合い、早足でこちらに向かつてくる。

相当頭に血が上っているようで、前の席のオレには気付く事なく一夏に向かつて刺すような視線を向ける。オレはこの視線に含まれるモノが何か知っている。

これは——殺意だ。

ラウラが手を振り上げ、一夏に向かって振りおろそうとした。すぐさま立ち上がってラウラが掌を振り下ろす前に腕を掴んだ。

「——ッ！ 何をする！」

「そりゃオレの台詞。アンタ何しようとしてた？」

「離せ！」

バツと手を振り払い、ラウラはこちらを向く。顔を合わせた瞬間驚いたように目を見開いた。

「な——ッ！ き、貴様が何故ここに——」

「Seien Sie bittte still」——『静かに』

「——ッ！」

「Ich werde sp?ter den Grunder
kl?ren. Geben Sie bittte vor,e
s nicht zu wissen」——『理由は後で説明する。』

知らない振りをしてくれ』

腕を掴んだまま耳元でそう囁く。一夏に聞かれても問題ない様にドイツ語で。

「………………。私は認めない。貴様があの人の弟であるなど認めるものか…………！」

一夏に向かって殺意マックスの視線を送りながらも教壇に戻っていた。

何やら向こうの席のオルコットが何か言いたげにこちらを睨んでいる。オレなにか拙い事したっけ？

「な、なんだったんだ？」

「さあ。なんだったんだろうな？ アンタが何かしたんじゃないの？」

「何もしてねえよ！」

「よく思い出してみろ。女を振ったとか、女を泣かしたとか、女を捨てたとか——」

「なんで全部女絡みなんだよ！？」

スパパアアアン！

「静かにしろ馬鹿ども。ではHRを終わる。各人は直ぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は2組と合同で模擬戦闘を行う。以上解散！」

織斑先生が次の行動を促し、HR終了。とりあえず男子更衣室として使用されているアリーナに向かう事にした。

「織斑、浮舟。デュノアの面倒を見てやれ」

「あー、はい」

「オス」

「君が有名な織斑くん？ はじめまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

「あ、うん」

「とりあえず男子は空いてるアリーナで着替え。これから実習の度にこれだから早めに慣れてくれ」

「う、うん」

シャルル・デュノアの手を引きながら一夏は説明をする。面倒見のいい奴だ。

対してデュノアはさっきから落ち着かない様子だ。

「なんだ？ トイレか？」

「トイ……ッ！ 違うよ！」

「それはなにより」

「さて、と……。漫才はそこまでだ。来るぞ」

「そうだな……！」

オレが警戒を促すと、一夏の顔色も変わる。敵の気配がすぐ近くに感じられる。

身構えて襲撃に備えた。……まあ、ぶっちゃけた話一夏を人身御供に差し出せばオレには被害が及ぶ事はないのだが護衛という立場上それをする事は出来ない。

その上アレだ。シャルル・デュノアと一夏を2人にする訳にはいかない。

ぶっちゃけるとオレはシャルル・デュノアを全く信用していない。名字からしてシャルル・デュノアはデュノア社に縁がある人物だと考えて間違いない。

だが、経歴が怪しすぎる。

『世界で2人目のISを起動できる男』

織斑一夏がISを起動したときは世界各地のメディアに取りあげられた。

しかし、シャルル・デュノアはそうではない。『世界で2人目のISを起動できる男』としての情報が一切出回っていない。デュノア社が機密事項として徹底した情報統制をとっていたという事も考えられるが、世界的なニュースである情報が出回らず、その情報を隠蔽していた気配すらない。それなのにプロの情報組織が探る事が出来ないという状況は明らかに不自然だ。まるで『何も無いところ』に『その存在を捻じ込んだ』ように。階段を降りながらも尚思考を展開させる。

『ああつ！ 転校生発見！』

『しかも織斑くんと一緒！ ついでに浮舟くんも！』

『いたつ！ こつちよ！』

『者共出会えいっ！』

オレ『ついで』かいっ！

『黒髪もいいけど、金髪もいいわね』

『しかも瞳はエメラルド！』

『きやあああ！ 見て見て！ あの2人手を繋いでる！』

『今月の新刊は織斑くん×転校生くんで決まりね！』

『お母さん日本に生んでくれてありがとう！ 母の日は河原の花以外の物をあげるね！』

「な、なに？ みんな何を騒いでるの？」

女性陣の勢いに押され、シャルル・デュノアは困惑している。

まあ、いきなりあんなのが詰め寄ってきたら普通に怖いだろう。オレも怖い。

「男子が俺達だけだからだろ」

「???」

「いや、普通に珍しいだろ？ ISを操縦できる男って」

「いや、珍しいどころじゃないだろ。普通は『あり得ない』事なんだよ」

「あつ！ う、うん。そうだね」

「さーて、どうする？ このままじゃ千冬姉の出席簿アタックの餌食だぞ？」

「えーっと、話せばわかってくれるんじゃないかな？」

「誠実さは美德だが、ソレが通用するのは時と場合によりけりだ。周りが見えていない集団に何を言った所で無駄無駄」

「強行突破しかないか？」

「安心しろ。そんなことしなくても突破の為の策は準備してある」

「どんな？」

「一夏をあの集団に人身御供に差し出して――」

「却下！」

「冗談だ。一夏、デュノア少し耳を塞いで目を閉じてな」

「ああ」「う、うん」

ポケットの中から発煙筒の筒を取り出し導火線に着火。向かってくる集団の方向へ転がしていく。 3――2――1――ファイア！

『『『キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』』』

激しい爆音と共に断続的に発光。予期せぬ攻撃を受けて暴走する集団は恐慌状態に陥った。

「さー、今の内に行くぞ」
「何、アレ……？」
「お手製スタングレネード。マグネシウムと爆竹と発煙筒で作った」
「旭、お前って……」
「君……、酷いね」
「ああ。コイツは酷い奴だよ……」
「こっちの都合も考えずに暴走して、授業に遅刻させて殴られる原因を作る事は酷くないのか？」
「……」

3

「しかしまあ、助かったよ」
「何が？」
「いや、学園に男が二人しかいないってのは辛いからな。何かと気を使うし。人数が増えるってのは心強いもんだ」
「そうなの？」
「いつの時代でも少数派マイノリティってのは辛いモンなんだよな」
「そうなんだ」
「ま、なんにしてもこれからよろしくな。俺、織斑一夏。一夏って呼んでくれ。こっちのツンツン頭の吊り目は浮舟旭。眼つきが悪いけど、その通りの外道だから気をつける」
「失礼な。オレは外道じゃない。クソ外道なんだ」
「あ、そっち？」
「あはは。よろしく一夏、旭。僕の事もシャルルでいいよ」
「おう」「よろしく」

第二アリーナの扉を開き、中に入る。

「よし到着！ うわ、結構時間やばいなー」

「さつさと着替えれば問題ないだろ」

「これ着にくいんだよ。引つかかっちゃって」

「ひ、引っ掛かって!？」

「ん？ どうした？」

「な、なんでもにやいよ！」

「噛んでる噛んでる」

シャルルは顔を真っ赤にして慌てている。どうやらコイツは下ネタや下世話な話題に耐性が無いようだ。まあ、オレもオレで人にあまり体を見られたくないから、向こうで着替えるのだけだ。

「まあ、本当に急げよ。あの人はシャレにならん。というかシャレにしてくれん」

「う、うん。着替えるよ。着替えるけど、あっち向いてて」

「そりゃまあ、着替えをジロジロ見る趣味はないけどよ」

ゴソゴソと着替える音が聞こえる。オレも授業に遅れないようにさつさと着替えた。

ISスーツ。IS展開時に体に着ている特殊なフィットスーツのこと。スーツなしでもISを動かすこと自体は可能だが、反応速度が鈍ってしまう。ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行う。また、耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができる。ただし衝撃までは吸収しきれない。以上、山田先生の発言より抜粋。

やった事はないが専用機持ちの奴のみ、IS展開時にスーツも同時に展開する事が出来るらしい。そっちのほうが面倒臭くなくていいな、と思うがところがどっこい。おいしい話には裏がある。ISスーツを含むダイレクトなフォームチェンジは余計なエネルギーを消耗するため、緊急時以外は普通にISスーツを着てISを展開する

のがベターとされる。

余談だが、ハヴオの拡張領域の中にはISスーツだけではなく、アサルトアームズを後付武装扱いで収納されていたりする。閑話休題。

「そのスーツ着やすそうだな」

「デュノア社製のオリジナルだよ」

「デュノア社？ お前の名字もデュノアだよな？」

「父がそこで社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の会社だと思う」

「へー。社長の息子なのか。道理でいい所の育ちっていうか、仕草とかに気品があると思った」

「いい所、ねえ……」

「親睦を深めるのもいいが、そろそろ時間が押してる。さっさと行くぞ」

「あ、うん」

「あ、待て旭！ 俺まだ下を着てない——」

「知らん。引っかかって着にくいんだったら切ってしまうえ」

「なんて事言うんだよ！」

結局一夏が着替え終わるのを待っていたら時間ギリギリになって織斑先生に怒られてしまいましたとき。

第14話 ラウラ・ボーデヴィツヒ

1

7年前。ドイツ某所の研究施設にて――。

今年で8歳になる少女ラウラ・ボーデヴィツヒは研究者の後について訓練室に行くところだった。彼女は普通の人間ではない。ドイツ軍が遺伝子強化試験体として生み出試験管ベイビーであり、物心ついた頃からありとあらゆる訓練を受けており、全てにおいてトップクラスの成績を収めている。

その彼女に今日課された訓練内容は『ある人物』との実戦形式の戦闘訓練だった。

白い廊下を曲がりドアのスイッチを入れる。横開きのドアがスライドし、訓練の為に作られた広い空間がラウラの視界一杯に広がった。座っている人物は12、3歳くらいのジーンズによれよれのTシャツを着たボサボサ頭のしまりのない顔をしている――アホ面ともいう――どこにでもいるような少年だ。これにはラウラも意外に思った。彼女は8歳で既にその辺にいる軍人など相手にならない程の戦闘能力を誇っている。今日の訓練もどんな歴戦の猛者がくるかと身構えていた部分があったのだが、蓋を開けてみればあの間抜け面だ。困惑しない方がおかしい。

ラウラは少年はボーッと口を空けて座りながら天井を見上げている少年を睨みつけた。

――なんだあのアホ面は……ッ!? やる気があるのかッ!

幼いながらも『戦う為に作られた』という一種のプロ意識の様なも

のを持つラウラは戦士としての自覚を欠片も持たないような少年の態度が気に食わず、思わず怒鳴りつけそうになったが彼女はそれを飲み込んだ。感情の制御するのも兵士として必要な技能の一つだ。そう自分に言い聞かせながら努めて冷静に渡された訓練用のラバーナイフを構えた。

少年はそれを見て気だるげに立ち上がる。心底『面倒だ』と言わんばかりにボサボサの頭を掻き、ゆっくりとした動きで体を伸ばしながら、欠伸をした。

そして右手に持ったラバーナイフをクルクルと弄び、ポケットに左手を突っ込みながらラウラと相対した。

開始のブザー音が室内に響いても少年は構えようとはしない。

――嘗められた。――見下された。――侮辱された。

少年のその態度に人一倍兵士としてのプライドが高いラウラの頭が沸騰する。

ナイフを構え、姿勢を低くする。首筋に狙いを定め、全身のバネを使って一気に踏み込んだ。自分の間合いまであと1歩。そう思った瞬間だった。

少年は右手で弄んでいたナイフを上空に投げた。

予想外の行動にラウラの視線が、注意が、意識が投げられたナイフに向く。

次の瞬間彼女は仰向けに倒れて天井を見上げていた。ナイフは刃の部分で抑えつけられ、首筋には少年が先ほど上空に投げてキャッチしたナイフが突きつけられていた。何が起こったのかわからなかった。

「勝負あり、だな」

先ほどの間抜けな雰囲気とは打って変わった鋭い雰囲気にラウラは思わず息を飲む。

少年はナイフを退けてラウラに手を差し伸べた。

彼女はそれを無視して1人で立ち上がった。彼の手を取るのは負けた相手に情けをかけられたように思えて出来なかった。少年は苦笑して、ラウラに向き直った。

「スピードは完全にアンタの方が上。ナイフ戦での技量も多分ちょっとアンタの方が上。けど、動きも、ナイフの起動も、狙いも全部バカ正直すぎる。だから動きを読まれてちよつとしたフェイントに引っ掛かる。さっきも首筋を狙っているのが視線で丸わかり」

少年のダメ出しにラウラは悔しそうに唇を噛み締める。

「あと簡単な挑発に乗るな。生きるか、死ぬかの状況では冷静さを失った奴から死ぬぞ」

「……………貴様は何者だ？」

ストレンジャー

「《異邦人》。本名ないからそう呼ばれてる」

信じられなかった。戦う為に作られた存在。アドバンスドである自分が普通の人間に負けるといふ事が。あとから聞いた話のよると、この戦闘訓練はラウラに『攻撃力や身体能力に依存した戦い方だけでは勝てない相手がいる』という事身を持って理解させるといふ上層部の思惑が、《異邦人》ストレンジャーには『殺す事に特化した強さしか持たない彼が相手を殺さずに制圧する』事が出来るかどうかを試すという師である《身元不明》ジョン・ドウの目論見があつたらしい。

ストレンジャー

ジョン・ドウ

これより2年。《異邦人》は《身元不明》と共に定期的にドイツを訪れ、ラウラ・ボーデヴィツヒと戦闘訓練を行う事になる。

2

「遅い！」

「「すいませんっした軍曹殿！」」

IS学園の鬼教師と名高い織斑千冬の怒声に旭と一夏は思わず背筋を伸ばして敬礼した。

スパアン！

蒼穹の青空の下にバカ二人が殴られる音が響く。後ろでその様子を見ていたシャルルは困ったように笑っていた。そんな彼の反応を気にも留めず、殴られたバカ二人は仲良くしゃがみこみ頭を押さえて痛がっている。

「織斑先生と呼べ」

「一夏。旭。大丈夫？」

「なんとか……」

「デユノア、そのバカ二人は自業自得だ。くだらない事をやっていないでさっさと並べ」

「……はい」

そう言われて旭、一夏、シャルルはそれぞれ自分の配置についた。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

「一夏がスーツ着るのに手間取ってな」

「スーツを着るのに何故そんなに時間がかかるのかしら？」

「色々大変なんだよ、男の子は」

適当な事を言っただけでセシリアを煙に巻こうとした。が、旭のその反応がセシリアには自分が子供扱いされているように感じられ、面白くなさそうにむくれた。

何か言っただけでやりたかったが、旭の表情が真剣に変わったのを見たのでやめた。

旭は普段おちやらけているだけのバカでしかないが、ISの訓練では人一倍熱心に打ち込んでいる事をセシリアは知っている。朝、誰も起きていないような時間にアリーナで特訓をしている事も、夜遅くまで射撃や近接格闘の訓練をしている事も彼女の耳に入っていた。

——わたくしに言うてくだされば訓練くらい付き合つて差し上げますのに……。

旭が自分に頼つてくれない事を不満に思う一方で旭が努力を積み重ねる事をセシリアは嬉しく思っていた。自分は両親を亡くしてから、努力に努力を重ねる事で周囲の大人達から両親の遺産を守つて来た。そんな経緯があつてかセシリアは自分と同じく努力を重ねる人間である浮舟旭という人間に好感を持っていた。彼が過去に自分を助けてくれた恩人に似ているというのもあるだろうが、努力を重ねる人間は同じく努力を重ねる人間を好ましく思うものだ。

自分が好意を抱いている理想の男である織斑一夏以外の男性がこなにも気になるのはきつとそうに違いない。その考え方はまるで自分を無理やり納得させているようにも見えるが、幸か不幸か彼女がその事に気づく事はなかった。

3

「本日から実習を開始する」

「……はい!」

今日の訓練は1組と2組合同で行われる為、参加人数はザツといつもの二倍。これだけ揃うと壮観だな。………とここでさつきからオレの方を睨んでるオルコット嬢ちゃんがスゲー怖いんだが、なんかしたっけか? 一夏は一夏で横でファンと揉めてるし……。

まともなのはシャルルだけか? まあ、シャルルもシャルルで色々

と疑わしい部分が多いから厳密に言えば『まとも』とは言い難いが……。

「まずは戦闘を実演して貰う。――鳳^{ファン}！――オルコット！」

「は、はい！」

「専用機持ちならすぐに始められる。前に出ろ」

「ハア……。こういふのは見世物の様で気が進みませんわね……」

「めんどいなあ……。なんで私が……」

やる気なさげに前に進み出るオルコットとファン。

オイオイ、やる気出さねえと鬼教官の出席簿アタックが炸裂するんじゃない？

「お前ら少しはやる気をだせ」

歩み寄って小声で何かを耳打ちし、2人の目の色が変わった。

「やはりここはイギリス代表候補生。わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せるいい機会だよー。専用機持ちの！」

「今先生何言ったの？」

「俺が知るかよ」

「『あいつにいい所を見せられるぞ』ってな」

「へー。旭、お前って耳いいんだなー」

「……。今の聞いてその言葉しか出てこねーのか……。オルコットとファンも報われねーなあ」

「????」

意味がわからない、と言いたげに一夏は首を捻った。

「それでお相手は？　鈴さんとの勝負でも構いませんか？」
「ふふ〜ん、こっちのセリフ」

好意を抱く人物の前で格好つけたいという気持ちは誰にでもある。
あの子たちはここでいい所を見せて一夏の気を引いて他の子よりリードしたいのだろう。……リードしようとしてダッシュすぎて遥か彼方に暴走しそうな勢いだ。
恋愛は深い。というのはいくよく聞くが、この学園に来てつくづく思う。深いのは恋愛じゃなくアンタらの業だよ、と。

「慌てるなバカども。相手は——」

キイイイン！

これは——ISの飛行するときの音？　音のする方向を見上げるとそこには——

「ああああ——ッ！！　どいてくださあ〜いつ！！」

「お、おい旭。あのIS、こっちに突っ込んできてないか？」

「は、はは……。ま、まさか……。いくらなんでも、そんな事ある訳

……」

「あああああ〜〜〜っ！！」

「「うわあああああああ！！」」

気のせいだと思いたいオレと一夏のささやかな願いを嘲笑うかのようにISは真っ直ぐ少しのズレもなくこっちに突っ込んでくる。オレと一夏は泡を食って逃げ出した。

「「うわあああああああ！！」」

——ズドオオオオオオン！！

突っ込んで来たISは地面と衝突して地響きで体を揺さられ、衝撃で吹っ飛ばされた。土煙にむせながらも起き上がり落下地点に目を向けると小さなクレーターが出来あがっていた。

あまりの驚きと目の前に広がる惨状に一同言葉も出ない。

あ、危ねえ……。生身で衝突していたらミンチ決定だった……。

「えーっと、大丈夫ですかー？」

恐る恐るクレーターに向かって声をかけてみる。絶対防御があるから死にはしないだろうが、ISの扱いに慣れていなければオルコツト戦でのオレのように負傷しているだろう。

「あ、はいはい。だ、大丈夫です。ごめんなさい」

クレーターの中から這い出てきたのは——第二世代型IS【疾風のラファール・リバヴァイフ再誕】に身を包んだIS学園教諭・我らが一年一組担任の山田麻耶先生だった。

「……………山田先生、アナタ何やってんスカ…………？」

「えーっと、ちよっと……。その……………スラスターの操作を……………失敗しちゃいまして」

大丈夫なのかこの人は…………？ 今この場にいる全員が同じ疑問を抱いたと確信した。

オレはこの学園の入学試験の際にこの人にボロ負けしている。あの時は純粹に強者としての風格の様なものがあつたが、今はそんなのが欠片も感じられない。

そして縋る様な瞳で織斑先生の方を向く。織斑先生は短く嘆息した

後ポケットから——えーっと、あれはゲーセンなんかで使うコインか？ 何で持ってた？ ——を取り出した。

「山田先生」

「は、はい！」

飼い主に呼ばれて振り返る犬の様な仕草で織斑先生の方を振り向いた。それを見計らって織斑先生は取り出したコインを上空に投げる。

——ドン！ ドンドン！

3発分の銃声がアリーナに響き、コインが撃ち抜かれた。20メートル以上あるこの距離で、不安定な体勢のまま射撃したにも関わらず、あんな小さな的に全弾命中……！？ しかも狙撃銃じゃなくてアサルトライフルでやりやがった……！
いくらISで照準の補正がかかっているからって、こんな芸当が出来るのはこの学校でもほんの一握りしかないだろう。少なくともオレは狙撃用ライフルを用いずにあんな離れ業は出来ない。さつきとは違う意味で言葉が出てこなかった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃など造作もない」

「む、昔のことですよ。それに結局は代表候補生止まりでしたし」

あのレベルの射撃が出来て、代表候補生止まりかよ……。愕然と自分との力量の差に打ちひしがれている所にまだ上がいる、という事を突き付けられる。まったく、嫌になるねマジで。

「さて小娘共、いつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？ あ、あの2対1で？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

織斑先生の言葉がオルコットとファンのプライドに触ったのか、ムツと眉を吊り上げた。

「では、はじめ！」

織斑先生の合図と同時にオルコット、ファンが空へと上がる。山田先生も少し遅れて飛翔する。

「手加減しませんわ！」

「覚悟してね先生！」

「い、行きます！」

動いたのは同時。オルコットはバレルロールしながら後退。ファンは自分の間合いで勝負する為に突っ込んだ。オルコットがビットを出し変則的に攻撃を加えていく。しかし山田先生は機体を巧みに操り回避。続いてファンが衝撃砲を撃つがこれも難なく防がれる。

オルコットとファンは一方的に攻撃するが山田先生のISには一撃足りとも当たらなかった。

「デユノア、山田先生が使っているISの解説をして見せろ」

「あつ、はい。山田先生のISはデユノア社製『ラファール・リヴアイブ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないものです。現在配備されている量産ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、装備によって格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能です」

山田先生の矢継ぎ早に放った無数の銃弾をオルコットは機体を回転

させて難なく避ける。しかし――

あれは当てる射撃じゃない。態と避けやすいように撃って相手を自分都合のいい位置に誘導する為の射撃だ。

そしてオルコットは山田先生に衝撃砲を当てようとして深追いし過ぎた【甲龍】と衝突。

その間に山田先生は2人の頭上を翔け、ランチャーを展開。一纏めになっていたオルコットとファンに向かって撃った。

「「キヤアアアアアア！！」」

悲鳴と共に巻き起こる爆炎。そして墜落。2人の機体は地面に叩きつけられアリーナに2つ目のクレーターが出来た。

「ま、まさかこのわたくしが……」

「あ、あんたねえ……、何面白い様に回避先読まれてんのよ……！」

「鈴さんこそ、無駄にバカス力撃つからいけないのですわ……！」

「ぎぎぎぎぎぎ……っ！」

「ぐぐぐぐぐぐ……っ！」

「これで少しは諸君にも教員の实力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

この戦闘の目的はプライドの高いオルコットとファンの鼻柱をへし折る事と、山田先生の实力を示す為か。学び方を学ぶには一度格上の奴にボコボコにやられるのが一番だから手っ取り早いし。

「次に出席番号順でグループになって実習を始める。リーダーは専用機持ちがやる事。浮舟はボーデヴィツヒの補佐に入れ。では別れる」

「「「「はいっ！」「」「」」」

「んじゃ、改めてはじめましてラウラ・ボーデヴィツヒ。オレの名は『浮舟旭』。よろしくな」

「……………」

実習もラウラと旭の班は問題を起こす事なく終了し昼休み。人目に付かない屋上へと続く渡り廊下に旭とラウラはいた。

軽い調子で片手を挙げて挨拶する旭とは対照的にラウラは不機嫌だった。

「何故貴様がここにいる？」

「仕事。このISのテストパイロット————ってのは表向きの理由で、オレの仕事は『織斑一夏の護衛』。」

「何故ISを起動させられる？」

「よくわからんが、コイツに搭載されているコアがバグを取り込んで『男でも起動できるIS』になったから。オレ自身にISを起動する事は出来ねーよ。さっきの実習のときに試しにやってみたけど、まったく反応しなかったしな。こっちからも質問。何故織斑一夏を敵視する？」

「答える義務はない」

「そうはいかない。オレはアンタにされた質問に偽らず答えた。オレの質問にも答えてもらいたい」

「……………」あの男は……教官の顔に泥を塗ったからだ……！」

「教官？ 織斑先生か？」

「そうだ。あの人は強く、気高い。出会って一目見たときから、その強さに震えた。こうなりたい。そう願った。あの人の存在こそが私の存在理由であり、生きる意味だ。そんな教官の輝かしい実績にあの男は傷をつけた！ あの男さえいなければ教官はモンド・グロツソの大会二連覇という偉業を成し得たというのに！ それをあの

男は——！」

ヒートアップするラウラだったが旭の興味はそこにはなかった。

護衛を引き受けるときに一夏の経歴は粗方調べた事がある。不透明な点が多いのは気になったが、その時の事件の事はデータベースに記載されていた。織斑一夏は第二回モンド・グロツソの決勝戦当日にとある組織に誘拐され、決勝を棄権した織斑千冬に救出され、その時に一夏の捕捉に協力したのがドイツ軍に義理を果たす為に一年間ドイツで教官を務めていた、という経緯がある。

とある組織——亡国機業……。

旭は薄く嘲笑う。篠ノ之束の言うとおり、織斑一夏の周りには亡国機業の影がある。

自分の目的。命に替えても叶えたい願い。《身元不明》^{ジョン・ドウ}の復讐。

それを実現させる為には『織斑一夏』の存在は餌として護り抜く。

ラウラの存在理由が『織斑千冬』であるように旭の存在理由であり生きる目的そのものである『復讐』を果たす為に《異邦人》^{ストレンジヤー}には『織斑一夏』が必要だ。

「まあ、アンタのその言葉の裏にある真意はあえて聞かねーが——」
「——ッ!？」

旭は気付いている。ラウラが一夏を敵視する理由が他にある事に。考えてみればおかしな話だ。モンド・グロツソの日織斑一夏が誘拐されなければ、ラウラはそもそも織斑千冬に逢う事すらなかった。冷静に見えて感情的な彼女の事だから、頭に血が昇るあまりその矛盾に気づいていない可能性も考えられるが、例えそうだとしても旭には関係ない。

「——オレはアンタの事を妹のように思っている。だから警告しておく。オレは織斑一夏の護衛だ。仕事の邪魔をするなら——アンタ

を排除する。オレとの殺し合いがお望みなら止めないが、出来ればオレはアンタを殺したくない」

「……………」

「アンタがオレの標的ターゲットにならない事を願っているよ」

チラリと向こう側を窺う。誰かが近づいてくる気配がした。ラウラを残して旭はその場を後にした。

「貴様まで……！ 貴様まで織斑一夏の味方をするのか……ッ！」

裏切られた。そう感じたラウラの悲痛な呟きは旭に届く事はなかった。

5

「あら？ 浮舟さん、今からお昼ですか？」

「ああ」

旭はラウラと別れ教室に戻ろうとしたところに、セシリアと鉢合わせた。先ほど近づいてきていた気配は彼女のものだろう。

「？ 何かあったのですか？」

「何かって何が？」

「えっと、その……酷く辛そうな顔をしていましたので……。わたくしの勘違いなら良いのですが……」

「……なあ、オルコット」

「は、はい」

「人間ってままならないモンだな」

「はい？」

「なんでもねー。忘れてくれ。じゃあな」

「ま、待ってください！」

セシリアは慌てて立ち去ろうとする旭の腕をとった。

「あ、あのよろしければ一緒にどうですか？　今日はわたくしサン
ドイッチを用意してきましたの！」

自信満々に手に持っていたバスケットを掲げるセシリアの姿を微笑
ましく思いながらも、旭は静かに首を横に振った。

「折角誘ってもらって悪いけどやめとく。やる事あるし、それに邪
魔者は少ない方がいいだろ？」

「邪魔ものだなんて、そんなこと——」
「じゃあな」

掴まれた腕を静かに振り払い、旭は階段を下りて行った。その様子をセシリアは複雑な表情で見送っていた。

第15話 嫉妬

1

「来た来た来たあ！ コール！ ロイヤルでストレートなフラッシュ
ユ！」

『だあああああつ！ またお前かポーズ！』

『イカサマしてるんじゃないやねえだろうな！？』

「はっはっは！ 負け犬の言う事なんて聞こえねーッスよ。さあ、
さっさとブツを出してくださいさーい」

ラウラ・ボーデヴィツヒはじめ、他のアドヴァンスドであるラウラ
と定期的な戦闘訓練を行うようになってから一年が過ぎようとして
いた。最初はいくら自軍のエースとなりうる存在を鍛える為に上層
部が直々に招いた客分だと言え外部から入って来た《身元不明》ジョン・ドゥと
《異邦人》ストレンジャーに抵抗を覚える兵士も多かったが、今ではすっかり馴染
んでいた。

『このクソガキが！ もう一勝負だ！ 次は勝つー！』

『いやいや、また勝たせて貰いますよー』

『そうはいくか！ 絶対阻止だ！』

『《異邦人》ストレンジャー』

「あ？ なんだクラリツサか。どうした？ アンタに賭け事はまだ
早いぞ」

「あなたの方が年下でしょ。そんな事をしているとジョン姉さん
のお叱りを受けるわよ？ この間もお金賭けてたのバレて半殺しにさ
れてたでしょう」

「フッ、甘いな。このオレが同じ愚を犯す訳ねーだろ。今回賭けて

いるのは秘蔵のエロ本だ！」

「……………サイテー」

「何を言う！ 男はみんなコレが大好きなんだ！」

「男らしく言いきつても格好悪い事には変わりないから……………」

「で、要件は何だった？」

「ああ、そうだった。あなたは確か日本人の血を引いていたよね」

「まあ……………。引いているのは日本人の血だけじゃねーけど父親は……日本に住む『カンサイジン』……………とかいう民族だって言っていたような気が……………」

クラリッサに言われて《^{ストレンジジャー}異邦人》は幼い頃に口減らしの為、自分を売った母の言葉を必死に思い出す。何せ5歳以前の記憶だ。曖昧なところが多すぎる。

「そうか。では聞きたいのだが——日本では気というものを使えば空を自在に飛べて、手からビームの様なものが出てくるというのは本当なのか？」

「……………は？」

「それだけじゃない。日本人は『萌えの文化』を美德としており、聖地『アキハバラ』にの方向に毎日祈りを奉げているというのは——」

この時点で《^{ストレンジジャー}異邦人》は目の前の彼女から裸足で逃げ出したくなかった。

彼女は多分色々と間違っている。間違っている、と思う。だが、彼自身人に説明できるだけの日本の知識を有している訳ではなく、否定した所でどう説明したらいいか皆目見当もつかない。第一もし（あり得ないと思うが）彼女の言っているような事が本当だったら、自分の今までの価値観は根こそぎ壊されてしまう。そうなったら流石の彼も立ち直れないかもしれない。

どうしたいいか真剣に悩んでいると、向こう側からジッと自分達を見詰めているラウラの姿が見えた。とりあえずクラリッサを制止してラウラに声をかけたが、彼女は《ストレンジャー異邦人》の呼びかけを無視して奥の訓練室の方に去っていった。

「で、この漫画なんだけど――」
「悪い。またあとでな」

いつの間にかヒートアップしすぎて自分の好きな漫画談義へと突入し始めたクラリッサを放っておいて《ストレンジャー異邦人》はラウラを追いかけた。
なんだか訳が分からなかったが、無性に彼女の寂しそうな瞳が気になった。

2

「なーに拗ねてんだ？」
「……拗ねてなどいない」

嘘つけ。さっきからオレと目を合わせうとしない癖に。

「アンタも混ざれば良かったのに」
「慣れ合いは好きではない」
「孤高を貫くのは勝手だが、協調性のない兵士ってのはどうなんだよ？」

そう言つてラウラの正面に回り込もうとしたが、ラウラは無言でソッポを向いたまま腕を組んだ。これはラウラの拗ねている時の癖だ。困り果てたオレは何かラウラが話題を食いつきそうな話題を探す。考えてみればラウラとの話は大抵訓練や銃火器の話題ばかりでま

もな娯楽の話はした記憶がない。まあ、彼女は趣味イコール訓練の様な所があるのでそうなってしまうのは仕方ないと言えば仕方ないが……そんな事で周りとのコミュニケーションが上手く取れるのか心配になってくる。軍人にとってのいざという時の武器は経験と信頼ではないんだろつか、とオレは考えている。普段から信頼関係を築き上げてきた相手だからこそ命懸けの作戦の際に背中を任せる事が出来る。

そして軍関係とは別に周りとのコミュニケーションが不足しているともしもの時にラウラを守ってくれる人がいなくなるのではないかと。とも。

短く嘆息して一言軽口を叩く。

「なるほど。ラウラは一人上手と」

「……………」

「待て冗談だ！ だから無言でナイフを取り出すのは止めよう怖いから！ っていうか何で意味知ってんだこの耳年増！ どわっ！ 掠った！ 今耳に掠ったって！ 待て、ナイフはやめよう！ シヤレにならん！ うわああああっ！」

その後しばらくナイフを振り回すラウラから逃げ回ったが、彼女からさっきまでの寂しそうな雰囲気が消えていた事は素直に嬉しく思っていた。

3

「『『せーの！』』」

一夏、シャルル、旭が同時にトランプを出した。

一夏、シャルルA、旭9。

「よしベット頂き！」

「やられた……」

一夏はベットに身を投げ出し、旭はその場で打ちひしがれた。彼らは2人部屋の2つしかないベットを巡って争っていたのだ。結果一夏とシャルルが勝利し、旭がソファで寝る事に決定した。

「い、いいのかな？」

勝者コンビの片割れであるシャルルが遠慮気味に言う。彼は自分が来たせいで旭に迷惑がかかったのではないか、と思ったのだ。

「あー。いいって、いいって。気にすんな」

本来なら旭は一夏の部屋から2人部屋を1人で使っているラウラの部屋に移る予定だったが、旭がそれを断固拒否したのだった。結果一夏とシャルルが了承といった形で落ち着いた。

そして何よりもあれだけの事を言った手前ラウラと同じ部屋で過ごすのは気まずかった。

「じゃあ、改めてよろしくな」

「うん。よろしく」

「よろしく」

シャルル・デュノアの目的は織斑一夏に危害を加える事ではないと旭は考えている。

彼はフランスの代表候補生でデュノア社の社長子息という立ち位置がある。そんな彼が世界のバランスを崩す『鍵』となりうる『織斑一夏』に危害を加えようものなら、確実に国際問題だ。

（一夏を殺すつもりなら、学園に転入せずにフリーのまま、一夏が外出する際に狙撃、もしくは雑踏に交じって刺す。学生という身分や自分の立場をハッキリさせる事は行動に制限を受けるだけで暗殺任務には不向き。経歴全てが嘘っぱちって事は考えられるが、それならフランスやIS学園への転入手続きの時にバレてるだろう。――って事はシャルル・デュノアには別の目的があると考えるのが一番有力か……）

旭は警戒レベルを少しだけ下げる。とはいえ、シャルルの目的が見えない以上、信用する事は出来ない。

雑談を始めた一夏とシャルルを尻目に旭は携帯電話をポケットから取り出し玄関から外に出た。手動で番号を入れていき、電話をかける。3、4回のコールの後、目的の人物が電話に出た。

「もしもし、イアンか？」

『なんだ《ストレンジヤー異邦人》か。久しぶりだな』

『イアン・マルキス』。《ストレンジヤー異邦人》が情報を買う組織に属するエージェントであり、唯一の親友と言ってもいい存在だ。情報組織のデータベースに提示されていない情報や現地での生きたデータが必要な場合は彼に調べてもらう事になっている。

『聞いたぞお前。篠ノ之束の依頼でIS学園に入学したんだってな』

「耳が速いな」

『言っただろ？　「情報はエージェントに飯の種」だって。で、どうなんだ？』

「どうって？」

『惚けんなよ。女の20人や30人くらい出来ただろって話だよ？』

「明らかに桁がおかしいだろ」

『それに20超えて学生服はアウトなんじゃねえの？　まあ、アジ

ア系は幼く見えるから問題ないかもしれねえが」

「ほっとけよ。それよりイアン。アンタに頼みたい事がある」

『頼みごと?』

「ある人物の経歴を調べてもらいたい。組織のデータベースに存在しなかった奴がこつちに潜り込んでいる。調査対象は『シャルル・デュノア』」

『「デュノア」ってあのデュノアか? しかも名前からして男?』

「ああ。そのデュノアだ。本人が言うにはデュノア社の社長子息らしいが、どうにもキナ臭い」

『確かに。男でISを使用できるって時点でうちの組織に何らかの情報が入ってきてもいいはずなんだが……』

「ああ。オレもそこが気になっている。正式なフランスの代表候補生で、IS学園に入ってきている以上やりにくい上に下手は打てない。が、隠し事が何か分かれば、そこから目的を推測出来て対策の立てようはある」

『ふむ……。なるほど……。隠してるって事はそこに不都合な点があるから、だよな……』

「そーゆー事。それじゃあ頼んだ」

『頼まれた』

それだけ言っストレンジてイアンは電話を切った。イアンの調査が終了するまで《異邦人》がやるべき事はラウラ・ボーデヴィツヒとシャルル・デュノアへの警戒。

頭の中で自分の命題を確認してから部屋のドアを開き、中に入っていた。

シャルル・デュノアの発言から少しでも多く情報を得るために。

4

今日は土曜日。IS学園では土曜の午前中は座学。午後からは休み

でアリーナが全開放される。それゆえに午後を実習に当てる生徒は多い。オレと一夏もアリーナでISの訓練をしていた。

「ええつとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握しきれてないからだよ」

「そ、そうなのか……？ 一応わかつてはいるつもりだったが」「知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど間合いを詰められなかったでしょ」

「う……。確かに『瞬時加速』も読まれていたし……」

「一夏のISは格闘オンリーだから来るのがわかっていれば対応のしようがある、って事か？」

「うん。そう言う事。イグニッションブースト瞬時加速は速いけど動きが直線的だからね。だからより深く射撃武器の特性を理解しないと対戦ではまず勝てないよ」

「直線的か……。うーん……」

「言つとくが、加速中に軌道を無理やり変えるなんてバカはやるなよ」

「なんで俺の考えてる事がわかったんだ！？ エスパーか！？」

「アンタの思考回路は分かりやすいんだよ」

「ダメだよそんな事したら。空気抵抗とか圧力で機体に負荷がかかり過ぎると最悪骨折しちゃうからね」

「お、おう……」

シャルルの説明に一夏は素直に頷いた。どうやら一夏はシャルルと信頼関係を構築しつつあるようだ。まあ、オレとしても『餌』である一夏が強くて貰えるなら、シャルルを徹底的に利用しようと思う。

ところでさっきから気になっているのだが――

『ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ』

アドバイスつてのはあの長嶋式の説明の事か？ ミスター篠ノ之。

『あんなに分かりやすく説明してやったのに何よ』

「感覚よ感覚。なんとなくわかるでしょ」とか言われても感覚なんて人それぞれ何だからわかる訳ないと思う。

『わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら』

「右に5度」とか「後方に12度回転」とか言われても理路整然とし過ぎて意味わかんねーんだよ。しかもアンタら揃いも揃って『何故そうしなければならぬのか？』っていう解説をぶっ飛ばしてるし。そんなんでわかるわけねーだろ！ と、それぞれ一夏の自称・コーチ達に心の中でツツコミを入れておく。
アレだな。優れた操縦士が必ずしも優れた指導者ではないといういい例だな。

「一夏の白式イコライザって後付武装ハスロットがないんだよね」

「ああ。何回か調べてもらったけど拡張領域インストールが空いていないらしい。だから量子変換は無理だワンオフ・アビリティって言われた」

「多分だけどそれは単一仕様能力に要領を使ってるからだと思うよ」
「単一仕様能力ってあれか？ 各操縦者と使用ISの相性が最高の状態になった時のみに使用できるって能力」

「うん。普通は第二形態セカンドフォームから使用できるはずなんだけど、白式は第一形態から既に使えるようになってる。これは凄い異常現象だよ。前例がまるでないからね。しかもその能力が初代《ブリュンヒルデ

》の織斑先生と同じ能力」

「旭も言ってたけど、それってそんなに珍しい事なのか？」

「珍しいって言うか……」

「普通はありえねーよな？」

「うん」

「まあ、姉弟だからとかそんなもんじゃないのか」

「ううん。姉弟ってだけじゃ理由にならないと思う。さっきも言っただけどISって操縦士との相性が重要だから、似せようとして似せられるものじゃないんだよ」

シャルルのは真剣な眼差しで白式を隅々まで観察していた。

「シャルルは白式に興味があるのか？」

「え？ あ、ううん。そう言う訳じゃ——」

こちらの質問に不自然なほど慌てた様子を見せるシャルル。このあたりで少し探りを入れてみる事にする。

「ところで、シャルルは随分ISの操縦に慣れてるみたいだけど、
“いつから” ISに乗っていたんだ？」

世界で初めてのISを起動させる事の出来る男・織斑一夏が存在が世界に知られたのが2ヶ月前。いくら一夏が操縦士として天才といえども、たった2ヶ月では素人臭さが前面に押し出されている。（これはオレにも言える事だが）しかし、シャルル・デュノアにはそれが無い。むしろその華麗ともいえる操縦技術には熟練者のような風格すら感じられる。

これは才能なんて言葉では説明できない。裏に絶対に何かある。

「えつと……。それは……」

「いいじゃないかそんな事は。それより続き頼む」

思わず舌打ちをしそうになるのをグツと堪える。

まあ、いいさ。イアンの調査が終わればその辺は暴きだせる。

「あ、うん。そうだね。じゃあ、射撃の練習を試みようか。はい」

シャルルは一夏に自分の武装の一つ55口径アサルトライフル【ヴェント】を差し出す。

「え？ 他の奴の武装って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許可すれば使えるんだよ。今、一夏と白式に使用許可を発行したから試しに撃ってみて」

「お、おう」

慣れない手つきで銃を構えて一旦止まる。そのままシャルルの指導のもと銃を撃つ時の反動に驚きの声を上げながら何発的に向かって撃った。

しかし、射撃センスねーのな一夏……。

的に掠りもしない一夏の射撃を見てある意味感心した。

「どうだった？」

「お、おう。とにかくアレだな。『速い』って感想しか出てこないな」

「そう。『速い』んだ。一夏の瞬間加速も速いけど、小さくて弾丸

イグニッションブースト

は空気摩擦が少ない分、もっと速い。弾道予測さえ正確に出来れば当てる事は難しくないんだ。もし外れても牽制になる。一夏は特攻して相手との距離を詰める事に集中してるけど、心のどこかでブレーキがかかるんだよ」

「だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか」

「うん」

『だからそうだと私が何回説明したと……！』

『って、それすらわかってなかった訳？　はあ、ホントバカね』
『わたくしはてつきり分かった上であんな無茶な戦い方をしているのかと……』

うん。教える側が陥る落とし穴だな。相手が基本を理解している事を前提に教えるから、基本の基本すら理解していない教えられる側は余計に理解し辛くなる。その結果『わからない所がわからない』という泥沼に陥るのはよくある話だ。

「そう言えばシャルルのISってリヴァイヴなんだよな？　山田先生が使ってたやつと随分違って見えるけど本当に同じ機体なのか？」

シャルルのISに視線を移す。通常ラファール・リヴァイヴはバックパックに4枚の多方向加速推進翼が付いているが、シャルルのはバックパックには一対の推進翼が加速用と機動性が上昇し、アーマ一部分の余計な装甲は削られ、マルチウエポンラックについている大きなアスカートが装着されており、そこにも姿勢制御用の小型のスラスターがいくつか。そして何よりもリヴァイヴの肩に設置されている4枚の物理シールドが全て外され、左腕にシールドと一体化した腕部装甲、右は射撃の邪魔にならないようにスキンアーマーのみという外観だった。

「僕のは専用機だからかなりいいじつてあるよ。この子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備を幾つか外して、バズロケットその上で拡張領域を倍に増やしてあるんだ」

「倍！？　そりや凄え。少し分けてほしいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいけどね。そんなカスタム機だからね。インストール今量子変換されている武装だけでも20近くあるよ」

「ちょっとした火薬庫みたいだな」

「うん、そうだね。あ、1マガジン使い切っていいからそのまま続

けてて。えっと、次は旭だね」

「よろしく」

「旭は射撃が正確すぎるかな」

「正確な射撃の方がいいだろ？」

「うっん。なまじ射撃が正確すぎると逆に“何処に撃ちこんでくるか”って事を読まれるんだ。最善の射撃コースは限られているからね」

「……………」

「意外性のあるポイントに撃たないから、攻撃が読みやすいんだ。だから、偶には撃ちやすい所と別の所に撃つと良いと思うよ」

「なるほど……………」

“照準が正確が故に攻撃が読みやすい”か……。それは考えた事がなかったな。

「それとISでの戦闘に慣れていないよね。下からの攻撃に対する反応の遅れが目立っていたね」

「それは……確かに」

「まずはISでの空中戦闘に慣れる事が命題かな」

地上での戦闘ばかりこなしていたから、下からの攻撃には意識が向かない事が多い。

シャルルの指摘は正しい。コイツの事を信用は出来ないが、コーチとしての腕は信用してもいいと思った。

『ねえ、ちょっとあれ……………』

『ドイツの第3世代型！？』

『本国でトライアル段階だって聞いたけど……………！？』

外野がざわめきを上げ、オレ達もそちらの方を向く。そこには黒く、

重厚なフォルムなIS『シュバルツェア・レーゲン』に身を包んだドイツ軍シュバルツェ・ハーゼ部隊隊長ラウラ・ボーデヴィツヒの姿があった。

5

《おい》

ラウラは一夏を見つけるや否や、オープンチャンネルを開いた。彼女は一夏に対する敵意を隠そうともしていない。

「なんだよ？」

一夏はそれに渋々といった様子で応じた。

《貴様も専用機持ちだそうだな。ならば、話が早い。私と戦え》

「いやだよ。理由がねえ」

《貴様にはなくとも私にはある》

そう言つてラウラは怒り、殺意、憎しみに塗れた瞳で一夏を睨みつける。

旭とシャルルはその様子を見て、いつでも動けるように身構えていた。

《貴様がいなければ、大会二連覇という偉業を成し得た事は容易に想像できる。だから私は貴様を——貴様の存在を認めない……！私と戦え！》

息巻き暴言ともいえる言葉を一夏に浴びせるラウラだったが、一夏はその言葉を受けても耐えきり、受け流した。

「また今度な」それだけ言ってアリーナから立ち去ろうとすると、

「そうか。ならば——戦わざる得ないようにしてやる！」

そう言つてラウラのISが戦闘モードへシフト。左肩に装備されている大型のレールカノンが火を噴いた。が——。

ガキン！ と、いう轟音がアリーナの空気を振動させる。

レールガンの放つ実弾をシャルルのリヴァイヴのシールドが弾いたのだ。

「貴様……！」

ラウラは自分の邪魔をしたシャルルにも敵意の瞳を向ける。常人ならラウラの殺気の前に怯み引いてしまふだろうが、シャルルは涼しい顔でラウラと相対していた。

「こんな密集地帯でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツ人は随分と沸点が低いね。ビールだけじゃなく、頭までホットなのかな？」

「フランスの第二世代如きが私の前に立ちふさがるとはな」
アンティーク

「未だに量産の目途が立っていないドイツの第三世代ルキよりは動けるはずだよ」

一瞬の睨みあい。敵意と敵意がぶつかり合い、緊張がアリーナを包んでいく。

「随分と好き勝手やってくれるな。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

旭はシャルルと睨み合いを継続するラウラの背後に回り込み、彼女の頭部にバレットをゼロ距離で押し当てていた。

「……そんな貧弱なＩＳで私のシュバルツェア・レーゲンに勝てると思ったか？」

「攻撃力ばかりに目が行って相手力量を見誤り、慢心するのはアンタの悪い癖だ。だから足元を掬われる」

「フン。私はもう昔の私ではない。近接格闘が使えない貴様など私の敵ではない」

「それが慢心だって言うんだよ。最後にもう１度だけ聞いておくぞ。………アンタ、オレの敵か？」

感情の籠らない声。それは最終警告だ、と言外に語っていた。

ここで自分と彼との道が違える。ずっと、ずっと兄のように慕ってきたこの男との絆は壊れてしまふ。だからこそラウラは叫ばずにいられない。

「——ッ！ 先に私の敵になったのは貴様の方だろう！」

——突き放された。——見捨てられた。——裏切られた。

——織斑一夏……！ 貴様が……！ 貴様さえいなければ……ッ！

数少ない心を開ける人達を織斑一夏に奪われた。

そんな想いが彼女の孤独感を煽り怒りを、憎しみを、殺意を募らせていく。

《その生徒！ 何をしている！？ 学年とクラス、出席番号と名前を言え！》

担当の教師の怒鳴り声がアリーナのスピーカーから響く。

二度にわたる横槍でラウラの興は削がれた。

「ふん。今日は引こつ」

そう言つてラウラは去っていく。身を焼く程の怒りを滾らせながら。何処か遠くを見つめるように旭はそんな彼女の後姿をジツと見つめていた。

いずれ彼女と殺し合わなければならない、という事実と向き合つてうに。

何も言わずに佇んでいた。

第16話 シャロット・デュノア

1

「今日はもう上がるのか。4時過ぎだし、アリーナも閉まる時間だしね」

ラウラが去った後、シャルルのその一言で解散となった。

着替える途中に一夏がシャルルに日本の文化『裸の付き合い』を説いてセクハラしようとした為、凰と一緒に尻に蹴りを入れて黙らせておいた。シャルルは人に肌を晒す事を嫌う。

その気持ちは分からなくない。オレ自身も人に戦闘訓練の末にボロボロになった体を見せる事は抵抗を覚える。

『コホン。……どうしても「裸の付き合い」というものがしたいのなら、気は進みませんが仕方ありませんわね。このわたくしが――』

『篠ノ之。そのの（変態）淑女を連行してくれ』

『任せておけ。こっちも着替えに行くぞセシリア。早く来い』

『ちょ……！？ 浮舟さん今何とおっしゃいましたの！？ し、篠ノ之さん！ 首根っこを掴まないでください！ 浮舟さんとはジックリお話しなくては――！』

オルコットが何か言っているが聞こえないし、彼女に下した評価を撤回するつもりはない。というか、これ以上シツクリくる表現は他にない、と断言できる。

更衣室でISスーツからラフなジャージへと着替えて一夏達が着替え終わるのを待っていた。

端末をチェックするとイアンから連絡が来ていた。要件は『調査終

了』。

オレは一夏達に先に部屋に帰っている様に言うと、人目に付かない所へ移動してイアンに連絡をとった。

2・3回のコールの後、イアンと繋がる。

「もっしー！ ストちゃんコニヤニヤチハー！」

「……………」

調査内容なんてどうでもいいから、ソツコーで電話を切りたくなつた。

寧ろ、受話器の向こうにいる陽気なお気楽極楽男をぶっ殺したくなつた。電話口の向こうの相手を上手く暗殺する手段はないものだろうか？

「俺に電話をしてきたって事はアレか？ ついに女でも出来たか？ 20股がバレて絶賛修羅場中か？」

「……………違う」

「そうか。違うのか。ならアレか？ 遂に果たしたんだな……………！ 我ら童心を忘れない男達の永遠の浪漫！ 垂涎もののイベント！ 気になるあの子とお風呂場でバツタリイベントを！」

「……………知ってるか？ 『男の浪漫』とか口に出す奴は精神年齢が低いらしいぞ？」

「浪漫を語らなくなったら男じゃねえ！ 第一お前は男のくせに覇気がなさすぎる！ 男なら女子風呂を覗く位の気概を見せてみる！」

「それは普通に犯罪だ！」

「俺達の稼業に合法も非合法もないだろう。そこに浪漫があるから求める！ 男は伝説を作る為に生きているのだ！」

「……………オレの人生最大の間違いはアンタみたいなアホと友人関係にある事だな」

「フツ、そう褒めるな」

「褒めてねーよ！ さつさと本題に入れ！」

「了解した。調査した結果色々面白い事実が判明したぞ」

「……どんな？」

イアンの声が真剣なものにかわり、旭は気を引き締めた。

性格はアレだが、イアンの調査員としての腕は一流の上に『超』をつけてもいいくらいの凄腕だ。これでシャルル・デュノア及び、デュノア社の目的がハッキリするだろう。

「この情報を知れば、お前がいかにお風呂場でバツタリイベントに近い位置にいたか——」

「それはもういい！」

今日一番の怒声を電話の向こうの相手に叩きつけた。

2

「はー、風呂に入りてえ……」

織斑一夏は着替えを終え、一緒に着替える事を断固拒否したシャルルに「先に部屋に戻ってて」と言われ更衣室から出た所で溜息をついた。IS学園に入学したからというものの、一夏は風呂に入った事がない。IS学園には部屋にあるシャワールームとは別に大浴場があるのだが、男子禁制に近い扱いになっていた。『女子が入り終わったとで入ればいいんじゃないか？』という一夏の提案は『私たちの後に男子が入るなんてどういう風にお風呂に入っているのかわかりません！』という女子の言葉で却下された。

『その逆は？』という提案も『男子の後のお風呂なんてどう使えばいいんですか！』という女子の言葉で却下された。年頃の女の子の思考は複雑なのだ。

世は女尊男卑の時代。このIS学園内でも女子の意見が重要視される傾向にある。

一夏は世の中の不条理に心で泣いた。シャワーしか浴びる事を許されないこの状況は無類の風呂好きである彼にとっては拷問に近いのだ。

しかし！ 今日！ 遂に！ このIS学園の教師である山田麻耶の働きにより大浴場の解禁が決まった！

時間を別にとすると女子が反発する為、男子は週2回に使用日を設ける。と、言う事らしい。

ここに旭がいないのは僥倖だった。と、一夏は思う。もしこの場に風呂嫌いな彼がいたら『たった3人の男子の為に大浴場って……税金の無駄使いじゃねーの？』とか水を差す事を言いそうだ。

「嬉しいです！ 助かります！ ありがとうございます山田先生！」

一夏は万感の思いを込めて真耶の手を握って感謝の意を述べた。真耶は顔を真っ赤にして眼を反らした。

「い、いえ。仕事ですから……」

「いやいや。山田先生のお陰ですから！」

「そ、そうですか？ そう言われると照れちゃいます……」

ヒートアップする一夏。顔を真っ赤にして照れる真耶。一夏はこの時点で気付いてなかった。後ろから脅威が迫ってきている事に。

「……一夏、何してるの？」

一夏の心臓が跳ね、背筋が栗立った。恐る恐る後ろの声の主を確認

すると、温厚なルームメイト。シャルル・デュノアがニコニコしながら立っていた。

一夏はそれを見てホツとする。先ほどの寒気はきつと汗で体が冷えたからに違いない。

そう結論付けてシャルルに向き直る。

対してシャルルは無表情だ。いつも笑顔を絶やさない彼にしては珍しい事だった。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるの？」

心なしか彼の声が冷たい。気温でいうなら氷点下を余裕でブツギリそうなくらい。

しかし只今絶賛有頂天中の一夏はそんな事を意に介さない。天にも昇る気持ちのままシャルルに詰め寄った。

「喜ベシャルル！ 今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

興奮する一夏とは真逆にシャルルの態度は素っ気ない。どうでも良さそうにタオルで髪を拭き始めた。一夏はシャルルの様子が気になりながらも真耶の話を聞き続ける。

「ああ。そういうえば織斑くんにはもう一件用があるんです。ちよつと書いてほしい書類があるので職員室まで来てもらえますか？ 白式の正式登録の書類なのでちよつと枚数が多いですけど」

「わかりました。——それじゃあシャルル、ちよつと長くなりそうだから先にシャワーを浴びてくれ」

「……わかった」

遠くなっていく一夏の背中を見送りながらシャルルは重々しく嘆息

した。

「なにイライラしてるんだか……」

衝動的にとってしまった一夏への自分の態度。あれはない。と、彼は思う。

頭を上った血が下がって冷静に客観的に先ほどの自分の態度を見詰め直してさらに自己嫌悪に陥った。

（シャワーでも浴びて気分でも変えよう……）

3

「はー、終わった終わった」

白式の操縦士としての正式登録の書類約30枚全てを記入し終え、寮の廊下を伸びしながら歩いていた。これで織斑一夏は晴れて白式の操縦士だ。

とはいっても今までも正式操縦士のような扱いを受けていたのが、何かが変わる訳ではないのだが。

「たっただいまー！——って、誰もいないのか？」

呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！ といった具合にドアを勢いよく開けた一夏は誰もいない部屋を見回して肩すかしをくらった気分になった。

静まり返った部屋を見回し自分のベットに座るとシャワールームから水の流れる音が聞こえてくる。恐らくシャルルがシャワーを浴びているのだろう。と、一夏は思う。それと同時に昨日の夜ボディソープを切らしていたのを思い出した。

ガラスとシャワールームの中から扉を開く音が聞こえた。シャルルがボディソープを探しに来たのだろう。予備のボディソープをクロ―ゼットから取り出して、ノックなしに扉を開けた。

「おいシャルルー。これ替わりの――」

そう言いかけて固まった。目の前に突き付けられた信じ難い光景が彼の思考をフリーズさせたのだ。

彼の目の前に立っていたのは一糸まとわぬ姿の女性だった。

「……………は？」

「……………いち、か？」

聞き覚えのある声。見覚えのある顔。混乱する頭で情報が纏まり切らない。

「えっと、だな…………」

とりあえず一夏は問題を先送りにして自分の当初の目的だけを果たす事にした。

「こ、ここに替えを置いておくからな！」

そう叫び、逃げるようにシャワールームから出ていった。

4

沈黙。ひたすら沈黙。部屋の中は静まり返っており、張りつめた糸の様な緊張が辺りを支配していた。

そんな中でベットに座り固まっている少年少女が一组。

一方は織斑一夏。もう一方はシャルル・デュノア。

『ISを起動できる2人目の男』としてつい最近学園に編入してきた少年だったはずの少女だった。

時計の針の進む音だけがやたらと大きく感じられる。かれこれ1時間ほどこうして固まっていたであろうか。

「……………なんで男の振りなんかしてたんだ？」

黙ったままでは埒が明かない、と判断した一夏が静かにシャルルに問う。

しばらく彼女は無言だったが、やがてポツリポツリと少しずつ話し始めた。

「……………実家からそうしろって言われて」

「実家って、デュノア社の……………！」

「そう。僕の父がその社長だつていうのは前に話したよね。その人からの直接の命令なんだよ」

「命令って——！ 親だろう！？ なんでそんな……………！？」

「僕はね、一夏。……………愛人の子なんだよ」

「——ッ！」

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが無くなった時に、父の部下がやってきたの。それで色々検査する段階でISの適応が高い事がわかって、非公式だったけどデュノア社のテストパイロットをする事になって……………」

「……………」

シャルルの話を一夏は黙って耳を傾けた。正直な話、自分の過去を告白する彼女の痛々しい姿を見るのは辛かったが、眼を背ける事だけはしたくなかった。

「父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活してるんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『この泥棒猫の娘がつ！』つて。参るよね。お母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなにも戸惑わなかったのにね」

「……………」

「それからしばらく経ってデュノア社は経営不振に陥ったんだ。」

「え？　だってデュノア社って量産ISが世界で3位のシェアを誇っているって——」

「そうだけど、結局リヴァイヴは第二世代型のISなんだよ。ISの開発って言うのは物凄くお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援を貰ってやっと成り立っている所ばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代開発は急務なの。国防もそうだけど、基本力で負ける国がアドバンテージを取れないと悲惨な事になるんだよ」

『現在欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機の設定中なのですわ。今のところトライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型。ドイツのレーゲン型。イタリアのテンペスタ？型。今のところ実用化ではイギリスがリードしていますが、まだ難しい状況です。その為わたくしが稼働データを得る為にIS学園へと送り込まれましたの』

一夏は以前セシリア・オルコットの言っていた言葉を思い出しながらシャルルの話を聞き続ける。

「話を戻すね。それでデュノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型の最後発だからね。圧倒的に時間もデータも足りなくて、なかなか形にならなかったんだよ。」

それで、政府からの通達で予算の大幅カットされたの。そして、次のトライアルで選ばなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も全面はく奪するって話になったんだ」

「なんとなく話は分かったが、それと男装ってどう関係あるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔。そして――」

「特異ケース『織斑一夏』と接触し、白式のデータを盗み取る事、だな」

「……………ッ!?」

一夏とシャルルは声のした方向に慌てて振り向いた。そこには腕部だけ装甲を展開し、バレットの銃口をシャルルに向けていた浮舟旭の姿があった。

「やつと尻尾を出したな。シャルル・デュノア――いや、『シャルロット・デュノア』」

「……………やつぱり、旭は気付いていたんだね」

「気付いていたっていうより、怪しんでいたって方が正解だな。悪いがアンタの事はすべて調べさせてもらった。ご丁寧に戸籍や経歴の改竄までしてあったから調査に苦労したらしいが、な」

イアン・マルキスの情報収集の腕を甘く見てはいけない。彼は戸籍やデータベースに掲載されている過去のデータが改竄されていると悟ると、一にも二にも無く現地に飛び、聞き込みと民間企業の会員カードなどを作る段階で記入した個人情報进行管理している無数のデータベースをハッキングして探り始めた。

いくら国家とは言え、人の口に戸を立てる事は出来ないし、数ある企業の個人情報データベースを全て改竄するなどという芸当は不可能に近い。

結果、4件目にして『シャルロット・デュノア』にヒット。近所の住民の目撃証言もあり、彼女のルーツを探る事は出来た。そこまで

行けば後の痕跡をたどる事は簡単だ。

糸を手繰り寄せるように情報の流れを辿ればいい。

そうしてイアン・マルキスは調査を終了させ、旭に情報を渡した。

「オレが何をしようとしているか、わかっているよな。シャルロット・デュノア」

「……………勿論だよ」

「……………どういう……事だよ？」

「コイツを学園に突き出して、フランスに送還する」

「な——ッ!？」

至極まっとうな事を口にするような口調で旭は一夏の問いに答える。それを聞いて一夏は言葉を無くす。

「そんな事って——ッ!」

「いいんだ一夏。こうなる事を覚悟して君に全部話したんだから。

聞いてくれてありがとう。話したら楽になったよ。今まで騙してて

…………… 本当にゴメンね」

「いいのかよそれで…………。本当にそれでいいのかよ!？」

「良いも悪いも、僕には選択肢なんてないんだよ」

「その通りだ。スパイだと判明した以上野放しにしておくなんてナンセンスもいいとこだ」

「旭、シャルルの境遇を知っても何とも思わないのかよ!？」

「理由があればあらゆる行為は正当化されるのか? 随分と温い考え方だな。それにな、人の情けに付け入るのはスパイの専売特許だ。アンタはここでシャルルを見逃してデータを盗まれた場合、倉持技研や学園側、織斑先生にどれだけ迷惑がかかるか、ちゃんと考えて言ってるのか?」

「——ッ!？」

一夏は刺すような視線で旭を射抜いた。
織斑一夏は幼いころ姉の織斑千冬ともども両親に捨てられている。
彼が自分の親とシャルロット・デュノアの親と重ね合わせて怒りを
感じた。

「いくぞシャルロット・デュノア」

「……………うん」

「待てよまだ話は終わってない！」

「終わりだよ。この話は終わっているんだ。仮に彼女がこの先デュ
ノア社と縁を切るとしても、アンタはフランスっていう国相手から
シャルロット・デュノアを護り抜く事が出来るのか？」

「それは——ッ！」

「第一引きとめてどうするつもりだ？ この事が明るみにできればフ
ランス政府が黙っているとは思えない。自国の企業の起こした不始
末を完全に揉み消すか、罰するかして事態の收拾を図るだろう。ア
ンタはフランス相手に何が出来る？ ——ハッキリ言ってやろう。
アンタに出来る事は何もないんだよ」

一夏は激高し衝動的に旭に殴りかかった。

ドスッ！ と、いう音が部屋に響き一夏は倒れ込む。旭の膝蹴りが
一夏の腹部にまともに入ったのだ。

「一夏大丈夫！？」

シャルロットが一夏に駆け寄り心配そうに覗き込んだ。

「旭……………ッ！」

「安っぽい正義感を振りかざすな。アンタの言葉は軽すぎるんだ」
しゃがんでよく通る低い、冷たい声色で「お前には何も出来ない」

と突き付けて来る旭。

一夏は悔しさに齒噛みする。先ほどのシャルルの儚い微笑みに偽りなどない。

彼はそう信じている。旭の言う事もわかる。わかるからこそ余計に腹立たしい。

何も出来ない自分の非力さが。

シャルルの笑顔を護る事の出来ない自分が。

一人で絶望している女の子すら救う事が出来ない自分が。

それでも――何とかしたい！

一夏はシャルルを救い出す為に何か手段がないか思索する。

そして頭の片隅にあつた、最近丸暗記したある事を思い出した。

「……と、『特記事項第二十一。本学園における生徒はその在学中ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』！」

「……………」

「旭、つまりこの学園にいる3年間、シャルルの同意なしにフランスに送り返す事なんて出来ない！俺はその間に何とかする方法を見つける！見つけてみせる！いいんだよ！シャルルはここにいていいんだ！」

「……もし、アンタの情に付け込むつもりだったら？」

「その時はシャルルを信じた俺を笑えばいい」

そう宣言して一夏は旭の顔を真っ直ぐに見据えた。

その瞳には一点の曇りもない。それは――覚悟を決めた漢の顔だった。

「……………後はシャルルの決める事だ。旭、今は引いてくれ！」

「……………いいだろう」

旭は腕部のISの装甲を収納すると立ちあがった。

「だが、覚えておけ。オレはシャルロット・デュノアを信用していない。少しでも不審な行動を起こした場合、迷わず牙を剥くぞ」

「……僕は一夏を裏切らないよ。」

「……その言葉が真実だといいんだけどな」

旭はそう言つて扉を開けて部屋を後にした。

それと同時に一夏は体から一氣に力が抜けて、倒れ込んだ。

シャルロットはそれを抱きとめ、自分の膝を枕にして一夏を横にした。

「いててて……。あの野郎、手加減なしで蹴りやがって……」

「一夏。ごめんね、僕のせいで……」

「良いつてことよ。それより明日からさっそく何とかする方法を探さないとな」

「………ありがとう一夏。僕を信じてくれて」

「友達を信じるのは当然のことだろ」

「………それでも、ありがとう」

『ここにいていいんだ！』

——初めてそんな事を言われた。

シャルロット・デュノアの心が温かいもので満たされていく。

母を亡くしてからずっと居場所がなかった自分。

血の繋がりだけの父には氷に閉ざされた息苦しさしか感じられず、ただただ無為に毎日を過ごしていた。

いつしか自分が必要とされる事さえ求めなくなって、温度のない灰色な世界で過ごす事にもすっかり慣れてしまっていた。

そして父から命令で日本に行くことが決まっても別段何も感じなく

なっていた。

それなのに――

（――どうして一夏はこんなにも僕の心を揺り動かすんだろうね）

シャルロット・デュノアはこんな自分を信じてくれた目の前の少年を世界の誰よりも愛おしく思った。

5

「……損な役回りだな」

「誰かがやらなきゃいけない事ツスよ」

人気のない部屋で旭は千冬と会っていた。

実のところ旭はああは言ったものの、シャルロット・デュノアをあまり疑っていない。

彼女の話には矛盾がなく、イアンからの情報通りだ。

イアンがダミー情報を掴まされたという可能性は絶対はない、と断言できる。

いくら大企業とはいえ情報戦の一流のプロであるイアンを出し抜けるなら最初から素人をスパイに送ってくるはずかない。その上この方法は発覚した場合『私生児の存在』『デュノア社の危機』『スパイ行為』など大企業のスキャンダルが芽づる式に知れわたる。リスクとメリットを天秤にかけてどう考えてもリスクの方が高い。ハイリスク・ローリターンだ。

以上の事から旭はシャルロット・デュノアの話は概ね真実でやりたくもないスパイ行為を強要された。そう考えられる。

しかしシャルロットがスパイだということもまた事実なのだ。

そうなれば当然彼女を疑う者も出てくる。疑念というものは一度芽生えると際限なく他者に広がっていく。疑念は目に見えない悪意に

姿を変え害を及ぼし始める。そういった者達に信じてほしいと声高に叫んでも届かない。理性で納得出来たとしても本能的に疑ってしまっただ。

そして自分を安心させる為に暴走して、シャルロット・デュノアに害を及ぼす可能性も考えられる。彼女がスパイ時点で大義名分をたてる理由としては充分過ぎるのだ。

旭はそういった者達の暴走を未然に食い止める為に率先してシャルロット・デュノアを疑った。

そして——もう1つ理由がある。

シャルロット・デュノアを味方につける為だ。

現状旭は一夏の護衛を果たす為にはあまりにも力不足で未熟だ。

シャルロット・デュノアを織斑一夏に惚れさせ、籠絡してしまう。

これが旭の目論見だった。

英雄ヒーローが活躍するには悪役ビルの存在が必要だ。

だからこそ旭は自ら悪役になる事を決めた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女から一夏を護る為に。

「しかし、シャルロット・デュノアが一夏の味方にならないならどうする？」

「その時は——適当に理由をつけて本国に送還してしまえばいいだけッスよ」

「……………やはり貴様は信用出来ん」

吐き捨てるように千冬は言い、旭は曖昧に笑った。

第16話 シャロット・デュノア（後書き）

旭と一夏のガチ喧嘩でした。

喧嘩って難しい……。

酷い主人公とか言われそう（苦笑）

第17話 暴走

1

（な、何故このような事に……？）

道場にて日課である鍛錬を行っていた篤は頭を抱えていた。

現在学校中に流れている噂『学園別トーナメントで織斑一夏に勝った者が一夏と付き合う事が出来る』という噂は自分の発言が発端だ。その噂はセシリアと鈴の耳にまで入り、周りは皆ヒートアップしていた。

しかしそれはあくまで『自分が一夏に勝った時、私と付き合ってほしい』という意味で言った言葉であり、そういう意味ではないのだ！

うがつ！ と、ままならない現状にますます頭を抱える。

と、とにかく優勝だ！ 優勝すればいいのだ！ 今回はあの時の様な事は――

――あの時の様な事だけは……。大丈夫だ。大丈夫な、はずだ。

篤は小学4年の頃、一夏と同様の約束をした事がある。

その時は剣道の全国大会だった。小学生の部という括りがあるので参加者のほとんどが5年生、6年生なのだが、篤は当時から実家が剣術道場という事もあって年の差などものともしない強さを持っていた。優勝確実。周りからもそう言われ、自分自身もそれを信じて疑わなかった。

しかし、当日。いきなりの引越しを余儀なくされた。当然大会は不戦敗。

一夏との約束はなかった事になった。

実姉・束の所為だ。

束の開発したISはその圧倒的な性能から軍事転用が危ぶまれ、本人含む親族の保護という名目で政府主導の転居を余儀なくされた。その日自分の大事なものがすべて奪われた気がした。

当時の仲の良かった友達。自分が生まれ育った家。一夏との絆もすべて。

以来、箒は束が好きではない。寧ろ嫌いだ。

その後重要人物保護プログラムによる西へ東へと引っ越しをさせられ、慌ただしいばかりで何もなかった。一夏からの手紙も『居場所が特定の第三者に知られると困る』という政府からの事務的な圧力で握りつぶされた。

気がつけば、両親は別々に暮らしを余儀なくされ、元凶の束は失踪。箒は実の妹という事で政府からの執拗な監視と聴取を幾度となく繰り返された。

泣こうが、叫ぼうが、怒ろうが、政府の事務的な反応は変わらず、箒はなにひとつ自由に出来ず、疲れ果てていった。

そんな中で唯一縋れるものは『一夏との絆の象徴』でもある剣術だった。

しかし去年の全国大会の結果は散々たるものだった。

全国大会優勝。第三者から見れば華々しいものではあったが、箒にとってはそうではなかった。

——誰かを叩きのめしたい。

その想いを解き放ち、相手を圧倒的な力で叩きのめしただけだった。太刀筋は己の心を映し出す鏡。自分の醜い心を目の前に突きつけられ表彰式では逃げ出したくなるほど惨めだった。そしてなにより自分が叩きのめした相手の涙。

真摯に剣道と向き合い、修練を積んできたであろう対戦相手の涙だ

った。

自分は『暴力』で『強さ』を否定してしまった。

自分は強さを見誤り、大切なものを見失ってしまっていた。

——私は今度こそ強さを見誤らずに勝つ事が出来るのだろうか？

少し考え込んで首を振る。

——いや、勝たねばならない。なにより自分自身の為に。今度こそ私は本当の強さを手にして見せる！

粘着質な過去の記憶を振り払うように、ひたすら剣を振るった。

「随分と闇雲に振り回してるな」

「——ッ！？」

突如としてかけられた声に箒は振り向いた。そこには浮舟旭の姿があった。

「浮舟。何故ここに？」

「うがっ！　とか言う奇声が聞こえて何事かと思って。悩んでるな、若人よ」

「グッ……！」

「それに酷い太刀筋だ。迷ってんのが丸わかりな」

「な！？　剣を知らないお前に何がわかる！？」

自分の太刀筋を貶され、箒は激高した。箒の反応に旭は肩を竦め、曖昧に笑い返す。

「確かにオレは剣術に関しては素人さ。武道の精神なんてまるでわ

かねー。けど、こんなオモチャの扱いなら分かるぞ？」

旭は手近にあった小太刀の木刀を手に取り旭は打ちこみ人形に向かつて構えた。

そして一瞬。一瞬の出来事だった。

旭の放つ連撃が正確に打ちこみ人形の急所を捉えた。

「……………ッ！」

箒は驚きのあまり何も言えない。

冴えていて、迷いのない剣閃。自分にはあのような剣を振るう事は出来ない。

しかし——自分の求める『本当の強さ』とは何か違うような気がした。

真似したいとも思わない。

旭の太刀筋には、まるで相対した相手を殺す為に磨き続けた業の様な恐ろしさがあった。

「アンタはコレをどう思う？」

「……………わからない。ただ、恐ろしい。——と思う」

旭は箒の答えを聞き優しく笑った。

「それでいい」

「え…………？」

「オレのこの技は『暴力』だ。あらゆる事象を捻じ曲げる不条理なまでの絶対的な力だ。けどな、不条理な力の使い手は須らく破滅する。暴力には制御する方法はないからな」

「……………」

「手に入れた力を御する心が無ければ『暴力』は『本当の強さ』に

成りえない」

「……………では『本当の強さ』とはなんだ？」

「それは人によって違うからなあ。一概に『これが本当の強さだ！』って断言は出来ねーんだよな。『弱いからこそ強い』奴もいるし、『強いからこそ弱い』奴もいる。人によって『本当の強さ』の定義が違う以上、言葉遊びみたいなもんになる。ただ、『力』は『力』にしかなりえない。『何が為の力』か？ それを踏まえて『力の良き御者』である事。『本当の強さ』ってのはそっから始まるんじゃないのかな」

「……………初心忘れるべからずか」

「そーゆー事」

「私にも、手に入れられるだろうか……………？ 本当の強さを……………」

「それはわかんねーな。ただ——」

「ただ？」

「『そうなりたい』と願い、その為に努力する事が出来れば、いつかは。何が為に強さを追い求めるのか。焦らずゆっくりと探すといい。人は心を無くさない限り目的のない強さに耐えられないからな」

アンタはオレの様になるなよ。と、旭は小さく呟いた。

彼の言葉の真意を測りかねていたが、その理由を旭の横顔に問う事は出来なかった。

2

旭と喧嘩をした翌日の放課後。結局あの後旭は帰ってくる事はなかった。

鈴経由の情報によると、昨日一晩宿直室に泊まつたらしい。

よくよく考えると旭も自分を心配していたからこそ、あんな事を言ったのだ。それをあんなに邪険に扱って、旭を悪者にしてしまった。その事を反省した一夏は『どうやって仲直りしたものかな？』と懊

悩する。素直に『ごめん』と謝るのはプライドが邪魔したし、上から目線で『仕方ないから許してやろう』と言えるほど面の皮が厚い訳でもない。

どうすればいいか途方に暮れていたところ、何やら言い争っているような声が聞こえてきた。気になって茂みから覗いてみると、

「《異邦人》といい、教官といい何故こんな所にいるのですか!？」
「何度も言わせるな。私には私の役目がある。浮舟にもだ」
「こんな極東の地でなんの役目があるというのですか!？」

そこにいたのはラウラ・ボーデヴィツヒと織斑千冬。自身が『教官』と慕い、敬愛している千冬に自分の思いの丈をぶつけていたのだから。

「お願いです教官！ 我がドイツで再びご指導を！ ここでは貴女
の能力は半分も生かされません！」

「ほう？」

「大体、この学園の生徒など、教官の教えるに足るものではありません！ 危機感に欠け、ISをファクションか何かと勘違いしている！ そのような者たちに教官が貴重な時間を割かれるなど——」

「そこまでしておけよ小娘」

「——ッ!!」

「少し見ない間にえらくなつたな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は——!!」

ラウラは何か反論しようとするが、千冬はそれを許さない。鋭い眼光でラウラを射抜き、問答無用で言い放った。

「寮に戻れ。私は忙しい」

「……クッ！」

悔しそうに齒噛みしながらラウラは走り去っていった。
しばしの静寂。そして――。

「その男子。盗み聞きか？ 異常性癖は感心せんぞ」

「な、なんでそうなるんだよ千冬ね――」

「学校では織斑先生と呼べ」

「……は、はい」

「こんな所でフラフラしている暇があったら浮舟を見習って自主訓練でもしている。そんな事では来週の学園別トーナメントで初戦負けだぞ」

「わかってるって」

痛いところを突かれ一夏は苦笑いを零す。千冬のかざす正論は実に耳が痛い。

「そうか。ならいい」

「なあ、ちよつと待ってくれよ」

去ろうとする千冬を一夏は呼び止めた。先ほどの話で気になった事があつたからだ。

「さっきの――ラウラって奴が言っていたストレンジャーってなんなんだ？ 旭と何か関係あるのか？」

一瞬、千冬表情が険しくなるのを一夏は見逃さなかった。

「その事については他言無用だ。くだらん事を気にしている暇があったらさっさと行け」

一夏は納得できないものを抱えながらもこれ以上聞いても無駄だと判断したようで渋々寮へ戻っていった。

3

「「あ」」

アリーナで鉢合わせたセシリアと鈴の間抜けな声がはもった。そしてお互い牽制するように視線を交わらせる。

「奇遇ね。私はこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど」

「わたくしもまったく同じですわ」

「「む……ッ……！」」

視線に込められるものが警戒から敵意へと変わる。

少し前の山田麻耶との模擬戦以来この2人はやたらと張り合う事が多かった。

「この際どっちが上かこの場ではつきりさせておくっても悪くはないわね」

「よろしくてよ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけて差上げますわ」

「勿論、私の方が強いってのは分かってるんだけどね」

「ふふっ。弱い犬ほどよく吠えると言っけれど本当ですわね」

「どういう意味よ！」

「自分が上だと態々大きく見せようとしているところなど典型的ですもの」

「その言葉、そっくりそのまま返してあげる！」

同時にブルーティアーズと甲龍を展開させて構える。

そして抗戦しようとした瞬間。2人の間に爆炎が奔った。

瞬時に着弾点から射手の位置を割り出しそちらを向く。そこには――

――機体名『シュバルツィア・レーゲン』。操縦者名――ラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女が好戦的に笑っていた。

「どういつつもり！？ いきなりぶつ放すなんて！ いい度胸してるじゃない！」

鈴がすかさず噛みつくが、ラウラは挑発的に機体を見回すと明らかに嘲笑した。

「イギリスの《ブルーティアーズ》に中国の《甲龍》か。データで見た時の方が強そうだったな」

「何、やるの？ 態々ドイツくん dari から来てボコられに来るなんて大したマゾっぷりじゃない。それともジャガイモ農場ではそういうのが流行ってるの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうやら共通言語をお持ちでない様ですから、あまり苛めるのは可哀そうですね」

痛烈な皮肉を投げかける鈴とセシリアだったが、ラウラに対して刺さった様子はなく呆れたように溜息をついた。

「貴様等の様な者が私と同じ第三世代型の専用気持ちは……。数くらいしか能のない国と、古いだけ取り柄の国はよほど人材不足と見える」

皮肉を皮肉で返され鈴とセシリアの中で何かが切れた。
装備の最終安全装置を解除。ラウラに敵意を剥き出しにする。

「スクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね……！」

「フン。二人がかりで来たらどうだ？　くだらん種馬を取り合うようなメスにこの私は止められない」

「今何て言った！？　私の耳には『どうぞ。好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど！」

「この場にはいない人間の侮辱までするとは！　その軽口、二度と叩けぬようにして差し上げますわ！」

「フツ。前置きはいいい。とつと来い」

「「上等……！」」

4

「王手飛車取り」

「……………」

将棋盤を前にして固まる。これまで前戦全敗。勝ち星なし。
眼の前の学園の良心と名高い壮年の穏やかな男性に徹底的にやりこめられていた。

飛車を捨てればより速く反撃する事が出来る。しかし——飛車を捨てたとしてもキツチリ１手。何処に指しても必ず詰まされる形が出来あがっている。

反撃の為の手を捻りだそうとするが、持ち駒も既に桂馬しか持っていない。

「ま、負けました」

「ありがとうございます。いや、いい息抜きになりましたよ」

「流石にこれだけ負けると悔しいッス……」

「いやいや。中々強かったですよ。何度かヒヤツとさせられました」

特訓前の息抜きにシヨージを指していた。

穏やかに受け応えるのは轡木十蔵くつぎじゅうぞう。この学園の用務員——というのは仮の姿。その実態はIS学園の実務経営を取り仕切る事実上の運営者だ。

男性がトップだと女尊男卑の風当たりがきつい為、表向きは十蔵さんの奥さんがトップという事になっている。正直能力があれば、男でも女でも関係ないと思うが、社会がそういう風に出てしまっているのだから仕方ない。

話が脱線したが、オレと十蔵さんは楯無さんの挨拶しに行った次の日に引き合わされて以来のシヨージ仲間だ。

何度か対局したが、そりやもう強いなのつて……。

当たり前のような顔して本格的な矢倉囲いなんか組んでくるから、俄仕込みの四間飛車なんかじゃ敵わねー。

意気消沈していると外から騒ぎ声が聞こえてきた。

「騒がしいッスね」

「何かあったのでしょうかね？」

「オレ見えますよ」

立ち上がり用務員室から出て騒いでる生徒を捕まえる。

「何かあったのか？」

『大変！ 大変なんだよ！』

「何が？」

『第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦やってるんだって！』

「代表候補生3人！？ 誰だ！？」

『えーっと、セシリアと鈴と、最近転校してきた——』

「ラウラ・ボーデヴィツヒか!？」

『あ、そうそう。そんな名前だったような——ってあれ? 何処に行くの浮舟くん!』

聞くや否や全力で走った。もし、セシリア・オルコットと凰鈴音に何かあれば一夏は間違いなくラウラを敵として認識するだろう。アイツは自分の親しいものを傷つけられることを極端に嫌う。そして自分が率先して前に出て周りを守ろうとする。

護衛の身としては一夏の性格は胃が痛い。だがそれが織斑一夏という人間を形成している以上、それを安易に否定する事は出来ない。オレが復讐者である事を選んだように、一夏も守護者としての道を突き進むのだろう。

だが、今の一夏ではラウラには到底敵わない。

これはラウラと一夏の間には絶対的なIS操縦者としての経験の壁が立ちはだかる。

しかし、オレなら勝てる。

例えIS操縦士としての技量が劣ろうとも、ラウラの性格や戦闘スタイルを知っているオレならラウラを潰す事が出来る。

しかし——本当にそれでいいのか?

——感傷的になるな。感情を超えるもの。それがプロとしてのプライドだ。

——そうやって、大事なものを少しずつ失っていくのか?

——構わない。先生を殺したあの日、オレは決めた。例え破滅しようとも先生をあんな風にした奴を皆殺しにすると。その為に必要ならなんだって捨ててやる。

——今なら戻る。あの優しい世界に。あの日々に。先生はもういないけど、ラウラがいて、一夏がいて、篠ノ之がいて、オルコットがいて、ファンがいて、織斑先生や山田先生がいて、十蔵さんがいて、楯無さんがいて一緒にあって笑っているオレがいる光の世界に。

—— 必要ない。オレの進む道に優しさなんて要らない。優しさは誰かを救う事は出来ても、壊す事は出来ない。オレの欲しいものは壊す為の力。安息。安寧。平安。幸福。そんなものは要らない。もう何も—— いるものか！

第18話 地雷

ドゴオオオン！ という轟音と同時に土煙が舞う。

セシリア・オルコットと凰鈴音は手を地について肩で息をしていた。

「く、くう……。」

「ま、まさかこのわたくしが……」

「どうした？ もう終わりか？」

対するシュバルツェア・レーゲンを駆るラウラはボロボロになった2人を見下ろして嘲笑した。プライドを傷つけられたセシリアと鈴はすぐさま再び飛び上がった。

ラウラは好戦的に笑うと肩にマウントしてあるレールカノンが火を噴き2人を襲う。

セシリアと鈴は散開して回避。鈴は近接格闘用装備《双天牙月》を展開。スラスターを噴かせラウラとの距離を詰め、豪快に斬りかかった。

セシリアは後退してビットを繰り出し鈴を援護する。

ラウラはセシリアの攻撃を機体を回転させながら避けきり、プラズマ手刀で応戦した。

激しい鏖迫り合いでスパークが飛び散る。蹴りで鈴を弾き飛ばし、レールカノンを放った。

鈴はそれを辛うじて避ける。

「くらえっ！」

ジャカ！ という音と共に甲龍の両肩が開き、衝撃砲が最大出力で放つ。

轟音と共にラウラを目掛けて飛ぶ空間圧縮兵器の一撃はラウラが右

手をかざすと同時に目標に届く直前で弾けた。鈴は自身の必殺の攻撃が届かない事に顔を歪めた。

「無駄だ。このシュバルツィア・レーゲンの停止結界の前ではな」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。AIC。シュバルツィア・レーゲンの第三世代型兵器。慣性停止結界。ISに搭載されているPIC——ISは浮遊・加減速を司る機能——の発展形であり、対象を任意に停止させることを可能とした兵器。

この機能を巧みに使いこなし、ラウラは鈴の放つ衝撃砲をいとも簡単に受け止めていた。

「まさかここまで相性が悪いなんて……！」

ラウラは無数のワイヤーブレードを放ち、縦横無尽な動きで鈴を追い詰めていく。

大きく旋回してかわそうとする鈴だったが、蛇のようにうねるワイヤーに足を絡め取られた。

「フン。この程度の仕上がりで第三世代型兵器とはな。笑わせる」

展開していたビットから無数のビームが降り注ぎ、ラウラはそれを難なく回避する。

それ読んでいたセシリアはラウラの回避先にミサイルを放ちビットがラウラを追い詰めていく。ラウラは右手をかざしミサイルは爆散し、ビットの動きが止まった。

しかし、

ラウラの動きを止めたセシリアは既にスナイパーライフル《スターライトMk?》でシュバルツィア・レーゲンに狙いを付けていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアが引き金を引き、ラウラはレールカノンを同時に放つ。
轟！！と爆炎が舞い上がり、ビームとレールガンが相殺された。
ラウラは鈴を捕えていたワイヤーブレードを振り回し、セシリアにぶつけ、地面に叩きつける。地上に落ちたセシリアと鈴にトドメとばかりに近づきレールカノンの砲門を向けるラウラに鈴は衝撃砲を撃ち込んだ。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

鈴の衝撃砲の発射の間隙を縫いラウラのレールカノンが鈴の龍砲を撃ち抜いた。

その瞬間。千載一遇の勝機をセシリアは見逃さなかった。

まともにやっても勝ち目はない。悔しいが技量は相手の方が完全な上で、今まで戦った誰よりも強い。しかし、だからといって諦めたくない。

ふと、圧倒的な実力差があるにも関わらず万に一つの勝機を手繰り寄せた旭の事が脳裏に浮かんだ。

旭ならどんな状況でも万に一つの勝機を狙い、最期まで足掻くだろう。

そんなに諦めのいい性格なら自分はあるなりに苦戦しなかった。なら自分は？

勝機が見えないからといって諦めてしまっているのか？

そんな筈がない。自らの想い人である一夏を侮辱され、このまま引き下がるわけにはいかない。

なによりここで簡単に終わってしまえば、あの時自分が憧れ、近づきたいと願ったあの人の背中に一生かかっても追いつけない。そう思ったら考えるよりも先に体が動いた。

セシリアは反動も、自分に振りかかるであろうダメージも度外視して至近距離からミサイルを撃ち込んだ。ラウラはセシリアの捨て身の攻撃の前に驚愕しながら爆炎に包まれる。

爆風を受け、セシリアと鈴も同時に吹き飛ばされ地面に叩き付けられた。

「む、無茶するわねアンタ……。あのウニに似てきたんじゃない？」
「苦情はあとで。これなら少しはダメージが——」

セシリアの表情が凍った。

爆風で吹き飛ばされた土煙の中にはほぼ無傷のラウラの姿があった。煙幕のようになっている土煙を利用して奇襲すれば自分達は確実に墜とされていただろう。

しかしラウラはそれすら必要ないといわんばかりに堂々と正面から姿を現した。

まるで、自分達との絶望的なまでの力の差を見せつけるように。

「終わりか？ …… なら、今度はこちらの番だ」

シュバルツェア・レーゲンからワイヤーブレードが射出される。

決定打ともいえる渾身の一撃をも無効化され、呆然としていたセシリアと鈴は成す術もなく囚われた。

ワイヤーに引き摺られセシリアと鈴は苦悶の声を上げる。

ラウラはそんな事はお構いなしに2人を自分の間合いまで引き寄せると、あえて何も武器を使わずに格闘戦で痛めつけた。

殴り、蹴り、絞め、引き摺り回し、叩きつけISのアーマーを破壊していく。

ブルーティアーズと甲龍のシールドエネルギーは既に機体維持警告レッドゾーンを迎えていたが、ラウラは攻撃の手を一切緩めない。

ラウラの表情が愉悦に歪み、狂気に染まろうとしていたその時。

アリーナのシールドが破られ、白式を展開した一夏が瞬間加速で真っ直ぐに突っ込んだ。

[illegible]

ワンオブアビリティ
単一仕様能力零落白夜を最大出力で発動しラウラに斬りかかる。
それを見てラウラはつまらなそうに鼻を鳴らした。

「フン。感情的で直情的。絵に描いたような愚図だな」

雪片式型の刃が届く直前にラウラは手をかざし、停止結界を展開させ、一夏の体が固定された。一夏は腕を押しても引いても、微動だに出来ない。

「やはり敵ではないな。この私とシュバルツェア・レーゲンの前では有象無象の一つでしかない」

ラウラは停止結界に囚われ、動けない一夏にゼロ距離でレールカノンの砲門を向ける。

「消えろ！」

直後。空から無数の銃弾がラウラに降り注いだ。

「一夏、離れて！」

上空からフランス代表候補生。ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を駆るシャルル・デュノアがラウラをマシンガンで牽制しながら飛翔する。

「チツ。雑魚が……ッ！」

降り注ぐ弾丸を低空飛行で避けつつ、ターゲット・織斑一夏に定め、ロックした。

「終わり——ッ!？」

シュバルツェア・レーゲンのアラートがけたたましく鳴った。

——警告。左舷より熱源反応。ロックされています。

「何!？」

轟!!! と、膨大な光の奔流がラウラの左側から襲い、機体を捉える。

完璧な不意打ちだった。眼帯をしている為、完全に死角になっている左側からの反応が遅れた。シュバルツェア・レーゲンの絶対防御が発動し、シールドエネルギーの6割を削っていく。

——左舷上空に戦闘状態のISを感知。ISネーム【**暴風**】ハヴオック・ゲイル。操縦士名——『浮舟旭』。

「「旭!？」」

思わぬ乱入者に一夏とシャルルは驚愕した。

一夏とシャルルの反応などお構いなしに旭はセシリアと鈴を囚えているワイヤーブレードをスナイパーライフルで撃ち抜いた。

「一夏。シャルル。オルコットとファンを連れて下がれ」

「そんな訳に行くかよ！ 仲間がやられてるのに——」

「間違えるなよ。今アンタがやるべき事はアイツを潰す事じゃない。あの2人を医務室に連れて行くことだ」

「けど——！」

「一夏」

「——ッ！ ……わかった」

一夏はシャルルの呼びかけで我を取り戻し、納得いかないまでも何とか溜飲を下げてセシリアと鈴を担ぎ、アリーナを後にする。

「逃がす——ッ！？」

旭は一夏を追おうとするラウラを撃つ。ラウラは機体を横に滑らせ回避した。

「残念だラウラ・ボーデヴィツヒ」

ラウラは無感動で無機質な瞳で見詰められ、威圧感に吞まれそうになった。

今、自分に向けられているものの正体。それは——殺気だ。

ここでラウラは初めて知る。

彼女は訓練のときの手合わせの場の《ストレンジャー異邦人》しか知らない事に。彼の本領である『殺し合い』という場での旭の実力を知らない事に。

対する旭の中では激しい怒りが渦巻いていた。

セシリアと鈴のボロボロの姿が視界に入った時、彼女たちの姿が《ジョン・ドゥ身元不明》の最期の姿と重なった。

敢えて武装を使用せず、痛めつけ、苦しめる事を目的とした暴力。かつて自分が先生と呼び慕った女性が受けた苦しみを長引かせる為

に死に至る急所を徹底的に避けて行われた拷問。

その結果である全身に釘を打ちつけられ、顔の半分を焼かれ、指を全て斬り落とされ、耳を半分削ぎ落されたあの惨い姿。そして、彼女に懇願されトドメを刺した過去の自分。

ラウラは《異邦人》の最大の地雷を踏んだ。

激しい怒りと反比例して、頭の中が急速に冷えていく。

ラウラに向かって発する言葉はただ一つ。

「殺す」

その一言にラウラに向ける負の感情の全て集約されていた。

「アドヴァンテージ起動」

リミッター解除率10パーセントから30パーセントへ移行。

事象予測範囲を0.5秒から1.0秒に変更。

搭乗士との脳波リンク終了。

システムオールグリーン。

アドヴァンテージlevel.1起動。

スクリーンが投影されハヴォック・ゲイルを包む。

銃口をラウラに向けてトリガーを引き絞った。

ラウラは機体を回転させ回避。矢継ぎ早に繰り出される狙撃をやり過ぎ、プラズマ手刀を展開。イグニッションブースト瞬時加速で距離を詰めた。

旭は狙撃ライフルを収納し、ツインバレットを展開し、連射してラウラを牽制する。

ガキン！！ とプラズマ手刀をツインバレットのグリップで受け止め、弾き飛ばされる。後方へと飛ばされた反動を利用して距離を取

り太陽を背にして狙撃しようとするが、シュバルツエア・レーゲンは再びイグニツションブーストで間合いを詰め斬り掛かってきた。跳躍して斬撃をかわし、上空に筒状の何かを投げた。しかしラウラはそれに意識を向けない。少しでも意識を逸らせば、旭に何かする隙を与えてしまう。

旭は投げた筒に狙いを定め、狙撃した。

直後、停止結界に捕まり、プラズマ手刀でライフルは破壊され爆散する。

「終わりだ!!」

「アンタがな」

ピカッ!! と眩い光がアリーナを覆った。

ラウラは目が眩み、機体の制御が乱す。旭はその隙に死角である左側に回り込み蹴りあげ、バレットの銃身でラウラの頬を打ち据えてゼロ距離で弾丸を撃ち込んだ。

「グッ……! 閃光弾……!?!」

「アナログ兵器も侮れねーだろっ!」

辛うじてシールドの展開は間に合ったが、打たれた頬の痛みと口中一杯に広がる血の味がラウラの神経を逆撫でした。

怒りのままにプラズマ手刀を振り下ろすが、既に旭は離脱しており、繰り出した攻撃は虚しく空を切る。

旭との距離を詰め、右手をかざして停止結界で彼を捕らえようとするが、空間固定の位置がわかっていたかのように避ける。

ラウラは苛立っていた。IS操縦士としての旭の技量は弱いとまではいかずとも、所々操作に稚拙な面が目立つ。少なくとも先ほど自分が沈めた代表候補生2人を遙かに下回る事は確かだ。その程度の力量しか持ち得ない旭に此方の動きをすべて見透かしているかのよ

うに、のらりくらりとした動きで致命傷に成りうる攻撃をかわされ、詰め切れないでいる。

立ち回りが上手いという次元を越えてしまっている。

此方の動きをすべて見透かし、戦闘プランを組み立てているような動きだった。

まさか、あのISには未来を読み取る力があるのでは？　とラウラの脳裏に仮説が浮かぶ。

もし自分の仮説が当たっているならIS戦闘において素人の彼に手こずるのも得心がいく。

刹那の判断が必要なIS戦闘において、相手より未来事象を読み取り、対応出来る力。

もしそんな代物が存在しているなら——それは最早『絶対たる力』と言っても過言ではない。

自分はそんな存在と戦っているのだ。

だが、ラウラにも『戦うために生み出された存在』という矜持がある。

相手が絶対たる力の使い手だからといって退くなど有り得ない。『絶対たる力』を扱っているといっても、旭はその一片とて扱いかねている。それなら自分にも十二分に勝機はある。

上空からバレットを連射する旭にラウラはワイヤーブレードを射出した。

鎌首をもたげる蛇のような動きでワイヤーブレードは旭の逃げ場を塞ぐ。旭は瞬時に蹴りでワイヤーの軌道を変更し、離脱しようとしたが、下から発射されるレールカノンに対する反応が一瞬遅れた。

「く……ッ!!」

辛うじて直撃は避けたが、左半分のアーマーが破損し、破片が旭の額を掠めた。おびただしい量の血が左目に流れ落ち、彼の視界の半分を奪っていく。

「チツ……」

「勝負あつたな」

ラウラは薄く笑い、ボロボロになって伏している旭を見下ろした。

旭は起き上がりながらダメージを確認する。左手のアーマーが破損し持っていたバレットも破壊されている。スラスターの機動性も60%ダウン。IS全体のダメージがDを超えている。これ以上の運用は危険だ。

しかし――

「勝手言ってんじゃねーよ。オレはまだ生きてる。オレ達の生きている世界ではやりあうならば相手は必ず殺せ。そういう世界だろう？」

「……………、そうか。ならば、今トドメを刺してやる」

ラウラは旭にレールカノンの照準を合わせる。目の前にいる男は自分を裏切り、あんな愚図の味方をする裏切り者だ。と自分に言い聞かせながら。

眼を閉じて彼を撃つ決心をつける。幼い頃の思い出も、共に過ごした日々も、彼がくれた温もりも。

――すべて捨て去るように。

チクリと胸が痛んだ。自分にもこのような感情がある事に少し驚きつつもそれを押し殺す。

――それは未練だ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。そんな甘い考えでは一生かかっても教官に追いつけない。

「……………」

無言で砲門を旭に付きつけ、打ちだす為のタメを作った。その瞬間、狙いをすましたかのように、旭は砲門の中に光弾を撃ち込んだ。ボン！！ という小さな爆音と共にラウラの頭に衝撃が走ると同時に絶対防御が発動し、ある程度のダメージは抑えられたが、動揺は隠しきれない。

バサアッ！ と地に伏した時にコツソリ隠し持っていた砂利をラウラに投げつけ視界を奪う。

「グツ……………！ クソツ！ 《ストレンジヤー異邦人》アアアアアッ！！！」

ラウラは痛む目を押さえながら吠える。怒りのままに残った片方のレールカノンを闇雲に連射していくが、旭に命中する事はない。旭も後退しながら左側に回り込み右手のバレットでラウラを狙うが片目が塞がっている為、狙ったポイントと着弾ポイントがずれる。

「クソが……………っ！！」

乾坤一擲の反撃のチャンスを逃す事に苛立つが、すぐさまISSスーツを破り額に巻きつけ申し訳程度の止血を済ませる。ラウラもその間に眼を開ける程度に回復させていた。

両者肩で息をしてある程度の間合いを保ったまま対峙した。

旭もラウラも暴力の世界の中で生きてきた人間だ。

だからこそ、互いに『戦う』事は『互いを否定し合う』という事だ。『暴力は何も生み出さない』

陳腐で使い古された言い回しだが、真理だと旭は思う。

昨夜、箒に言った『暴力の使い手は須らく破滅の道を辿る』というのは自分とラウラの辿るべき運命を示唆していた。

今日、ここで。自分かラウラのどちらかが死に、どちらかが生き残る。あるいは相打ちか。

しかし、自分は死ぬ訳にはいかない。師である《身元不明^{ジョン・マウ}》の仇を討つまでは死ぬ事は出来ない。

それがわかつているからこそ最期の一手は全力で――。

――アドヴァンテージリミッター解放率30%から50%へと移行。

――事象予測範囲を1秒から2秒へと移行。

――搭乗士との脳波リンク――危険水域に到達。

――アドヴァンテージlevel2起動。

「グッ……！ アアアアアアアアアアッ！！！！！」

急激に脳に掛かる過負荷に旭は苦しみ荒い息を吐く。

アドヴァンテージlevel2。現状で旭が扱える――いや、人間が扱える高速演算による高精度事象予測能力。

旭の五感から収集した情報を高速演算させる事で未来予知にも似た行動予測が可能とした能力。一見汎用性が高く便利な機能に見える。しかしこの機能には致命的な欠陥が存在した。

脳への過負荷。

アドヴァンテージから脳に流される情報量は膨大だ。

日常で無意識のうちに取捨選択している音や対象のミリ単位の一挙手一投足動きも演算の対象となる。

そんな膨大な情報を人間の脳に流し込めば脳にかかる負担はあつという間に許容量を超え、最悪の場合発狂だろう。

許容量を超える電圧を回路に流せばオーバードロードで焼き切れてしまうように。

そのリスクを承知で旭はアドヴァンテージを使用する。

危険でも何でも、自らが生きる目的である復讐を果たす為なら躊躇

う理由はない。

復讐という目的が旭を支えている。目的を達成するまで彼は走り続けるだろう。

例え燃え尽きる事になろうとも。

「……そろそろ終わりにしようか」

「……ああ、そうしよう」

旭とラウラは構え、互いの出方を窺う。

そして――

「おおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「はああああああああああああああっ!!」

旭とラウラは吠え、正面から突撃した。

ドン!! と振動がアリーナを揺らす。旭とラウラは突如として自分達の間に割って入った銃弾に慄いた。

「その生徒達! 学校で殺し合いは駄目よ」

「何者だ?」

「た、楯無さん!？」

スカイブルーのIS《ミステリアス・レイディ》を展開していた更識楯無の姿であった。

「あら。旭くんこんなボロ雑巾みたいにされちゃって」

「何しに来たんですか?」

「言ったでしょ。この学園内で殺し合いなんて物騒な事を始めた2人を止めに来たんだよ」

「邪魔をしないでください。アイツは! アイツだけは!」

「うん。聞く気なし？ それじゃあちよつと手荒になるけど……
えい」

「ぐお……ッ!？」

楯無の軽い声と同時に放った当てを喰らった。弱っていた旭は地に沈み悶絶している。

それを見ていたラウラはしばらく啞然としていたが、すぐさま敵意に満ちた瞳を楯無に向けた。

「ダメダメ。そんな機体状況で私には勝てないよ」

「……………!？」

ラウラは自分の機体の状況を看破されて眼を見開いた。

ラウラと旭。傍から見れば旭がラウラに一方的に追いつめられているように見えるが、実際に追い詰められていたのはラウラも同じだった。

セシリアと鈴との戦闘と旭との連戦。絶対防御2回。レールカノン片方の破損と連射。

度重なるエネルギーの消費でシュバルツェア・レーゲンのエネルギー残量は既に10を切っている。

あと一撃でも攻撃を喰らっていれば、レーゲンは戦闘不能に陥っていただろう。

「退けラウラ」

「きよ、教官!？」

楯無に続いて姿を現した織斑千冬にラウラは背筋を伸ばした。

「これ以上は教師として黙認しかねる。これ以上やるというのなら、学年別トーナメントでやれ」

「……………、わかりました。教官がそう仰るなら」

「では、学園別トーナメントまで一切の私闘を禁止する。解散!」

「ストレインジャー」

「《異邦人》。織斑一夏に伝える。学年別トーナメントで貴様を排除する、と」

「ふざけんな。まだ一夏を狙うというのなら——その前にオレが貴様を潰す」

敵意と敵意をぶつけ合い、旭とラウラは逆方向に歩いていく。
お互いに一度も振り返る事のないまま。

第18話 地雷（後書き）

砂で眼潰しとかこんな主人公らしからぬ戦い方するキャラでいいんだろうか？

と、不安になる今日この頃です（汗）
感想なんか頂ければありがたいです。

第19話 二人一組ヘッーマンセル

1

「貴様に私の何がわかる！？ 戦うために造られた私が戦う事を奪われてしまったら何も残らない！」

軍部の病院のベットで寝かされているラウラは《ストレンジヤー異邦人》に枕を投げつけた。左目には今まで付けていなかった黒い眼帯が付けられていた。沈痛な面持ちで彼はラウラを見やる。

「ラウラ……」

「——ッ！」

最近登場したISという兵器の適応性を高めるために行われたISの適合性向上のために行われる処置。インフィニット・ストラトス

絶海の瞳。ヴォーダン・オージェ 擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指し、動体視力、視覚解像度を数倍に跳ね上げる他、ISを展開していない状態でも、最高で2キロ先の目標を狙うことが可能となるドイツ軍独自の技術。理論上、『被験者との不適合などあり得ない』とされていたが、ラウラ・ボーデヴィツヒに施術したヴォーダン・オージェは暴走し、自己の意志で制御する事が不可能となった。

そして疑似ハイパーセンサーの暴走によって押された失敗作という

烙印。それは『戦うために造られた』という彼女の存在理由を根こそぎ奪ってしまった。

それを超える事や10歳になったばかりの彼女には厳しい事だろう。

そしてその苦痛を和らげる事も当時15歳だった彼には荷が重かった。

「……………」
「……………」

沈黙が部屋を支配し、お互いに何も言えない。掛けるべき言葉が見つからない。

『戦う事以外にも出来る事はある』などという優しい言葉は吐けなかった。

彼は知っている。自分の存在理由を否定される事は、死よりも恐ろしいという事を。

自分だって師であり、自らの存在理由である《身元不明》^{ジョン・ドウ}に『要らない』と言われる事は『死』にも勝る恐怖だ。

「……………出ていけ！」
「……………」

「これ以上……………お前にこんな姿を見せたくない……………ッ！　もう……………、来ないでくれ……………ッ！」

絞り出すような細い声。彼女は体を折り、啜り泣いていた。そんな彼女の姿をこれ以上見ていられなくなり、《異邦人》^{ストレンジャー}は後ろを向いた。

「……………また、来る」

それだけ言って病室から出て、静かに扉を閉める。

出来ればラウラの傍にいてやりたかった。自分にとって妹の様な存在である彼女の痛みを、悲しみを、絶望を和らげる事は出来ないが、それでも傍にいてやりたかった。

だが、任務がある。

ファントム・タスク
亡国機業。

第二次世界大戦中に生まれたとされる秘密結社。

国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない。ゆえに目的は不明。存在理由も不確かで、その規模もわからない。

その謎に包まれた組織の全容の解明。これが今回《身元不明^{ジョン・ドウ}》と《異邦人^{ストレンジャー}》がドイツ軍から要請を受けた任務だった。

既に《身元不明^{ジョン・ドウ}》は任務のために動いている。

彼女が安全かつ自由に動けるようにバックアップする事が今回の任務における彼の役割だった。

眼を閉じ、気持ちを切り替える。

そして——確かな足取りで彼は任務に向かった。

その後——《異邦人^{ストレンジャー}》は二度とラウラの元に訪れる事はなかった。

2

「痛ててツ！ た、頼む！ もっとそーつとやってくれ！」

「い・や・よ」 旭くん、私怒ってるんだからね」

「わかったから落ち着いてくれ！ 笑顔で青筋を立てられるとマジで怖い！」

ラウラとの死闘を演じた旭は生徒会室にかつぎ込まれ、楯無による手当を受けていた。

正確にはISの破損したアーマーで深く切った額にオキシドールをグリグリと押し付けられていた。ただでさえ痛いのに、オキシドールが染みて非常に痛い。

普通なら医務室行きではあるが、そこは『完璧超人』と名高い更識楯無。少々酷い傷の手当てもお手の物。

「お嬢様。浮舟くんは怪我人ですからその辺で」

「そう！ 今、虚^{うつほ}さんはいい事言った！ という訳でオレを苛めんのはその辺で——痛アツ！ 今半端なく痛かったっ！ 無理！ それ以上は無理だって！ ゴ——メ——ン——ナ——サ——イ——ッッ！！！」

17歳の少女に涙目で平謝りする20歳。実に情けない光景である。

そんな楯無と旭のやりとりを見ていた布^{のほ}仏^{とけ}虚^{うつほ}は掛けている眼鏡をクイツと直しながら呆れたように見ていた。

虚と旭が初めて会ったのは4月の半ば。その時彼女は部活の予算割当て、会議の資料作り、学年別トーナメントの企画、運営などの仕事に追われていた。妹である本音は大事な仕事を任せるには少々心許ない。故に正式な生徒会役員である自分と会長である楯無の2人で踏ん張るしかなかった。気力、体力が限界に達したある日、楯無が旭を連れてきた。

彼は予算関係の仕事を瞬く間に終わらせていった。速く、それでいて正確に。

お陰で自分が随分助かったのを良く覚えている。

虚がその日の事を回想している間に旭は楯無に正座で『私は学園内で大変危険な行為をやらしました。海よりも深く反省しています。ごめんなさい』という文面の反省文を100枚書かされていた。

「それで、ラウラちゃんの事はどうするの？」

傷の手当ても終わり、額に包帯を巻いた状態で医務室に向かいながら今後について話していた。聞いた話だとオルコットとファンは大了したことはないらしいが、一応顔くらいは出しておくべきだろう。

「どうも、こうも——まだ一夏を狙うって言っただら始末するしかないでしょう」

「女心がわかってないね旭くん」

「そりゃ、マトモな恋愛なんてした事ありませんから」

あ、なんか楯無さんが『ダメだこのバカ。全然わかってないわ』つてな顔してる。

仕方ねーじゃないか。殺伐とした日常でマトモな恋愛なんてする余裕なかったんだから。

一応マフィアに飼われていた時に経験はあるって言えはあるが、相手は子供じゃないとダメっていう少々特殊な性癖をお持ちの女ばかりだったんだから！

「と・に・か・く、学園内での死闘は今後一切禁止ね」

「そんな！ それじゃあ一夏が——」

何か言う前に口に人差し指を当てられ黙らされた。

「問答無用」

「……………はい」

楯無さんの言葉にオレは押し黙るしかない。どうも彼女のいう事には逆らってはいけないような気がする。まあ、いい。態々正面から行かなくてもラウラを潰す手段はいくらでもある。今回は一夏がラウラと既に交戦状態になっていた為、割って入る必要があったが、オレは本来そっちの方が得意だ。

ラウラが一夏とぶつかる前に狙撃で片を付ける。

「と、いう訳で。旭くんが学園内に隠し持っていたコレは没収ね」
「アアアッ！！ オレのレミントオ——ンッ！！」

愛用の狙撃銃。レミントンM700が収められたケースを掲げられ、オレは泡を食った。

「楯無さんそれはオレの先生から譲り受けた大事な品で——」

「ダメダメ。これでラウラちゃんを狙撃する気でしょ？」

「ぐ……ッ！」

読まれてる。

「ダメだよ。そんなに安易に暴力に頼っちゃ。消えて無くなっちゃうよ。何もかも」

「構わねーよ。元々長生きする気なんか——」

「……………」

「——善処します」

輝かんばかりの笑顔に笑ってない眼を向けられ、オレは折れた。何故だろう。前から思っていたが彼女には絶対に逆らってはいいない気がする。

「ラウラちゃんがなんであそこまで自分を追い詰めているのか、考

えてあげて」

「……………」

「おねーさんからのお話は終わり」

「だからオレの方が年上だって！」

4

「別に助けてくれなくて良かったのに」

「あのまま続けてくれれば勝っていましたわ」

保健室。ラウラ・ボーデヴィツヒとの模擬戦に二人掛かりで挑み敗れ、負傷したセシリアと鈴は拗ねていた。全身に包帯や青あざで痛々しい姿だったが、その減らず口だけは健在な様子に織斑一夏は安堵の息を吐く。

正直言つて気が気ではなかった。自分がこの学園内で最も親しい部類に入る友人2人を傷つけられたという事実は一夏の頭に血を昇らせるには十分だった。

そのまま怒りのままにラウラへと刃を向けたが、一太刀も浴びせる事も出来ずに動きを封じられた。あときシャルルと旭が割って入らなかったらどうなっていただろうか、と考えるだけでも震えがくる。

「ウニの奴、大丈夫かな……………」

「きつと大丈夫ですわ……………」

鈴の言葉にセシリアが応じる。彼女のその言葉は自分に言い聞かせている様に聞こえた。

彼女の『大丈夫』には根拠など何もない。気まずい沈黙が部屋を支配する。

一夏も、シャルルも、鈴も、セシリアもそれ以上は何も言えなかつ

た。

客観的に見て浮舟旭は弱い。射撃の腕は眼を見張るものがあるが、それだけだ。

彼はISに乗り始めてから日が浅く、才能も織斑一夏と比べると見劣りする。操縦士としての技量は代表候補生を遥かに下回る。実際、代表候補生との模擬戦に全敗を喫している。そんな旭が代表候補生二人掛かりでもまるで敵わなかったラウラ・ボーデヴィツヒと対したのだ。悲惨な事になるのは目に見えていた。

一夏は自分の判断を後悔していた。何故あの時自分は旭だけにラウラの相手を任せてしまったのかと。自分も共に戦えば、あるいは――。

コンコン、と保健室をドアを叩く音が静かな部屋にやけに大きく響いた。保険医が留守にしている為、代わりに一夏が返事をする、額に包帯を巻いた浮舟旭が入って来た。

「お邪魔しまんにゃあー」

吉本のコントの様な気の抜けた挨拶にずっこけた。一夏は座っていた椅子から転げ落ち、シャルルはカクンと膝の力が抜け、セシリアと鈴はベットの上で脱力した。

「へいへい、どうしたー？ 揃いも揃ってゾンビでも見たような顔しやがってー」

「アンタ無事だったの！？」

「勝手に人を悲惨な事にすんな」

軽口を叩き大した事ないと示す旭だったが、セシリアは彼の額に巻かれている包帯を見てハツとした。

「その傷——ッ！」

「見た目ほど大したもんじゃねーよ。気にすんな。それよりアンタらは大丈夫なのか？」

「見た目ほど大したことはないわよ！」

「そうですわ！ このセシリア・オルコット。この程度のダメージで——！」

チヨンと一夏が2人の肩をつついた。それと同時にセシリアと鈴は体を震わせて悶絶する。

「アホかアンタらは。怪我人は大人しく寝てろ」

「アンタだって怪我人でしょうが……ッ！」

「オレは体が相当頑丈に出来てるからいーんだよ」

旭は軽快に鈴の言葉を受け流していく。先ほどまでの重苦しい雰囲気気が払拭されていた。

「それで、どうでしたの？」

「ん……。まあ痛み分け、だな」

「痛み分け、ですか……？」

「決着つけようとしたら生徒会長に止められた」

「まあ、そりゃそうよねー。そんな模擬戦で流血なんて事になったら、学校側も止めるしかないでしょ」

「まあ、なんにしても無事で何よりだ」

5

「——と、言う訳で相も変わらずラウラのアホは一夏を狙っている」

状況を説明を終えた後、全員頭を抱えた。

「状況変わって無くないかソレ？」

「えっと……、『試合で決着をつける』っていう織斑先生の言葉があるから、普段襲われるって心配はないよね」

フォローするようにシャルロット・デュノアは控えめに言う。

「そう言う訳で、大会当日に織斑先生の名前を使って呼び出して接着剤入り落とし穴に落としてしまおう」

「何がそう言う訳だ！」

「なにこれ以上ないくらいさわやかな笑顔でこれ以上ないほどドス黒い事言ってるのよアンタは！」

「浮舟さんには紳士として足りないものが多すぎますわね……」

「オルコット、一ついい事を教えてやろう」

「？　なんですか？」

「お膳立てされた綺麗な舞台で戦えるのは物語の中の正義の味方だけだ。そんでもって、この世は悪い奴が一番強い」

「……最悪ですわ」

「そうとも。オレは最悪なんだ」

さて、どうしよう。と、全員であーだ、こーだとラウラ対策を練っていると、ドドドドッ！　と地響きが。——ラウラの襲撃か！？　咄嗟に破損したハヴオのアーマーの腕部装甲とバレットを展開して警戒する。

しかし、それは取り越し苦労に終わった。

バンツッ！！　と、勢いよく扉が開かれる。

「織斑くん！」

「デュノアくん！」

「ついでに浮舟くん！」

だ・か・ら！ やっぱりオレは『ついで』かいな！
かなり失礼な発言にもう笑うしかね……。――

「な、なんだなんだ！？」

「どうしたのみんな？ ちょ……ちょっと落ち着いて！」

鉄砲玉の勢いで詰め寄る女子たちに一夏とシャルロット・デュノアは戦っている。

その様子を一步引いた所から見ていたオレは呆れ気味に溜息をついて装甲を収納した。

『『『コレ！！』』』

こちらの都合お構いなしに押し掛けてきた女性陣は揃いも揃ってとある書類を掲げた。

「あーつと……、『今月開催する学年別トーナメントではより実践的な模擬戦闘を行うため、2人組での参加を必須とする。』――つてなんじゃこりゃ！？」

随分いきなりなルール変更だなオイ。

『私と組もう織斑くん！』

『私と組んでデュノアくん！』

もう病室では静かについていう最低限のモラルすら吹っ飛んじまってる。

フッ、コレが若さってヤツか……。

「なにをお年寄りの様な事を考えていますの」
「人の思考を勝手に読むのはやめてもらおうか」

ジト目でこちらを見て冷ややかに言うセシリア・オルコットにツッコミを入れた。

「悪い！ 俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

予想通りそんな逃げ口上を叫んだ一夏に騒がしかった部屋はシンと静まりかえった。

これは大ブーイングか……？

『まあ、そう言う事なら』

『他の女子と組まれるよりはいいし』

『男同士っていうのも萌えるし——ゴホンゴホン』

……。女の切り替えの速さってスゲー……。最後の奴の言葉を聞こえない振りをしつつ、曖昧な笑いを浮かべるしかなかった。

「さて、オレもペアを探さねーと、な」

楯無さんに申し込んでみるか？

「浮舟さん、わたくしでよければ組んで差し上げてもよろしくてよ」
「なんでそんなに上から目線！？——っていうかアンタと組むくらいならファンと組む」

「わ、わたくしの技量が鈴さんに劣ると言いたいんですかっ！？」
「ちよっと待ちなさいよ！ アタシの意志は！？」

「聞いてない」
「が……っ！」

ファンがオレに怒鳴り散らす、それをスルーして理由を説明する。

「オレとアンタは相性が悪いんだよ。あ、勿論体の相性って意味じゃないぞ？」

オルコットが顔を真っ赤にして枕を投げつけてきたが、上体を少し反らし軽く回避。

「セ、セクハラですわ！」

「セクハラですが、なにか？」

「開き直らないでくださいっ！」

「大丈夫だ。アメリカ人には言わねーから。奴ら二言目には『訴えてやる』『裁判だ』とか。まったく訴訟大国はこれだから——」

「そういう問題ではありませんっ！」

「アンタの機体とオレの機体はミドルレンジ、アウトレンジでの戦闘を想定して武装もそれ用ばっかだろ」

「シレッと流さないでくださいっ！」

「遠距離からバカス力撃っているだけならまだしも、お互い近づかれたら打つ手なし。それならお互いに弱点を補う為に接近戦を得意とする奴と組む方が弱点を潰し合えるから効率がいい」

まあ、その理屈でいくと一夏とシャルロット・デュノアとの相性はいい。

白式はスペックは非常に高いが、機体の特性がアンバランス過ぎて汎用性が低い。特定の条件下ではその強力無比なスペックを十全に生かす事が出来るが、それ以外の局面では極端な程弱い。つまり白式が勝つためには『如何にして相手との間合いを詰めるか』という

ことが命題になってくる。しかし一夏は『勝つ為の状況を作り出す』
という技術が経験不足故に未熟。バカの一つ覚えの様に【瞬間加速】
を使ってくるだけだ。しかし、シャルロット・デュノアと連携して
くるなら話は違ってくる。

【ラファール・リヴァイヴ】はオールレンジでのパフォーマンスが
可能な汎用性の高い機体だ。どんな局面になっても【白式】を援護
する事が出来る。リヴァイヴが敵を牽制して、白式が決める。単純
だが、それゆえに崩しにくい陣形だ。

「ちょっとウニ！ アタシはアンタと組まないからね！」

「あーっと、申し込みの締切日は――」

「聞きなさいよ！」

「むー……。何故こんなにムカムカするのでしょうか……」

「ダメですよ3人共」

山田先生が部屋に入ってくるなりハッキリとそう言いきった。

「何が駄目なんスか？」

「出場は許可できません」

「何故？」

「まずはオルコットさんと凰さん。御二人のISの状態を確認した
ところ、ダメージレベルがCを超えています。当分修復に専念しな
いと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも
トーナメント参加は許可できません」

「う、ぐ……ッ！ わかりました……ッ」

「不本意ですが……ッ！ 非常に不本意ですが……ッ……ッ！」

絞り出すような声で山田先生の言葉を受け取るオルコットとファン。
ISには戦闘経験を含むすべての経験を蓄積させる事によってより
自らを進化した状態へと移行させる。その蓄積には損傷時の稼働も

含まれ、ISのダメージがCを超えた状態で稼働させると不完全な状態でのエネルギーバイパスを構成してしまい、正常事の稼働に悪影響を及ぼす事がある。つまり早い話がISのドクターストップつてところだ。

まあ、それでそれでも我を通し、強行するようなら代表候補生失格か……。

2人が参加できない理由は分かった。分かったが、

「オレは？」

ハヴォのダメージレベルはD。武装もラウラに大分壊されたが、1週間もあれば完全修復出来るだろう。オレの方もこの程度の傷なら3日で全快だ。

出場を止められる理由はないはずだが……？

「浮舟くんには織斑先生から強制待機命令が出ています。短期間に
ハヴォック・ゲイル
【暴風】に搭載されているあの機能——アドヴァンテージの過度使用」

「……………」

「心当たりがありますよね」

「……………まあ、そッスね」

「浮舟くん。あの機能は二度と使わない方がいいです。このまま使い続ければきつとあなた自身の身を滅ぼします」

「……………最悪のときの覚悟は既に出ています。でなければあんな狂ったシステム使いませんよ」

「……………」

「話はそれだけッスか？ それでは失礼します」

「浮舟くん！」

「……………トーナメントは辞退しておきます。それで問題ないでしょう？」

それだけ言って保健室を後にする。
誰にも邪魔はさせない。操縦士としての才能のないオレが一流の操縦士——そして亡国機業と互角に渡り合うにはアドヴァンテージは必要だ。

あいつらを皆殺しにする為なら——命くらいいくらでも懸けてやるさ。

6

『ラウラちゃんがんばるであそこまで自分を追い詰めているのか、考えてあげて』

転がり込んだ用務員室で楯無さんの言葉を思い出し、懊悩とするが、一向に答えは得られない。

そもそもラウラの行動には不明瞭な点多すぎる。

織斑一夏は織斑千冬のたった一人の身内で、かけがえない存在といてもいい。

それこそ世界中の期待を一身に受けたモンド・グロツソの決勝を放棄するほどに。

そんな存在である一夏を排除するという事は織斑千冬の覚悟を無駄にする行為だ。そして——ラウラが敬愛してやまない織斑先生の憎悪の対象になるという事に他ならない。

アイツはそれを分かっているのか？ 憎悪を向けられる覚悟があるのか？

いや、違う。そんなものじゃない。アイツがファンとオルコットにやった事はそんな覚悟を持っている者のやる事ではない。やり口があまりにも子供じみている。

分からない。分からない。ワカラナイ……。

オレは一体何を見落としている？

なにか重要な事を見逃してはいやしないか？

そして――答えが分からないまま、学園別トーナメントの日を迎えた。

第20話 開幕

1

「そうそうたる面子だな」

学園生徒に誘導されている各国の政府関係者、研究所長、企業エージェントといった顔ぶれを眺めて旭は溜息交じりに呟いた。

「テロリストなら垂涎ものの状況だよな」

「だからこそ万全の警備体制で臨むんだよ」

会場の各地にはSPや金属探知機、教員による警護が置かれており、嚴重な事この上ない。

流石は国家プロジェクト。と、旭は内心感心した。

「学年別トーナメントは複数の国家による合同プロジェクトみたいなものだからね」

「三年はスカウト、二年は成果報告で企業や国家へのアピール、つてところか」

「その通り。旭くん、わかってると思うけど」

「わかってるよ。目立って仕事をやりにくくするようなしねーよ」

一回戦。ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒ペア対織斑一夏、シャルル・デュノアペア。

「思ったより早いな。さーて、どうする？」

旭はアドヴァンテージの後遺症を危惧した織斑千冬の命令で学年別トーナメントに参加できない。「別に何ともねーのに」と、旭は一人零すが介入する余地がないという事態は変わらない。あるいはコレを計算した彼女の策略か。

色々考え込んでいると、突然後ろから髪の毛を一本抜かれた。

「■■■ッ！」

不意に頭皮に奔った痛み旭は日本語ではない呪文のような言語で悲鳴を上げる。が、周りの喧騒に掻き消された。

「白髪発見♪」

「楯無さん……」

悪戯を成功させた子供の様な笑みを向けられ、旭は頂垂れた。

「そんな難しい顔してると幸せが逃げちゃうよ」
「ほつといってくれ」

旭は苦虫を噛み潰したような表情で引き攣った笑いを浮かべた。

2

更識楯無は浮舟旭と別れた後、先ほど彼の頭部から引っこ抜いた白髪を眺めていた。

一昨日まではそんなもの無かった。

旭の黒髪に白髪はよく目立つ。

原因は心当たりがある。高速演算処理システム・アドヴァンテージ。あのシステムは脳に相当な負荷をかける。

人間の脳は普段潜在能力の3割しか使用しておらず、残りの7割は無意識にリミッターをかけている。理由は多々あるが、どの理由もすべて人体がもたないというものだ。

あのシステムは使用者との脳波をリンクさせ、潜在能力を強制的に開放。視角から得た情報を脳を媒体にシステムに演算処理させ事象予測を行う。

便利な半面、使用者の安全を完全に度外視したシステム構築。まさに悪魔のシステムと呼ぶに相応しい代物だ。昨日旭とラウラの殺し合いも自分があのままあの場に割って入らずに彼がアドヴァンテージを使用し続けていたらどうなっていただろう。

恐らく待っていたのは発狂、もしくは――『脳の崩壊』。白髪化はその前兆だろう。

そして旭は恐らく分かっている。あの機能を使っている。

自分からみた『浮舟旭』は酷く不安定な人間だ。『大人』にも『子供』にも成り切れない、いや。それ以前に『人間』にも『復讐鬼』にも成り切れていない『モラトリウム』。

どちらでもあるが故にどちらでもない。

ちよつとした拍子にどちらに転んでもおかしくはない。そんな不安定な人間臭い人間。

楯無は彼のそんな人間くさい部分をこの上なく気にしている。

しかし逆に彼が復讐鬼に身を堕とし、この学園の生徒に危害を及ぼす方に転ぶなら自らが引導を渡す覚悟も出来ている。

そうでなければ、その覚悟がなければ旭を鍛える事など出来るものか。

自分はこのIS学園の学園の長・生徒会長なのだから。

3

「よう一夏。オゲンキデスカー？」

「なんでそんな片言みたいな喋り方になってるんだよ？」

「気分だ」

「そうか。気分なら仕方ないな」

「そうだ。気分だから仕方ないんだ」

「なんだか会話がおかしくない？」

旭と一夏の何処か感性のズレた会話にシャルロットが思わず突っ込んで、しまったと思い、口を噤んだ。旭はシャルロットにあからさまな不快感を示している。

恐らくは自分が一夏に近づく危険分子だからだ。それは仕方ないと思う。

寧ろスパイである自分に対する一夏の態度は寛大すぎるのだ。

だから、どんな誹りも誹謗中傷も敢えて受ける。

それが彼女の選んだ道だった。

旭は鋭い目つきでシャルロットを一瞥。何も言わずに手元の大量の書類を差し出した。

「???? これは!？」

「知り合いに頼んで集めてもらったラウラの機体『シユバルツエア・レーゲン』について集めたデータだ。入手方法は聞くな」

「何故これをボクに……?」

「一夏じゃこのデータを生かすだけの細かな操作は出来ねーからな」
「失礼な事言っくなよ!」

「否定できるだけの根拠を聞こうか、PICの意味すら知らなかった一夏くん」

「う……っ!」

「わかっていると思うが、オレはアンタを信用していない」

シャルロットが下唇を?む。理解していた事だが、実際に面と向かって言われると辛い。少し前まで友人として共に笑っていた相手が自分を嫌っているという事実を突きつけられるのは想像以上に心に

刺さる。

「けどな、今回一夏の傍にいて、助けになれる位置にいるのはアンタだけなんだよ」

「え？」

「だから……、頼む……」

シャルロットは困惑した。旭はさっき自分で言った通りシャルロットを信用していない。

だが、それでもラウラから一夏を護るためにはシャルロットを信じるしかない。

そのジレンマに苦しんだのだろう。その心の葛藤の末にシャルロットを信じる。という結論に達して、自分達をバックアップしてくれている。

嬉しかった。例え打算だらけの信用でも、スパイ行為という裏切りを働いた自分を信じてくれる。壊れてしまった関係もいつかは修復出来る時がくるかもしれない。そんな夢を見てしまう。

「うん」

シャルロットは書類を受け取った。決して取りこぼさないよう、しっかりと。

4

「一戦目で戦う事になるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「それは何よりだ」

試合開始直前。一夏・シャルルペアとラウラ・箒ペアがアリーナ中

央で睨み合う。

ドイツ軍最新鋭の機体【シュバルツェア・レーゲン】。
日本の倉持技研自慢の【白式】。

そして世界で唯一ISを起動する事が出来る男性。『織斑一夏』への打診。

それらを一度に見る事の出来るこの試合を各国企業のスカウト、要人達も真剣に見入っている。電光掲示板に試合開始までのカウントダウンが表示される。

5 — 4 — 3 — 2 — 1 —

「叩きのめす！」

— 0。

「おおおおおおっ！！」

開始と同時に一夏はスラスターを噴射。雪片式型を構えて真っ直ぐに突っ込んだ。

ラウラは右手を突き出しAICを展開。一夏の動きを止める。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりゃ、どうも。以心伝心で何よりだ」

明らかな侮蔑をこめてラウラは嘲笑しながら一夏にレールカノンの砲門を向けてロックした。

絶体絶命。そんな状況で一夏は笑う。自分にこの攻撃が当たる事はない事を知っているからだ。

一夏の機体をブラインドにして接近していたシャルロットが一夏の

頭を飛び越え、アサルトカノン【ガルド】を展開。ラウラに爆破射撃を仕掛けた。

ラウラは咄嗟にレーゲンを低空でスライドさせて攻撃をやり過ごす。

「逃がさない！」

シャルルは空中に舞い上がり左手にアサルトライフルを展開。光の粒子は一秒もしないうちに形を成し、銃口から無数の鉛玉が撃ちだされる。

【ラファール・リヴァイヴ】のお家芸にして、シャルロット・デュノアの得意技。

ラビット・スイッチ
【高速切替】。

リヴァイヴ特有の大容量の拡張領域を使い、通常1〜2秒かかる量子構成をほとんど一瞬で、それも照準を合わせるのと同時に行う技術。

事前に呼び出しを行わなくても戦闘状況に合わせて最適な武器を使用できると同時に弾薬の供給も高速で可能にする。

この事から持久戦に圧倒的な優位性をもち、相手の装備を見てから自分の装備を変更できるという強みがある。

その技術を巧みに使いこなすラウラに追撃を加える。

「私を忘れてもらっては困る！」

箒が打鉄の実体シールドで弾を弾き飛ばしリヴァイヴに斬りかかる。AICから解放された一夏も瞬間加速でシャルロットに迫る箒に割って入る。

ガキンツ！！ と刀と刀がぶつかり合い、鏝迫り合いの火花が飛び交っていく。

力と技が拮抗し、一夏と箒は膠着状態に陥った。

そのまま一夏は強引に力で決じ開けて隙を作り出そうとしたが、不

意にガクン！ と手応えが無くなり、箒が一夏の視界から消えた。

「邪魔だ」

箒と入れ替わるようにラウラがプラズマ手刀を振り上げ一夏に突進。はるか後方ではラウラのワイヤーブレードによって箒がアリーナ脇まで投げ飛ばされていた。

「何をする！？」

ラウラの突然の暴挙に箒の頭に血が上り彼女を怒鳴りつける。が、当の本人はお構いなしに既にプラズマ手刀で一夏に連続攻撃を仕掛けシャルルをワイヤーブレードで牽制していく。シャルルはラウラのワイヤーブレードを機体を回転してかわして間合いの外へと離脱。アリーナの隅に投げ飛ばされていた箒はすぐさま頭を切り替え、近接ブレードを構えて一夏に突進。斬りかかるが、シャルルが間に入り箒を両手に持ったアサルトライフルで銃撃する。間隔の短い連射を前に箒の打鉄は防戦一方に陥った。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ……！ 馬鹿にするな！！」

——いける！ ラウラ相手に互角にやり合えてる！ あとは旭の言っていたラウラの弱点が本当なら——

『「シュバルツェア・レーゲン」のAICは強力だ。だが、弱点は見えた』

『ホントか！？』

『任せろ。敵の弱点を突く事に関してオレの右に出る奴はいねーよ』

『嫌な特技だな』

『ほっとけ。時間がねーから手早く済ませるぞ。一夏がA I Cに捕まってるあの時の事を覚えているか?』

『僕が乱入したあのときだね』

『そうだ。あの時ラウラはアンタに対してA I Cを使用せずに攻撃を避けた』

『そつえばそうだな。けど、それがどうしたんだよ?』

『「避ける」って事は危険を感じたって事だ。つまりあの時A I Cを使用できない状況だった。あの兵器はひょっとして対象に対して意識を集中しないと効果を発揮できねーんじゃないか?』

『単体にしか使用できないって事?』

『そーゆー事。だからアンタらが採るべき戦法は2対1でのフルボッコ』

『えつと……箒は?』

『篠ノ之の剣術が達者なのは確かだが、シャルロット・デュノアの腕なら沈めるのは簡単だろう』

『……そうだね。自分の間合いで勝負させなければ篠ノ之さんに勝つのは難しい事ではないと思うよ。けど、そう上手く2人を分断できるかな?』

『ラウラの性格ならパートナーが危機的状況に陥っても助けに入る事はまずない。アイツはI S学園の生徒を見下している。なら、パートナーは自分の動きを阻害する対象としか見てねーだろーよ』

『けど、どこか卑怯臭いっていうか……』

『そこは迷うなよ。戦闘に置いて敵の弱点を突くのは定石だ。「正々堂々」なブシドー精神なんか犬に食わせてしまえ』

『じゃあ作戦は分断して各個撃破。狙うのは箒、でいいんだな?』

『それがいいね』

『一夏。勝負のカギはアンタがどれだけ上手くリヴァイヴの楯になれるかだ。頑張れ使い捨て装甲板!』

『お前は一言余分なんだよ!』

箒はシャルルの作る弾幕が薄いルートを探り、突撃。間合いを詰める。

しかし、それは誘いだ。

シャルルは即座に反応し、近接用のショートブレード【ブラッド・スライサー】で受け止め、左手に大火力のショットガン【レイン・オブ・サタデー】の弾丸を無防備な所に撃ち込まれた。

打鉄の絶対防御が発動し箒は衝撃のまま後方へと弾き飛ばされる。

「ぐっ！ まだだ！」

すぐさま起き上がろうとするが、打鉄の関節部から煙が噴き上げスクリーンに【戦闘続行不可能】の文字が浮かぶ。

「——ッ！ ここまでか……！」

箒を戦闘不能にしたシャルルはすぐさまショットガンでラウラを銃撃。斬り結んでいた一夏の援護に入る。

「お待たせ」

「助かったぜ。ありがとよ。箒は？」

「お休み中」

「流石だな。それじゃあ俺は——これで決める！」

——エネルギー転換率100%オーバー。【零落白夜】使用可能。

一夏の意思に呼応するかのように白式から高密度エネルギーが溢れ出る。

イクニッション・フースト
瞬時加速。刀を構えての突貫。

「無駄な事を！」

自分に突っ込んでくる一夏を嘲笑い、ラウラは掌をかざしA I Cを展開。

一夏を空間に磔にする。勝利を確信しレールカノンの砲門を一夏に向ける。

「へっ」

「何がおかしい？」

「忘れたのか？ 俺達は2人組なんだぜ！」

直後。一夏の脇からシャルル・デュノアの駆るリヴァイヴが姿を現し、ショットガンを連射。一夏を潰す事に固執し、シャルルの奇襲への警戒をしていなかったラウラは機体を後退させようとするが、一手遅い。レーゲンのレールカノンが被弾。轟音と煙を噴き上げ爆散する。

「旭の言うとおりあの兵器は対象に意識を集中しなければ効果は続かないみたいだな！」

「——ッ！ あの男が……私を倒す為に貴様に力を貸したというのかっ！！」

ラウラは飛翔。上空からプラズマ手刀を振り下ろすが、一夏はそれを受け止める。

——何故だ！ 何故教官も【異邦人】ストレンジヤーもこんなクズを——ッ！
何故……、何故コイツばかりが……ッ！

「何故だアアアアッ!!」

「ぐっっっっっっっっ!!」

ラウラの怒りに呼応するかのような力に一夏は押し切られ地面に叩きつけられる。

一夏の纏っていた高密度エネルギーが消える。それは零落白夜の限界時間が訪れた事を示していた。

「堕ちろ!!」

「させないよ!!」

一夏を庇うようにシャルルがラウラを撃つ。

「邪魔だ!!」

ワイヤーブレードを射出。シャルルを捉え、弾き飛ばす。

「シャルル!!」

「次は貴様だ!!」

「く……っ!!」

雪片式型を握り締め、ラウラのプラズマ手刀を受け止め、弾るが弾き飛ばされる。

「私の——勝ちだ!!」

「まだ終わってないよ!!」

シャルルが一瞬で超高速状態でラウラとの間合いを詰めて肉薄。至近距離からアサルトライフルの乱射を浴びせる。

「瞬時加速だど!? 馬鹿な! そんな、そんなデータは存在しなかった!」

「今初めて使ったからね!」

「——ッ! だが、私の停止結界の前では無意味、——ッ!」

ドン! と、背中に衝撃が走った。

ラウラは視線を背後に移す。遙か後方にシャルルの捨てたアサルトライフルを構えた織斑一夏がアサルトライフルを構えた織斑一夏の姿があった。

「これならA I Cは使えまい!」

「こっの……死に損ないがつ!」

ワイヤーブレードを射出。白式のアーマーを削り、絶対防御が発動。戦闘不能。

「何処を見てるのかな」

「な……っ!」

「この距離なら外さない!」

リヴァイヴの実体シールドの装甲が剥がれ、シャルルの対ラウラ戦の切り札が姿を現した。

リボルバーと杭が融合した外観の装備。パイルバンカー。別名——

「シールドピアース
楯殺しだど!?」

シールドに杭を突き立て、楯が弾ける。レーゲンの絶対防御が発動するが、衝撃は殺し蹴れない。ラウラの腹部に震動が走り、呼吸が一瞬止まる。

シャルルはその隙を見逃さず次弾装填。続けて杭を打ち込んでいく。

一撃、二撃、三撃。次々と撃ち込まれる攻撃にレーゲンの装甲が剥がれ、ISの強制解除の兆候が見え始めた。

5

「勝負あつたな」

アリーナの客席で試合を観戦していた旭はそのまま身を翻し会場を後にする。

篠ノ之箒が倒された時点で勝負は見えていた。

こうなったのは自明の理だっただろう。

自分の考えが正しかった事が証明され、順調にラウラを追い詰めている。

にも拘らず旭の心は晴れなかった。

『ラウラちゃんがんばるであそこまで自分を追い詰めているのか、考えてあげて』

楯無の言葉が脳裏を掠め、立ち止まり、壁に体を擡げる。

「なんだってんだよ……」

旭には復讐が全てだ。生きる目的でもある。

それ以外のものは自分には必要ない。

目的を阻害する存在があるのなら、それを排除するためにあらゆる情を捨て去る覚悟はある。

だから、亡国機業を誘い出す餌である一夏を潰させる訳にはいかない。

それだけが、自分の全ての筈だ。

「貴女の言いたい事が、オレにはまるでわからねーよ……」

携帯が鳴り、旭は着信先を確認。『イアン・マルクス』。
浮かない顔で電話を受けた。

「なんだよ？ 今アンタの下品な冗談に付き合う気分じゃ——」

《バカ！ それどころじゃねえ！ 大変な事がわかったんだよ！》

「何があつた？」

《ドイツ軍の新型！ ありゃとんでもねえ機能を搭載してやがる！》
「とんでもない機能？」

《ヴァルキリー・トレース・システム！ 通称V・Tシステム！
過去のモンド・グロツソの部門受賞者——ヴァルキリーの名を冠する者の動きをトレースするシステムで、そのヤバさからアラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている兵器だ！》

「落ち着けよ。その何がヤベーんだ？」

《よく聞けよ！ VTシステムは起動すれば最期。無敵ともいえる力を手にする代わりに一切の制御を受け付けなくなる！ つまり、全てを破壊するまで止まらねえ！》

「……………そんな代物がレーゲンに……………！」

《そして何よりも危険なのはシステムは搭乗者の安全を完全に度外視したシステム設計！ 自身の体を媒介にした無理な動きを続けていけば中に入っている搭乗士はどうなる！？》

「——ッ！ ……システム起動の為の力ギは……………？」

《ISの破損レベルがD以上ある事。搭乗士の怒りや悲しみといった負の感情が最大限に達したとき、発動するように設定されている》

「……………わかった。イアン、サンキュな……………」

《気をつける【異邦人^{ストレンジヤー}】。俺は【身元不明^{ジョン・ドゥ}】の様にこれ以上、仲間を失いたくない……………》

「……………悪いな」

電話を切り、懷にしまい込む。そして走りだした。

織斑一夏の護衛。

そして——ラウラ、オレはお前に一体何をしてやればいい……？

「いない」と棄てた癖に、再び拾い上げようとしている。

オレは結局、何がしたいんだ？

第21話 ヴァルキリー・トレース・システム

1

——こんな……！　こんな所で負けるのか、私は？

相手の力量を見誤った。織斑一夏。シャルル・デュノア。この2人を雑魚と決めてかかり舐めてかかった。怒りで目が曇っていた。そこは否定しようのない自分のミスだ。

しかし、それでも私は負ける訳にはいかない。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それが私の名前。識別上の記号。

私はただ、闘いの為だけに造られ、生み出され、育てられ、鍛え上げられた。

私は優秀だった。あらゆる訓練において最高レベルを維持し続けた。過去に暗殺者として叩きあげられた経歴を持ち、近接格闘において比類なき強さを発揮した【異邦人】ストレンジャー相手に引けを取らない程に。

しかしそれは最強の兵器、ISが出現するまでの事だった。直ちに私にも適合性向上の為、肉眼へのナノマシン移植手術が施された。

しかし、私の体は適応しきれず、その結果。『出来損ない』の烙印を押され、共に訓練を受けていた【異邦人】ストレンジャーにすら見捨てられてしまった。

たった一人、心を開ける兄の様な存在に見限られた孤独と存在意義の否定。この二つは私を絶望の底に叩き込むには十分過ぎた。

そんな時、あの人に出会った。

彼女は極めて有能な教官だった。

私はIS専門となった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

そして、強烈に、深く、強く憧れた。

彼女の強さに。【異邦人】^{ストレンジヤー}とも自分とも違う強さに。こうなりたい。あの人の様になりたい。

『どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？』

『私には弟がいる』

『弟……ですか？』

『あいつを見ているとわかるときがある。強さとはどういうものなのか。その先に何があるのか』

『……よく、わかりません』

『今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来る事があれば会ってみるといい……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに——』

——違う。どうしてそんなに優しい顔をするのですか？

私が憧れるあなたは強く、気高く、凛々しく、堂々としているのに……。

あなたまで、私を置いていくのですか？

『……また、来る』

そう言つて私を暗闇に置き去りにいた【異邦人】^{ストレンジヤー}のように……。

嫌だ……。置いていかないで……。

あの男の所為だ……。

許せない。教官にあのような顔をさせるあの男が。教官をそんな風に変えるあの男が。

許せない。【異邦人】^{ストレンジヤー}の隣にいるあの男が。本来なら私がいた筈の場所に当然の様に居座っているあの男が。

認めない！　認めるものか！

力が……欲しい！　何物にも負ける事のない、全てを破壊する絶対たる力が！

《願うか？ 汝、自らの変革を求めるか……？ 絶対たる力を欲するか……？》

力を寄こせ。比類なき最強を。何もかも破壊し尽くす絶対たる力を！

D a m a g e L e v e l D .

M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n C l e a r .

《V a l k y r i e T r a c e S y s t e m》 b o o
t .

2

「ああああああああああっ！！！！！！」

ラウラの体がビクリと痙攣し、絶叫を発する。と同時にレーゲンの全体に電撃が走り、ラウラに向かって近距離射撃を行っていたシャルルを弾き飛ばした。

「何がっ！」

「なっ………！」

シャルルと一夏、そして遠くで一夏達の闘いを見守っていた篤は眼の前の信じ難い光景に絶句した。「シユバルツェア・レーゲン」をドロドロした黒い物体が包み、ラウラごと飲み込み、その形状を変えていく。一夏にはそれが粘土人形のように見えた。

黒い物体が【シュバルツェア・レーゲン】を包み始めた時、旭は遅かったと悟った。

何もかも遅すぎた。こうなればシステムが暴走する前にラウラを殺すしかない。

【ハヴォック・ゲイル】を纏い、スナイパーライフル【インフェルノ】を展開。

内蔵されているサブジェネレーターからエネルギーバイパスを繋ぎ、チャージを開始する。

ガンカメラの照準マークが左右に揺れた後、ラウラがいるであろう胸部と重なり、色が赤く染まる。引き金に指を添えて、外部からの情報を完全にシャットアウトした。

あの状態では絶対防御が発動する事はないだろう。

あとはトリガーを引き絞るだけで目標に向かって膨大なエネルギーの槍が発射され、ラウラを貫き、焼き尽くすだろう。

それが、自分達『破壊者』が辿る末路だ。

暴力を制御する方法などない。

だからこそ暴力の使い手は須らく破滅の道を歩む。

制御しきれない自らの力に身を焼かれて。

そこにただ、ひとつの例外などない。

——先生、どうして……オレはいつもこんな決着の付け方しかできないんでしょうか？

過去に自らが殺した師の幻影が旭の脳裏をよぎり、胸が千切れるように痛くなる。

——サブジェネレーターよりエネルギー充填完了。システム・オールグリーン。

照準マークはラウラを捉えている。

大威力を引きだす為のチャージも終わっている。

引き金を引け。それで、すべてが終わる。指に力が入る。

『……拗ねてなどいない』

『これ以上……お前にこんな姿を見せたくない……ッ！　もう……、来ないでくれ……ッ！』

『先に私の敵になったのは貴様の方だろう！』

『ラウラちゃんがんばるであそこまで自分を追い詰めているのか、考えてあげて』

——オレか、ラウラ。オレがアンタを……そこまで追い詰めてしまったのか……？

——なあ、ラウラいいのかよ！　アンタ本当にそれでいいのかよ！？

——このままじゃアンタ死んじまうぞ！？　反撃してオレを殺せよ！

——その『絶対的な力』って奴でオレを殺しに来いよ！！

指先が凝固する。あと数ミリ。それだけですべてが片付くのに。どうしても、動かない。

自分がここにいる理由を思い出せ！　思い出せ！　思い出せ！

篠ノ之束の依頼。織斑一夏の護衛。ジョン・ドウ【身元不明】の敵討ち。

ファントム・タスク亡国機業への復讐……ッ！！

『私の死んでいく感触を、アナタの中に……』

『私の、存在を……無かった事にしないで……』

『……ありがとう【異邦人】……。アナタは私の、自慢の弟子だった、わ……』

「チクシヨウ……ッ！　どうして、甘さが捨てられないッ！！」

——その程度の覚悟で、先生の仇が討てるのかよ。

ズウウウウウン！！　という振動と共に伝わる轟音に旭は我に帰る。

意識をラウラに戻すと、変形を終えた【粘土人形】の様な人型が一夏とシャルロットに斬りかかり、アリーナの地面を割っていた。シャルロットは一夏を庇うように抱き抱え、地面に叩きつけられる。旭は憎悪を以ってしても振り払えない躊躇いを抱きながら頭部に照準を移し、引き金を引いた。

4

「なんだよ、あれは……」

【シュバルツエア・レーゲン】だった物体は流動し、脈動を繰り返しながら地に降り立った。そのまま徐々に脈動は沈静化し全身を成形していった。

一夏達の目の前に立ったのは以前IS学園を襲撃した【全身装甲】フルスキンに似て非なる存在がアリーナに降り立った。

ボディラインはラウラのものがそのまま表面化した少女のものであり、最小限のアーマーが手と足に付けられ、頭部にはフルフェイスのヘルメットを被っている。その下には赤いセンサーが点滅している。そしてそれが手に持っている装備を見て一夏は眼を見張った。かつて初代【ブリュンヒルデ】こと織斑千冬の武器がそこにあった。

「雪片……ッ！？」

ブオン！！　と、刀はうねりをあげ、上段から必殺の一閃を一夏に

振り下ろす。白式を纏う事の出来ない一夏には避ける術はない。頭上から迫りくる刃を見詰めている事しか出来なかった。

「一夏！！」

間一髪でシャルルが瞬間加速で一夏を抱えて回避。イグニッション・ブースト

それでも避けきれず、スラスターの一部を斬り飛ばされ、リヴァイヴは機体のバランスを崩し、アーマーが地面を擦りあげ叩きつけられる。

しかし、それでもシャルルは一夏を抱きかかえたまま離さない。決して一夏が怪我をしない様に、自らの身を楯にしても。決して離しはしない。

「シャルル！？ シャルル、大丈夫か！！ 返事をしてくれ！！」

「う……。一夏……。よかった無事で……」

シャルロットの無事を確認して一夏は一息つく。そしてラウラ——いや、システムが構築している【粘土人形】に鋭い眼光を投げつけた。

「うおおおおおっ！！」

——許さねえ！ 許さねえ！ 許さねえ！！

一夏は拳を握って【粘土人形】に向かって怒りのままに駆けていく。白式のエネルギー残量が残っていない以上、一夏のやろうとしている事は自殺行為に等しい。しかし——

「それがどうしたああああああああっ！！」

織斑一夏は仲間を傷つけられる事に激しく嫌う。シャルロットを傷つけた眼の前の人形を許せない。それだけが、その怒りだけが一夏の行動を後押ししていた。

応ずるように【粘土人形】は雪片を構える。そしてあと一歩。あと一歩で【粘土人形】の間合いに入る。

そこで一夏の体が不意に逆に引つ張られた。

「……ッ！ 箒！？」

「馬鹿者！ 何をしている！ 死ぬ気か！？」

「離せ！ 離せよ！ 邪魔するならお前から——ッ！！」

「っ！ いい加減にしろ！！！」

パン！ と箒は一夏の頬を打った。

「お前の成すべき事を言ってみろ！」

「……………成すべき、事？」

「いつからお前は怪我人を放っておいて怒りに吞まれるような男に成り下がった！？」

「——ッ」

ハッ和我に返り、後ろを振り返る。

「お前の目指す本物の強さとはそのようなものではない筈だ。強さとは力とは別の物だ！ 自分に負けない心の強さ！ 良き力の使い手である事！ それがお前や私の目指す強さのはずだ！」

今更ながら旭の言っていた事を理解する。

そうだな。力はただの力にしかなりえない。

道具が道具でしかない様に。

その道具をどう使うかは、結局のところ使う者の心次第なのだ。だから、武芸者は得た力で人を傷つける事のない様、心を鍛えるのだ。

そうして、力は強さに変わっていくのだ。

「……悪い」

「気にするな。私は大丈夫だ」

箒がそう言つて微笑を浮かべた直後。

一夏と箒は眼を見張った。シュバルツエア・レーゲンが姿を変えた【粘土人形】が一瞬で自分達との間合いを詰め、刀を振り下ろそうとしている。

今度こそやられる！ 一夏は箒を庇うように抱きしめたその時。

轟！！ と巨大な光の柱が【粘土人形】の頭部を消し飛ばした。間髪入れずに光の雨が【粘土人形】を穿ち破壊していく。

《一夏、篠ノ之！ 無事か！？》

「旭！ 俺は無事だ！ それよりシャルルと箒が！」

「私は大丈夫だ！」

「僕も大丈夫……」

《無茶しすぎだこのバカ共！ 死んだらどうする！》

「す、すまん……」

「ごめん。でも、言つたはずだよ旭……。『僕は一夏を絶対に裏切らない』って」

《——ッ！ アンタ……、バカだろ……》

旭は吐き捨てるように言い、シャルルは困つたように笑う。

『旭がシャルロットへの落とし所を見つけ、彼女を信頼する』という彼の思い描いたシナリオ通りではあるのだが、人の悪意の中で生きてきた【異邦人】ストレンジヤーにはシャルロット・デュノアの善意は眩しすぎ

る。

「ラウラは……?」

「わからん。胸部を避けて攻撃したから死んではいねーとは思うが、あれだけやれば——ッ!？」

旭は眼を見開いて向き直る。徹底的に破壊した【粘土人形】はグニヤグニヤと形を変え、再びその形を変えていく。その様子はグロテスクでおぞましくもあった。

変形が終わる前に旭は二丁拳銃を構え、連弾を撃ちだす。が、黒い塊が光弾を阻み、本体に届かない。

「なんだ!？」

再び人の形を成した【粘土人形】。ただし、その背中には無数のワイヤーブレードが空中を漂っていた。

「シャルロット、一夏と篠ノ之を連れて逃げる!」

この状況は旭にとっても想定外だった。あれだけ破壊すれば少なくとも足止め程度にはなると踏んでいたが、あれではそれすら叶わない。

再構成される【粘土人形】。しかし、その背には無数の触手の様なものが生えていた。

ワイヤーブレードが一斉に【ハヴォック・ゲイル】に襲いかかる。

旭はシールドを展開。ワイヤーを防ぐが、次の瞬間には雪片を構えた【粘土人形】が距離を詰めていた。

上段からの必殺の一閃。咄嗟に二丁拳銃【ツインバレット】を展開。銃身で受け止め防御するが、衝撃までは殺しきれず大地叩きつけられる。

そのまま【粘土人形】は旭にトドメを刺そうと刀を構えるが、

「旭!!」

シャルロットが弾幕を張り、旭を守る。

その隙に旭は起き上がり、【粘土人形】の間合いから離脱して彼女に合流した。

「悪いな助かった!」

「お安い御用だよ! それよりアレは何!？」

二丁拳銃を構え、弾幕を張るのを手伝う旭にシャルロットは問う。

「ヴァルキリー・トレース・システムとかいう代物だ! 過去のモンド・グロツソの部門受賞者——ヴァルキリーの名を冠する者の動きをトレースするシステムで発動すれば無敵ともいえる力を手にする代わりに一切の制御を受け付けなくなる——つまり、周りの物を全てを破壊するまで止まらる事のないトンデモ機能だ!」

後ろには戦闘不能になった織斑一夏と篠ノ之箒が息を飲む。そんなシステムを目の前にして無茶をやらかしていた事に今更ながら背筋が寒くなった。

——しかし、どうする?

旭はひたすら牽制の為に銃を乱射しながら頭の中で状況を整理する。シャルロットの【ラファール・リヴァイヴ・カスタム?】のエネルギー残量もあと僅か。

2人を連れてこの場から離脱するにしても、教師が【粘土人形】の制圧に乗り出してくるまで現状維持を試みるにも苦しい状況だ。

旭は苛立ちながら歯を食いしばる。袋小路に陥ってしまった。突破口がどうしても開けない。

——せめて、あと一機稼働できるＩＳがあれば……ッ！

「手なら、ある！」

「一夏！？」

「なんか、ロクでもねーような提案の様な気がするが、一応聞くだけ聞こうか！」

「白式で——」

「はい却下——！」

「なんでだよ！？」

「アホかアンタは！！ 白式のエネルギーが無い状態でどうやって戦うんだよ！？」

「なんとかするんだよ！」

「どうやって！？」

「どうにかして！」

「無茶言つな！ 確かに白式の攻撃力ならアレを確実に仕留められるだろーがな！ 実際問題エネルギーを何処から引いてくるんだよ！？」

ヤケクソ気味に叫び返すが、シャルロットは思案してから口を開いた。

「……ううん。無いなら持つてくればいいんだよ！」

「だから、どうやって！？」

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？ だったら頼む！ 早速やってくれ！」

「待て待て待て！ リヴァイヴのエネルギー残量もほとんど残って

ないんだろ！ そんなんじゃない、【零落白夜】一回分にも満たない——あ……っ」

思いついてしまった。【零落白夜】一回分。キツチリと賄える分だけのエネルギーが今この場にある事を。しかし、

——オレの立場上、一夏にこれやらせるのは色々拙いんじゃない？

「何か手があるんだね？」

「あ……、いや、その……」

「あ・る・ん・だ・ね？」

「う……っ！」

ニツコリと誰もが見惚れるほどの笑顔でシャルロットは旭にプレッシャーをかける。

蛇に睨まれた蛙よろしく、旭はその気迫に白旗を上げた。

どの道このままでは押し切られ、4人共お陀仏だ。

それに——壊す事しか出来ない自分ではラウラを殺すしかない。殺したくない。

今更だけど。

『要らない』と切り捨てた癖に。

矛盾しているとも思う。

それでも。

ストレンジャー

【異邦人】はラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女の事が大事なのだ。結局のところ自分は半端者だ。

覚悟が足りない、どうしようもない甘ったれだ。

だとしても。

ラウラを救ってほしい。それは偽らざる旭の本当の気持だった。なら、織斑一夏に賭けてみるのもいいかもしれない。

右手の拳銃で【粘土人形】を牽制しながら、無言でスナイパーライフル【インフェルノ】を展開。地に置いた。

「こいつに内蔵されているサブジェネレーターの中に【零落白夜】一回分。賄えるだけのエネルギーがある。これをシャルルのリヴアイヴのコア・バイパスを経由して移せ。その間、オレはどんな手を使っても時間を稼ぐ」

「いいの旭？ 僕を信じて」

「……………アンタは自分の身を呈して一夏を護った。それだけで信じる材料としては充分だ」

「ありがとう旭……………」

「サンキュな。旭」

「礼はいい。それよりアイツを、ラウラを頼む」

「ああ。力に振り回されているアイツを一発ぶん殴った後、眼を覚まさせてやる！」

強引で、真っ直ぐで、暖かくて、優しい。これが、織斑一夏という人間だ。

旭は口の端を僅かに吊りあげ、二丁拳銃を展開して上空に跳躍した。

第22話 繋がり

1

「かかって来いよ玩具野郎!!」

態と注意を引く為に大声で挑発する。システム相手に挑発が意味があるのか疑問ではあるのだが、そこは皮肉屋な旭の性分だ。

【粘土人形】は空中に跳躍した深緑のISにターゲットを移した。背中の数多のワイヤーブレードが螺旋の様に変化しながら、うねり、乱れ飛ぶ。

旭は脚部に反重力場を形成。再び空中を駆け上がる。

リミッター解除率30パーセント。

事象予測範囲を1.0秒に設定。

搭乗士との脳波リンク完了。

システムオールグリーン。

「アドヴァンテージ起動!!」

投影されたスクリーンに包まれた【ハヴオック・ゲイル】が不規則な動きで【粘土人形】を翻弄しながらツインバレットを展開。

1秒後に約3メートルの位置に辿り着くワイヤーブレードの座標を割り出し、眼にも止まらぬ速度で狙いを付けてトリガーを引き絞り、乱れ撃つ。

空を覆い襲い来る無数のワイヤーブレードは空中を飛び交う連弾が一本一本順番に、それでいて正確に弾かれた。ワイヤーブレードの『面』の攻撃を射撃による『点』による防御で迎え撃つ。

それは下策だ。この方法はつまるところただの曲芸でしかなく、実戦では非効率極まりない。そんな事は旭も理解している。理解して、敢えてこの方法を選択した。

もし、旭がシールドによる防御を行えばVTシステムは即座に戦術をワイヤーブレード主体から雪片による接近戦に切り替えるだろう。格闘性能に特化したシステム相手に本来射撃・砲撃による後方支援を目的とした機体設計を成されている【ハヴォック・ゲイル】に勝ち目はない。演算補助システムの恩恵を受けているとはいえ、射撃機で格闘機に挑むのは分が悪い。

逆に【ハヴォック・ゲイル】が有利に戦える中・遠距離戦では【ハヴォック・ゲイル】の方に分がある。この状態になら一気に押し切られる事はないだろう。

少しでも長い時間を稼げるように。

その為に『ワイヤーブレードと拳銃の撃ちあい』という構図を維持し続ける必要があった。

すぐに相手の限界が訪れる。システムにそう思わせる事でこのままの戦闘方法で勝てると錯覚させる。現状で実行している戦術が効果的なら変更する事はない。機械的思考というのは本来保守的なものなのだ。上手く回っているのなら、変更する意味すらない。と判断するだろう。だからこそ、あえて非効率な方法で戦闘を続行する。一つ、またひとつ。

光弾とワイヤーがぶつかり合い、相殺されていく。

しかし、ワイヤーブレードは徐々にだが確実に旭に迫っていた。

約0.3秒毎秒に一回の高速に、それでいて正確に撃ち出される光弾。それでも次から次へと襲いかかってくるワイヤーブレードの圧倒的物量に追いつかない。

チラリと一夏とシャルロット達の方を窺う。

リヴァイヴから伸びたケーブルが遠距離射撃用ライフル【インフェルノ】と待機モードであるガントレットになった【白式】と繋がり、

エネルギーを流し込んでいる。

旭の位置からでは進行状況はよくわからないが、まだ少し時間が必要そうだ。

「——ッ!?」

旭は眼を見張った。一瞬の警戒の緩み。

空白の時間に【粘土人形】は【ハヴォック・ゲイル】との間合いを詰めていた。

振り下ろされる刃に膝蹴りで応戦。

——狙うは、右手首！

ゴッ！！ という鈍い音を立てて粘土人形の腕の振りが止まる。

間髪入れずに飛び上がり旋回。【粘土人形】の腹部に飛び後ろ回し蹴りを打ち込み弾き飛ばし照準を合わせる。蹴り飛ばされた【粘土人形】はワイヤーブレードで応戦。無数の鉄の鞭が旭の体を打ち据えた。

「ガ……ッ！ ハッ！」

口の中に広がる血の味。軋む骨。額の傷が開き、視界が深紅に染まる。

一瞬、意識が闇に落ちそうになる。が、歯を食いしばり持ち直す。痛み能耐え旭は【粘土人形】の頭上に旋回しながら跳躍。

鮮血を散らしながら【ツインバレット】を連射。光の雨の熱が【粘土人形】の背中から生えているワイヤーを幾つか焼き千切っていく。弾幕を張りつつ、旭は【粘土人形】との距離をとる。【粘土人形】もまた焼き切られたワイヤーを復元するために追撃しなかった。再びグニャグニャと黒い塊が波打ち、形状を復元していく。

「システムの核になっているラウラをなんとかしねーとダメか……。こりゃ、ハヴオの火力じゃ厳しいな……。ッ」

——3時の方向仰角30度。頭部狙い。7時の方向80度。同じく頭部狙い。9時の方向10度。胸部狙いのワイヤーブレード接近。

半身にして攻撃の全て最小限の動きで回避。

——ワイヤーブレードにより攻撃はすべてが陽動。本命は——

「——背後からの刀の一閃！」

上段より振り下ろされる必殺の一撃をタイミングを計り、身を翻してやりすごす。銃口を相手の頭部に押し当てゼロ距離から連弾を叩きこんだ。

【粘土人形】の頭部は無数に撃ち込まれる光弾に変形し、削られ、焼き尽くされる。

体勢を崩し隙だらけになった【粘土人形】の腹部に蹴り飛ばす。

——ワイヤーブレードが前方より3本。内2本は0.43秒後に左右に分かれ挟撃！

復元した【粘土人形】が地に足を付けワイヤーを飛ばす。

敢えて迫りくるワイヤーブレードに踏み込み、攻撃は頭上を摺り抜けた。

照準を合わせ【粘土人形】に反撃の隙を与えない二丁拳銃の掃射。

【粘土人形】は雪片を振るい大地を割った。

「な……。ッ!？」

舞い上がった土煙に【ツインバレット】が放った光と熱が拡散、威力を削ぎ落される。

「まさか、あんな方法で防御を、——ッ!？」

塞がれた視界から一斉にワイヤーブレードが【ハヴオック・ゲイル】を強襲した。

不意を打たれた旭はスラスターを噴かせ、ピッチアップ。180度の急速旋回と180度ロールを同時に行い回避を行うが逃れきれない。

ワイヤーは旭の足を捉えそのまま弧を描き、地面に叩きつける。

咄嗟にシールドを張り衝撃を分散させるが、殺し切れない衝撃が旭を貫く。

流石に舌を？むようなヘマはしないが、それでもダメージは計り知れない。

痛み慣れている旭でなければ、悶絶して動けなくなっていただろう。

——チッ、肋骨が1、2本いったか……ッ！ その上血で視界が奪われる……ッ！ まだか一夏、シャルロット！ もう長くは保たねー……ガッ!!

再び勢いを付けて地に叩きつけられ、旭は片方の拳銃を取り落とし、攻撃手段を失う。

もはや彼にはシールドを張り一夏達が襲われない様に黙って【粘土人形】のサンドバックになる事しか出来なかった。右手にもった銃を取り落とさない様に握ったまま。

【粘土人形】はアリーナ中央で【ハヴォック・ゲイル】に一方的に攻撃を加えている。

一夏。箒。シャルロットはその様子を少し離れた位置で見守るしかなかった。

「シャルル、まだかつ!？」

「もうちよつと……!」

慌てる一夏を宥めようとするシャルロットだが、彼女の口調に僅かな焦りが見える。

「落ち着け2人とも。焦りは心に隙を生む」

「そう、だな」

「……繋がったよ!」

【ラファール・リヴァイヴ】のエネルギー・バイパスを経由してサブジェネレーター内の膨大な量のエネルギーが籠手状態の【白式】に流れ込む。

一夏の体の底から沸々と力が湧き上がる。

そんな中で不思議な一体感と懐かしさを感じる。

世界の全てがクリアに映し出され、自分が生まれ変わった様な鮮明な感覚。

——この感覚、ずっと昔に何処かで……いや、今はそんな事はどうでもいい。

「完了。これで【インフェルノ】に内蔵されていたエネルギーは全部【白式】に渡したよ」

「サンキュ」

一夏は【白式】の再起動に移る。白い装甲が彼を包みこんだ。

「それじゃあ行こうか！」

「ああ！」

シャルロットに促されて、白式とリヴァイヴは宙に浮く。

「約束しろ一夏！ 死ぬなよ！ 絶対に、だ！」

「なんの心配してんだよバカ」

「バ、バカとはなんだ！ 私はお前が——」

「信じる」

「え？」

「俺を信じるよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、俺を信じて待っていてくれ。必ず勝って旭を助けて帰ってくる」

——もう、強さを見誤る事はない。力ではない強さを、俺は知っている。

誰かを守る為に強くあり続けた人を、俺は知っている。

ならば——ならば俺も、誰かの為に強くありたい。強く生きたい、とそう願う。

「いくぜ偽物野郎！」

3

ボロボロになって動かなくなった旭を放し、【粘土人形】がエネルギーの受け渡しを行って無防備な状態の一夏とシャルロット、傍に
いる箒の方を向く。

【ハヴオック・ゲイル】の装甲が消えていない事から意識は手放していないようだ、最早体を動かす事は敵わないだろう。むしろ、痛みに対して強いという事が気絶という逃げ道に逃さず、苦痛を長引かせている。

今の彼には脅威を感じない。放っておいても大丈夫だ。と、システムが判断を下したのだろう。

しかし、

ドン！ という衝撃が【粘土人形】の頭部に走った。反射的に振り向く。

「何処行くんだよ……。まだ、死んでねーぞ……。ッ！」

——抵抗確認。排除。

【粘土人形】が再び旭の方を向く。今度こそ、彼を確実に仕留める為に。

——エネルギー残量32。あと一撃喰らえばハヴオの装甲が剥がれる。その時がオレの最期か……。それでも、

「さあ、続けようか……」

覚束ない足取りで一步。また、一步と前進する。

進むたびに激痛が全身に走るが、それすらどうでもいい事だ。

ラウラの為ではない。自分の為に。

自分はこうすると決めた。自分の命は自分の為だけに在る。

誰かの為に死んでたまるか。残された誰かの痛みがわかるから。

この先に何が待ち受けていても、それは自分が自分の為に起こした

行動の結果であり、決してラウラの所為などではない。

最期の抵抗。痛みで震える右腕を伸ばし、【粘土人形】に銃口を向ける。そして発砲。

【粘土人形】はそれを難なく避け、旭との間合いを詰める。そして上段から一閃。

――0・2秒後。直撃。0・89秒後。オレは、刃で胸を貫かれて……死ぬ……。

先生の仇を討つまで死んでたまるか、という想い。

それと同時に自分を終わりに出来る事を何処かでホッとしている自分。

相反する想いの自分がいる事に少し驚きつつも、辿る運命を静かに受け入れた。

《旭――！》

【粘土人形】の振り下ろす雪片を割り込んだ【白式】が雪片式型で受け止める。

「……、お早いお付きで」

「空が混んでたんだ、よつと！」

雪片を押し返し、【粘土人形】は機体バランスを崩した。
ドドドドドドツッ！　と鉛玉の雨が【粘土人形】を襲う。

【粘土人形】はすぐさま上空を見上げ、遙か上空を駆ける【ラファール・リヴァイヴ・カスタム？】にターゲットを移した。
射撃に対抗するようにワイヤーブレードを応射する。

シャルロットはそれを優雅かつ華麗ともいえる操縦技術で全て回避

した。

が、次から次へと湧いて出る無数のワイヤーブレードを前にシャルロットは押し切られそうになる。

《旭！！》

「応！」

シャルロットが投げて寄こしたショットガン「レイン・オブ・サタデー」を受け取り援護射撃行っ

一夏もその隙に何とか間合いを詰めようと試みるが、ワイヤーブレードの牽制で近づけない。

《これじゃあ近づけない！》

「クソッ！　ここまで来て……ッ！」

【白式】の攻撃力は数あるISの中でもトップクラスだ。しかし、その攻撃力も当たらなければ意味を成さない。

なんとかして壁を形成しているワイヤーブレードを突破して接近しなければ、3人に勝ち目はない。

——近づいてくる一瞬を狙うか？　いや、ダメだ。ワイヤーブレードと連携して攻撃を仕掛けられたらその一瞬を捉える事は至難の業だ。

——罔になって——、それもダメだ。俺が離れた瞬間、弱ってる旭が墮とされる危険が——！

「一夏……。状況を打開できる方法がある……！」

「ど、どんな！？」

藁にも縋りたい想いで一夏は旭の言葉に食いついた。

「【アドヴァンテージ】の、リンクを開く」

「【アドヴァンテージ】？」

「コイツには視角から得た情報を演算解析して事象予測する機能がある。ＩＳネットワークを利用してアンタらとオレの脳波をリンク・同調させる事で、事象予測結果を共有させる事が出来る筈だ……」

「そんな凄いものがあるなら最初から——」

「ただし——！」

詰め寄ろうとした一夏だが、旭の切迫した声に何も言えなくなる。

「コイツは搭乗士の脳を媒介にして演算を行う。事象予測なんて行えばアンタの脳に相当な過負荷がかかり、最悪、発狂だってあり得る。それでも、やるか？」

「応えなんて聞く必要ないだろ？」

間髪いれずに答えた。揺ぎ無い決意。一夏の顔は挺子でも動かないと、語っていた。

「……………腹は決まってる、ってか？」

「ああ」

——最低だ。

——ラウラを殺せば全てが収まるのに……オレにはそれが出来なかった。

——あまつさえそんな自分勝手な私情で護衛対象の一夏を危険に晒している。

——……オレは、護衛失格——いや、それどころかプロとして失格だな……。

——それでも、今は戦う時。後悔するのはそれからだ。

「余計な情報は受け流せ！ 思考の波に囚われるな！ 思考の波に流されるな！ 思考に逆らうな！ そうすれば見てくる！ 未来が！」

「お、お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！……！」

一夏は思考の暴風に煽られながらも咆哮と同時に眼を開く。
そこには彼の見た事のない世界が広がっていた。

——なんだ、これは……？

——見える？ いや、違う。これはわかるんだ。

——1秒先の未来がわかる。

——これは、凄い……ッ！ けど、

——これは、まともな人間が扱えるような代物じゃない！

ズキン！ と頭部に激痛が走る。

果てのない膨大な情報が、一夏の脳を掻きまわす。

システムが彼の自我を崩壊へと導こうと鎌首をもたげる。

旭とリンクしていなければ、とうの昔に一夏は発狂していただろう。
精神と肉体が乖離していく様な不気味な感覚に一夏は畏怖の感情を抱きつつも、己のやるべき事を真っ直ぐに見据えた。

——長くはもたない！ 一撃で片を付ける！

一夏は雪片式型を構えて【粘土人形】を見据えた。

【零落白夜】を発動。

全てのエネルギーを消し去る絶対無効の力を宿した刃が本来の刃渡

りの二倍以上に膨れ上がる。

——今回はそんなにでかなくていいぜ。必要なのは速度と鋭さ。
——素早く振り抜ける洗練された刃だ。

ヴン！ と一夏の願いに応えるように雪片式型がその形状を変えていく。

意識を集中させる。深い闇の中、一束の光が差し込むイメージ。それを更に細く、鋭く研ぎ澄ましていく。

その集中が極限に達した時、雪片式型の実体剣がすべて消え、柄から上には【零落白夜】の光が日本刀のエネルギー刃が形成された。

——ありがとよ、【白式】……。

一夏は刀を腰に据え、居合の構えをとり、腰を落としてタメを作る。それは千冬に教え習い、箒の姿に学んだ【一閃二段】の構え。

「シャルロット！ 一夏が突っ込む為の道を開く！ 援護してくれ！」

「了解！」

シャルロットが空から。旭が地上から。

躍動しながら一点集中砲火を浴びせ、ワイヤーブレードの防御を、壁を抉じ開ける。

【粘土人形】までの一本の道が生まれた。

「ぶちかませ！ 一夏アアアアアアアアアアアアアアアアアッ
！！！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおッッッッ！！！！」

『いいか。刀はその重さを利用して振り抜くのだ。手にするのではなく、自らの一部と思って扱え。無駄なく、隙なく、油断なく、それを振るえ』

『ええい、どうしてわからんだ！ やってみせるからちゃんと見ていろ！』

二人の姿が脳裏で重なる。そのイメージが一夏の動きに反映される。刀を持つ手が身を背へと導く。その眼はただ、真っ直ぐに見据え揺らぐ事のない穏やかな水面を心の中で思い浮かべる。

全ての動作に対応出来るよう、己の感覚を——その意識を、ただ一点敵に集中させて真っ直ぐに突っ込んだ。

【粘土人形】も一夏に応戦する。旭とシャルロットの撃ち洩らしたワイヤーブレードを全て使い一夏に猛攻を加える。

無数の迫りくるワイヤーブレード。しかしそのどれも【アドヴァンテージ】の恩恵を受けた【白式】を、一夏を捉える事は無かった。事象予測。

一切無駄のない動きで、一夏はワイヤーブレードを全て回避。

攻撃が届くか、届かないかの境界線に一步。
踏み込む。

【粘土人形】が刀を振り下ろす。

織斑千冬が現役時代に最も得意とした上段からの袈裟斬り。

ギンッ！ と腰から抜き放って横一閃。【粘土人形】の雪片を弾き飛ばす。

——確かに千冬姉の技だ。けどな、お前のそれには千冬姉の意志がない。

——あの心の強さはどこにも存在しない。

——ならばそれは本当の強さとは言わない！ ただの——

「——真似事でしかない！」

——本当の強さとは断じてそんな下らないものではない筈だ！

頭上に構えた雪片式型を真っ直ぐに振り下ろし、相手を断ち斬った。

これこそが一閃二段の構え。一足目に閃き、二手目に断つ。

《が、が……ギ……》

斬り口から紫電が奔り、【粘土人形】が真っ二つに割れた。

そして、気を失う瞬間のラウラ・ボーデヴィツヒと眼があった。

眼帯が外れ、彼女のコンプレックスとなっている金色の瞳は孤独感に満ちていた。

まるで、雨の中に打ち捨てられた子犬の様に。
助けて。

そう言われているような気がした。

気を失い、倒れるラウラを一夏は優しく抱きとめた。

「まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

4

「とりあえず、良かった……」

力尽きて仰向けに倒れこみ、頬に伝う涙を隠すように顔を覆う。

【ジョン・ドウ身元不明】が死んだ日から彼は涙を流せなくなった。

常に仮面を被るしかなく、親友のイアン・マルキスの前でしか自分の弱いところを見せる事がなくなった。

——よかった……！ チクシヨウ、本当に良かった……ッ！！

これで問題が全て片付いたわけではない。

なに一つとして解決していないのかもしれない。

状況が良くなったとも思えない。

だが、

——そんな事はどうでもいい。今はただ、喜ぼう。

——誰も殺す事なく、死ぬ事もない未来が訪れた事を。

第22話 繋がり（後書き）

旭が一応主人公のはずなのにサブキャラっぽい件（苦笑）
いいんですね。

サブキャラとしてのキャラが立っていてくれれば！↑強がりはい。第二部、もうちょい続きます。

戦闘描写にマルマルモリモリー話分！

頑張ったオレ！そして長くなりすぎた！

次回で終わるといいなあ……。

第23話 足跡

1

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会う事があるのなら、心を強く持て。あれは未熟者のくせにどういう訳か、妙に女心を刺激するのだ。油断していると惚れてしまうぞ?」

自分の憧れであり、目標である女性の照れくさそうで、心の底から嬉しそうなその横顔は少女の心を酷く掻き乱した。今思えば、あれは『嫉妬』という感情だったのだろう。

「教官も惚れているのですか?」

「自分の弟に惚れるものか、馬鹿め」

意地の悪そうな顔で笑い、ますます落ち着かなくなる。

自分にはそんな笑顔を向けてくれた事がないのに。

自分は一番欲しいものが手に入れる事が出来ない。

いつも彼女が一番大事に想うものは、絶対に彼女を選んでくれない。戦う為に造りだされたという自分の存在意義は【絶界の瞳】の不適合で否定された。

兄の様に慕っていた【異邦人】ストレンジャーは自分よりも、彼の師である【身元】ジョンを殺した者への復讐を遂げる為に彼女を切り捨てた。

そして、絶望の底から自分を救ってくれた教官『織斑千冬』の一番は自分ではない、と見せつけられた。

羨ましい。

私の持っていないものをすべて持っている、あの男が。ただ、それだけの理由だったのだ。

だから、許せなかった。

なんて幼稚で、理不尽な八つ当たりだろうか。

そしてあの男——織斑一夏と戦って初めて、自分が追い求めていた『暴力』と『強さ』の差と本質を理解する事になるとはなんとも皮肉な話だ。

闇雲に心の伴わない力を振るい絶望しか生まない力が『暴力』。

自分の意志一つで希望にも絶望にも成りうる無限の可能性が『強さ』。

ただ、それだけのことだったのだ。

漂う意識を包む冷たく、深い闇が広がる空間を斬り裂いた一筋の光明。

温かく、優しい光の中には穢れのない『白』があつた。

ラウラは薄れゆく意識の中で『白』に問いを投げかける。

「教えてくれ。お前にとって『強さ』とはなんなのだ……？」

「……『強さ』っていうのは心の在処。己の拠所。自分がどう在りたいかを常に思い続ける事だと、俺は思う」

「……そう、なのか？」

「そりゃそうだろ。自分がどうしたいかわからない奴は強いが、弱いか以前に歩き方すら知らないようなもんなんだからな」

「歩き、方……」

「つまりやりたい事はやったもん勝ち。やりたい事やらないなんて、人生じゃねーよ」

「では、お前は何故強くあろうとする……？ 何故そんなに強い？」

「俺は強くなんてないさ。この間も『強さ』と『自己犠牲』を履き違えて旭に怒られたばかりだしな。俺が強く見えるとしたらそれは

——強く生きたい、と思うから強いのだ」

「——ッ！」

ドクン！ と心臓が跳ねた。

「それに、強くなったらやってみたい事があるんだよ」

「……そのやってみたい事を、教えてくれないか？」

「誰かを護ってみたい。自分の全てを使って、大事なものを護りたいんだ。そういう人間で在りたいんだ」

嗚呼、この横顔は見覚えがある。

自分で自分を認めるきっかけを与えてくれて、鮮烈に憧れた『織斑教官』。

いつも私を気にかけてくれて頑なになってしまった心を解きほぐしてくれていた【ストレンジヤー異邦人】のようだ。

「さあ、いこうぜ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

眩い光から差し伸べられた手にラウラは恐る恐る手を伸ばす。

私の名前。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

個体識別上の名でしかなく、何の意味も持たないもの。

しかし、その名で呼ばれる事がこの上なく嬉しい。

心が温かさで満たされていく。

そうしてラウラは織斑一夏の手を握る。

『破壊者』として生きてきたラウラが自らの世界を変える為に。

閉じた暗闇から無限の可能性が広がる光の世界へと。

最初の一步を踏み出した。

「オレはあとでいい。先にラウラと一夏、シャルロ——、シャルルを医務室に運んでやってくれ」

旭たつての希望により意識を手放したラウラは彼より先に担架に乗せられて医務室へと運ばれていった。一夏も変形した「シユバルツエア・レーゲン」——【粘土人形】との戦闘で使用した【アドヴァンテージ・リンク】の後遺症である脳への過負荷によってピットに着くなり眠っている。シャルロットは旭を気にかけて、一夏が同じ様に医務室へと運ばれていった。

静かになったピットで旭は1人、傷の手当てを行っていた。折れているであろうアバラは痛むが、額の傷の手当てを優先した。傷は浅いとはいえ、出血が酷く見た目のインパクト的に流石に子供に見せるには忍びない。

ロッカー内に常備している血止めの薬を取り出して器用にも片手で蓋を開ける。

傷口に塗り込み、脱脂綿を当てて血が止まるのを待っている間、ガーゼを手ごろな大きさに切って折り畳んでいく。

「派手にやられましたわね……」

「見た目ほど大したことはねーよ。傷も開いただけだしな」

声の主を一瞥して確認。ガーゼの折り畳む作業を中断した。立っていたのはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生。ちょうどいいタイミングで来た。と、旭は微笑を浮かべる。

「相変わらず無茶ばかりしますわね。そんな事ばかりやっていたら、いつか死んでしまいますわよ……」

「今更だろ。オレ達、IS操縦者達は大なり小なりそーゆーリスク

を覚悟してこの学園に所属している筈だ。………唯一、自分の意志とは関係のない所で入学を決められた一夏を除いて、な」

いざという時に腹の据わらないものがこの学園にいてはいけない。力を持つ者は常に力の大きさに比例した覚悟を問われるものなのだ。兵器とはそんな軽々しい気持ちで扱っていいものではない。

「アンタは一夏のところに行かなくていいのか？」

「一夏さんのところには………鈴さん達が行っています」

「それでも、一夏の事が好きなら行くべきだ。………まあ、ちょうどいいや。オレもアンタに用事があつたんだ」

「用事、ですか？」

「ラウラの事だ。………その、なんだ……。ラウラが迷惑をかけて、すまなかつた」

「………何故浮舟さんが謝るのですか？」

「アンタらがラウラに痛めつけられた遠因はオレにある。オレがラウラを考えなしに追い詰めて、アイツの孤独感を煽ってしまったから……。虫のいい話だつていうのは分かっているつもりだ。それを承知で敢えて頼む。ラウラを、許してやってくれないか？」

そう言つて旭はセシリアに頭を下げた。

こんな状況を招いたのは他ならぬ自分だ。

あの時点で誰よりもラウラに近かつた旭だからこそ出来た対応があった筈だ。

ラウラの味方でいてブレーキ役でいる事。

彼女の孤独感を少しでも和らげるために傍にいます。

ラウラと一夏を対立させない為に出来る事が山ほどあつたのに。

彼だけが『IFの未来』を選び取る事が出来たのに。

旭はそれをしなかつた。

織斑一夏の護衛任務を優先させるあまり、ラウラを切り捨てた。

その結果がラウラの暴走。そして護衛対象である一夏に【アドヴァンテージ・リンク】を使用させる事態に陥らせ彼を危険に晒してしまった。

自分はなんて愚かで浅はかな人間なのだろうか。
自らの浅慮と無能さに嫌悪の感情しか浮かんでこない。

「浮舟さん、頭を上げてください。各国のIS技術を競い合う為に代表候補生同士がぶつかり合った末に怪我を負う事はわたくしたちは覚悟の上です。それを覚悟したうえでIS学園に所属しているのです。恐らく鈴さんも同じ事を言う筈ですわ」
「……………、すまない。アンタを見縊っていた」

旭の心配は覚悟を持つ者に対する侮辱だ。彼は素直に謝罪した。
謝罪を受けてセシリアは柔和に笑う。

「お気になさらず。それに……………あなたに心配して頂ける事は、その……………嬉しいですから」
「そっか。サンキュな。……………それと、悪いついでに1つ頼みがあるんだ」

「なんででしょう?」
「出来る事なら、アイツ——ラウラと仲良くしてやって欲しい。これからアイツがどんな道を歩むにしても色んな経験を積んで、自分の知らない世界があつて、十人十色の価値観がある事を知っておいた方がいと思うから」

声のトーンが優しくなる。セシリアには今の旭はもあるで妹を心配する兄の様に見えた。

ラウラが羨ましい。
本当に、そう思った。

セシリアの母は強かった。

女尊男卑以前の女でありながらいくつもの会社を経営して成功を収めた人で厳しくも優しい憧れの人だった。しかし、セシリアは知っている。

周りから『強い』と称される母にも『弱い』部分が確かに存在している事に。

それに気がついたのは夜誰もいない部屋で静かに1人泣いている母を見てしまったときだった。幼かった自分には母が何故泣いているのか理解する事は出来なかったが、今なら分かる。

強いと周りが勝手に決めつけて、母に寄りかかり、誰一人母を心配する事はない。

そう。母は強くあらねばならない。上に立つ者として、下にいる者に弱い自分を晒す事は出来なかったのだ。

反面、父は弱かった。

名家に入り婿した父はいつも母の顔色を窺っていた。

ISが開発・運用され始めて女尊男卑の世界になってからは、父はますます卑屈になっていった。母はそれが鬱陶しそうで、父との会話を拒んでる様に見えた。

セシリアはそんな父に憤りを感じていた。

何故、誰よりも支えを必要として、1人泣いている母を支えてあげなかったのか！

そんな怒りが今も彼女の心の中で燦っている。

しかし、その怒りをぶつけられる場所はもう、存在しない。突然の両親の死。

三年前、事故で他界した。

いつも別々に過ごしていた両親が一緒にいたのかわからない。

所々不自然な点の残る現場に一時期陰謀説も囁かれたが、結局新し

い手掛かりが得られないまま捜査は打ち切られた。セシリアは今もその事を納得していない。

越境事故の横転事故。死傷者が100人を超える大事故だった。両親はあっさりと帰らぬ人となってしまった。

強く憧れた母も、あれだけ疎ましく思っていた父も今はもういない。

だからこそ、羨ましい。

旭とラウラの関係が。

強いラウラ。強い彼女を心配し支えようとする旭。

自分が何よりも欲しかった関係。

そんな関係の2人がこの上なく羨ましい。

もし浮舟旭の愛を手に入れる事が出来れば、この人は何があっても味方でいてくれるだろう。そんな根拠のない確信がセシリアにあった。

『織斑一夏』の存在が無ければ、自分も絶対に彼を好きになっただろう。

あるいはそれは彼を自分の憧れの人【ストレンジャー異邦人】と重ねているからなのか。

いずれにしてもセシリアは思う。

彼の恋人になる人間は幸せだ、と。

3

「浮舟さんは、ラウラさんの所へは行かないのですか？」

「こんな見るからにボロボロの状態で行ったらラウラが気に病むだろう」

この痛みは自分が愚かしさへの罰だ。

ラウラの為ではなく、ラウラの所為でもない。

自分の為であり、自分の所為だ。

そうだろう。自分の命は自分の為だけに在るのだから。

「優しい、ですわね……」

「そんなじゃねーよ。目の前で勝手に自分の所為だって決めつけられて、勝手に落ち込まれたら目障りだろう。勝手に人を優しい人にすんな」

『優しい人間』という言葉がこんな殺す事や、壊す事しか出来ない屑に与えられるなら、世の中誰でも優しい人間になってしまう。自分に優しい人間なんて『称号』は要らない。

優しさなんて要らない。これから旭のやる事に優しさは邪魔なだけだ。

ただ力だけあれば、それだけでいい。

「……あの、以前から気になっていたのですが」

「あ？」

「浮舟さんとラウラさんは何処で知り合ったのですか？」

「……………」

フウ、と気持ちを切り替える為に溜息をつく。

「昔、同じ施設で二年ほど一緒に訓練を受けていた事がある。それ以上は守秘義務規定に触れるから勘弁な」

ハヴォック・ゲイル

『守秘義務』。浮舟旭は表向きは男性でも起動できるIS【暴風】のテストパイロットという事になっている。守秘義務規定違反を犯せばよくて罰則。

最悪、更迭という事になりかねない。

セシリアにもその意味がわかってるから、出自に触れる質問はやめた。が、また違うベクトルから追及してみる。寧ろそこがセシリ

アの気になっているポイントなのだ。

「ひょっとしてお二人は恋人同士なのですか？」

「答える義理はねーな」

包帯へと伸ばした手が空を切る。

セシリアが包帯をひよいと持ち上げて一步。二歩と離れてニッコリ笑う。

どうやら口を割るまで包帯を渡してくれる気はない様だ。

「気に、なるのです。最初にラウラさんが転校してきたときから親しそうでしたし、あなたもラウラさんを良く気にかけていましたから……」

「よく見てんのな……」

観察対象の一挙手一投足をよく観察している。彼女は経験を積みめば優秀な狙撃手になるだろう。だが、その優れた観察眼も今この時は厄介以外の何物でもない。

そして何よりも彼女の顔には『話を聞けるまで梃子でも動かない』と書いてある。

『年頃の女の子は甘いものと恋愛話に眼がない』とよく言うが、ここまでとは。

旭は肩をすくめて諦めたように溜息をついた。

「オレとラウラはそんなじゃねーよ。向こうもオレに対して恋愛感情なんて持ってねーだろうし、オレにもそーゆーのはない」

「本当ですか？」

「こんなしょうもない事で嘘ついてどうすんだよ？」

「浮舟さんは……恋人を作る気はないのですか……？」

「ねーな。………今はそーゆーの作るより、やらなきゃなんねー」

事があるんだ」

旭の表情が剣のあるものに変わった事に気がついて、僅かにたじろいた。まるで凍りついたナイフの様な冷たく、鋭い空気を纏う彼はいつもの浮舟旭とは別人のようだ。

本当に眼の前の彼はあの『浮舟旭』なのだろうか。

或いはこちらが彼の本性なのだろうか。

時々セシリアにはそれがわからなくなる。

「それよりアンタは人の事気にしてる場合じゃねーぞ？」

セシリアの表情が強張っていた事に気が付き旭は態とらしい程のからかい口調で言う。少々話題転換が唐突で不自然ではあったが、彼女はそれに乗る事にした。あのままでいる事は気まづかったし、迂闊に踏み込めば旭を深く傷つけてしまうような気がした。

「ラウラが良くも悪くも一本気だからな。一夏に惚れようものならアプローチはかーなり、積極的に大胆なものになるだろーよ」

「ラ、ラウラさんが一夏に好きになるという保証はありませんわ！
！」

ムキになって否定する彼女を見て旭は意地悪げに口の端を吊り上げた。

「いやいやいや。ラウラを暴走したレーゲンから助け出したあの凛々しい姿。オレが女なら絶対惚れるね。それに鼻厖目なしに見てラウラは可愛いしな。さあ、どーするよ？ 競争率更に上がったぞ？」

「きよ、競争率！？」

「それとも、一夏は諦めてオレにしとくか？」

「……………え？」

一瞬何を言われてるのかわからなかった。

「もしそうなら大歓迎だ。オレはアンタの事が大好きだからな」

からかい口調から一転。微笑を浮かべた旭の声のトーンがラウラの時より更に優しくなる。

反則だ！ と、セシリアは叫びたくなった。憎からずとも思っている相手が緩急をつけての不意打ちでの正面からの告白。こんな状況で心の動かない女性がこの世の中にどれだけ存在するだろうか。心拍数が跳ね上がり、頬が真っ赤に紅潮する。

「本当、なのですか……？」

「勿論、嘘ですとも」

「んな……っ！！」

絶句。暫くして、からかわれた事を悟った。

「オルコットは単純だな。将来、オレみたいな嘘つきに騙されない様に注意しろよ？」

軽薄に笑う旭。沸々と腹の底から怒りが湧きあがってくる。「冗談にしては性質が悪過ぎる。」

何故自分はこんな男と【異邦人】ストレンジヤーを重ねたのだろうか。

ゴッ……！ とセシリアは旭を殴った。平手ではなくグーで。

女の敵は顔面にモロに拳を受けて「グヘッ……！」と潰れたカエルの様な断末魔を上げて轟沈した。

「浮舟さんの—— バカアああああああああああああああああああああ……！」

これでいい、と倒れたまま一息ついた。

オルコットはオレが【異邦人】^{ストレンジャー}が同一人物である事を勘繰っている事は気付いている。オレは過去の任務でセシリア・オルコットに会った事がある。

IS関連の会社で更なる発展を遂げたオルコット家だが、その分敵が多い。

彼女の母の会社がイギリスに提出した次世代型IS構想。『BTシステム』。

そのシステムが完成した場合の戦闘能力は他の企業が提出した次世代型のIS構想の遙か上をいつていた。

そして、その事に危機感を抱いた対立関係にある貴族が経営する会社がISの軍事導入の煽りを受けて軍を追われた傭兵を何人も雇ってオルコット家の一人娘セシリア・オルコットを誘拐するという暴挙に出た。向こうの要求は『娘を無事に返してほしければ、BTシステム構想を取り下げる』。

当然、そんな要求飲める筈がない。上に立つものとして何千人という社員の事を第一に考える義務がある。責任感と娘への情が板挟みになった。そして、オルコット夫妻が取った手段は師である【身元^{シヨン}不明】への『娘を取り戻してほしい』のという依頼。

その依頼を受けオレと先生は彼女の身柄の確保に動いた。というのがあの時の概要だ。

あの時の女の子がまさかIS学園で再び会う事になるとは人生は分らないものだ。

しかし、その再会はオレにとって喜ばしいものではない。

オレの存在や生業は秘匿されるべきものだ。

その為にはオルコットにはあまり近づかず、距離を置いた方が良かった。

事実、オレもセシリア・オルコットに近づく気はなかった。懐に入る気なんてなかった。

しかし、ここで問題が発生する。

セシリア・オルコットがあらうことか、護衛対象である織斑一夏に惚れてしまったのだ。

間接的にオルコットに関わる機会が多くなる今の状況では済し崩し的にオレの正体がバレかねない。上手く線引きが出来ないのはオレが甘く未熟だからだ。

或いは――まだ未練があるのかもしれない。

彼女と共にいる事で、『世界はまだ捨てたものじゃない』と錯覚していた過去のオレに戻る事が出来るかもしれない、という願望があったのかもしれない。

しかし、それは所詮夢でしかない。

儚い霞の様な幻でしかないのだ。

そしてオレは知っている。

この世界には自分の様な人間に対する『救い』はなく、絶望しかない事を。

救いがあるとしたら、何故誰も先生に救いをさしのべてくれなかったのか。

誰かがほんの少し、人間の心を持っていれば。

ほんの少しの情けがあれば。

ほんの少しの救いがあれば。

あんな事にはならなかった。

だが、そうはならなかった

この世界には絶望しかない。

希望があるとしても、それは自分達のような暗闇の世界の人間のものではなく、織斑一夏の様な光の世界の人間のものだ。

オレのような人を守ることも救う事も出来ない屑は大事なものを遠ざけなければいけない。

このままオレがセシリア・オルコットの近くにいれば、復讐劇に巻き込んでしまう。

先生が護ったものを、オレが壊すような事だけはしたくない。先生の生きた痕跡を消すことは、オレが許さない。

そこで、予防線としてセシリア・オルコットに嫌われる事にした。彼女はどうも過去のオレを美化しすぎている傾向にある。

以前偶々オルコットとルームメイトのティナ・ハミルトンが初恋の話に花を咲かせているのを聞いてしまった。決して盗み聞きではない。耳に飛び込んできただけだ。

それはさておき、彼女による過去のオレの評価を聞いてしまった時、『何処のスーパーヒーローだよ!？』と言うほどの美化されっぷりに恥ずかしさのあまり机から顔が上げられなくなった。それほど言うのだから、さっきの様な『人の心を弄ぶ最低野郎』^{ストレンジャー} Ⅱ【異邦人】だという結論には至らないだろう。

結果としてこちらの思惑通り事が運んだ訳だが、

「まさか殴ってくるとはなあ……」

『悪印象を持つてくれればいい』と思って採った方法はどうかやら彼女の逆鱗に触れてしまった様だ。狙撃手にとつて禁忌^{タブー}ともいえる指を傷つけるグーパンチを思わずやってしまうあたり、オルコットがどれだけ怒っているのが窺える。それだけ傷つけてしまったのだろう。

「悪い事してしまったな」

かといって謝る気はないが。

このまま蛇蝎のごとく嫌われてしまえばしめたもの。良心が痛まない訳ではないが、それはそれ。これはこれだ。

倫理よりも結果が重要とはよく言ったものだ。

あとは、残った問題を解決する為の後始末、か……。

「相変わらずバカだね旭くんは」

「そーですねー」

後ろから掛けられた声に適当に生返事をする。馴染みに声の主は見なくてもわかる。

そして、後ろから気配を消して近づくこの手口も。

更識楯無。

オレのIS戦闘における師で天性の人たらし。

ある意味天敵。

「あのまま押し切っちゃえば絶対フラグが立ってセシリアちゃんルートに入っていたよ」

「ギャルゲーと現実を混同すんな。一夏じゃあるまいし、オレにそんな『たらしスキル』があるわけねーだろ」

「やん、それじゃあオネーサルートに入っちゃう？」

「いや、それオレの本来の目的から逸れてるよな」

「そう？ もういつその事エージェントなんてやめてこの学園に骨を埋めちゃわない？」

楯無さんの提案に返したのは微笑。言外に「あり得ない」と語った。

楯無さんも最初から期待していなかったようで悪戯っぽく笑い返す。

視線を彼女から外して、包帯を拾い上げて軽くはたいて埃を払う。

楯無さんは手の中にあつた包帯を奪い取り、肩を掴んで強引に椅子に座らせた。

そしてあつという間に包帯を額に巻いていった。

「旭くんの髪って柴犬みたいな手触りだね」

「ほつといてくれ」

「褒めてるのに」

「褒めてたのかよ……」

包帯を巻き終わり、まるで犬の毛づくろいをするかのような手つきでオレの頭を撫でてきた。

犬扱いされた事は不本意ではあったが、何故かその手を振り払う気は起きなかった。

必要以上に他人にベタベタされるのは嫌いだが、それが楯無さんなら別に嫌じゃない。体の力を抜いて、身を委ねた。

「頑張ったわねって言ってあげたいところだけど、まだやる事が残っているよね」

ギクッ！ と力を抜いた体が再び強張る。

「ラウラちゃんの所に行つてあげないと、ね」

「ちょ、ちよつと待つてください。こんなボロボロの状態でラウラの所に行つたらアイツガ気に病む——」

「ダメ」 こういうのは早めに行つてちゃんと話し合った方がいいいんだから」

「いや、けど」

「会長命令」

「グヌ……ッ！」

頑張れオレ！ ここで押し切られたら負けだ！ 強気に切り返すんだ！ いつもとは一味違うニュー旭を見せてやれ！ 或いは旭・ザ・セカンドでも可！

「こ、断ると言つたら？」

「首輪とリードと犬耳を付けて医務室まで強引に引っ張っていくからね。」

「くっ！ この外道め！」

「私としてはそっちの方がいいかな。なんて思っただけど。旭くん犬耳が似合いそうだし。」

眼が本気と書いてマジだこの人！ もし犬耳なんかつけられようものなら、この人の事だ。間違いなく写真に撮ってオレの手の出せないようなデータベースの奥の奥に後生大事にしまい込むだろう。その写真を何かの拍子にあのお調子者のイアンに見られようものなら……！

絶対にそれをネタに5年10年と、下手すりゃ一生からかわれる！
間違いない！

そうなってしまうたら最悪だ！
出来ればそんな展開は考えたくもない！

「わかった！ 分かりましたよ！ 行けばいいんでしょ行けば！」

「うんうん。素直な子はおねーさん大好きよ」

「だから、オレの方が年上だって！！」

第24話 絆

1

「う、あ……」

ラウラのぼんやりと宙に浮いていた意識が徐々に覚醒してくる。
ゆっくりと眼を開く。眩い光に眼が眩むが、それも少しずつ慣れて
ぼやけた輪郭がハッキリとしてきた。

「気がついたか？」

「教、官……ウッ！」

ラウラは自らが教官と尊敬して仰ぐ織斑千冬が視界に入り反射的に
起き上がるうとしたが、全身に激痛が走り体を動かす事が叶わない。

「無理をするな。全身に無理な負荷がかかった事で、骨と筋肉が悲
鳴を上げている。しばらくは動けないだろう」

「一体、何が……起こったのですか？」

全身の痛みに顔を歪めながらもそれを堪えて上体を起こして、真っ
直ぐに千冬に問うた。

縋る様な眼で見つめられて、千冬はしばらくラウラの問いに答える
事を憚っていたが、誤魔化しきれないと判断した。ここだけの話だ。
と前置きしてから何が起こったか話し始めた。

「VTシステムは知っているな？」

ヴァルキリー

「過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシス
テム……。しかし、それは——」

「そう、登場士の安全性を一切考えないシステム設計からIS条約でどの国家・企業・組織においても研究・開発・使用のすべてが禁止されている悪魔のシステム。それがお前のISに搭載されていた」
「……………」
「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そしてなにより搭乗者の意志が揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く委員会は強制捜査に入るだろう」

ラウラは俯いたままギュツとシートを握り締める。
結局、自分の愚かしさがこんな事態を招いてしまった。
結局自分は何をしたかったのだろうか。

大事なものを力づくで取り戻そうと躍起になり破壊する事に拘り過ぎたその心が、自分の何より大事にしてきた絆さえも壊してしまっ
た。

織斑千冬。 ストレンジヤー 【異邦人】。

二人ともさぞかし失望しただろう。

後悔しても、もう遅い。時計の針が戻せない様に、やってしまった事は消える事は無い。

虚空を彷徨う視線は彼女自身の心を見失わせる。

『さあ、いこうぜ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

織斑一夏のかけてくれた暖かい言葉が、今ではこんなにも遠い。

——やはり私に、光の世界に行く資格など……。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

急に名前を呼ばれ、ラウラは顔を上げる。その視線の先には自分を真っ直ぐに見てくれている織斑千冬の瞳があった。

「お前はこれからどうしたい！」

「私……、は……。私、は……」

「どうしたいのかわからないのなら丁度いい。これからゆつくりと探すといい。何、時間はたっぷりあるぞ。なにせ三年間はこの学園に所属しなければならぬのだからな。まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩んで自分だけの答えを見つけろよ小娘」

「あ……………」

千冬の言葉は見捨てられたと思っていたラウラにとって意外だった。突然の事でラウラはどう答えていいのかわからない。分からないまま、ただ口をポカンと開けるしかなかった。

そんな彼女の様子に構う事なく、いいたい事を言っただけで言わんばかりに千冬は席を立ちラウラに背中を向ける。まるで先に行くから追って来い、と言わんばかりに。

「まったくお前といい、浮舟といいバカな生徒を持つと苦労する」

ストレンジャー

「……………」
【異邦人】は今どこに？ 無事なのですか？」

「安心しろ。重傷だが、今のお前よりは遥かにマシな状態だ。体の方は、な……………」

「……………え？」

「気になるなら、本人に直接聞いてみたらどうだ」

千冬はドアの取っ手に手をかけて、横開きの扉を開く。

「あ」

開いたドアから姿を現したのはコップに耳を当てている完全なる立

ち聞きルツクの上、首に犬の首輪を巻かれて、頭に犬耳のオマケつきというふざけた格好の【異邦人】ストレンジヤー——浮舟旭だった。

「立ち聞きとはいい趣味だな」

「あー、いや……。ラウラとちよいと話をしようとしただけなんスけど、なんだか深刻そうだったので、終わるのを待とうかと……」

「そうか。それはそれとして、そのふざけた格好はなんだ？」

「……………織斑先生、男には時として自らのプライド捨ててでも、やらなきゃいけないときがあるんスよ……」

「そ、そうか……。んっ！ んんっ！ あとはお前たち二人で話をしろ」

千冬は旭の深い理由にツツコミを入れたい衝動に駆られるが、心中察するに余りある事情にグツと堪えて咳払いをして今度こそ、部屋から出ていった。

犬耳力チューシャと首輪を外し、ベットの脇に置いてあつた椅子に座る。

気まずい沈黙が旭とラウラの間に流れる。無理もない。

2人が最後に交わした言葉は殺し合い一歩手前のこれ以上ないほど殺伐としたものだった。

「し、しかしアレだな。こうやって改まって話すとなると、中々言葉が出てこないモンだな」

「……………そうだな」

「ここはアレだ。適度に気のきいた小粋なトークで場を和ました方がいいんだろうかな？」

「……………好きにしろ」

「ほ、本日はお日柄もよく——」

「……………普通に頼む」

「お、おう」

再び沈黙が二人の間に横たわる。かれこれ10分くらい旭とラウラは固まっていたであろうか。不意にラウラが言葉を投げかけた。

「私たちの、関係は壊れたのだろうか？」

「……………、壊れたんだろう。少なくとも、オレは殺し合いをした相手と平気な顔で笑いあえるほど神経太くなれない」

少し逡巡してから、慰めも、取り繕いもなく【異邦人】ストレンジヤーは静かにそう告げた。

当然だ。自分は『織斑一夏の護衛』という彼の仕事を知りつつ邪魔をしたのだ。

見捨てられるのは当然の結果だろう。

例えばここで許されたとしても、自分で自分を許せない。

ラウラは懲役判決を受ける被告の様な心境で旭の言葉を受け入れる。壊れてしまったものは決して元には戻らないのだから。

「だから、【異邦人】ストレンジヤーとしてのオレとアンタの関係はここでお終いだ」

「……………当然、だろうな。お前に嫌われる事をしたという、自覚はある」

——ダメだ。泣くな。強くあるのだろう。ここで泣いてしまうのは卑怯だ。

「最期に1つ。【異邦人】ストレンジヤーとしてアンタに言っておきたい事がある」

「……………ラウラ、オレが……………アンタを嫌いになる筈がないだろう……………」

「……………お前は、狡い奴だ……………」

「そつだな。オレは、狡くて、嘘つきで、本当に最低なクソ野郎さ。けど、それでもこれだけは本心だよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。ア

ンタを大事に想っていた」

「ありがとう。【異邦人】」
ストレンジヤー

——そして、さよなら。

「そういつわけで、改めましてはじめましてラウラ・ボーデヴィッヒ。オレの名前は浮舟旭。よろしくな」

「……………え？」

——何を言っているんだこの男は？

「なーに呆けてんだ？ 今のオレは【異邦人】としてここに居るんじゃないくて、『浮舟旭』としてここに居るんだ。【異邦人】としての関係はここで終わってもさ、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』と『浮舟旭』としての関係はこっからだろ？」

「そんなの、屁理屈だ……ッ！」

「屁理屈としてもお互い自分にする言い訳としては使えるだろーよ」

嗚咽混じりの声のラウラをあやす様にそっと抱き寄せて優しく撫でた。

自身の泣き顔を隠す為、ラウラは縋りつくよに彼の胸に顔を埋める。

旭の心が軋る。

何故自分はこんな女の子に敵愾心を向ける事しか出来なかったのだろうか。

彼女はこんなに寂しがっていたのに。

ただ、置いていかれる事に怯えて、寂しがっていただけなのに。

「ごめんなラウラ。独りにしてしまって」

旭の謝罪を受けて、ラウラはしゃくりを上げるような息を一つすると声を震わせながら言った。

「お前にとって……わ、私が一番じゃないのは分かってる……！」

旭にとって一番大事な人は【身元不明^{ジョン・ドウ}】だ。
ラウラではない。

それは分かっている。

死んでしまった人間には誰も敵わないのだ。
だけど、それでも願わずにはいられない。
いつか、自分を一番に想ってくれる日が来る事を。

「だけど、わた……！ 私を敵を見る目で、見ないで……っ！ お前まで、私を邪魔者扱いしないで……！」

「……………ああ。ラウラ、アンタはオレの敵じゃない。敵なんかじゃ、なかったんだ……」

腕の中に収まる温もりを確かめるようにそって包み込む。

折れたアバラは痛むが、それすらどうでもいい程にラウラの事を愛おしく想う。

たとえ、遠くない未来に手放さなければならないとわかっていても失いたくない。

だから、もう少しだけ。

破滅するときは誰も巻き込まず独りで消えるから。

この命が消えるその時まで。

これから先幾多のモノがこの掌から零れ落ちても。
どうか、この温もりだけは——奪わないで……。

彼の切なる願いが届くかは、神のみぞ知る。

《はろう 皆のアイドルリリカルマジカル束さんだよ！》

「もしもし束さん？ オレです」

《かけて来ると思っていたよあつくん。私の事を考え過ぎて夜も眠れないのかな？》

「申し訳ないけど、今日はおふざけに付き合う気はない。単刀直入に聞く。ドイツ軍のVTシステム。あれはアンタが一枚噛んでいるのか？」

《ふふ》

此方の問いに束さんが返したのは嘲笑。

《まだまだ私の事をわかってないね、あつくん。私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ。すなわち、私の作る者は等しく完璧でなければ意味がない。あんな不細工な代物、私が世に出す訳ないじゃない》

「……………その割には【暴風】ハヴオック・ゲイルは所々不完全だよな」

《あれはあれで一種の完成形だよ。特に【アドヴァンテージ】の出来は【白式】にも劣らない傑作といってもいいくらい。アレの真価はただの事象予測機能だけに留まらない。寧ろ演算による事象予測なんて、【アドヴァンテージ】の絶大な力の一端でしかない。

ハヴオック・ゲイル【暴風】は使い様によつては最弱のISだけど、その気になれば世界相手に戦つても、ううん。全世界のISを相手に戦つても勝てるだけの相反性を持っている。あつくんも気付いているよね？》

「……………ああ。だけど、それを使うには——」

——人間をやめる覚悟がいる。

《本気のあつくんなら扱いきれでしよう》

「多分、な。だけどオレは二度と本気にはならない」

オレの本気は殺す事に特化しすぎる性質上先生に禁じられた。
本気を出せば文字通り人間でいる事を投げ出す事になる。
だから、先生はオレが人間でいられる様に枷をした。

《ああ。言い忘れていたけど、その研究所。三時間前に地図から消えたよ》

「な……ッ!？」

眼を見開き耳と肩で電話を挟みながら、情報端末を手にとって起動させる。確かに三時間前にドイツの山奥にある研究所が壊滅させられた、という情報がある。死亡者はゼロ。

「東さん、アンタ……!」

《うふふふ。あつくん、何を怒っているの？ 今更?》

そつ。今更。今更だ。しかし、それでも――

「黙れ。……………チッ、オレはアンタのそういうところが大嫌いだ」
《そうかな？ 私はあつくんのそういう汚れている癖に妙に潔癖な矛盾してるところは好きだけどね》 いくら観察しても飽きが来ないくらい》

自分の理解できないものが面白い。まるで『お前は実験用のマウスだ』と言われているようだった。

気持ちを切り替える為に息を吸って、ゆっくりと吐く。
感情的になるな。頭で事象を判断すればいい。

「アンタがオレを興味対象とする理由はどうでもいい。一つ、忠告しておく。アンタはオレのクライアントだ。仕事を依頼された以上、

それを全うする為に全力を尽くす。オレはプロだからな。その過程でアンタが対象の『織斑一夏』に危害を加える気なら、例えばアンタでも容赦はしない」

《ふふふふ》 いつでもどうぞ。私の時間はあつくんの為なら二十四時間フルオープン。コンビ二なんか目じゃないよ》

表情を険しくしたまま電話を切ってポケットに仕舞い込む。泣き疲れて寝て眠っているラウラに視線を落とした。その無防備な笑顔に思わず笑みが零れる。

しっかりと手を握ったまま放さないラウラの頭をそつと撫でる。と、いうかしっかりと掴んだまま手を放してくれない。トイレに行きたくなったらどうしたらいいんだコレ？ それ以前に本当にコイツは寝ているのだろうか？

試しに指でプニプニと頬を突いてみる。

うん。餅みたいな頬だ。突き甲斐がある。

プニプニプニプニプニプニ。

ヤッベ。癖になりそう。

「ヘンターイとまれ」

「1・2」

背後から楯無さんがこっちに声をかける。このやりとりも慣れたものだ。

溜息をついて振り向く。

「いつも思うんだがよ、アンタはどっから湧いて出るんだ？」

「やん、旭くんはおねーさんの事をもっと知りたいのカナ？」

「いや別に」

「……………」

ツン、と楯無さんがオレのアバラをつつく。堪らず悶絶。

「旭くん、女の子にはもつと優しくしないとモテないゾ」

「~~~~~ッ！！ 今日のおれの思いやりはラウラの分で売り切れだこの野郎……！」

チクシヨウ折れた部分をピンポイントで触りやがって！

拷問に耐える訓練は受けていても、『痛み到我慢が効く』ってだけで、痛てえもんは痛てえんだぞ！

「怪我、結構酷いね」

「これくらい、安いもんだろ。ラウラの痛みに比べれば」

「……………そうやって、『自分の体はどうでもいい』って投げだしちゃってるんだね」

「だから？ それこそあなたには関係ない事だ」

「頭、痛くない？」

「……………」

正直言つて、かなり痛い。【アドヴァンテージ】を使用した後は決まって酷い頭痛に苛まれる。この間学園側に内緒で診断を受けた結果、脳細胞が異常発達している弊害らしい。

そのせいか最近是不眠症気味だ。活性化しすぎた脳細胞が働き続けて眠る事を許さない。

「些細な事さ」

「……………矛盾してるね。『死ねない』って言ってる割には自分の体を消耗品みたいに扱ってる」

「否定はしない」

「旭くん。アナタは本当は、死にたがっているんじゃないの？」

「さーで、どうなんだろうな。」

「おねーさんと旭くんの仲じゃない」 隠し事はなしでいきましょ
う?。」

「案外、秘密の多い男の方が女にモテるんだよ」

「……………嘘つき。本当はそんな事どうでもいい癖に」

「……………ああ。オレは……………、嘘つきなんだ」

楯無さんの開いた扇子には『有耶無耶』の文字が。彼女はこれ以上
情報は得られないと判断したのか、視線を外して後ろから救急箱を
取り出した。

「シャツ、脱いで。手当てしてあげるから」

「ん……………頼む」

3

騒動から二日後のホームルーム。一夏と旭は顔を突き合わせていた。

「シャルルの奴、遅いな」

「そーだなー」

一夏の言葉に旭は適当に相槌を打つ。

「なんだよ旭。やる気ないな」

「昨日の今日でそこまで元気なアンタと一緒にすんな。アバラ折れ
てて痛エんだよ。っていうか、アンタ大丈夫なのか? 【アドヴァ
ンテージ】の影響は」

「ん、昨日CT検査を受けたけど何ともないってさ」

「そうか。それはなによりだ」

ホッと安堵の息を吐く。【アドヴァンテージ】の後遺症を受けて取

り返しのつかない事になろうものなら、依頼人である篠ノ之束に申し訳が立たない。

少なからず以前の無人機襲撃以来あからさまな不信感を抱いているとはいえ、そのあたりのケジメはキッチリ付ける人間だ。

「そう言えば箒」

一夏の隣に座っていた抜け殻——もとい、篠ノ之箒は一夏の呼びかけに反応を示さない。

「先月の約束なんだけど——」

「……………ピク」

約束とは箒が一夏に取り付けた『私が勝ったら付き合ってもうらうぞ!』というものだろう。と旭は傍観モードに入りながらぼんやり思う。

「——付き合ってもいいぞ」

「……………なに？」

一夏は『復活の呪文』を唱えた。箒は復活した。箒はすぐさま一夏に飛びつき締め上げる。

「りりりり理由を聞こうではないか!」

表情は険しいがあからさまに上機嫌だ。

そんな彼女の様子に構う事なく一夏は飄々と言葉を繋ぐ。

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合うさ。————買い物くらい」

「……………」

ビキッ！ と箒の表情が固まった。旭は巻き込まれない様にそそくさと退避を始める。

「……………だろうと……………」

「ん？」

「そんな事だろうと思ったわ！！」

腰を捻つての正拳突きを鳩尾に受けて一夏は撃沈。トドメの踏みつけで完全に沈黙する。

「……………な、何故……………ガクッ」

「……………アンタ、わざとやつんじゃねーよな？」

なけなしの勇気で行為を抱いている人間に告白した篠ノ之箒に同情しながらも溜息交じりに苦笑を洩らす。いつもの朝の光景だ。

「みなさーん、ホームルームを始めますので席についてくださーい……………」

教室に入つて来た副担任・山田麻耶の存在に気がついて、生徒達は席付いて教壇を見た。

心なしか彼女は相当疲れている様に見える。

旭だけがそんな彼女の様子を見て申し訳なさそうな、居た堪れない表情をしていた。

「今日は、ですね……………。皆さんに転校生を紹介します……………。転校生といえますか、既に紹介は済んでいるといえますか、ええと……………」

クラスメートは皆、真耶の齒切れの悪い言葉に疑問符を浮かべている。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「「「え……ッ!?」」」

教室に入ってきた『転校生』の姿に一同啞然。

それもそうだろう。教室に入ってきたのは『ブロード・ジェントル金髪の貴公子』と校内でも屈指の人気を持つシャルル・デュノア。

その彼が女子の制服を着て教室に入ってきたのだから、誰でも驚くだろう。

唯一、シャルルと昨日会ってとある計画の話をした旭を除いて。

「（どういう事だよ旭？　なんでシャルが——っていうかいいのか？　デュノア社とか、フランス政府とか……）」

「（いやー、『スパイの事がバレればデュノア社のスキャンダルが芋づる式に委員会に知れ渡る事になる』って僭越ながら脅し——ゴホンゴホン、説得をさせて頂きました。ドイツ軍のスキヤンダル的事もあつてか、快くシャルロットの解放を約束してくれたね。スパイの存在と企業としての保身っていったら当然スパイの方を切り捨てるだろうしな）」

「（お前って本当に何者だよ?）」

「（テヘッ）」

「（気持ち悪いからやめれ）」

「え？　え？　デュノア君って女……?」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったのね!」

「っており織斑くんと浮舟くん同室だから知らないって事は――」

「ちょっと待って！　一昨日、男子が大浴場使ってたわよね！？」

ザワザワッ！　と教室内にどよめきが奔る。そして、教室内がヒートアップしていくのに反比例して一夏の顔色が青ざめていく。

「一夏アあああああ！！！」

「げえ！　関羽！」

「死ねエエエエエエツ！！！」

ドン！　と登場。中国代表候補生・ファン・リンイン鳳鈴音。

IS【甲龍】を展開。一夏の命を狙^{タマ}って死神の鎌は迫りくる。

一夏の脳裏に『哀れ高校一年生男子。同学年女子に惨殺される』という明日の朝刊に載るであろう文面が。

いきり立つ鈴の攻撃が迫りくる。一夏は死を覚悟して固く目を閉じた。

が、いつまで経っても衝撃はこない。代わりにガキッ！　という音がしただけだ。

一夏が恐る恐る目を開けると、鈴が攻撃をシャルルはリヴァイヴを展開した防いでいた。

そして鈴の背後から旭のチョップが炸裂。

「な、何すんのよウニ！　う……ッ」

当然これには鈴も即座に噛みついた。だが、旭の阿修羅の形相を前に思わず怯む。

「鳳鈴音。ちょっとそこに正座しなさい」

「な、なんでよ……」

「はい」

額で激しい自己主張をするのは切れんばかりの太い青筋。

旭が怒らせると怖いのは、一カ月前の無人機襲撃の際に目撃済みだ。下手すれば千冬とタメを張れるほどに。

「アホか貴様はアアアアああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「ISみたいな兵器をそんな軽々しく振るうんじゃねえ！　ふざけてんのかテメーは！！　感情をコントロール出来ずに下らない理由で闇雲に力を振るうつもりならテメーに専用機を持つ資格すらねえ！　今すぐ代表候補生なんざやめちまえ！！！！」

「うう……。じゃ、じゃあどうすればいいのよ!？」

「え？」

「ここにオレ特製熊もイチコロ100万ボルト改造スタンガンと150気圧エア5グラムの鉛弾を秒速150メートルで10連発で撃ち出す事の出来る改造エアガン。勿論違法じゃねーよ」

どちらも違法です。

「一回のレンタル料は500円のところを友人価格の300円ポツキリ。奥さん、いかがですか？」

「旭イイイイイ！？」

「大丈夫だ。細工してあるから致死性は皆無。死んだ方がちょっとマシだって思う程度さ」

旭のさわやかな笑顔で言う物騒この上ない台詞に一夏はおるか鈴も引き気味だ。

固まっている二人の様子を気にも留めずセシリアが旭に近づいてきて改造エアガンの方をひたたくって銃身をスライドして、安全装置を外した。

そして無表情なまま旭の足元に銃口を向け、引き金を引いた。

「どわっ！ オ、オルコット待て！ 標的は一夏あっちだろ！？ うわああああ！！」

予想外の展開に慌てる旭。だが、セシリアは攻撃の手は緩まない。あくまで無表情に。それでいて正確に鉛弾を発射する。

旭もそれを避ける。避ける。避ける。

やがて弾が尽きて、肩で息をする旭とセシリア。

「なにすんだオルコット！？」

「あら、浮舟さんも知っていたのですから同罪ですわ」

「そんな無茶な理屈があつてたまるか！ アンタまさか一昨日の事根に持つて——」

「お覚悟を」

「待て待て待て！ ちょっと待とう！ イギリスは紳士の国だろう！ とりあえず武器を収めて話し合いのテーブルにつこうじゃないか

！ 紳士なら誰でも知っている紳士協定ですよ！！」

「浮舟さん、残念ながらわたくし、淑女ですの」

「灯台もと暗しと言わんばかりの落とし穴！ なんてこったコレが世間で言う言葉の抜け道という奴か！ っていうか何故安全圏から一気に地雷原へ！？ オレ何か悪い事――」

「……………」

「――しましたよね思いつきり」

リロードが終わりセシリアは笑顔のまま旭に銃口を向けた。

カンカンカン！ と再び鉛弾を発射。旭は教壇に潜り込み弾をやり過ごす。

「うはははははは！」

教壇の金具の部分が凹むのを目の当たりにしてヤケクソ気味に笑う。本気で命の危険を感じ取っていた。不意に教室の引き戸が開いた。

「相変わらず騒がしいなこのクラスは」

「「「ラウラ（さん）！？」「」」

「アンタ、もういいのか！？」

「ああ」

「な、なんともなくてなによりだ……」

一夏は若干腰を引かせながらラウラの無事を喜ぶ。無理もないだろう。彼は初対面時からラウラにロクな目にあわされていないのだから。

「織斑一夏」

「な、なんだ？」

「お前には迷惑をかけた」

「き、気にするなよ」

「これはその礼だ」

グイッ！ と袖口を引っ張ってラウラは一夏の頬に唇を押しあてた。

「……………は？」

驚天動地。まさかの光景にクラス中の人間があんぐりと口を開けている。

そして、旭が鬼神の形相で一夏に迫った。

「いイイイちかクウウウウン！！」

「うおわっ！ なんだよ旭！」

「スクラップの時間だぜエ！ クツソ野郎がアあああッ！！」

「待て旭！ 話せばわかる！ 今のはただのお礼だろ！ そんなにくじら立てなくても」

「んだとオオおおお！ 貴様ラウラにキスされて言うことがそれか！ ウチの娘じゃ不満だったのか！？ 許せん！ 万死に値する！！」

「ええ！？ じゃ、じゃあ、ウオオオ！ やったぜエえええ！！」

「おっしやああっ！ 娘が欲しけりやまずオレの屍を越えてゆけ！！」

「どうしろってんだよ！？ 面倒くさい奴だな！！」

「さあ死ね今死ねすぐに死ね！！！！」

そう言いながら、旭は両手に持った改造スタンガンのスイッチを入れながらチェシヤ猫を彷彿とさせる邪悪な笑みを浮かべながら一夏との間合いを積める。

周りの生徒達も専用機持ちの中で比較的理性的だと思っていた旭の暴走に啞然としている。怒り心頭だったセシリアですら旭のブチギ

レっぷりにおののいていた。

ラウラはそんな喧噪の中で一人懊悩としていた。「【ストレンジャー異邦人】浮舟旭と織斑一夏への感謝の気持ちを表すにはどうすればいい？」そんな相談を同じ部隊の副隊長であり、【ストレンジャー異邦人】の友人でもあるクラリッサ・ハルフォーフに持ちかけたのは、昨日の事だった。

織斑一夏への礼の方は先程の頬のキス。そちらの方は特に抵抗はなかった。しかし、旭への礼はかなり抵抗がある。いや、正確には以前からそう呼びたい、という願望はあった。しかし、今更そう呼ぶのは気恥ずかしすぎる。もし、万が一迷惑そうな顔をされたらどうしよう。そんな想いがラウラに二の足を踏ませる。クラリッサは大喜びすると言っていたが、果たしてそれは本当なのだろうか。

女は度胸。真の強者とは心の強いものだ！

ラウラは自分を奮い立たせ、決心を固める。

暴走する旭のそばに近づいて、袖を軽く引く張った。

「どうしたラウラ？」

振り向いた旭の耳にそつと囁いた。

「.....ありがとう。.....お、お兄ちゃん」

「旭？」

「.....は.....、」

「は？」

「反則だアアあああああ！！！！ どういうつもりだ！？ つていうか、誰の入れ知恵だ！？」

「ク、クラリッサだが.....」

「クラリッサのヤロー！ ウチの娘に何吹き込んでくれてるんだ！

だが、よくやった！！！」

よくわからないが、どうやら喜んでくれたようだ。

以前の自分だったら『くだらない』と斬って捨てた光景も今では自分が自分である為に必要だと思う。きっと自分の道はここから始まるのだと、そう思える。

さあ、行こう。

これが私の——ラウラ・ボーデヴィツヒの最初の一步だ。

ラウラは柔らかな笑みを浮かべて、光の世界へと一歩踏み出した。

第二部 完

第25話 アドバイザー

1

「うーん……」

時刻は午前5時。額に生々しい傷のあるツンツン頭の青年はIS学園にあるラボでコンソールパネルを操作しながら唸り声を上げていた。眉間に皺を寄せて吊りあがり気味の眼を更に吊りあげている彼の形相はまるでチンピラのそのものだ。

彼の頭を悩ます原因は視線の先にあるIS【ハヴオック・ゲイル】。自らの専用機が最近シツクリこない。

そんな感覚がここ一週間で顕著に表れていた。その原因を究明すべく、学園に備え付けてあるラボに持ちこんで原因を調べてみたが、まったくわからない。

そもそも彼は『アサルトアームズ』の調整は手慣れているが、ISの調整に関してはズブの素人なのだ。原因が究明できないのは当然と言えば当然だ。

整備科に任せればいいのか？ という意見もあったが、出来る限り自分の道具は自分で手入れをしたい。自分の手入れも出来ないものはプロとして失格だ、という考え。

そしてなにより自らのIS【ハヴオック・ゲイル】に道具以上の愛着。

言うならば、『命を預ける相棒』や『長年の親友』のような感情を抱いていた。

それを他人においそれと触らせるなど、あり得ない。

しかし、このままでは深刻な問題に発展していくであろう事も確かだ。

兵器の整備不良はシャレにならない。その事は彼も重々承知してい

る。

だから問題だ。

気軽に自分の機体に触ってほしくない。

しかし、自分では整備する事は出来ない。

そんな二律背反を抱いて懊悩とする。

「……………、こりゃ本格的に整備の勉強しなけりやなあ……………」

そう呟くと【ハヴォック・ゲイル】の操縦士・浮舟旭は作業を切り上げて、【ハヴォック・ゲイル】を待機状態の鎖のブレスレットに戻す。

そのまま日課である体力作りのランニングに向かった。

2

時刻は朝の7時。日課であるランニングと近接格闘の訓練を終わらせて、部屋に戻って学校に行く準備を始めようとする。

その前にシャワーを浴びて汗を流しておきたい。一夏はまだ起きてないだろうから、先に使わせて貰うとしようかな。

そう考えながら部屋の入口のドアノブに手をかけて固まった。

ドアノブの位置が行きより3センチ低い。

それが示す意味はただ一つ。侵入者だ。

予想もしない展開に臍を？んだ。

クソツたれが！ まさか天下御免のIS学園で——しかも織斑先生や楯無さんの敷いた防衛網をかくぐって侵入者が入ると思っていなかった！

侵入者の目的は一夏か……………ッ！

侵入してきた奴の目的が一夏の暗殺だったなら、アイツの生存は絶望的……………！

一縷の望みをかけて、部屋へ突入した。

「一夏、無事か!？」

「ん……? う〜ん……。なんだよ旭? 朝からうるさいな……」

危機という言葉からまったく縁遠い一夏の姿にホツとした。しかし、すぐに口を真一文字に閉めて気を引き締める。

一夏が無事だったという事は侵入者の目的は別にある、という事。もしくはまだこの部屋に隠れているという事だ。注意深く、部屋の隅から隅まで見渡すと、オレの普段使っているベットが盛り上がっていた。

叩き起こした一夏にジェスチャーで下がるように指示を出して、手持ちの改造エアガンを右手に持つ。

殺傷能力は低いが、当たれば悶絶必死。侵入者の目的を吐かせる為に生け捕るには最適な武器だ。

緊張状態を保ちながら一気に左手で布団をひっぺ返してバックステップ。銃を構えた。

「Freeze!!は？」

「ん……」

銃口を向けて固まった。布団の中にいたのは小柄な銀髪の少女。つい一カ月前に殺し合いをした末に和解に至った少女・ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

それはいい。それだけなら特に大きな問題はなかった。しかし、

「.....な、なんで裸なんだ？」

その格好が問題どころか大問題だ。

「Freeze」と叫んでいながらオレの思考の方がフリーズしてしまった。

IS学園の広い敷地。朝の陽射し。爽やかな風。蝉の鳴き声はうるさいが、風鈴の涼やかな音でトントンだ。嗚呼、心が洗われる。

改造エアガンの残弾数を確認。残っている鉛弾の数は12。

銃口を向けるまでの時間と標的の逃げるに要する時間を計測。

[illegible]

銃口を織斑一夏に向けて発砲。

一夏はそれを横つ跳びに避けて床の上を転げ回る。

「黙れ！ ウチの娘を連れ込むとはいい度胸だよっ ぽど命が要らん

「なんだよ!？」 訳わからねえよ! 俺が何したって言うんだよ!

「娘に手を出す奴は抹殺！！」

411

あああああ！！！！！！」

容赦のない射撃を浴びせ、一夏は涙目で逃げ回った。
チツ、すばしっこい奴だ！　しかし、オレの本来の戦闘スタイルは
近接格闘！

逃げ回るならその足を止めてしまえばいいだけの話だ！

夏の進路に立ち塞がり、関節を取り、膝裏を蹴って床に転がす。肘
関節を後ろに回して、足で抑えつけた。

「ぐ……ッ！　待て旭！　誤解なんだ！」

「言い訳は最期の審判でしな。安心しろ！　一瞬で楽にしてやる！
オレは殺す相手はなるべく苦しまないように殺す事を心がけてい
るからなあっ！！」

「そのどこが安心だ！？」

「さて、おねむの時間だぜ！！　愉快で痛快な死体^{オブジェ}にしてやるよ！
！」

「嫌だアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「何をしているのだお前たちは？」

結局この騒ぎはラウラが間に入って説明する事で落ち着いた。

聞けば、侵入した目的は一夏ではなく、オレの布団に入りこもうと
した、という事らしい。

要するに一夏はラウラの起こした騒動のとはっちりをモロに受けた
事になる。

一夏に拳骨を喰らったが、まあそれは敢えて受けた。
奴の拳は非常に痛かった。

3

「痛エ……」

放課後。生徒会室に向かう途中浮舟旭は今朝一夏に殴られた頭をさすっていた。

「聞いたよ旭くん」 ラウラちゃんを部屋に連れ込んだんだってね？」

「どっからそんな噂が……違うつて。ラウラが部屋に入りこんでオレのベットで寝てただけ」

「ラウラちゃん裸だったんでしょ？ 旭くんのスーケベー」
「妹の裸に欲情する兄貴がいてたまるか」

楯無の言葉を受けて海よりも深いため息について予算関係の書類に目を通していく。

旭は生徒会役員ではない。が、ここ最近生徒会の仕事を手伝う事が多い。

実質的な会計として認識されている。

2ヶ月後の学園祭に向けて生徒会のやる事は山積みだ。

その上、夏休み前という事で学園内の生徒のテンションが上がっている。

その所為で、

「チエストオ——ッ！！！」

生徒会長の楯無を襲う生徒が絶賛急増中だったりする。

「フッ！！」

襲ってきた生徒の竹刀を旭は蹴りでへし折った。踵を軸に回転。脚を襲撃者の少女の顔紙一重で寸止めする。

「まだやる？」

「……ま、参りました」

「はい。お疲れ」

IS学園の生徒会長の座は『最強』の代名詞だ。

彼女に勝つという事はIS学園のトップに立つ事を意味している。

普段は平静を保っていても人間テンションが上がると普段しない様な事をやってしまう者である。そのたびに楯無の近くにいた事が多い旭が撃退している。

ここ最近で旭に付いた渾名が【生徒会の番犬】。

まったくもって不本意な話である。旭は更に深い溜息をついた。

「旭くん、溜息ばかりついてたら幸せが逃げちゃうゾ？」

「ほつといてくれ」

ただええ考える事が多いのに、これでは心の休まる時が無い。

そんな憂鬱モード真つ最中の鬱陶しい事この上ない旭の携帯に着信が。

旭は面倒くさそうに携帯を取り出して発信者を確認する。

イアンなら問答無用で切ってしまうおうと思っていたが、発信者の名前の所に『ラウラ・ボーデヴィツヒ』と出ていたので嬉しそうに笑って通話ボタンを押す。

なんだかんだ言いつつ、彼はラウラに弱いのだ。

「へいへいもしもし」

《スト——、旭か？》

「ああ。どうしたラウラ？」

《来週ある課外授業の事は知っているか？》

「おう。朝織斑先生が言ってたアレだろ？」

《実は——私は水着は学校指定のスクール水着しか持っていないの

だ」

「……………ああ。それは拙いな」

《やはりお前も拙いと思うか？》

「『お前も』？」

《ああ。クラリッサにやめた方がいいと言われてな》

「ふーん……………」

ラウラの年でスクール水着を着ていようものなら痛い人、もしくは可哀そうな子扱いされる事は請け合いだ。クラリッサにしてはまともな意見だ。と旭は内心彼女を見直していた。

《『スクール水着はマニア心をくすぐるだろうが、所詮色物の域を出ない！』と言われてしまつてな……………」

「……………」

クラリと旭は立ち眩みを覚えたような気がした。

前言撤回。やはり彼女の意見はロクなものではなかった。

とりあえずラウラに余計な事を吹き込みまくるクラリッサは次に会った時に一発殴つておこう、と心に決める。女尊男卑の風潮のこの世の中ではあるが彼にはそんな事は関係ない。旭は根が真面目なので、『やる』と言つたら本気でやる。

良くも悪くもそういう人間なのだ。

だが、ラウラの変化はある意味いい傾向だとも思う。

自分の身だしなみを気にすると言う事は今まで『兵士』や『兵器』としてしか生きてこなかったラウラが戦う以外に存在意義を見出そうとしているのだと思う。

それは光の世界へと積極的に馴染もうと彼女が努力している証拠だ。

自分は救われなくてもいい。救われるには沢山の人を殺し過ぎた。師である人間ですら殺した。

だから、救われるべきではない。救われるなんて赦さない。

【ジョン・ドゥ身元不明】の仇を討ったあとは、苦しんだ末に惨たらしく死ぬべきだ。

それが彼の望む自分の結末。破壊者として迎えるべき末路。

しかし、ラウラには幸せになつてほしい。

光の世界で笑つていてほしい。

それが人間としての彼のたった一つの想い。

破壊を願う者が人の幸せを願う。

自分の在り方は矛盾している。

以前からそれを周りに指摘されていたが、ラウラが現れてから彼のその在り方が顕著に表れてきている。

その道化じみた在り方が篠ノ之束から見たらさぞ滑稽なのだろう。

しかし、自分のこの在り方を変える気はない。

その矛盾が【ストレンジヤー異邦人】という怪物で、『浮舟旭』という人間なのだから。

「オーライ。買いに行くんだな。いつにする？」

《……日曜日はどうだ？》

「日曜日、日曜日……。ああ、大丈夫だ。その日は一夏はシャルロットと出かける予定らしいからな」

シャルロット・デュノア。

一カ月前に転入してきたデュノア社のスパイ。

諸々あつて彼女は一夏に惚れて、実家であるデュノア社と縁を切つた。

その際に色々と協力して以来、今では彼女は信頼できて、利用できる協力者の一人だ。

実際彼女のお陰で旭の負担は大分減った。

事前に危険を察知する能力は旭に劣るが、彼女の戦闘能力は旭より上だ。

後手に回ったとしても、一夏を護り抜けるだけの実力を備えている。

《では、日曜日。 10:00に噴水広場に》
ヒトマルマルマル

「ちよい待て。なんで学校じゃなくて、外で待ち合わせするんだ？
学校から直接行けばいいだろう」

《そ、それはクラリッサが——ええい、何でも無い！ とにか
くその日時に指定の場所まで来い！ いいな！ 拒否は認めん！》
「なんでキレ気味なんだよ!？」

言い終わる前に電話が切れた。ラウラの様子に訳が分からない。と
いう表情で首をかしげながら眼を瞬かせている。その様子を見てい
た楯無が「やっぱり女心がわかっていないね」という言葉に旭の混
乱は一層深くなり首を傾げた。

4

ラウラは旭との電話を終えた後、小さくガッツポーズ。

旭と出かける約束を取り付ける事に成功した。

クラリッサのアドバイス通りに事を運ぶ事に成功した事を純粹に喜
んでいた。

遡る事1時間前。

ドイツ国内軍施設【黒い枝】に【黒い雨】
シュバルツェア・ツヴァイク から緊急暗号通信と同義
のプライベート・チャンネルが届いた。
シュバルツェア・レーゲン

ドイツ軍特殊部隊シュバルツェ・ハーゼ——通称黒ウサギ部隊の副
隊長である『クラリッサ・ハルフォーフ』は訓練を中断して通信を
受けた。

「受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」
《クラリッサか……？ わ、私だ……》

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、なにか問題でも起きたのですか？」
《あ、ああ……。とても重大な問題が発生している》

ラウラの切迫した声にただ事ではないと悟ったクラリツサは訓練中の隊員たちにハンドサインで『訓練中止。緊急招集』と伝える。

「――部隊を向かわせますか？」

《い、いや。部隊は必要ない。実はだな、お前の言うとおり【異邦人】――旭との溝を埋めるべく、ベットに潜り込んでみたのだが失敗してしまつてな。その……、どうも行動が空回りしている様な気がするのだが……。ど、どうすればいい？　こういう場合どうするのが一番いいのだ？》

ラウラはこの一カ月悩んでいた。すれ違いが続いていた【異邦人】

ストレンジャー

――いや、浮舟旭と和解に至ったが、長い間離れて過ごしていた際に生じた溝を埋めるのに四苦八苦していた。

どうにも自分と旭の間に微妙な距離感が生じてしまっている様な気がする。

表面上、旭はラウラに甘いが、上手く距離感を測りかねている感じがなのだ。

人間関係は難しい。特にこれまで孤高を貫き通してきたラウラには人間関係の修復は非常に困難だ。そこで彼女は同部隊の厳しくも面倒見良く牽引する頼れる副隊長。

『お姉さま』と呼び慕われているクラリツサに相談を持ちかけた。

「なるほど。失敗しましたか……。朝起きて隣に可愛い女の子が寝ていて喜ばない男はいないと思つていたのですが……。………も
ストレンジャー
しや【異邦人】はゲイなのでは？」

《そ、そんな筈はない！！　旭は間違いなく女好きだ！　その証拠に先日もイギリスの代表候補生にセクハラをして殴られていた！！》

「相変わらずなのですね彼は……。では、他の作戦を考えてみましょう」

《た、頼む！》

次なるクラリッサがラウラに授けた次なる策は——すなわち旭をデートに誘う事だった。

「ここで重要な事は必ず外で待ち合わせをする事です。それによって相手にいつもと違う、という事を強く意識させる事が出来ます」
《な、なるほど……》

この場に旭がいればきつと『倦怠期の夫婦かよ』と皮肉っただろうが、ラウラは自分の認めた相手のアドバイスは疑う事なく聞き入れる。彼女は旭の様な捻くれた人間と違って良くも悪くも一本気な性格なのだ。

「口実は……。そうですね……。『水着を一緒に買いに行く』というのはどうでしょう？」

《水着か？　しかし、私はもう水着は学校指定の物を——》

「何をバカな事を——！」

《！？》

「確かIS学園は旧式スクール水着を導入していましたね。それも悪くない。いや、寧ろマニア心を擲るでしょう。しかし！　それでは色物の域を出ない——！」

《なん……だと……！？》

ラウラは愕然とする。

——まさか、水着一つでそこまで綿密な狙いがあるとは……！　恐るべし光の世界……！

と、なにやらズレた事で戦慄している。

そんなラウラの様子に構わずクラリツサは畳みかける様に自分の持論を捲し立てた。

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。特に【異邦人】^{ストレンジャー}はああ見えて経験豊富です。色物では決して陥落は出来ないでしょう！」

《い、いや。私と旭はそういう関係では——》

「隊長！ そんな及び腰では【異邦人】^{ストレンジャー}との溝は10年経っても埋める事は出来ません！」

《——ッ！？ ……そうか。そうだなクラリツサ。敵前逃亡は兵士としてあるまじきことだ……！》

「その通りです隊長——！」

《よし。それではこれより速やかに作戦を実行に移す》

「健闘を祈ります！ —— 通信終わり」

通信を切ったクラリツサは満ち足りた表情で笑みを浮かべた。否、高笑いをしていた。

「副隊長、^{おねえさま}隊長はなんと！？」

その問いにクラリツサは高笑いをしたままハンドサインで答える。

【隊長は2日後意中の相手とデート】と。

「……おおおお……！！」「」

「相手はやっぱ先日のお兄ちゃんですか！？ ^{おねえさま}副隊長——！」

「そうだ。長い間離れ離れになっていた幼馴染が再会してすれ違いながらも惹かれあつていく！ なんと言う浪漫！ ^{ストレンジャー}まるで少女漫画の恋ではないか——！ これはもう、隊長と【異邦人】が結ばれない

など嘘だ！」

「おねえさま流石副隊長！ 恋愛に詳しい！！」

「当然だ。伊達や酔狂で少女漫画を愛読している訳ではない！」

「か、かつこいい……！！」

「そんなかつこいい副隊長が大好きです！」

「でも、可愛くなった隊長はもっと好きです！」

「そうだろう、そうだろう。私も同じ思いだ！ 何故本国にいてもっと早く心を通わせる事が出来なかったのか……！ いや、今からでも遅くはない！ 私は決起する！ 可愛くなった隊長が想いを遂げる為に、全力で支援を行う事を誓う！ お前たちはどうだ！？」

「おねえさま「私たちも同じ思いです、副隊長！！！！」」

「よし。現時点で訓練を終了！ 直ちに日本の正当なデートについてのリサーチして対策を講じる！！」

「おねえさま「はい、副隊長！！！！」」

ドイツ軍シュバルツェ・ハーゼ——通称黒ウサギ部隊。

ドイツ国内で保有しているIS10機のうち、3機を保有する部隊。隊員たちの錬度も高く、名実ともにドイツ軍最強の部隊と目されている。

彼女たちの日常は今日も平和だ。

第26話 休暇

1

日曜日の朝9時40分。ラウラの指定した噴水広場の前に来ていた。少し早く来すぎた気もしなくなかったが、今も昔も男が女を待たせるといのはマナー違反だ。と、旭は【身元不明^{ジョン・ドウ}】に教育されている。

「女を待たせるのは男の甲斐性だ」とのたまう輩もいるが、彼の主観ではそういった男はかなりいけない男の部類に入る。

と、いうより今の女尊男卑の世の中ではそういった男は時代錯誤どころか絶滅危惧種だ。

別に絶滅した所で害はないので、保護は必要ないのだが。

と、特に関係ない事を考えているうちに10分が過ぎた。

とりあえずベンチに腰をかけて額の傷隠し様に被って来た帽子をかぶり直す。

そして鋭い目つきが少しでも柔らかく見える様にかけてきた伊達眼鏡の位置を直して本を開いた。ちなみに彼が今読んでいる本のタイトルは『ブラック世渡り術』である。

——嗚呼、こんなにのんびり出来るのは何カ月ぶりだろう。安らぐ……。

そうこうしている内に更に5分経過。ラウラはまだ来ない。

周囲を見回してもそれらしい人影が見当たらない。再び視線を本に戻して読書再開。

時間は10時を過ぎた。

「すまない。待たせてしまったな」

「んあ？」

不意に声をかけられて間抜けな声を上げながら顔を上げると、モデルのような女の子がいた。

ホットパンツにいまどきのサンダルを履いて、体のラインが出る様なピッタリとしたブラウスに黒いネクタイ。その上に黒いジャケツトを羽織っている。

長い銀髪をサイドテール気味に肩の辺りで縛って肩に流している。

「あ……」

旭は目の前の少女に見惚れて、言葉を失った。

「あ、あまりジロジロ見ないでくれ……。は、恥ずかしいだろう……」

「スゲエ……」

「な……ッ!? べ、別に凄くない……! 私……私……!」
「スゲエ……ラウラにそっくりだ……!」

次の瞬間、拳が彼の鳩尾を抉った。

2

「ラウラさぁくん、そろそろ機嫌を治してくれませんか？」

「……………」

旭の謝罪を受けてもラウラは腕を組んでそっぽを向いたまま目を合わそうとはしない。完全に拗ねていた。

「いや、マジで悪かったって。まさかアンタがそんな恰好で来ると

は予想もしてなかったから」

ラウラの性格からして絶対に制服でくると踏んでいた旭はまさか眼の前のモデルのような少女があのだと不覚にも気付く事が出来なかった。恐らくクラリツサあたりが服のコーディネートを受け持ったのだろう。と、当たりをつける。

平静を保ちながらも内心では「クラリツサ、グッジョブ！」と惜しめない拍手喝采を送っていた。

旭の言葉にラウラは更に膨れっ面になった。

「どうせ私にはこんな格好は似合わない」

「いやいやいや。何言ってるの？ 似合いすぎだろ。滅茶苦茶可愛いぞ」

「お世辞はいい……」

「お世辞じゃねーって」

「フン！ どうだかな。お前は嘘つきだからな」

「あんなあ」

溜息をついて、被っていた帽子を脱いでラウラの肩を掴んで正面に向き直った。

「確かにアンタの言う通りオレは嘘つきだけどな、」

相手の懐に潜り込む為の嘘は工作員の専売特許だ。

事実彼の経歴は嘘で塗り固められている。

国籍も、年齢も、名前も、素性もその全てが周りを欺く為の偽りだ。しかし、それでも。

「オレは意味のある嘘しかつかねーぞ」

「……………」

「オレがアンタにお世辞を言うメリットは？」

「……………ない、と思う」

「だろ？」

「……………」

「だから、機嫌直してくれよ。な？」

「……………」

「ラウラ？」

「……………す……………」

「ん？」

ラウラの声が良く聞こえず聞き返す。

「…………手を繋いでくれてら、許す……………」

旭は少し面を喰らった様な表情になり、固まった。そして、

「Roger. Der Major, der begleitet
n wird.」——『了解。お供します少佐殿』

「Ich erwarte s für Ihre Arbeit
des Beamten」——『貴官の働きに期待する』

真面目な軍隊式のあいさつを交わしてから同時に嘖き出して笑いだした。

そこには打算、嘘、悪意。

そういったものの欠片もない本物の兄と妹の様なやりとりだった。

3

「で、まずは何処に行くのだ？」

「ん、オレはあんまり女性物詳しくねーからなあ……。とりあえ

ず店を梯子してみようか」
「任せる」

向かう先は駅前のショッピングモール『レゾナンス』。

交通網の中心であるここは電車に地下鉄は勿論、バス、タクシーと交通機関が充実しており市の何処へでもアクセスできる。そしてその逆もかり。

品ぞろえも充実しており、そこに行けば揃わないものなどない、と言われるほどの品数を誇る。

流石は天下のIS学園のお膝元。と、旭は感嘆する。

「あれはなんだ？」

「ん？ ああ、あれはスポーツアトラクション施設だ。最近は大トスポットとして人気があるらしいぞ」

「……………」

「ラウラ？」

「……………い、いや。何でもないぞ。何でもないともし！」

「興味あるのか？」

「ちちちちち違う！ 誰があんな子供騙しに——！」

顔を真っ赤にして必死に否定しようとするラウラだが、旭は聞いていない。

繋いでいた手を引いて施設の中に入っていく。

「あ、旭！？」

「学生二枚」

『はい。お客様、今日はカップルデーとなっていますので、90分1200円になります』

「なっ……………！！ カ、カップ……………！ ち、違う——モガモガ」

反射的に否定しようとしたラウラの口を旭が塞ぐ。折角安くなるのに否定して定価を払うなどバカらしい。それなら事実がどうあれカップルとしてしまった方が自分達の利益に繋がる。利用できるものはなんでも利用する。それが彼の基本方針だ。

「はい。1500円から」

『300円のおつりです。ごゆっくりお楽しみください』

「へいへーい。行こうかラウラ」

「むう……」

ビリヤード、アーチェリー、テニス、ロデオ、卓球、バスケット、ダーツ。

様々な競技が楽しめる事が売りのスポーツアトラクション施設で空いているところを探す。

ちょうど卓球台が一台空いていたので卓球をする事にした。

「卓球をやったことは？」

「ルールは知っているが、やるのはこれが初めてだ」

「そっか。これが初体験だな。……ラウラの初体験。いい響きだ」

「……………」

「ちょっと待とうかラウラ。無言でナイフを取り出して殺気たつぷりにこっちを睨むのはやめよう怖いから」

ジャケットの下に隠し持っていたナイフを取り出して鋭い視線を投げかけてくるラウラに旭は両手を上げて即無条件降伏。流石にレジヤー施設の中で刃傷沙汰になって明日の一面を飾るのは御免被りた。ラウラも軍人である以上、投降した相手をむやみやたらに攻撃する事は無い。と思いたい旭だった。

「と、とりあえずこれがラケットな。細かいルールは無視で15点

先取で勝利って事で」

「……勝負するのか？」

「勝負って言っても遊びだ、遊び。気楽に行こうぜ。アンタのサブからでよろしく」

「……わかった」

ラウラはラケットを構え慎重にサーブを打った。

緩くツーバウンドするお手本の様なサーブが旭の右に跳ねる。

そして次の瞬間。旭の眼が燃えた。

腰を左に捻ってステイバック。左足で思いっきり踏み込み、体のバネと全身の筋力を最大限に使ってラケットをほぼ水平に振り抜いた。激しい下回転のかかったピンポン玉は弓なりの軌道を描きネットで阻まれた台の上をバウンドしていく。そしてラウラは一步も動く事が出来ずに点を取られた。

パワードライブ。

スピードドライブの更に回転をかけたドライブの一種でスピードを殺して回転を優先させるループドライブ。

回転を殺してスピードを優先させるスピードドライブの両方のいい所取り。

つまりスピードとスピンの両方が兼ねそろえられている上級技。

普通は擦り切れたラバーで打つ事など出来ないのだが、それを力任せで実現させるあたり旭の出鱈目な膂力が窺える。

「……、遊びではなかったのか？」

「ふふふ、ふが三つ！ 甘い。赤福に蜂蜜と粗目を塗してトドメに生クリームを乗つけたくらい甘い！ オレはかつて先生に『敗北は己の死を意味する』と叩き込まれた！ 故に！ どんな勝負も勝利の為に全力を尽くす！ それがオレのジャスティス！ そうとも！

百獣の王はウサギ一匹狩るのにも全力をもって望むものだ！」

「そうか」

「という訳でいざ勝負！」

カコンカコンとピンポン玉が低く2バウンドしてラウラに向かう。ラウラはそれをお手本の様なフォームで打ち返す。1バウンドした球を待ち構えた旭の眼が再び燃え上がった。

「ドリヤアアアアアアアアア！」

必殺のパワードライブを打ち込む。
だが。

弓なりの軌道を描く高速のピンポン玉は自分の方へ打ち返されていた。

コレには旭も驚いた。まさか自分の必殺ショットを未経験者のラウラが打ち返すとは流石に予想外という範疇を超えている。

例えるなら年がら年中酔っ払っている呑んだくれ父親が今日も外で寝ているのだろう、とを探しに來た途中に屋台で酒を煽って上司の愚痴を溢している宇宙人というシュールな場面に遭遇してしまった様なそんな訳の分からない感覚だった。

驚愕しながらラウラの方を見る。

彼女は好戦的で嗜虐的な爛々とした笑みを浮かべていた。

左目の眼帯は外され露わになった金色の瞳はこれでもか！ というくらいに輝いている。

「ヴェ、
ヴェーダン・オージェ【絶界の瞳】だと……！？」

ヴェーダン・オージェ

【絶界の瞳】。ナノマシンの移植処理を行った左の金色に輝く瞳。

脳への視覚信号伝達の爆発的速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした疑似ハイパーセンサー。動体視力、視覚解像度を数倍に跳ね上げる他、ISを展開していない状態でも最高で2キロ先の目標を狙うことが可能となるドイツ軍独自の技術。

普段は黒い眼帯で覆い隠しているそれを彼女はこの場で解放したのだ。

「かつての私は、この眼を嫌っていたが、今はそうでもない」

「お、おう。それは何よりだな」

スキルの無駄遣いどころの話じゃねえ！！ と内心ツツコミを入れながらも引き攣った表情を浮かべながら旭は何とか答える。

そんな彼の様子など気にも留めない様にラウラは続けて言う。

「お前をこの場で徹底的に負かせるからだ」

やっべー。調子に乗ってはっちゃけ過ぎたあ……。

と、内心冷や汗をダラダラ流しながら引き攣った表情を気合と根性で直し、何でも無い様に振る舞う。

「相手が全力で来るなら私も軍人として全力で応えよう。貴様は百獣の王はウサギ一匹を狩るのにも全力を尽くすと言ったな？ …… よろしい。ならば戦争だ」

何処かの少佐のような（実際少佐なのだが）宣言をするラウラに旭は戦慄した。

これから始まるのは戦争ではなく、一方的な蹂躪だ。と本能的に察してしまったからだ。

そして彼の思い描いた不吉な未来予想図は寸分の狂いもなく実現する事になった。

4

「卓球とはなかなか面白いものだったな」

「そーですねー……」

快勝してご満悦なラウラと対照的に大敗した旭は頭からキノコが生えてきそうなほど沈んだ様子で返す。流石にここまでボコボコにされる兄としての面子など跡形もなく消えてしまいそうだった。

とはいっても元はと言えば彼の大人気ない行動が原因なので同情の余地は一切ないのだが。

旭はチラリと時計を見やる。予定外の事で時間を食ったが問題ない。当初の予定通りラウラの水着を買う為に駅前の店へと足を進める。すると前方の物陰に隠れて人目を憚るように移動する二つの影が眼に入った。

「……旭」

「……なんだ？」

「あれはなんだ？」

「奇遇だな。オレも気になってたところだ」

二つの影には旭もラウラも見覚えがあった。

躍動的なツインテールと優雅なブロードヘアー。

旭とラウラの推測が正しければその正体は――

『……あのさあ』

『……なんですの？』

『……あれ、手握ってない？』

『……握ってますわね』

『そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでも白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし殺そう』

やっぱりか。と、旭は溜息をついた。

どうやらのんびりできる休暇は終わりのようだ。放っておきたいと

ころだが、鈴が既にこの街中で衝撃砲をぶつ放そうとしている以上
そういうわけにもいかない。

「アンタら何してんの？」

「……………、アンタ誰よ？」

鈴は怪訝そうな表情で聞き返す。旭は一瞬「何言ってんだコイツ？」
と思ったが、自分の格好を思い返して納得がいった。

帽子に伊達眼鏡。これでは彼女が目の前の男が浮舟旭だと認識でき
ないのも無理はない。

被っていた帽子をとり、顔が良く見える様にした途端、鈴の表情が
固まった。

「ゲッ……！ 旭！？」

「はい、旭ですよー。随分殺気だっていたみたいだけど、まさかこ
んな街中で衝撃砲ぶつ放そうとしている訳じゃねーよな？」

爽やかな笑顔で軽快に鈴に問うが、彼の伊達眼鏡の奥の双眸は「も
しそうなら膝詰め説教5時間コースだコラ」と如実に語っていた。
目は口ほどにも物を言うとはよく言ったものである。

「そ、そんな訳ないじゃないのヨー。アハ、アハハハ！」

「そっか。アハハハハ」

何気ない相槌の後明るく笑いだした。その反応に鈴はホッと胸を撫
で下ろす。直後。

「ならいい」

この世で最も恐ろしい締め言葉は鈴を震えあがらせた。

「……………」

「どうしたオルコット？ 私服姿のオレの格好良さに濡れた？」

「……………」、殺しますわよ」

「じゃあ、惚れた？」

「な…………ツ！？」

「そうなのかセシリア？」

「そんなあけありませんわ！！」

ラウラの問いかけにセシリアは真っ赤になって噛みついた。

「そうか。それは何よりだ」

無表情だが、僅かなホツとした表情になるラウラにセシリアはモヤモヤした気持ちになるが、首を振りその気持ちを振り払う。

「で、アンタらはここで何してんだ？」

「…………？ しまった、見失ったわ！」

「ああ、もう！ あなたの所為ですわよ！」

「は？」

何が何やらわからないと言う風に旭とラウラは顔を見合わせて首を傾げた。

5

「なるほど。一夏とシャルロットのデートを尾行していた、と」

「その通りよ！」

フフンと、（ない）胸を張りあげる鈴に溜息をついて一言。

「アンタらってヒマなの？ バカなの？ 死ぬの？」

「アタシのどこがバカだアああああっ！！」

「うおっと」

繰り出される鈴の拳を旭は涼しい顔で避ける。

「大体アンタみたいなバカキングに言われたくないわよっ！！」

「聞いたかラウラ？ 言うに事欠いてバカキング呼ばわりだよ」
「妥当な分析だ」

「……………、なんてこった。これが世に言う反抗期というやつか……。お父さん、最近娘とのコミュニケーションがうまく取れていない様な気がするよ……………」

よよよよ、と噓泣きをする旭にラウラ、鈴、セシリアは冷たい目線を送る。

旭も一人でやる寸劇に飽きたのか、帽子を被り直して咳払いを一つ。

「まあ、ちょうど良かった。アンタらに頼みがあるんだ」

「頼み？ あんたが？ 珍しいわね」

「まーな。ラウラの水着を見立ててやってくれねーかな？ オレはあんまり女物詳しくねーからな」

「あ、旭。私は……………」

何か言おうとするラウラの腕を引っ張って肩に手をまわして耳元で囁いた。

「（ここで水着を選んでもらって新密度上げとくんだよ。余計なお世話かもしれないけど、アンタはもう少し色んな人間と話した方がいい。鈴とオルコットは裏表ないから話しやすいだろ）」

「……………」

ラウラは半眼で旭を見て無言でサンダルのヒールになっている部分を使って彼の足を踏みつけた。

「……………ッ!? な、なにすんだラウラ…………!」

「フン! 行くぞ鈴、セシリア」

「ちよつと! なんであんたが仕切ってるのよ!?!」

痛みに悶絶している旭を残してラウラは怒って鈴を連れて店内に入っていく。

「浮舟さん、大丈夫ですか?」

セシリアの差し伸べた手をとって旭は立ち上がる。

「……オルコット、オレの心配してくれる優しい奴はアンタだけだよってちよつと待て。なんでそんなに勢いよく手を振り上げて——」
「これは先ほどのセクハラ分ですわ!——」

バツシーン!…… という音と共に旭は頬に紅葉のような痣を作って冷たいコンクリートに沈んだ。

その場にいた通行人曰く倒れていた青年の傍にいたお嬢様風の少女は『いい仕事した』と言わんばかりの素敵な笑顔を浮かべて額の汗を拭っていたという。

第27話 不安（前書き）

活動報告でスランプと言っておきながらさっきスポーンと書けてしまいました。

好調、不調時の波が激しくて困りますね（苦笑）
それではどうぞ！

第27話 不安

1

水着売り場の外で待機する事しばらく。水着選びを終えた鈴に試着室の前へと引っ張られていった。

「で、どんな感じなんだ？」

「ちよっと、ヤバいわ。笑いが止まらない」

そう言つて不気味な笑いを振りまく鈴。正直言つてかなり気色悪い。なまじ容姿が整っている分、余計に残念な事になってしまっている。普段コンビを組んでいるオルコットも若干引き気味だ。

「いい？ 開けるわよ！」

「ま、待て！ まだ心の準備が——！」

「いくわよ！」

「だから待てと言っているのに——！」

中で慌てて抗議するラウラの言を無視して、相変わらずゴーイングマイウェイな鈴は気味の悪い笑みを浮かべながら試着室のカーテンを一気に引いた。

「どうよ——！」

「……………！！！」

言葉が出てこない。目を奪われた。思わず息を呑んだ。レースをふんだんにあしらった黒い水着。髪を左右のアップテール

にしており、慣れない格好をしているラウラはモジモジと落ち着かない様子で上目遣いで赤面している。

鈴と眼を合わせて彼女と同時にサムズアップ。

「鈴小姐最高!!」

「フフン、当然」

「……………貴様等…………ツ!」

「……………、何故あなた達はそんなに息が合っているのですか」

惜しめない賛辞を鈴に送る。それだけの仕事を彼女はやってのけた。寧ろこの程度の賛辞では物足りないくらいだ。

ラウラとオルコットが恨めしそうな眼でこちらを見るが、それは敢えて気付かない振りをしてやり過ごす。

そして今現在脳内に入っている語彙を総動員してラウラの可愛らしい姿を褒め干切ろうとフル回転させようとしたその時。ケータイが鳴った。

普段使うようではなく、仕事用が。

このケータイにかけてくるのは二人しかいない。

クライアント
依頼人・篠ノ之束。

もしくは情報組織エージェント・イアン・マルキス。

ケータイの画面を見てやはり予想通りイアンだ。

あの野郎。なんて絶妙に悪いタイミングでかけてきやがる。

無視して切ってしまったおうかと思っただが、仕事に必要な情報を持ってきてくれた可能性もあるので無碍には出来ない。

もし緊急事態なら早急に対策を練っておかないといけない。

「すまん。少しいいか?」

そう言っただけ鈴達にケータイを見せると無言で頷いた。

鈴達の上承を得て手の平を立てて謝罪の意を表明。少し離れて通話

ボタンを押した。

《ストレンジヤー
【異邦人】……》

「おう、イアンか。久しぶりだな」

《たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である》

「聖書の言葉だな。何かの暗号か？」

《このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。……

……、素晴らしい言葉だと思わないか？》

「あ？ おいおいどうした？ いきなり神の愛とやらに目覚めちまったのか？」

《神の愛か……。愛とは素晴らしいものだよなあ……》

「お、おい。どうした？ いい精神科医を紹介してやろうか？」

イアンがおかしい。いや、おかしいのは元からなんだが今日は輪をかけて変だ。

ここまですぐと流石に心配になってくる。

普段なんだかんだで憎まれ口ばかり叩いているが、コイツはオレの数少ないの友達だ。

コイツが困っているのなら可能な限り力になりたい。

《実は……、女の事で相談があるんだ……》

「ハア？ アンタが？ オレに？」

何を言っているんだコイツは？

イアンは性格は残念だが、容姿はイケメンを通り越して美形の上に超がついてもおかしくない程の美男子だ。コイツに笑いかけられたらどんな女でもイチコロ。

少なくともオレはコイツに撃墜されなかった女は見た事がない。
しかも一夏と違ってイアンは確信犯でそれをやったのけるからム力
つく事この上ない。

そんな女たらしが女心の機微に弱いオレに恋愛相談とは……。

「わかった。聞いてやるよ。けど、まともなアドバイスは期待すんなよ。オレは恋愛は専門外なんだ」

《ありがとう。それじゃあ早速。実は、二人の女性に同時に求愛を受けているんだ》

僅かに殺意が湧いたが、それをグツと押し殺す。

御大層に愛とやらを説いている神は不公平だ。何故こんなバカに引
つ掛かる女がいるのか。

引つ掛かった哀れな犠牲者に小一時間ほど問い質したいところだ。

「そうか。それで？」

《サーシャは家庭的で料理がとても上手い。特に彼女の作るボルシ
チは絶品だ。ジェニファアはともグラマラスでセクシーだ。性格
だっていい。そんな魅力的な二人からアプローチを受けていてどち
らの想いに応えたらいいか困っている。サーシャかジェニファア
……。ジェニファアかサーシャか……。アンジェリカかジェニファ
アか……。！ アンナか、カレンか！ サンデーか、キーラか！ 俺
は誰の想いに応えればいいと思う！？ ここはみんな平等に愛する
べきなんだろうか！ 俺はどうすればいいと思う！？》

「戦車の履帯に踏みつぶされてグロテスクに死ねばいいと思う」

当社比1.5倍の毒舌を飛ばして電話を切った。そしてそのままケ
ータイを操作して、着信拒否リストにイアン・マルキスを登録。あ
の野郎のリア充爆発しろ的な悩みの所為で折角のいい気分を台無し
にされたのだからこれくらいの暴言は許されてもいいと思う。

まあいい。イアンの下らない悩みよりラウラを褒めちぎる方が先だ。ケータイをポケットの中に仕舞い込み、ラウラのあの可愛い姿をどうやって褒めようかと黙考を開始した。

2

「さあ、好きな物を頼みなさい。お兄さんが奢ってあげよう」

ボロボロにされた旭はオープンカフェの一角でラウラ、鈴、セシリアの3人にそう言った。

ボロ雑巾にされた彼を物珍しそうに周りの客が見ているが敢えて気付かない振りをしてやり過ごす。

何故彼がボロ雑巾にされているのかというと、ラウラの水着姿を褒める際15禁どころか、18禁を天元突破しそうなセクハラワードを交えた為3人に制裁を加えられて今に至る。鈴に蹴られて、セシリアに平手を喰らい、ラウラに絞められて殺されかけた。

「当然だ」

「当然よね」

「当然ですわね」

要するに甘いもので釣って機嫌を直してもらおう、と安直にも考えたのだ。

3人も3人で旭のその魂胆を見抜いたうえで乗って来たのだが。

「わたくしはケーキセットで。紅茶はダーズリンを頂きますわ」

「あたしはあんみつと烏龍茶ね」

「タレミミウサちゃんジャンボアイスセット」

「「「……………」」」」

胡乱なものを見るように旭、鈴、セシリアはラウラを見る。
その視線に気づいたラウラは訝しげな表情をした。

「なんだ？」

「「「いいえ。なんでも」」」

触らぬラウラに祟りなし。

流石にさっきの失態に続き、ラウラの珍プレー（本人はいたって真剣）にツツコミを入れる度胸はない。

とりあえずラウラの意外な趣味について言及する事は避けた。

自身の望みを叶えない内に殺されるのは御免被りたい。

背筋に寒いものを感じながらも、店員の持ってきたアイスコーヒ―を口に運んだ。

3

『現在、世界は極めて危いバランスの上に成り立っています！ ISが開発されて10年。各国の抑止力は核からISへと変化してきました！ しかし！ 日本の弱腰外交はISという絶対的な力を独占できる立場にもかかわらず――！！』

「うるせえな」

「なんの演説だ」

先ほどから聞こえてくる演説に食べ終わって会計を済ませた旭とラウラは眉間に皺を寄せてそちらを見た。

取り巻く人々。その中心の壇上で演説をする政治家。

「あの方は確か……」

「誰？ 知ってる人？」

「『有澤光』議員。日本の現防衛大臣にしてこの国のIS軍事の最高責任者。マニユフェストは『日本のIS軍事大国化』」
「詳しいわね、あんた」

スラスラと説明する旭に鈴は感心したように眼を見開く。

「鈴さん、IS関係者ならそのあたりの情報はチェックした方がいいですよ」

「あたし他の国の事ってあんまり興味ないから」

「興味がなくても知識として知っておけ。お前は代表候補生としての自覚があるのか？」

「なによラウラ？ 喧嘩売ってるの？」

「事実を指摘したまでだ」

「ハイハイハイハイ、こんな所で喧嘩するんじゃない。ラウラ、もう少し言い方を考えろ。そんな言い方じゃ鈴もムカつくだろうが」
「む……」

「鈴も興味がなくても知識として一応知っておいた方がいい。代表候補生のくせに無教養な奴だっと思われるぞ。あとムカついたからって直ぐに相手に噛みつくのはやめろって。色々損するぞ？」

「うっ……」

「はい、それじゃあお互い謝って仲直り」

「子供扱いするな！」「子供扱いしないでよ！」

「なんでアンタらオレに抗議するときは息ぴったりなんだよ……」

がつくりと肩を落としてから再び有澤議員に眼を向ける。

確か篠ノ之束の失踪後、一番血眼になって彼女を探していたのも彼女だった筈だ。

と、頭の中から情報を引き出した。

篠ノ之束の失踪の手助けをした身としてはある意味因縁ある相手だ。彼女の唱える日本のIS軍事大国化を実現させるには世界で唯一I

Sコアを製造する事の出来る篠ノ之束の存在が必要不可欠。
その為には手段は選ばない。

妹である篠ノ之箒を始め、その父と母に執拗な尋問と監視を行い彼女の世界を壊した。

それでも有澤光は目的の為に止まらない。

——いや、篠ノ之箒の生活を壊したのはオレも同じか。そうなる事を予想していながら束さんの亡命を手助けしたんだから。

「で？」

「『で？』とは？」

鈴に唐突に声をかけられて我に返る。内心焦りつつも平静を装い愛想良く応じた。

「聞いてあげるから説明しなさいよ。」

「だからなんでそんな上から目線だよ。まあ、いいや。」

「『監視用人口衛星アイズ』は知ってるか？」

「えーっと？」

「複数の国家による共同実験場としてのIS学園の敷地内は事実上ISを世界一保有する一つの国家として扱われています。そのためIS条約に反していないかどうかを監視する為、そして反乱抑止の為に日本政府が主導して打ち上げた監視用人口衛星の事ですわね」

「はい、オルコット正解。で、そのアイズプロジェクトの最高責任者があの有澤光議員。ありさわひかりあの人掲げる政策は『国内ISの軍備増強』

。つまり、日本の軍事大国化。そのためには反対派は徹底的に潰す事で有名な人だ」

現在の世界情勢は絶妙なバランスを保っているようでその実極めて不安定な状態だ。

だからこそ、各国はこぞつてISという兵器の技術を競い合う。
自国が食われない様に。
国民を護る為に。
利権を貪る為に。

「……………あまり優雅なやり方ではありませんわね」

セシリアはあからさまに不快感を示すが、旭はそんな彼女の潔癖な反応に苦笑で返す。

「けど、支持率が高い。何でだかわかるか？」

「……………」

「彼女は国に、民衆に、支持者に、協力者に、自分が潰す反対勢力にさえも真剣だからさ。そうしなければならぬ理由を知っているから」

「理由、ですか？」

「人が求めているのは高潔な理想論じゃなくて、目に見える成果だ。どんな理想だってそれに見合う力がなければ実現出来ない。後一歩のところで力尽きたとしても現実問題として何も変わっていないければソイツの理想はどうあれ、口だけの政治屋っていうレッテルが張られる。だからこそ、彼女は自分の信じたヴィジョンに向かう為に手段を選ばない。良くも悪くも実力行使で、目に見える成果で示す。たとえ誰にも理解されなくても、な」

「浮舟さんはあの人をどう思いますか？」

セシリアの問いに旭は少しだけ逡巡してから答えた。

「オレは正論を盾に自分の行動を正当化する奴は嫌いだけど、自分のやることに覚悟を持っている奴は嫌いじゃない。例えばどんな悪党

でも、自分の業から眼を逸らさずに受け止める覚悟があるなら、オレはソイツの在り方に敬意を払うさ」

「え？」

セシリアは心底意外そうな顔で旭を見た。

「なんだよ。なんでそんな意外そうな顔してんだ？」

「い、いえ。なんとなく……」

『アンタがどんだけ自分の不幸な境遇とやらを語っても、あんな小さな女の子の人生を奪って良い理由にはならない。確かにあんたはIS開発における被害者だっただろうさ。けどな、それを理由に誰かを傷つけた時点であんたは加害者だ。赦されない』

『正義の為だ』と謳い、セシリアを誘拐して自らの行動を正当化した男に向かって『異邦人』ストレンジャーが言い放った言葉を思い出す。

あの言葉はセシリアにとって英雄ヒーローである彼の正義感から来た言葉だ
と
思
っ
て
い
た。

その在り方に憧れた。

彼の在り方は彼女の大切にしている貴族としての誇り。

母が体現していたノブレス・オブリージュに通じるものがあつたからだ。

しかし、今になって疑問が波紋の様に彼女の心に広がっていく。

彼の言葉の真意は本当に自分の思っているものと同じなのだろうか。本当は自分達の行動を正当化して背負うべき業から眼を反らしたからこそ、『異邦人』ストレンジャーは彼らにそう言ったのでないか。

そんな考えが浮かんできて、セシリアは慌ててそれを否定した。

彼はセシリアにとってヒーローだ。今も、昔も。

彼女はそんな彼に追いつきたいと思い、力を求めた。

『異邦人』ストレンジャーの存在は彼女のアイデンティティの根幹に今も根付いて

いる。

もし、それが自分の単なる勘違いだったなら？
彼女の大事にしてきたものまで嘘になってしまうのではないだろうか。

そんな疑問が彼女に鎌首をもたげる。

セシリアが考え込んでいると、旭が不意に真顔になった。

彼は周囲に漂う嗅ぎ慣れた匂いに気付いた。

「……旭」

ラウラは真剣な表情で旭に呼びかける。彼はラウラと眼を合わせて無言で頷いた。

「鈴、オルコット。今すぐ、ここから離れるぞ」

「？ 何でよ？」

「あちこちから硝煙と火薬の匂いがする。ここに留まるのは危険だ」

「それって、つまり——！？」

「テロリストがいる」

鈴の言葉をラウラが繋ぎ、セシリアが眼の色を変えて辺りを見回そうとするのを旭が制した。

「キョロキョロするな。恐らく連中の狙いは恐らく有澤議員だ。なるべく自然に立ち去るぞ」

「勘違いって事は？」

「それだったらどれだけ良かった事か。けど、たぶん間違いない。染みついた硝煙の匂いってのはなかなか落ちないからな」

鈴の問いに旭は淡々と答えた。ラウラも周囲を警戒しながらそれに続く。どうやら本気でこの場を立ち去るつもりの様だ。

「なにもせずにこの場を去るつもりですか……!？」

旭のその行動を咎めるようにセシリアは言った。それに堪えた様子もなく旭は相変わらず平坦に言葉を繋ぐ。

「当たり前だ。人助けで自分の命を賭けるほどオレはお人好しじゃない」

旭の任務は『織斑一夏の護衛』だ。

何故一夏に関係のない人間までボランティアで助けないといけない。下手に介入すれば、それこそ新しい火種になる可能性だって考えられる。

餅は餅屋。

有澤議員の身を護る事は彼女の護衛に任せればいい。

それが筋だ。

自分達が下手に首を突っ込んで場を乱す事はそれこそ、周りを危険に晒す事になる。

「貴方は……ッ、それでもISの操縦士ですか!？」

「勘違いするなよ、セシリア・オルコット。オレ達IS操縦士は正義の味方なんかじゃねーんだよ」

「——ッ! 見損ないましたわ浮舟さん……! どうぞアナタはこのまま尻尾を巻いてお逃げください。わたくしだけでも——」

最期まで言う事は叶わなかった。これ以上ないほど殺気だった旭にセシリアは胸倉を掴まれて驚いた。

「いい加減にしろよガキが……ッ!」

彼の鳶色の瞳に射抜かれて一瞬戦くが、彼女は負けじと睨み返した。拘泥している状況ではない。

理性では分っているのだが、それでも怒らずにいらなかった。

確かに殺されそうな人間がいれば助ける。

それは人として正しい在り方なのだろう。

セシリア・オルコットは『ノブレス・オブリージュ』を何よりも大事に思う貴族なのだ。

ISという強大な力を持つ自分が弱いものに手を差し伸べるのは義務だとも思っている。

しかし、旭は違う。

彼に在るのは自分に出来る事、出来ない事、やるべき事、やらなくてもいい事。

それらを的確に見極め、必要とあらば優先順位の低いものを切り捨てて結果を出す冷徹なまでのプロ意識。

どちらが正しいという話ではない。

そこには決定的な考え方の違いがあるだけだ。

違う故にお互いぶつかり合う。

「……………」

「……………」、いいか。よく聞け」

一拍置いて昂った感情を鎮めてゆっくりと掴んだ手を離しながらセシリアに語りかける。

「相手はプロだ。いくらISを持っていたとしても、無数の隠れた敵をどうやって制圧するつもりだ？ 下手に介入すりゃ一般人も巻き込むことになるぞ」

「そ、それは……………」

「『なんとなく』で何とかなると思ってるのか？ 思いあがるなよ。」

ISを持っているからって全てが何とかなる訳じゃない。群衆の中で兵器を運用したら周囲への被害はどうなる？ 状況に適した力を選択して、行動しなけりゃその先に待っているのは悲劇だけだ」

「っ！ それでも、わたくしは……」

セシリアが何か言おうとした瞬間。

——パン！！

聞きなれた炸裂音が彼らの耳を撃つ。

旭はセシリアの、ラウラは鈴の頭を押さえこんで伏せさせた。

『有澤光を殺せ！』

1人の男の先導の声と同時に壇上で演説をしていた有澤光に群衆に紛れていた無数のテロリストと思いき男たちが彼女に雪崩れ込む。

彼女はそれに慌てず、悠然と立っていた。

再び鳴り響く銃声。同時に放たれる凶弾。

しかし、弾丸が彼女を死に至らしめる事は無かった。

有澤の体が光の粒子に包まれ、IS学園でも訓練機として使用されている馴染みある機体。【打鉄】が彼女を包む。そして、即座に暴徒制圧用のスタンロッドを展開。

瞬く間にテロリストを制圧していった。

『有澤議員、お怪我は！？』

「私よりここにいる皆さんの心配をなさい！」

『は、はい』

「皆さん、このような事になってしまい申し訳ありませんでした。巻き込んでしまった事を心よりお詫び申し上げます。どれだけの恫喝を受けても、どれだけの暴力に晒されても私の決意は変わりませ

ん！ 日本が世界と対等で在る為には『ISの軍備増強』というマニユフェストを是が非でもやり遂げなければなりません。身勝手に映るかもしれません。強引に映るかもしれません。軽蔑されるかもしれません。しかし、それらすべての罵りを私は真摯に受け止めます！ その上で私は皆さんと真剣に向き合う事を約束します！ それが私の信念です！ 皆さん、平和に過ごせる日本を私と一緒に造るうではありませんか！！」

割れんばかりの拍手が会場を包み込む。そして有澤議員は優雅に一礼した。

「以上をもちまして私の講演会を終了させていただきます。御清聴ありがとうございます」

5

セシリアと鈴と別れ、旭とラウラは手を繋ぎながら帰路についていた。

「どう思う？」

「どう思っつて？」

「『有澤光』。それと、」

「……………今日のあの騒ぎ、か？」

「……………」

ラウラは無言で頷いて肯定の意を示した。旭はラウラの眼を見ずにしばらく逡巡。

やがて思い口を開いた。

「根拠はねーが……………多分自作自演だ」

「やはり……」

旭は【身元不明】^{ジョン・ドゥ}に拾われるまで『人を殺す為の道具』として生きてきた。

彼女の教育の末、人殺しの道具として生きる必要はなくなったが、彼の根本にある『暗殺者としての思考』は矯正する事なくある程度残してある。

その方が護衛任務にあたる場合、『暗殺者が何処から狙ってくるか』
『どのタイミングで狙ってくるか』を予測しやすくなるからだ。

そんな彼の暗殺者としての思考が件の有澤光議員襲撃を自作自演だと告げている。

そもそも彼女を本気で暗殺する為の手段として一番確実なのは狙撃だ。

ISは一度纏えば、エネルギーが切れるまで搭乗士の命を護り続けるが、待機状態のISは絶対防御が発動しない。要するにIS搭乗士を殺すのに有効な手段はISを纏っていない状態の搭乗士の不意を突く事なのだ。

だが、テロリストの男たちはそれをしなかった。

『出来なかった』とは思えない。

男達の動きを鑑みる練度の低い集団ではない。

計画を練るのに狙撃手を用意せずにハイリスクな方法を選択するという愚を犯すとは思えない。

故に『自作自演』だという根拠はないが確信はある。

恐らく狙いは2つ。

『人気取り』と『眼に見える危機を意識させて民衆の危機感を煽り軍備増強への抵抗を減らす』。

そしてその2つとも見事に彼女の目論見通りに事が運んだ訳だ。

「有澤光議員。鼻持ちならないな……」

「だな。一夏に危険が及ばないといいけど……」

旭の口から『織斑一夏』の名が出た途端、ラウラはむくれた。彼は織斑一夏の護衛だ。

それが仕事である以上彼の安全を第一に考える義務がある。頭では理解しているのだが、気持ちが追いつかない。どうにもモヤモヤする。面白くない。

「なんだよラウラ。まだ一夏の事嫌ってるのか？」

「……いや。もう嫌ってはいない」

これはまぎれのない本心だ。VTシステムから救い出された時、言葉を交わし彼の持つ本当の強さに触れた。その時からラウラの中で彼の心象は『絵にかいたような愚図』から織斑千冬同様『尊敬し、目標とすべき人物』へと変わっていた。むしろ好感を抱いているといってもいい。それなのに、

「それほどまでに一夏が大事か？」

「ああ。大事さ。織斑一夏は亡国機業を誘き寄せる為の餌だからな」

——何故、こんなに心がざわめくのだ……？

ラウラはそう思って立ち止まって俯いた。

【身元不明^{シ・ユン・ウ・テ}】の仇討ち。彼女を殺した【亡国機業】への復讐。こんなにすぐ近くににいるのに、彼との距離が遠い。

今の彼からはいつか再び自分の傍から消えて無くなりそうな、そんな危うさを感じられる。

不安で不安で仕方がない。

——それほどまでに【身元不明^{ジョン・ドウ}】への思慕は大きなものなのか……？ 私なら……、私なら、お前を独りにしない……。ずっとお前の傍にいるのに……。

『復讐をやめてほしい』とは言えない。

復讐という明確な目的が旭の生きる意志を支えている。たった1つの想いが、壊れそうな旭の心を護っている。

それが無くなれば——彼の辿るべき末路は眼に見えている。

「大丈夫だ」

ラウラの不安を読み取ったように旭は優しい声で言う。

「オレの目的の為にIS学園や一夏に危険を及ぼすような事はしない。決着の時は独りでケリを着けるさ」

——違う。私が不安なのはそんな事ではない！ お前がいつか、壊れてしまいそうで——！

まったく的外れな旭の言葉に内心腹を立てながらも、少しでも不安に駆られた心を安心させる為に彼の腕に寄り添って再び歩き出した。

第28話 更識簪

1

「……………」

ラウラの腕の温もりがまだ残っている。誰もいない部屋でジッと手を見詰めていた。

ダメだ。未練を持つな。オレがラウラの傍に居るのは彼女が居場所を見つけられるまで。安心してラウラを託せる奴が見つかるまでだ。

織斑千冬。彼女なら安心して後を託して逝ける。

織斑一夏。今の時点では可能性にすぎないが、彼には『救済者』としての資質がある。

篠ノ之箒。気難しく取り付きにくい所はあるが、真っ直ぐな人柄は信用できる。

セシリア・オルコット。精神的に未熟な面があるが、彼女の気高さは個人的には嫌いではない。

鳳鈴音。気性は荒いが、裏表がないサバサバした性格は人を惹きつける。

シャルロット・デュノア。第一印象は最悪だが、彼女の本質は面倒見が良い姉のような人物だ。ラウラが困っていたらきっと損得を超越して手を差し伸べてくれるだろう。

更識楯無。彼女なら自分がいなくなっても――、否。オレのような屑よりもラウラをより良い方向に導いてくれる。そういう確信がある。

現時点で一番の有力候補は織斑千冬。更識楯無。シャルロット・デ

ユノア。

次点が織斑一夏。

彼女達と強固な絆を結ぶ事が出来れば、ラウラは光の世界で生きていける。

自分が消えても、きっと大丈夫だ。

ラウラの幸せの為？

違う。オレがただ、見ただけなんだ。

ラウラが、優しくて温かい世界で笑っているところを。

他でもない自分が満足する為に。

そうする事でオレは安心して消える事が出来る。

不意にケータイが鳴った。仕事用のケータイの方だ。

着信先を確認して怪訝に思う。

おかしい。この番号は知らない。

アインの番号ではないし、束さんの特製ラボ【名前はまだない吾輩は猫である】からの連絡でもない。

警戒レベルを一段、いや。二段階引き上げて通話ボタンを押す。それと同時に録音用のカセットテープに繋いで録音ボタンを押した。

「もしもし」

《ストレンジヤーこんにちは。【異邦人】。始めましてね。私の名前は有澤光。日本で国防大臣をやらせて貰ってるわ》

「——ッ!?!」

不意打ちでの連絡に心臓が掴まれた気分になった。動揺を悟られまいとあくまで平坦な声で応じる。この手の交渉でハツタリは結構大事だ。

「これは始めまして。お話しできて光栄です。有澤議員。昼間の茶番劇は見事でしたね」

《あら？ あなたに褒めていただけるなんて嬉しいわね。けど、今日は世間話をする為に電話をかけた訳じゃないの。あなたに頼みたい事があって――》

「その前にアナタが本物の有澤議員であるという証拠を提示して頂けますか？ 有名人を語る偽物かもしれません」

《……尤もね。それじゃあ、私が篠ノ之束を捕獲しようとした時の詳細を事細かに説明しましょうか？ それとも、妹の篤さんや彼女のご両親を尋問した時の事の方がいいかしら？》

「……いえ。結構です。その虫唾の走る考え方は有澤議員そのものです。それで、私に何のご用でしょうか？」

《さっきも言った通りあなたに頼みたい事があるの。篠ノ之束の居場所を教えてくれないかしら？》

直球で来たか。さっきの『茶番劇』についても否定しない。

仕事のケータイは盗聴防止用の回線を使用している為、そっちの心配はしなくていいが今のオレの様に電話口で会話を録音している可能性も考えられる。

その対策として出来るだけ後ろに手が回らないような言葉を選んでいるが、有澤議員には腹芸使う気は一切なし。

豪胆。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

「随分と不用心ですね。私がこの会話を録音してあなたの対抗組織に渡すとは考えないのですか？」

《あら？ あなたなら私を失脚させる工作をするよりも、私を殺す方を選択すると思うわ。私には敵が多い。有澤光が死ねば、自然と敵対勢力が纏まって私の勢力を食い潰す、と考えて》

当たりだ。だが、ここであっさり認めてしまうのも面白くない。

「まさか。オレは平和主義ですからそんな事は――」

《本音で話しましょう？ 腹の探り合いをしていたら取引にならないわ》

「……………、確かに」

《本音で話してくれるわね？》

「……………、わかりました」

有澤議員は鼻持ちならない。だが、『依頼人には誠実であれ』というのは他でもない先生の教えだ。腹を括って交渉に臨む。

《そう。良かったわ》

「その前に1つ確認を。私があなたに情報を開示したとして、私にどんなメリットが？」

《あら？ もうあなたは対価を受け取っているわ。IS学園への潜入に眼を瞑ってあげてるじゃない》

有澤議員の言い分に思わず眉を潜めた。

「そこまで面の皮が厚いと感心しますね。勝手に工作しておいて、後になって代金を払えって詐欺師のやり口じゃないですか」

《冗談よ。私があなたのIS学園潜入を見逃したのは『使える』と判断したからよ》

「……………亡国機業を潰す為に、ですか？」

アメリカの第三世代型試験機【アラクネ】。

イギリスのBT兵器試験機第二号【サイレント・ゼフィリス】。

自国の名誉の為に公になっていないが、この2機が亡国機業の手によって強奪されたという情報はイアンを通してオレの耳にも入って

きている。

《そう。あの組織は私の目指す『ISの軍備増強』をはかるためには眼障りなの。あなたが亡国機業を潰してくれるなら、邪魔者同士で潰し合ってくれるならそれに越した事はないじゃないの》

そう言つて有澤議員はコロコロと笑う。オレはそれを無表情で聞いていた。

その笑顔の裏で一体どれほどの事を企んでいるのか。

まあ、いい。亡国機業を潰した後に有澤議員がオレをどうしようがどうでもいい。

復讐を遂げたなら、オレにはもう、生きる理由はないんだから。

「それでああなたの要求である『篠ノ之束の居場所』ですが、率直に申し上げて私は知りません」

《本当に？》

「本当です」

《言わなければ今日一緒にいたラウラ・ボーデヴィツヒ、セシリア・オルコット、鳳鈴音の3名に危険が及ぶと言つても？》

「強引な手段をとるのはお互いの為にやめておいた方がいい。もし、彼女達に危害を及ぼすなら、あなたを生かしておく理由がなくなるのだから」

《そう。ならやめておくわ》

「それに本当に、知らないんです。連絡をとるにしても、偶に向こうから秘匿回線が送られてくるだけです」

嘘だ。居場所は知らないが、連絡先は知っている。

だが、不信感を持つていたとはいえ依頼人は依頼人。向こうが裏切らない限り、オレから裏切る事はない。

「あとこれは本心からの忠告なんですが、彼女を追うのはやめた方がいいかと」

《何故かしら？》

「何故？ 分からないのですか？ あの人はあなたの予定調和の未来に組み込めるような人間ではないからですよ」

《あなたの言っている事が良くわからないわ》

「あの人はあなたの御せる人間ではない、という事です」

篠ノ之束は下手すれば世界を相手に戦っても勝てる様な人間だ。

そして、普通の人間が備えている倫理、道徳、モラル。人道的観点が激しく破綻している。

『退屈だから』というだけで世界を壊そうと考えてもおかしくない。所謂『世界にとっての危険分子』。それが篠ノ之束の本質だ。

有澤議員が彼女を軟禁して協力を取り付けたとしても白騎士事件の再現になるだけだという事は簡単に予測できる。しかも、ミサイルではなく全世界のＩＳが暴走した、となっては世界に成す術は無い。現存出来る兵器でもＩＳに勝てる方法はある。

だが、そのどれも自軍に『負けたも同然の被害』を生み出す前提の作戦だ。

人間が正気のまま実行できとは思えない。

要するに篠ノ之束はパンドラの箱だ。

開ければ必ず災厄をもたらす。そしてその箱の中には希望が残っているかどうかすら怪しい。

「誤解なさないでいただきたいのですが、決してあなたを見縊っている訳ではありません。ただ、人間としての性質上、篠ノ之束を御せるとは思えないのです。彼女は自分の興味対象外の人間には徹底的に冷淡です。何をしてくすかわからない。彼女を御せる人間は私の知っている限り『織斑千冬』だけです。あなたではない」

《……………、ご忠告ありがとう。面白い話が聞けたわ》

「それはどうも」

《ああ、そうそう。この間私の親戚の経営する『有澤重工』が面白い武器を開発したのだけど、扱いの難しい武器だからどの国家代表も扱えないのよ。良かったらお近づきの印に貰ってくれないかしら？》

「妙な仕掛けをしていないなら喜んで」

《ふふ。それじゃあ今度送っておくわね》

それだけ言って電話は切れた。果たしてあの忠告に意味があったのか、どうかは分からない。多分、だが有澤議員は今後も東さんを追いかけるだろう。

その行動の結果がどんなものになったとしても――

「――オレの知った事じゃねえよ……」

壊れるなら、跡形もなくぶっ壊れてしまえ。

先生を助けてくれなかった世界なんか、どうなっても知るものか。

2

有澤議員との交渉を終えて一晩過ぎた。

旭は相変わらずラボで整備料の基礎本を片手に【ハヴォック・ゲイル暴風】の調整を行っている。が、相変わらず行き詰っている。

一か所数値を書き換えれば、また何処かに不備が出てくる。その繰り返し。イタチごっこだ。

「ダメだ……。休憩しよ……」

立ち上がり自動販売機で冷えた缶コーヒーを購入。プルタブを開け

て一口煽る。

渴いた喉を潤して、ベンチに座ってから一息ついた。

「さーで、どうしたもんかねえ……」

天井を見上げて放心。再び深いため息をついた。

何気なく周りを見回していると、見覚えのないISが鎮座していた。旭は思わず眼を奪われた。

フォルムは「白式」によく似ているが、全くの別物だ。

スカートアーマーに独立ウイングスラスター。

肩部ユニットに小型ジェットスラスターを二対搭載。

碗部装甲は細身になっており、格闘戦において器用な立ち回りが出来る様な設計になっている。

傍に在る空間投影ディスプレイに眼を向けると、機体名らしき名前がある。

旭はそれを反芻するように声に出して読み上げた。

「……【打鉄式うちがねしき】？」

「だ、誰……？」

声の方を見るとそこには女の子が1人佇んでいた。

セミロングの髪は内側に跳ねている。

四角いフレームの眼鏡の奥の双眸からはこちらに対する警戒心がありありと見て採れた。

何処かで、というより誰かに似ている様な気がしたが、今はそれより怯えた少女を安心させる方が先決だ。ここで悲鳴など上げられようものなら明日から彼の渾名は不審者で決定だ。そうなれば彼のIS戦闘における師であり、ある意味彼の天敵更識楯無にかかわれる事は眼に見えている。

なるべく声に丸みを持たせる事を意識して、営業用の笑顔を浮かべ

て友好的に話しかけた。

「驚かせて申し訳ない。見覚えのないISが置いてあったから珍しくつてな。これはアンタの機体？」

「うん……。打鉄、式式……。まだ……。未完成だけど……」

「ってことはアンタが日本の代表候補生『更識簪』さん？」

旭の問いかけに彼女は無言で頷いた。

更識簪。IS学園生徒会長にして対暗部用暗部更識家17代目盾無『更識盾無』の妹。

頭の中から情報を引き出しながら、旭は友好的にと心掛けて挨拶を続ける。

「オレは浮舟旭。IS【ハヴオック・ゲイル】のテストパイロット。よろしくな」

「……………【生徒会の番犬】？」

「……………、その呼び方は勘弁してくれ」

ガックリとうなだれた。

定着している……。迷惑千万だ、と呟いてから力なく笑った。

「自分のIS自分で組んでんの？」

「うん……。そう……」

「へえ？ 整備とか詳しいのか」

「別に……。普通……」

「それで普通って言ったらオレはどうなるんだよ……」

態とらしく地面に『の』の字を書いて落ち込んでいます、というポーズをとると簪は面白いほど慌てふためいてくれた。旭はそれを見て笑いを噛み殺す。

「……からかった？」

「悪い悪い。けど実際整備が上手く出来なくて困ってるのは事実なんだよな」

「整備科の人に、任せるのは……？」

「ん、それ考えなくもなかったんだけど、やっぱり自分の機体は自分で整備したいからな。アンタもそうなんだろう？」

「……え？」

「専用機はただの道具じゃなくて自分の命を預ける大事な相棒だ。だからこそこれから一緒に戦っていく戦友を自分の手で組み上げたってことじゃねーの？」

「……ううん。私が……打鉄式を自分で組み上げたいのは……お姉ちゃんに追いつく為……」

「楯無さんに？」

何故自分は初対面の相手にこんな話を話しているのだろうか？

簪は自分の行動が理解できずに不思議に思った。

彼を初めて見たのは1カ月前。

クラスの人達に誘われて、自分の専用機が放置される原因となった男子『織斑一夏』と彼『浮舟旭』と一緒に訓練をしているところを見物に行った。

簪は非生産的な事が嫌いだ。

だが、自分の姉である『更識楯無』が鍛えているという旭に少なからず興味が湧いていた。

織斑一夏。彼にはIS操縦士として溢れんばかりの才能の片鱗が感じられた。

僅か3ヶ月であそこまで自在にISを動かす事は自分には出来なかった。

対する浮舟旭。遠目から見ても、彼にはIS操縦士としての才能がまるで感じられなかった。

飛行という操縦士としての基礎中の基礎。それすらも満足に出来ない。

射撃の腕は眼を見張るものがあるが、それだけだ。それ以外は典型的な凡人。それが彼だった。

決してヒーローになれない存在。

しかしそれでも、彼の眼には諦めはなかった。

才能への挑戦。飽くなき向上心。強固な意志。

圧倒的な才能を持つ姉への劣等感故に自分を見限っていた簪と似て非なる存在。

それが彼への印象。

気付けば自分も楯無を超える事を考えるようになっていた。

もう、これ以上自分への劣等感で苦しみたくない。

その為に彼女のとった行動はかつて姉が自らの専用機【ミステリアス・レイディ】を完成させたように『未完成の機体を独力で完成させ実用化する』という事だった。

それすら出来ないようでは楯無の影すら踏めない。

そう、自分に言い聞かせて甘えを断った。

旭は簪の意図を何処まで察したのかわからないが、少し考え込んだ後優しく微笑んだ。

「そっか。アンタは楯無さんの事が好きなんだな」

「え……？」

思いもよらない解釈に簪は驚き眼を丸く見開いた。

「いや、そうだろ？ 嫌いな人間に追いつきたいって願う人間はいねーよ。その人の事が好きで、尊敬してて、同じ世界に立ちたいから追いつきたいって願うんだと思う」

【異邦人】——浮舟旭が【身元不明】ジョン・ドウを師として仰いだように。

ラウラ・ボーデヴィツヒが織斑千冬のようになりたいと願った様に。
セシリア・オルコットが【ストレンジヤー異邦人】に憧れた様に。

「そう、なのかな……？」

「少なくとも、オレは嫌いな人間相手に劣等感を抱く事はねーな。
相手の事を認めていて、認められたいから競争心が生まれるんだよ」
「そう、だいいいな……」

いつからだろう。

姉のあの無邪気な笑顔を真っ直ぐに見れなくなったのは。
いつも自分の前を走っている姿を疎ましく思うようになったのは。
同じ名前を背負う事が辛くなったのは。
そして、そんな姉を僻んでいる自分自身が一番惨めで、許せなかった。

しかし、そんな感情は『姉の事が好きだから』という姉への思慕に
基づいていたのだ。

『姉の事が好きだから追いつきたい』
その想いが根本にあるとするならば、嫌いだったこの感情も肯定出
来る様な気がする。

「ありがとう……、浮舟くん……」

「？ オレ何かしたっけか？」

「ううん……。なんとなく……お礼を……言ってみたかっただけ……」

「お、おう？ どういたしまして？」

分かっていない。

この人の何気ない一言が自分の長年抱いてきた鬱屈した感情に風穴
を開けてくれた事を。

簪はなんとなくそれが可笑しくて笑った。

「……………機体のバランスが崩れてる。一カ所の数値を……………変更するんじゃないくて、全体の……………出力バランスの数値を、満遍なく変更して……………いけないと……………」

「な、なるほど……………」

何故こうなっている？

あれから更識簪としばらく話していると、何故か彼女から調子の悪い【ハヴオック・ゲイル】を見てあげる。と申し出があった。

自分の機体は自分で整備したい、と思っていたのだが、実際問題整備をマトモに出来ていないというのが実情だ。

オレは子供じゃない。変な意地を張っていて、事故に繋がったらそれこそ話にならない。

教えを請う事をプライドが邪魔をするなら、そんな役に立たないプライドは捨てるべきだ。

プロを名乗るなら出来る事と出来ない事はしっかり見極めて、精進する義務がある。

オレは簪の申し出を受けた。

勿論、ただ調整を丸投げするような愚は犯さない。少しでも簪の言うISの整備理論を吸収しようと、彼女の言葉一字一句を聞きもらさずにメモしながら真剣に聞き入る。

「最後に……………フィッティングしたのはいつ……………？」

「えーっと、確か4月の頭……………」

「……………そんな、前じゃ不具合が起きて当たり前……………。ISはアサルトアームズよりも……………デリケートなんだから、定期的に筋力。重量。反応速度の変化を計測……………して数値を変更しないと、ズレが生じて……………当たり前……………」

「はい。肝に命じときます……」

簪の指摘は実に手厳しい。一応オレ年上なのに、立つ瀬がない。流石、更識。姉妹揃ってオレを凹ましてくれる。

だが、反面有り難いと思う。

『厳しい』ということはそれだけこちらに対して真剣だということだ。

会ったばかりの人間のＩＳの整備を引き受け、理論を徹底的に叩き込むなど、普通は出来ない。オレはこの時点でこの５歳も年下の少女に尊敬の念を抱いていた。

「浮舟くん……、聞いている……？」

「押忍！ 聞いているであります！」

その後、簪の力を借りて明け方までかかって【ハヴオック・ゲイル】の抱えていた不具合は解消した。

これで安心して５日後の臨海学校に臨む事が出来る。

さーて、臨海学校ではどんな騒動が待ち受けている事やら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9155s/>

IS インフィニット・ストラトス～I am a Stranger～

2012年1月9日21時32分発行